
いつも君がいた

遙香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつも君がいた

【Nコード】

N6142N

【作者名】

遙香

【あらすじ】

両親の海外赴任に伴い、高校3年の春に寮のある高校へ転校した佐倉零。
さくらぜろ

転校先の高校はほぼ男子校?!の逆ハーレム状態で、イケメンに囲まれつつ恋と夢とに全力投球するお話です。

000:プロローグ(前書き)

筆者自身が「あーこんな恋愛したいー」と思う要素を詰め込んでお
りますので、

あまーいラブラブが苦手な方には不向きとされます。

尚、プロローグの頭のメモは『きみがすきだよ』と言う曲の歌詞を
若干(いや、かなり)パクっております。

000：プロローグ

『心から、君が好きだよ。』

君が好きだよ、誰よりも。

いつも見てる。遠くから。

一人ぼっちの君を守りたい。』

転校してすぐ、学校の図書室で借りた本の間に、流れるような美しい文字でかかれたメモが挟んであった。

誰かの秘密を見てしまったようで、胸がドキドキした。

でも、そんな風に想われる女性ヒトがうらやましくもあった。

佐倉零さくられいは両親が海外赴任で不在となるあおりを受け、高校3年に進学する春に転校することが決まり、遠方からの生徒を受け入れるために寮制度のあるここ、私立白金台高校へ編入した。

数ある高校の中からこの高校を選んだのにはいくつかの理由がある。一つは、学力が国内でも指折りの進学校であること、海外の大学への進学サポートがある事、そして、自分の事を誰も知らない、故郷から離れたところにある事。

零は忘れたかった。今までの人生を。ありきたりの高校で、夢を持って努力することがいじめの対象となる理不尽な場所での生活を。

今日からは、新しい自分。

顔をあげて、自分の目線で歩いていこう。背伸びをし過ぎて足元の小石につまずかないように。

001：転校生（前書き）

いいなーこんな高校生活したかったなー、と妄想しつつ。
やっぱり美しいものには癒されます。
どんどん逆ハーになっていくので、女性向けだと思います。

001：転校生

新学期が始まる前に、寮への引越しが待っていた。

事前に届いた案内によると、零の入る寮は《シュヴェールト》。ほかに、《エスクード》《アルマ》の3つの寮に分かれている。

シュヴェールトって、剣？エスクードは盾、たしかアルマは鎧、だったよね？何だかファンタジーチックな名前……。

案内にある通り電車を乗り継ぎ、駅から30分ほどの道のりを歩く。零の住んでいたところよりもずいぶん都会で、これからの生活はより楽しいものになるだろうと期待が膨らんだ。

もらった地図をたどっていくと、街を抜け、次第に緑の多い景色へと変わる。

大きく婉曲した道を曲がると、目前に白を基調とした麗美な校舎が現れた。

わあ、すごい綺麗。金持ち学校、って感じ、だよな。

心の中でつぶやき、閉ざされている大きな門に近づいた。

「佐倉零さんですよな？」

どうやって入ればいいのか、と思案していると、背後から声をかけられ零は思わず声をあげた。

「……驚かせてごめん。僕はこの学校の生徒で月島つきしまかおる。よろしく。」

振り向くと、そこにはアイドルばりの眩しい笑顔。何かスポーツをしているのだろう、背の高い少し筋肉質な体、少し茶色の、長めの髪は綺麗に整っていて、男性にしては大きめのこげ茶の瞳が印象的だ。

「あつ、は、はじめましてッ！佐倉零です！今日からこちらにお世話になりますっ！」

突然現れた、下手なアイドルよりもずっとかっこいい男子生徒に零はどきまぎしながら頭を下げる。

「こちらこそ、よろしくね。寮に入るって聞いてるけど？」

「あつ、はいっ」

「それなら僕と同じだ。案内するよ。」

につこり、と微笑まれ、腰が抜けそうになる。なんて男前。こんな人と同じ寮なんて幸先がいい。

「君・・・零ちゃん、でいい？零ちゃんはこの高校の事、よく知ってる？」

寮までの整備された小道を歩きながらかおるが問いかける。

「いえ・・・急に転校が決まって、寮がある事と、海外進学の道が選べる事だけを基準に選んだので・・・」

零が言い淀むと、かおるはそうだろうね、と言ってクスリと笑った。
「そうだろうね、って・・・」

「いや、この学校、確かにいろいろと優秀なんだけど、寮に入ってるのは零ちゃん以外、全員男子だし、

「・・・え、

「海外進学科なんだよね？そこも、男子しかないし。

「えっ?!」

「それに、ほかの棟とは基本的に交流がないから、要するに、零ちゃんも男子校の一輪の花的存在、ってこと。」

「ええええええっ！」

驚きすぎてフリーズした零を見てかおるは声を立てて笑い、さあ行こう、と促した。

「大丈夫、零ちゃんなら問題なくやっていけるさ、

「どっ、どうしてそんなことわかるんですか？」

「どうしてって、零ちゃんは可愛いから。きつとみんなから好かれると思うよ？」

さらつと、心臓を打ち抜かれるセリフを口にし、かおるは100%スマイルを浮かべた。

男子校、って、女子一人って、聞いてないしっ！いや、私も聞かなかったけど、共学って書いてあったし、話の流れで行くと寮が男女一緒？！

内心大パニックの零はしばらく茫然とし、自分が荷物を持っていない事に気がつく。

「あれっ?!荷物っ!あぁっ!ごめんなさいッ!」

「校門で会った時から僕が持ってたんだけど、今気付いたのかおるはおかしくて仕方がないという風に笑う。

「あのっ、月島・・・サン、すみません。私いろいろと驚いちゃってそれで・・・」

「かおるでいいよ。かおるって呼んで・・・いいんだよ。女の子に荷物を持たせるのは僕の趣味じゃないから。

ああ、かつこよすぎる。こんな人世の中にいるんだ。いや、少なくとも前の高校には一人もいなかった。

零は丁寧にお礼をし、かおるの案内に従って寮へと足を踏み入れた。

001：転校生（後書き）

さっそく、ポイントを付けてくださった方、お気に入り登録をしてくださった方。

本当にうれしいです。頑張ります。

もう一本ファンタジーも書いているので、出来る限り毎日を目標に更新します

誤字脱字など、ご指摘いただけるとうれしいです。

このお話は書き下ろしでいくのでつじつまが合わないところが出てくるかも……。そんな場所が出てきたらぜひご指摘くださいませ。

002：寮生達（前書き）

一応、主要メンバー登場です。ああ誰と恋愛しましょうか・・・。
私的ツボの3人組みです。

002：寮生達

かおるに連れられて寮に入った零は、言われるままに入口で靴を脱ぐ。

「くらっちー！転校生の零ちゃん連れて来たよー！」

かおるは入口わきの部屋の向かって大声を上げる。

「寮母の倉口さん。みんな『くらっち』って呼んでるんだ。とつても優しいお母さんみたいだよ。」

かおるはいたずらっぽく笑って零の耳元でささやく。零は不意に顔を近づけられて耳まで真っ赤になった。

「あら、おかえりなさい。あなたが佐倉零ちゃんね？よろしく。」

『やさしいお母さん』と言うのはすごく的を得た表現だな、と零は思う。

少しぼつちやりした体系、年齢は40代後半くらいだろうか。

「佐倉零です。よろしくお願いします。」

頭を下げると、そんなに畏まらなくていいのよ、と肩を抱かれた。

「寮の中の案内はかおる君にお願いしていいかしら？みんなの紹介もお願いね、」

「はい、承りました。」

おどけて跪いて畏まった礼をするかおるだったが、その様が似合いすぎて見とれてしまう。

「じゃ、行こうか、零ちゃん。」

「零ちゃんの部屋は2階に上がって左の突き当たり。あ、この寮、部屋にカギが付いていないから入られて困る時はノブに何かかけておくといいよ。後、食堂はこの突き当たり。朝食と夕食は時間が決まっているから時間に遅れないようにね。外食をするときはくらっちに先に連絡をしておく事。部屋にはトイレとシャワーがついてるけど、大浴場もあるんだ。・・・けど零ちゃんは難しいかなあ・・・」

後でくらつちに相談してみるよ。さすがに混浴はねえ。

「あ、そうそうこのシュヴェールトに入っている生徒は零ちゃんを入れて全部で10人なんだけど・・・今春休みで帰宅している人も多いから残ってるのは僕を入れて3人かな。後で紹介するよ。ちなみに、この寮の生徒は全員3年生。海外進学科の生徒は5人。僕もその一人。」

そう言うてかおるはウインクした。ウインクがこんなにも似合う男子がこの世に存在するとは思えないほど、ハマりすぎていて心臓を打ち抜かれる。

「後はー、門限はないんだけど、遅いとみんなが心配するからあまり遅くならないように、とか、外泊するときは必ずくらつちに連絡をする事、とか・・・ま、わからないことがあったらいつでも聞いてよ。ちなみに僕の部屋は、零ちゃんの部屋の向かい側。」

こつちが零ちゃんの部屋だよ、とかおるは部屋のドアを開ける。

部屋に入ると、先に送っておいた荷物が山のように積まれていた。

「ああ、大変だね、片づけ。手伝おうか？」

「あ、いえっ、大丈夫です。新学期が始まるまでまだ一週間ありますから、それまでに片づけます。」

「そう？何かあったらいつでも声かけてね。それと、敬語はやめようよ、同級生なんだから。」

あなたのその100%スマイルが緊張させるんです、と内心思うが言葉にはせず、小さく笑う。

「私も敬語は苦手だけど・・・。ちよつと緊張しちゃって。これから、よろしく・・・ね？」

「そうそう、それでいいよ。じゃあ先に寮に残ってるメンバーだけ紹介しておくから、ついてきて。」

フワリ、と頭を撫でられて、顔が熱くなる。この人は天然なのか、意識してやっているのか、わからないけどいちいち心臓に悪い。

「まず零ちゃんのお隣さんからね。駿、駿、いる？」

かおるがノックすると、がちやり、と部屋のドアが開く。

「何か用？」

わぁ、超イケメン・・・。

くせのない黒髪。少し長めに伸びた前髪に、時折うつとおしそうに目を細める。すっと通った鼻筋に切れ長の瞳。身長はおおるよりも少し高く、筋肉質ではないが、つちりした印象を受ける。

「あつ、私、今日からこちらでお世話になりますっ！佐倉零です。よろしく願いますッ！」

かおるとはタイプの違うイケメンの登場に一瞬見とれた零はあわてて勢いよく頭を下げ、勢いがつきすぎて半開きのドアの角に額をぶつけた。

「イタッ！」

「だっ、大丈夫?!」

「・・・ばか？」

とつさに心配してくれるかおると、あきれたような視線をなげかける駿。性格も正反対のようだ。

「だっ、大丈夫です・・・。ごめんなさい、

「そう。じゃ、また。」

ボタン、と目の前でドアが閉じられる。

初対面で、嫌われた？名前も、聞けなかったし・・・ちよつとへこむかも・・・。

しゅんとした零の様子を見てかおるは少し溜息を付く。

「駿はいつもあんな感じさ。無愛想と言うか、あまりしゃべりたがらないんだ。気にする事ないよ。彼は久遠駿^{くどしゅん}。駿も海外進学科なんだよ。」

「そ・・・そうなんだ・・・

「そうそう。じゃ、もう一人のとこへ行こうか。

かおるに促されて廊下を歩き、ちょうど零達の部屋とは階段を挟んで逆サイドに位置する部屋をノックする。

「健^{たける}いるー?」

「いるよー」

「入るよ、

いつものことなのだろうか、中からの返事と同時にかおるはドアを開ける。

男の子の部屋なんて初めて・・・。

少しドキドキしながらかおるに続いて中に入ると、健と呼ばれた彼はさっぱりと片付いた部屋の中央で腕立て伏せをしていた。

「あつ、佐倉零ちゃん、だよな？よろしく！俺、しもむらたける下村健。」

パツと花が咲くような笑顔。この学校にはイケメンしかないのか？と零は思う。

甘いマスク、と言う表現がぴったりと当てはまる。優しい瞳、こげ茶と金髪の混じった《今時の若者》的髪型をしている。腰ばきの力ーゴパンツが良く似合っている。身長はかおるにくらべるとやや低かったがバランスの取れた体型で、良く日に焼けた健康的な素肌が印象的だ。

「あつ、ハイツ！佐倉零です。宜しくお願いします！」

「健は国内進学科の理工学部。彼はこう見えて、すごく頭がいいんだよ、

「こう見えてつてのは余計じゃねーの？でも、得意なのは数学と物理だけ。後はだいつキライ。」

そう言っていたずらっぽく笑う。

ああ、今日はイケメンにしか出会ってないから、なんだか麻痺しそう。

零はイケメンの笑顔がこんなにも心臓に悪いものだとして初めて知った、と内心想う。

「零ちゃん海外進学科だから、いろんな意味で僕がエスコートすることになってるんだ。健は邪魔しないようにね、」

「なつ、なんだよっ！勝手に決めんなよそんな事ッ！俺だつてなあ・

言いかけて、健は口を噤む。

「俺だつて、何？」

穏やかな口調でかおるが尋ねる。

「べつ、別に何でもねーよ。何か困ったことがあったら、いつでも声かけてくれよなっ！あつ、携帯、教えてよ？」

「えっ？携帯？」

「会ってすぐにナンパ？零ちゃん、無理に教えなくていいよ？・・・でも、できれば僕も教えて欲しいんだけど。」

「につこり、と100%スマイルで言われて、教えない女子など存在するのだろうか？零はフラフラと携帯を取り出し、番号の交換をする。登録に手間取っていると、かおるが手元を覗き込んできた。

ちっ、近いっ！

至近距離に心臓が跳ね上がる。

「あ、名前ね。僕はお月様の月に普通の島、なまえはひらがなでかおる。」

「おい、かおる、お前近づきすぎ。離れろ！」

ガクン、とかおるの体が揺れて、かおるの顔が離れる。少しホットしていると、今度は健が近づいた。フワリ、と少しスパイシーな柑橘系の香りがする。

「俺は上下の下に市町村の村、たけるは健康の健って書いてたける。健って呼んでよ。」

眩しすぎる笑顔にドキドキしながら、この人たちの笑顔はどうしてこんなにも素敵なんだろう、と思う。

そういえば、あの人は全然笑ってくれなかったな。目も、見てくれなかった。

駿の不機嫌そうな顔を思い出し、一瞬心に影が差す。

「ん？どうした？」

「えっ？」

「いや、何か急に寂しそうな顔したからさ。

零の顔を覗き込むように、健が体をかがめて近づく。

「えっ、だっ、大丈夫ッ！ちよつと、疲れちゃったかなー？」

慌ててごまかすが、健は零の瞳を覗き込むようにさらに近づいた。

「健、近すぎるのは健の方だよ。」

さっきのお返しと言わんばかりに思い切り健の体を引き離すと、零の腕を掴む。

「じゃあ、僕達の用事は終わったから、部屋に戻るよ。」

何だよ！と怒鳴る健の鼻先でドアを閉めると、かおるは驚いている零を促して部屋の方へ歩いていく。

部屋の前まで来ると、かおるは軽く吐息を付いた。

「・・・ごめんね、移動で疲れているときにあちこち連れまわしたりして・・・。片付けもあるんだよね。僕はずっと部屋にいるから、何かあつたらいつでも声かけてね。・・・本当に手伝わなくても大丈夫？」

申し訳なさそうな口調のかおるは、遠慮がちに問いかける。

これ以上一緒にいたら心臓がおかしくなっちゃいそうだし。

そんな風に言ってくれるのは本当にうれしかったけれど、零は緊張しすぎてドキドキしっぱなしの心臓をなだめるためにも一人になりたいと思った。

「今日はいろいろ助けてくれてありがとう。また、わからないこととか、教えてくれる？来るまではすごく不安だったけど、かおるくんに案内してもらえて、優しくしてもらえてとっても嬉しかったの。」

「もちろん。零ちゃんにそんな風に言われたら、好きになっちゃいそうだよ。」

100%スマイルでそんな殺人的なセリフをサラッと口にするのは、どうかおやめ下さい・・・。

零は耳まで真っ赤になって、慌てて頭をさげると自分の部屋に入って扉を閉めた。

003：お片づけ

改めて部屋を見ると、8畳程の広さの1ルームに一部ロフトがついている。造り付けの本棚とクローゼット、シャワールームとトイレ。寮というには豪華すぎる作りだと思う。

間取りを見てからベッドを選ぼうと思っていたが、ロフトの上で寝ることにして、ベッドの変わりにソファを置こうかな、と呟く。窓から見える景色は中庭に面して緑が多く、落ち着ける。

角部屋の特権か、窓は2方向についていて部屋も明るい。片方は掃きだしの大きな窓で小さいながらバルコニーがついている。

とりあえず、窓が全開のままでは落ち着かないので、持参したカーテンをかけようと、踏み台になるものを探す。持ってきたカーテンは淡いピンクにレースと小花がちりばめられたお姫様系のデザイン。お気に入りのデザイナーズブランドのものだ。

「このサイズで合えばいいけど・・・」

呟いて、ダンボールを踏み台の代わりにしようと窓際まで運ぶ。片足で力をかけてみても頑丈そうで、そつと乗ってみても安定している。

これなら大丈夫・・・

「キヤアツツ！」

カーテンレールに手を伸ばそうと背伸びをした瞬間、バターン、と派手な音を立ててダンボールの上から転げ落ちた。

「どうしたっ?！」

ボタン、と扉が開き、勢い良く駆け寄ってくる人影。カーテンが身体に絡まって床に倒れた零を抱き起こす。フワリ、とネロリの甘い香り。

「・・・ごめんなさ・・・!！」

てつきり、かおる君が来てくれたのだと思って顔を上げると、そこ

には不機嫌そうな駿の顔。

「あつ、あのつ、わ、わたしっ

焦りまくって、何を話していいのかわからなくなる。抱き起こしてくれている腕のたくましさに頭がクラクラした。

「零ちゃんっ、どうかしたの?!・・・ああ、

激しく扉が開く音を聞きつけて、かおるが顔を出し、へこんだダンボール、ちらかったカーテン、倒れた零と助け起こす駿を見て、かおるはやれやれ、と肩をすくめる。

「そのダンボールに乗って、カーテンをかけようとして、転んじやつて、その音に驚いて駿が駆けつけた、と、そんなところ?」

「は・・・はい・・・」

「ばかか、お前。そんな箱の上に乗ったら危ないに決まってるだろ!」

「ごっつ、ごめんなさいっ」

駿に怒鳴られて、ビクリ、と身をすくめる。男の人に怒鳴られたのは初めてで、怖くて顔を上げられないしていると、まあまあ、とかおるが駿の肩に手をかけた。

「零ちゃん、困ったことがあったら呼んでね、って言ったよね?」

「それに、駿もいつまで零ちゃんを抱いてるつもり?それは僕の役目のはずなんだけど?」

冷静なかおるのつつこみに、駿は一瞬頬を染めるが、それ以上に零は真っ赤になった。

「あつ、わっつ、わたしッ!も、大丈夫ですッ!ごめんなさい・・・痛ッ!」

零は慌てて駿から離れようとして左足に体重をかけ、再びその場に倒れこむ。

「どうした?!足、捻ったのか?」

見せてみる、と駿に言われ、おずおずと痛む左足を差し出す。ショートパンツから出た素足を見られるのがなんだか恥かしくて身体が熱くなった。

「・・・腫れてるな。早く冷やした方がいい。」

「僕、くらつちに湿布をもらってくるよ。駿は零ちゃんが無駄に動かないように見張ってて。」

かおるが出て行くと、駿は小さく舌打ちし、少しずつ腫れのひどくなる零の足首に目を落とす。零は不機嫌な顔の駿にどうしていいかわからなくなつて俯いた。

「・・・すごく不機嫌そう・・・。」

ちらり、と横顔を見て思う。

さつきも怒鳴られたし、完全に嫌われたよね・・・。

そう思うと、なんだかとても悲しくなった。フワリと微かに香る甘いネロリの香りが鼻腔をくすぐる。

「・・・お前、すごくちっちゃくて、なんか、人形みたい。」

ポツリ、と駿が呟く。

「え？」

顔を上げると、相変わらず無表情な駿の横顔。

「顔も、足も、手も、全部、」

よくできた人形みたいだ、と続けた。

「くつ、久遠君は、すごく大きいよね？身長、180センチくらい？かなつ？て、最初会ったとき、」

支離滅裂だ、と内心思いながら、零は一生懸命言葉を搜す。駿が話してくれているのが嬉しくて、思わず笑顔になった。

「お前、犬みたいなヤツだな。ワンワン尻尾振って喜んだり、耳垂らしてしよげたり、面白いヤツ。」

「いつ、犬って・・・。」

「チビだから子犬だな。」

相変わらず無表情。零の方を見ることはなかったが、口元には小さな微笑みが浮かんでいた。

「・・・はい、できたよ。これでいいかな？」

すっかり腫れてしまった足首に、かおるは丁寧に湿布を張り、はがれないように、と包帯を巻く。

ちよつと、大げさ・・・。

零は内心想うがかおるに礼を言う。

「じゃあ、とりあえず、零ちゃんはそこに座って、とかおるは唯一セッティングの終わっている Dresser の椅子を指す。

「駿はそっちのカーテン、よろしく。」

「・・・はい、零ちゃん掴まって？」

そして、床に座ったままの零の横に跪き、ひょい、と抱き上げる。

「えっ！あっ！わっ、

「暴れると、危ないよ？」

おおおお 姫様だっこ？！

「零ちゃんは小さくて、可愛いね。このまま連れて帰りたいな。」
そしてまたサラリとすごいセリフを口にするかおるに零は抱き上げられたまま真っ赤になる。

「おい、かおる。お前もさっさと手伝え、」

「はいはい。せっかくの零ちゃんとの甘い時間を邪魔してくれてどうもありがとう、」

極上に不機嫌そうな駿の声に、かおるは苦笑し、零を椅子の上に下ろした。

003：お片づけ（後書き）

優しいイケメンに囲まれて生活したーい！

という、願望をそのまま書いてますので・・・。
支離滅裂だったら
ごめんなさい。

でも書いていて非常に楽しいです（笑）

004：それぞれの優しさ

足を捻った零の代わりに、結局部屋の片付けはかおると駿がほぼ行い、あつという間に部屋の中はきれいに片付けられた。持ってきたものは、お気に入りの本を数冊と、勉強道具、ドレッサー、お気に入りのランプ、携帯、お洋服。それに、ぬいぐるみを一つ。寝具をロフトの上上げたこともあり、部屋は寂しいほどにガランとして見える。

「後必要なものは・・・。」

部屋を見渡して呟く零に、かおるが微笑みかける。

「僕なら、ここにソファアを置いて、あつちにはテレビ。後は・・・音楽を聴くためのスピーカーが欲しいかな？」

センターテーブルもあったほうがいいかもね、とウインクする。

そのウインク、殺人的・・・。

何度見ても、見慣れない美しすぎる笑顔に零は頬を染める。どういう育ち方をすれば、こんな風に笑ったり、殺人的なセリフをさらうと言ってしまう様になるんだろう。

「ラグも欲しいな・・・」

呟く零に、そうだね、とかおるは相槌を打つ。

「でも、その足じゃお買物には行けないから、足が良くなったら、一緒に街へ行こうね。」

につこり、と100%スマイルを向けられると、頷くことしかできなくなってしまう。微笑みの貴公子、とでも言うべきか。

「おい、夕飯の時間・・・なんだよお前ら全員そろって・・・って零ちゃん足どうしたの?！」

ひよい、と開けたままのドアから顔を出して、その場に零以外の姿を認めると一瞬不機嫌になり、零の足首の包帯を見て零に駆け寄る、と言う万華鏡のように変わる健の機嫌を見て、零は思わず噴出す。

「・・・まあ、話すと長いんだけど、見ての通り、零ちゃんは足を

挫いちゃって。一人では歩けないから、・・・僕が食堂までエスコートするよ。」

えええええっ！

再びひよい、とお姫様抱っこをされて零は真っ赤になって慌てる。

「だ、だ、大丈夫だからッ！私、歩けますッ」

「零ちゃん、無理しちゃダメだよ？ほら、ちゃんと掴まって？」

鼻先が触れそうなほど顔を近づけられて、思考が停止する。

「かおるッ！お前何やってんだよッ！」

「・・・お前ら、バカじゃねえの？」

健の怒鳴り声が遠くに聞こえる中、冷ややかな、とも思える駿の呟きが、零の胸に突き刺さった。

夕食を終え、再び部屋まで『運んでもらった』零は、フウ、と大きく息を吐き出した。

すっかり片付いた部屋、8畳のロフト付きは一人には少々広い。

さすがに、ちよつと疲れたな・・・。

ソファーもラグもないフローリングの部屋に寝転ぶと、背中が痛い。クッションくらい持って来たらよかった、と心の中で呟き、ドレッサーの椅子に座らせてあったクマのぬいぐるみを抱く。某テーマパークで人気のあるクマのぬいぐるみで、抱き心地もやわらかい。

足、挫いちゃったな・・・。

腫れている足首を見て、ため息をつく。少し動かしてみたが、痛みはずいぶん取れているようで安心する。

かおる君にも久遠君にも、いっぱい迷惑かけちゃったし・・・。

瞬間、かおるのお姫様抱っこを思い出して顔が熱くなる。

よくできた人形みたい、って言ってたな・・・。

駿に言われた言葉をぼんやりと思い出し、ため息を付く。確かに、背の高い駿から見れば150センチしか身長のない零は小さく見え

るのだろう。人形と言ってみたり、子犬と言ってみたり、でも一度も目を合わせてくれなかった。

一回でいいから、笑って欲しいな・・・。

そう思ったとき、コンコン、とドアをノックする音がした。

「は・・・ハイッ！」

フローリングの上に寝転んでいた零は急いで起き上がり、とっさに抱いていたクマを背後に隠す。

「くっ、久遠君？」

勝手に、かおるが心配して様子を見に来てくれたのだろうと思っていた零は、予想外の人物が顔を出したことに驚く。

「お前、上で寝るのか？」

「えっ？」

「だから、ロフトの上で寝るのか、って」

呆れた声。視線はロフトの上を見ている。

「そのつもりだけど・・・」

やっぱり、こっちは向いてくれないんだ・・・。

「その足で、そのロフトのはしごを登るつもりか？」

言葉尻に怒気が含まれている気がして、零の心が波立つ。

「も、もうあんまり痛くなくなってきたし・・・ご、ごめんね？心配、かけて・・・」

自分でもはつきり分かるほど、声が小さくなる。

「お前、ほんとにバカだな？」

呆れた声に涙が出そうになる。そんなにバカバカいわなくったって・・・

「お前みたいなチビをロフトに上げてやるくらい、簡単なモンだ。寝る前に教える。」

ぶっくらぼくにそう言って、手にしていたメモをドレッサーの前に置いて部屋を出て行ってしまった。

な・・・何・・・？

一人取り残されて零は一瞬呆然と駿の出て行ったドアを眺める。

久遠君つてもしかして・・・優しい？

目を見てくれないけど、笑ってくれないけど、でも、心配してくれているんだ、と思うと、嬉しくて心が苦しくなる。

でも、寝る前って、パジャマだよな？！パジャマでロフトに上げてもらって何？！あああダメダメダメ、そんなの絶対無理！！一人で駿にお姫様抱っこをされているところを妄想し、真っ赤になって妄想を打ち消す。今日ここに来て以来、とびきりのイケメンに間近で触れ合いすぎて思考がおかしくなっているに違いない、と自分を無理やり納得させていると、携帯が鳴った。ドレッサーの前に置いたままだった事を思い出し、左足に負担をかけないように立ち上がる。

《下村 健》

表示されていた名前を見て、携帯を取る。

「ハイ、零です。」

親しい友達からの電話だったら、もっとフランクに出るんだけど、と思いながら、携帯で名前を言うのもヘンな感じ、と妙な居心地の悪さを感じる。

「あ、健だけど・・・今、いい？」

「うん、大丈夫。」

「あのさ、足、大丈夫？」

「あ、うん、大丈夫だよ。もうかなり痛みもひいたし。」

「そっか、ならいいんだけど。」

「うん、ありがとう、心配してくれて。」

「いや、別に心配してるわけじゃ・・・ないけど・・・」

電話の向こうで口ごもる。

「俺、ちよつと部屋離れてるけどさ、手伝えることあったら言えよな？さつきも、一人でカーテンかけようとして転んだって聞いたけど・・・一人で頑張ることないぜ？零ちゃんは女の子一人だからって気にするかもしれないけど、俺、いつでも手伝うし。」
とても優しい言葉に、胸の奥がキュンと苦しくなる。

「あ・・ありがとう。すごく、うれしい、」

零の答えに、電話の向こうの健の声が弾むのが伝わった。

「零ちゃん、ノックしても返事もしてくれないと思ったら、誰と電話？」

まだ繋がったままの電話を背後からひよいと取り上げられ、零は驚きのあまり一瞬間まり、そこにかおるの姿を認める。

「あ、か、おる君？今、たけ・・・」

「もしもし？僕の零ちゃんに電話するのは健くらいしかないと思っただけ、やっぱり、」

《なんでいきなりお前が出てくんだよッ！》

電話の向こうで怒鳴っている声が離れている零のところまで届く。

「声大きい。耳が痛い。」

かおるは眉をひそめて携帯を耳から遠ざける。

《ふざけんなテメー！》

電話の向こうの健の声に零は思わず笑い出した。

「零ちゃんに笑われてるよ、健。零ちゃんを笑顔にしたことは褒めてあげる。じゃ、また。」

かおるは一方的に携帯を切ると、改めて零に向き直った。

「零ちゃん、あんまり無防備になるのはよくないよ、念のために忠告しておくけど・・・。」

「む、無防備って・・・」

戸惑う零に、かおるはにっこりと微笑みかける。

「そう言うのが、無防備、って言うんだよ。恥かしがったり困ったり戸惑ったり驚いたり喜んだり、零ちゃんは素直だから、考えてることがすぐわかつちゃう。だから、こっちも気になって、からかいたくなっちゃうんだよ。」

「僕だけならいいけど、健も、あの駿まで零ちゃんのこと、気になつて仕方ないみたいだね、」

とドレッサーの上に置かれたメモを指す。

「え？久遠君が？」

「このメモ、まだ見てないの？」

「それ、さつき久遠君が置いていったんだけど・・・」

「見てごらんよ、」

手渡されたメモに書いてあったのは走り書きの携帯番号。

「あ・・・、」

《寝る前に教える》と言う言葉を思い出して、カッと頬が赤くなる。その様子を見て、ほらね、とかおるは大げさにため息を付いた。

005：お風呂上がり

部屋に備え付けられているシャワールームは円形に作られていて、直径一メートルほどの広さがある。全面がすりガラスになっていて明るく、円形であるせいか、それほどの窮屈さは感じなかった。

かおるが丁寧に巻いてくれた包帯と湿布を外すと、腫れもかなり引いていて、軽く足を付いてみると、鈍い痛みが走る。これなら、明日にはふつうに歩けるようになるかもしれない、と思うと心が晴れた。

《無防備になるのはよくないね。》

かおるに言われた言葉が脳裏によぎる。無防備になんか、なっているつもりはない。これでも精一杯背伸びをして、頑張っているつもりだったのに。

《一人で頑張ることないぜ》

健の言葉。思い出すだけで、じんわりと心の奥が暖くなる。転校してきて、周りは男の子ばかりで、頑張らなきゃ、って気を張っていた心をふんわりと包んでくれた言葉。

でも、頑張らなきゃ！

頭からシャワーをかぶりながら呟く。もともと、元気だけが取り柄、だと思う。かおるや駿や健の様に、誰もが認める容姿をしていれば、もつと堂々としていられるのかもしれないが、自分は至って普通だ。出会ってすぐにチビと言われてしまうほど背も低く、お世辞にもスタイルがいい、とは言えない。シャワールームに備え付けられた鏡を見てため息を付く。後10センチ背が高かったら、と何度思ったことだろう。

零は持ってきたバスタオルで濡れた髪を拭きながら、お気入りのパジャマに袖を通す。フワフワした肌触りがぬいぐるみのようで心地良い。鈍い痛みの走る左足をかばいながらドレッサーの前に座

り、鏡を覗き込んだ。

零は色白で、瞳の色も、髪の色も茶色い。髪は細く、まっすぐな猫毛で、今はやりの巻き髪にしたいくてもすぐにまっすぐに戻ってしまふ。前に一度、自分の容姿の事で母親に愚痴を言った際、祖母がハーフで、零にもほんの少し、イギリス人の血が流れているからだ、と聞かされた事がある。祖母は早くに他界していて、一度も会ったことがなかったが、若い頃の写真を見る限り、ものすごく美人だった。

その血を引いているわりには、私には美人成分が含まれてないよね、

と、零は鏡を見るたびに思う。零はどちらかと言うと童顔で、美人と言うよりは《可愛い》に分類される顔立ちをしている。大きな二重の瞳にぷっくりとした桜貝色の唇、駿が《よくできた人形の様》と表現したのは案外的を得ている。零は自分が思うよりはずっと愛らしい容姿をしていたが、前の学校でのトラウマが零から必要以上に自信を奪っていた。

バスタオルを頭からかぶって、ドレッサーの前の椅子で膝を抱える。

どんなに頑張っても、私は私にしかねないし……。少しでもみんなと仲良くなれるように頑張ろう。

よしっ！と自分に気合いを入れ、持参したドライヤーで髪を乾かし始める。背中に届く長さの髪を乾かすのは大変で、いつも途中でうんざりするが、それでも猫毛が絡まらないように櫛を通しながら丁寧に乾かすのが零の日常だ。

「・・・ちゃん、れーいーちゃんッ！」

「キヤアッ！」

「そんな、悲鳴上げないでよ、僕傷ついちゃうな・・・」

「ごっ、ごめんなさい、びっくりしちゃって。」

ドライヤーを使っていた零は、ノックをして入ってきたかおるに気付かず、不意に肩を叩かれて思わず悲鳴を上げた。

「ドライヤーの音がしていたから、もうお風呂上りかなと思って、」
につこり、と微笑まれる。

だからその笑顔は殺人的だって・・・。

反射的に、頬が赤くなる。

「足の手当てをしようと思ってね、湿布をもらってきたから。」

見せてご覧、とドレッサーの椅子に座ったままの零の足元に跪いた。
かおるも風呂上りなのか、ほのかに石鹸の良い香りがする。

「も、もう大丈夫だよ？歩いててもあんまり痛くないし、」

「歩いたの？！一人で？！・・・まあそうだよ、シャワーを浴びるには歩かなきゃいけないだろうけど・・・でも無理しちゃだめだよ？歩くのは部屋の中だけにしてね。」

かおるに足首を掴まれると身体が熱くなるのを止められない。かおるは零の足首に湿布を貼り、丁寧に包帯を巻いていく。

「ずいぶん、腫れも引いたね。痛みはどう？」

「歩くと少し痛むけど、もう大丈夫。」

「だから、歩いちゃだめだって、」

「外には行かないけど・・・あつ、」

「どうしたの？」

「少し、喉が渴いちゃって・・・」

「あ、そうだよ。気付かなくてごめんね？買ってくるから待って、」

かおるはにつこりと微笑むと部屋を後にした。穏やかで、優しくて、かおると話しているとお姫様にでもなった気分になってくる。腫れ物に触るかのように、優しく、そっと包まれるような錯覚。

零はふと、ドレッサーの上に置いたままのメモに目を落とした。

《お前みたいなたびをロフトに上げてやるくらい、簡単なもんだ。
寝る前に教える》

ぶっくらばうな言葉が蘇る。

まだ、寝ないけど・・・。

走り書きの携帯番号に目をやると、胸の奥がキュンと苦しくなる。

幸せな苦しさだ、と思った。無条件に優しくしてくれるかおる、照れながらも温かい言葉をかけてくれる健、ぶっきらぼうだけど、きつと優しい駿、それぞれの顔と、かけてくれた言葉を思い出すだけで胸が温かくなって、少し苦しくなる。

・・・それにしても、ここの人達は女子の部屋にも普通に入ってきてきちゃうんだ？

何もかもが慣れない事だらけで戸惑いの多い寮生活だったが、それでもこれからの生活を思うと心が躍った。本当に、新しい自分になれるそうな、そんな気がした。

006：眠る前（前書き）

長い一日が終わりました（笑）。
これからどうしよっかなー？

006：眠る前

零のかわりにミネラルウォーターを買いに行ったかおるは、程なくして再び零の部屋に顔を出した。

「今日は疲れたでしょ？緊張もしてただろうし、今日はゆっくり休むといいよ。」

ガランとした部屋の中では零が座っているドレッサーの椅子以外に座る場所はなく、かおるは零の傍らに立ったままにつこりと微笑む。

「なんだかたくさん迷惑かけちゃったけど・・・いろいろありがとう。」

零がぎこちなく笑うと、かおるは極上の笑顔で体を屈めて零に顔を近づける。

「迷惑だなんて、少しも思っていないよ？零ちゃんのためならどんな事でも迷惑なんかじゃないし、むしろもっとたくさんわがまま言うって甘えてほしいくらいさ。」

近づけられる顔に、零の心臓は相変わらず跳ね上がり、頬が赤くなる。

「あ、あのっ！

「なあに？」

「あの、どうしてそんなに、優しくしてくれるんですか？」

ドキドキついでに、今日出会ってからずっと疑問に思っていた事を口にする。優しい、だけではない、一歩間違えば、かおるが零に恋をしていると取られかねないきわどい発言を繰り返すのは、なぜなのだろう？

「突然の敬語でどうしてそんなこと聞くの？」

零の問いかけに、スツとかおるの瞳に影のような感情が走る。

「だ、だって・・・

「だって、何？」

「今日、会ったばかりだし、かおる君、すごく素敵で、かつこよくって優しくて王子様みたいなのに、私みたいな何の取り柄もない平均点以下のチビにどうしてそんなにしてくれるのかなって、」

口にすると、何だか自分がみじめになる。転校生と言う状況に、女子が一人しかいないという環境に、同情してくれているのなら、これ以上の優しさは罪だ、とさえ思った。

ちよつと、泣きそう・・・

かおるの顔を見れずに、零は俯く。

「零ちゃん、僕の事王子様みたいって思ってくれてたんだ、」
うれしそうなかおるの声に、思わず顔を上げると、眩暈がしそうなほど華やかな笑顔にぶつかる。

「零ちゃんがそんなこと言ってくれるなんて、うれしくて今日は眠れないかもしれないな」

かおるの声が弾む。

「でも、

かおるはフツと真顔になり、椅子に座っている零の前に跪いてその顔を下からのぞきこむ。

「零ちゃんが、《何の取り柄もない平均点以下のチビ》ってのは聞き捨てならないな。それ、誰かに言われたの？」

少し、怒っているようにも取れる口調。零は何と答えるべきか解らずにかおるから目を逸らせる。転校前、常にクラスメイトから言われていた言葉。《お前なんか、いなくなればいいのに》《ちよつと頭がいいからつていい気になりやがって》《親がハーフだか何だか知らないけど、真っ白で気持ち悪い》クラスメイトの女子が学校で一番人気だった男子が零の事を好きだ、と言う情報を聞いた事をきっかけに始まっていたいじめ。零はそんな理由など知らず、突然始まった、友達だと思っていた人達からの罵声を、2年間聞かされ続けた。《私は、ダメな子なんだ》と、思う事でしか、心を守れなかった。

「零ちゃん？」

俯いた零の肩にかおるはそつとふれる。

「誰に、何を言われたのか知らないけど、零ちゃんは平均点以下なんかじゃないよ？零ちゃんが僕を王子様みたいと言ってくれるなら、僕にとつて零ちゃんはお姫様だね。」

かおるはそう言つて、にっこりと微笑む。

「少なくとも僕は、零ちゃんのエスコート役をやめる気はないし、もつと甘えてくれていいんだよ？零ちゃんに優しくすることに理由が必要だつて言うなら・・・」

かおるは言葉を探すように少し口ごもり、まっすぐに零の瞳を見つめた。

「お人形さんみたいに可愛いくて頑張り屋さんの零ちゃんをほつておけないから、かな。」

「さあ、お姫様はもう寝る時間だよ？零ちゃん、ロフトの上で寝るの？」

かおるの最初から最後まで殺人的なセリフに悩殺されて思考がフリーズしかけていた零は、あわてて頷く。

「その足ではしごを登ろうとするのは関心しないけど、幸い僕がここにいるから、許してあげる。」

かおるはそう言つて、当たり前のように椅子に座っている零を抱き上げる。

「零ちゃんのパジャマはふわふわしててぬいぐるみを抱いてるみたい。このまま僕の部屋に連れて行つて抱っこして寝ちゃおうかな？」

と零の思考を完全に停止させる殺人的なセリフを口にしながら零をロフトの上におろすと、にっこりと微笑んで、おやすみ、と部屋へ歸つて行つた。

かおるによる思考停止事件が多発したせいもあり、零はロフトの上が上がってしばらくたつてから駿に寝る前に連絡しろと言われた事を思い出す。

もしも、かおる君が来てくれなくて、私が久遠君に電話をかけた

ら、久遠君は・・・。

昼間に抱き起してくれた、たくましい腕を思い出して、顔が熱くなる。なんとなく、当たり前のように抱っこしてくるかおるに触れる事には不本意ながらこの一日で慣れてしまった気がする。当然のように殺人的なセリフを口にする男前かおるの微笑みはいつも完璧で、その向こうにある真意は零には掴めない。

連絡しろって言われたし、もしかしたら待つてくれるかもしれないし、電話、してみよう・・・。

零は勇気をだして、もらったメモを見ながら駿の携帯を鳴らす。

《はい》

電話口でも、無表情な、不機嫌そうな声。

「あつ、あのつ、佐倉零ですっ！昼間は、ありがとうございました・・・」

《ああ、》

「あ、あ、の、連絡しろって、言ってくれたから、電話、かけて、その・・・」

《何だよ？》

しどろもどろになる零に、ぶっきらぼうな問いかけが突き刺さる。

「さ、さっきかおる君が来てくれて、その、」

《大丈夫ならいい。》

零の言葉を遮って、プツリ、と通話が途切れる。

・・・やっぱり、怖い・・・。

通話の途切れた携帯を握り締めて、零は思う。枕元に置いておいたクマを抱き寄せて顔を埋め、駿の不機嫌そうな横顔を思い出して溜息をついた。

《お人形さんみたいで頑張りやさんの零ちゃんをほっておけないから》

かおるに言われた言葉を思い出すと、恥かしくて胸の奥が苦しくなる。

「お姫様、だつて。」

・・・完璧王子に言われても、実感ないけど、でも、嬉しい、と素直に思った。ここでなら、うつむかず顔を上げて夢に向かって頑張れる、そう思えた。

006：眠る前（後書き）

明日からプチ旅行にお出かけするので、更新しばらくストップします

読んで下さっている方、ポイントをつけて下さっている方、いつもとっても励みになります。これからもあまあまで頑張ります（笑）
ご感想、ご指摘、ダメ出し、大大歓迎です！

007：翌朝（前書き）

プチ旅行から帰ってまいりましたー
これからも頑張って更新しますので、どうぞよろしくお願い致します。

引つ越しに始まった急激な環境の変化で、肉体的にも精神的にも疲れていた零は気付くと深い眠りに誘われ、お気に入りクマを抱いたままぐっすりと眠っていた。窓から差し込む春の光は暖かで明るかったがロフトの上までは届かず、零の眠りは柔らかなシーツにつつまれて穏やかに続いていた。

「・・・ちゃん、零ちゃん、もう朝食の時間だよ、」

「・・・まだ眠いの・・・」

優しく肩をゆすられて、完全に寝ぼけている零はクマを抱いたまま呟いて寝返りを打つ。

「このお寝坊なお姫様は僕を誘ってるの？ああ、そうか、姫は王子のキスで目が覚めるものだったね、」

ロフトのはしごを２段ほど上り、眠っている零の耳元に囁く。

天使の様にさえ見える寝顔。可愛すぎて理性を失いそうになる。

この可愛さは罪だ、とかおるは苦笑した。

「お姫様、目を覚まして下さいな？」

零の寝顔に顔を近づけ、額に軽く指先で触れる。

「・・・ん・・・」

零は額にくすぐったいような刺激を感じてまどろみの世界から引き戻される。覚醒する意識と同時に、睫毛が触れそうなほど間近にある王子様の顔が視界に入り、寝ぼけていた脳がたたき起こされた。

「・・・そんな、悲鳴上げないで。おはよう、零ちゃん・・・」

あ、駿も、おはよう。」

目覚めと同時にドアップの男前かおるに、女性としての本能なのか、まだ半分寝ぼけているせいかは不明だが、零は人生最大級の悲鳴をあげ、その悲鳴に駿が部屋に駆けつけた。

悲鳴の元凶となったかおるは涼しい顔で二人に朝の挨拶をした。

「おい、かおる、お前何かしたのか?!」

責めるような駿の口調に、穏やかなかおるの表情に一瞬驚きが走る。
「・・・何も? お寝坊な眠り姫を起こすのに、目覚めのキスをしようとしただけ、」

「キツ、キスツ?!」

シートにくるまってロフトの上に座ったままの零の声が裏返る。

さつき、額に触れたのって、ま、ま、ま、まさか・・・

カアッ、と頬が熱くなる。

「してないよ。寝顔があんまりにも可愛くてちよつと理性を失いそうになったけどね。」

かおるはそう言って微笑む。

「ね・・・寝顔・・・」

「そう、寝顔。だってノックしても呼んでも返事がないし、万が一何かあったんじゃないかと思って部屋に入ってみたらぬいぐるみを抱いてすやすや眠ってる天使がいたからさ。」

思わずみとれちゃった、と事も無げに言うかおるを駿がにらむ。

「ソイツは女なんだ、お前ももう少し気を使ったらどうなんだ、」

駿の眉間の皺を見て、朝から機嫌が悪そうだと零は思う。

「うーん、気は使ってるつもりなんだけど・・・。これから部屋に入るときは、もう少し気をつけるよ、」

かおるはそう言って零にウィンクし、ロフトの上の零をシートごと抱き上げる。

「あつ、ちよ、ちよ、まつ」

「ちゃんと掴まって? 危ないから。」

慌てふためく零を抱いたままはしごをおり、零をドレッサーの椅子まで運ぶ。

「足はどう? まだ痛む?」

「え、あ、足つ? あ・・・」

いろいろありすぎて、足を捻ったことなど忘れていた。足首に巻かれた包帯を見て昨日足を捻った記憶がよみがえる。

「も、大丈夫だと・・・思う。」

動かしてみても痛みはなく、少し違和感を感じる程度で零はほっとした。

「朝っぱらから、人騒がせなヤツ。」

駿はそう言い捨てて、部屋を出て行く。その後姿を見て、零の胸の奥が鋭く痛んだ。

「・・・零ちゃん？僕がいるのに、他の男に気を取られるなんてひどいなあ。駿は恥かしがりやだからね、打ち解けるのには時間がかかるかもしれないけど・・・すごくいいヤツだから、あまり駿の言葉に傷つかないでね？」

「・・・うん、」

「じゃあ、朝食に行こうか？」

かおるはパジャマのままの零を再び抱き上げ、部屋を出ようとする。

「あ、あ、あ、あのっ！私パジャマだしっ！も、足痛くないしっ！」

「だから何？」

「だ、だからっ！あの、着替えて、一人で行けるからっ！」

「どうして？」

「ど、どうして、って、」

「朝食はみんな着替えてないよ？零ちゃんもこのままで大丈夫さ。

それに、痛くなくても今日はまだ無理に歩かない方がいいし・・・

僕は零ちゃんを抱っこしたいから、これで問題ナシ。」

わ、私的には問題おありなんですけど・・・。

「はい、だからちゃんと掴まって？ほら、僕の首に手を回す！」

もう、ダメだ・・・このまま気を失ってしまいたい。もう無理。

私には、刺激が強すぎます・・・。

昨日マヒしたはずのお姫様抱っこだが、心臓が痛いほどに暴れ、体が熱くなる。

そんな零にはおかまいなしに、かおるは零を食堂へ連れて行くのだった。

007：翌朝（後書き）

私的に、ああ、こういう男子がいたらいいなあという妄想の元に・
・このお話を書いておりますので、そろそろ『絶対こんな奴いない
よ!』と言っツツコミが入りそうですが・・・その辺りはご容赦く
ださいませ。

高校3年生の一年間のお話なのに、最初の1日だけで7話まで行っ
てしまいました。反省・・・もう少しスピードアップします。

008：お買い物・1

午後になり、すっかり足の痛みがひいた零は一人でガランとした部屋を見まわし、足りないものを買に行こうと思い立った。かおるが巻いてくれた包帯をとって見るとすっかり腫れもひき、歩いてみても痛くない。だが、みんなに、特にかおるに見つかり、まだ歩いてはいけなさと叱られそうだったので一人で出かける準備をしていると、携帯が鳴り出した。

「もしもし？」

「あ、健だけど、」

「うん、」

「あのさ、今日何か用事ある？」

「あつ・・・別に、ないけど・・・」

何となく罪悪感があり、一人で買い物に行こうと思っていた、と言えずに口ごもる。

「何かあるのか？」

零の口調から何かを感じたのか、健が問いかける。

「いつ、いろいろお部屋に足りないものがあるから、お買物に行こうかと思ってたんだけど・・・」

おずおずと切り出すと、健の声が弾んだ。

「俺もさ、街へ行かないかって誘おうと思ってたんだ。買い物なら付き合うぜ？」

「あつ、ありがとう。でも、いろいろ買わなくちゃいけないし・・・」

「じゃあなおさら荷物持ちも必要だろ？」

一時に一階集合な、と声を弾ませた健の電話は一方的に切れてしまった。

・・・健君なら、叱られることもないよね？

零は健の笑顔を思い出して、ふんわりと心が暖くなる。元気いっ

ばいな健と一緒にならきつと楽しいだろうと思うと、自然と笑顔になった。

荷物を運ぶこともあると思い、ボトムは七分丈の細身のデニムをロールアップにして、トップスは春らしく淡いピンクの花柄のシフオン生地の子ユニックを選ぶ。足元はヒールのないグラディエーターサンダル。いくつかある腕時計の中からお気に入りの物を選んで部屋を出た。

・・・スリッパ、欲しいよね？

寮の中では靴は履かず、基本全員はだし。廊下も部屋もフローリングで、はだしでも違和感はなかったが、なんとなく、素足で歩くのはためられる。

買い物リスト、作っておけばよかったな。とりあえず、家具屋さんへ行つてソファーとラグとセンターテーブルを見て、電気屋さんでテレビと掃除機を見て、雑貨屋さんへ行つて・・・

頭の中で、必要と思われるものを整理しながら階段をおり、寮の入り口で部屋から持ってきたサンダルを履いていると寮母の倉口さんが部屋から顔を出した。

「零ちゃん、足はもういいの？」

「あ、ハイッ！もう大丈夫です。ご心配をお掛けしてすみませんでした。」

頭を下げると、かしこまる必要はない、と倉口さんはおおらかに笑う。

「今からお出かけ？」

「はい、いろいろと必要なものが出てきたのでお買い物に。」

「そう、俺とデート。なっ？」

そこへ2階から健が降りてきて、後ろから零の肩を抱く。少しスパイシーな柑橘系の香りにドキッとさせられる。

「たっ、健君ッ！」

「行こうぜ！」

健は待ちきれないと言った風で零の手をとって走り出す。身長差も

あり、借り物競争に借り出されて引つ張られる子供のように見える二人を見て倉口さんは笑い。部屋に戻った。

「たつ健君っ！ちよ、待って！」

寮から校門までまっすぐに伸びる路を走りきったところで、健はようやく走るのをやめ、零の手を離す。ぜえぜえと呼吸を整える零を見て、ごめん、と謝った。

「寮の窓から見えるところを二人で歩いてて、他のやつらに見られたら面倒だしな、
そう言って照れたように笑う。

「じゃ、行こうか。」

自分よりもずいぶん背の高い健の背中はとても大きく見え、これまで男の子と二人で出歩いたことなどなかった事を思い出し、零は昨日からの異常事態で感覚がすっかり麻痺しているな、と苦笑した。

「零ちゃんは、どこに住んでたの？」

歩きながら健が問いかける。

「愛知県・・・って知ってる？父が海外赴任になって、母親がついていくって言うから、一人になっちゃって、」

「愛知かぁ。知ってるよ、金のシャチホコがあるとこだよな。」

後はキシメン、ミソカツ、エビフライに手羽先！と健は次々と有名な食べ物を並べる。

「よく知ってるんだね。小倉トーストは食べたことある？」

「ん？ナニそれ？」

「バターを塗ったトーストにあんこと生クリームをつけて食べるの。おいしいんだよ？」

零の言葉に、健は食べてみたいな、と笑顔になる。

かおるの、少し大人びて綺麗に整った笑顔とは違う、少年のような笑顔。鍛えられたスポーツ選手のような体つきに整った顔。面倒見が良くて優しく、さぞ、女の子にモテるだろうと思う。

寮から市街までは歩いて30分程度。途中までは緑も多く、森の中を散策しているような気分になれる。遊歩道も整備されていて木漏れ日が心地良い。

「あ、そういえば、」

「どした？」

「足が治ったら一緒に買い物に行こうって、昨日かおる君と約束したんだった・・・」

「かおると？あんなヤツのことほっときやいいさ。調子いいことばっかり言って、おいしいところ取りしやがって、」

「おいしいとこって何を？」

「えっ？！べつ別に何がって、そんなのどうでもいいだろっ！」

急に赤くなってそっぽをむく健を不思議に思いながらも、零は話の流れとはいえ誘ってくれていたかおるに声もかけずに出てきた事を少し後悔する。せめて今からでも連絡しようかと思っただが、携帯を部屋においてきたことに気付く。

「ああ、また忘れちゃった・・・」

「ん？」

「携帯、置いてきちゃった。私よく置きっぱなしにしちゃうの。」

「別に一日くらい持つてなくても大丈夫さ。俺とはぐれなきゃ、問題ないだろ？」

全開の笑顔がまぶしい。こんな風に歯を見せて笑ってもかっこよく決まる人って珍しい、と零は内心想う。少女漫画の主人公の彼氏役がはまりそうなさわやかさに思わず見とれてしまふ。

「それはそうと、さ。」

歩きながら、いつもはつきり物を言う健が珍しく言い出しにくそうに口ごもる。

「何？」

健の方を振り向くと、一瞬目が合い、瞬間目を逸らされてしまふ。

「前の高校で、彼氏とか・・・いたの？」

質問の内容で、健が口ごもった理由が分かり、かっこいい人でもそ

う言うことは聞き辛いんだな、と零は思う。

「いないよ？私、人生で一度もモテたことないし、前の学校ではあんまり・・・」

いいことがなかった、と言いかけてやめる。

「マジで？！じゃあ・・・好きなヤツとかは？」

「・・・それも・・・なかったな。」

「そっかあ。何か安心した！零ちゃん可愛いし、もう絶対彼氏いるって言うと思うってたけど、」

健は少し赤い顔で照れたように笑う。

「けど、モテたことがないってのは、零ちゃんが気付いてないだけだと思うぜ？みんな気になって仕方ないと思うけどな。」

「そんなことないよ？だって本当に何にもなかったし、」

前の高校のことはあまり思い出したくないくらい、と付け足すと、

健は驚いた顔をしたが、すぐに満面の笑顔になった。

「じゃあ、この高校で最高に楽しい思い出、いっぱい作ろうぜ！俺も手伝うし！」

健の笑顔に零もつられて笑顔になる。

「ありがとう、健君といると何だか元気になれちゃう。」

自分に向けられた零の偽りのない笑顔に、健は顔が熱くなるのを感じ、零に悟られないように上を向いた。

009：お買い物・2（前書き）

もつベタベタの王道ストーリーで申し訳ありません。
どうぞ気長に私の妄想恋愛にお付き合ってください。

009：お買い物・2

「今度はあっち!」

「ええ、まだ行くの・・・」

家具屋、電気屋、雑貨屋のはしごをする零に連れまわされ、健はこの小さな体のどこにそんなパワーがあるのかと関心する。家具や家電などの大きなものは発送の手配をすませ、こまごまとした買い物が続く。

「ねえほら、これ可愛いよね?!」

零は雑貨屋でおおきなボンボンのついたパステルカラーのルームシューズを見つけて、傍らの健を振り返る。

「あ・・・ああ・・・」

心から楽しい、と言う気持ちがまっすぐに伝わる笑顔に思わず心を奪われていた健は気のない返事をする。

「・・・可愛く、ないかな?」

健のそっけない返事に、零は不安気な声を出す。寮の中で履こうと思っただけど、と呟きながらディスプレイに戻そうとする零に健は我に返り、思わずその手を掴んだ。

「えっ?」

「あ、いやっ、ごめん、」

零の驚いた瞳にぶつかり、健は慌てて零の手を離す。

「いやっ、その・・・すげー可愛いと・・・思う・・・」

零ちゃんには似合うと思う。と健は最後の言葉を飲み込む。可愛いと思う、と言う健の言葉に、再び零の顔に笑顔が戻った。

「だよねっ!どの色がいいかな?こんなに選択肢が多いと迷って決められないよ。」

そんな零を見て、ああ女の子だな、と健は思う。こんなにも楽しそうにするなら、何時間でも買い物に付き合っていられる気がする、と思っていると、不意に携帯がなった。発信者はおおる。

「もしもし？」

いいところで邪魔しやがって、と思いながらも携帯を取ると、あきらかに怒った風のかおるの声が耳に突き刺さる。

「健、今どこにいる？」

「えっ、今？街に出てきてるけど？」

「零ちゃんも、いるよね？」

「いつ、いたらどうだったの、」

「零ちゃんは、足を怪我してるんだよ？本人が痛くないって言ったかもしれないけど、街を連れ歩くなでどという神経してるのかな？今日帰って少しでも零ちゃんの足がひどくなったらどうなるか、覚悟しておくといい、」

「べ、別に俺は無理やり連れ歩いてるわけじゃ・・・」

「それに、足が治ったら一緒に買い物に行こうって、僕が約束していたのに、抜け駆けしたこの落とし前はきつちりつけてもらうからね、」

「ぬ、抜け駆けなんかしてねえよ！お前だって昨日からいいとこ取りばかりしてるじゃねーか！」

電話口で言い争っている健を見て、きつと電話の相手はかおるだ、と零は思う。

「ねえ、ちよつと、かわってほしいな？」

健の腕をつついてそう言うのと、渡りに船、とばかりに健は零に携帯を渡す。

「かおる君・・・？」

「れ、零ちゃん？！今どこにいるの？部屋をノックしてもいないし、携帯を鳴らしたら部屋で鳴ってるし、心配したんだよ？」

突然零が電話口に出たことで、かおるも少し驚いたようだったが、すぐに冷静さを取り戻す。

「ご・・・ごめんなさい。私、よく携帯を忘れるんです・・・。」

冷静に怒られると、思わず敬語になってしまう。

「僕は怒ってるんじゃないくて、心配してるんだよ。零ちゃんに何か

あつたらつて思つたら心臓が止まりそうになつたくらい。」

溜息をつくようなかおるの言葉に、零の心も痛くなる。

「ごっ、ごめんなさい。今度からはちゃんと心配かけないようにします・・・。」

「分かつてくれたならいいけど、でも、

「でも？」

「今日のことは、ごめんなさいでは許してあげない。」

「えっ？」

「帰ってきたらまっすぐに僕の部屋に来て、ただいまのキスをする
こと。いいね？」

「えっ?! なっ、・・・切れちゃった・・・。」

健の方を見ると、健も肩をすくめて見せる。

「かおるって、すげー横暴だろ? 頭良くてよく気が付いて、基本優しいんだけどさ、気に入らないことがあると超こええし。」

「すごく、同感。横暴と言うか、強引と言うか・・・。」

「・・・帰ったら、一緒に謝りに行つてくれる?」

一人で、かおる君の部屋へ行く勇氣なんかないし。

「ああ、いいぜ。二人で怒られた方がまだマシだもんな。つつか、
何で俺達がかおるに怒られるんだってのなあ?」

やってらんねーぜ、と言いながらも、お互いに少しずつ、後ろめた
いところもあり、顔を見合わせて諦めたように笑う。

「零ちゃん、それ、零ちゃんには白が似合うと思うぜ。白にピンク
のヤツ。」

思い出したように健はそう言い、それでいいなら買ってくるよ、と
笑顔を向ける。いいよ、と遠慮する零を健は制する。

「お近づきのしるしと、零ちゃんの足がまだ完治してないのに連れ
出したお詫びと、俺の株を上げるためにプレゼントさせてくれよ。」

必要なものを一通り買い揃え、不必要と思われる小物までいろいろと買い込んだ零は、その荷物の大半を健に持つてもらっている事を心苦しく思いながら、早々に寮へ帰ることにする。買い物をしているときは楽しくてテンションが上がっていたのか、全く痛くなかった足が気付くとまた少し腫れて痛み始めている事も、零の心を憂鬱にした。

かおるにどうやって言い訳をすれば許してもらえらるうか、と考えるが論理的で隙のないかおるを丸め込むことは難しいだろうと思われ、知らず知らずのうちにため息が出る。

「ちよつ、零ちゃんこつち来て、」

零がもんもんと帰ってからの《かおる対策》について考えていると、不意に健に腕をひっぱられる。

「ど、どうしたの、急に、」

「アイツら、北高のヤツらだ。」

「??」

健の視線の先をたどると、大通りを隔てた歩道を前から歩いてくる高校生の姿がある。まだ少し距離があつてはつきり顔は見えないが、雰囲気からもあまり良い印象は受けない。

「この辺りでハバきかせるヤツらさ。関わったらロクな事にならない。零ちゃん可愛いからさ、あんなヤツらに目をつけられたら大変だし。」

見られないに越したことはない、と健は言い百貨店の中に入る。

「この中を抜けていけば大丈夫。ホント、ロクなヤツらじゃないからさ。しょっちゅう警察沙汰になつてるし、喧嘩っ早いし。」

「そうなんだ・・・」

確かに、見た目から怖そうだったな、と零は思う。派手に着崩した制服も、威張ったような歩き方も。

「これから街へ出た時も、絶対関わらないようにな。女の子拉致つたとか言うウワサも聞いたことあるし、ホントにロクなヤツらじゃないからさ。」

「拉致つた、って・・・」

絶句する零に、大丈夫、と健は笑いかける。

「今日は俺がいるから大丈夫。零ちゃんのこととは、俺が守るよ。」

010：お仕置き

買い物を終えた零と健が寮に戻ると、倉口さんが部屋から顔をのぞかせる。

「零ちゃん、かおる君と駿君が心配してたわよ、」

「えっ？」

駿君が・・・？

零の心の中の戸惑いを知ってかしらるか、健が口をはさむ。

「かおるはともかく、駿が人の心配なんかするわけねーじゃん。零ちゃんの足の怪我だって、バカにしてばかりで全然心配なんかしてなかったのに、」

健の言葉に倉口さんは笑う。

「そう？でも、《佐倉見なかった？》って言って、わざわざ私の部屋に来たくらいだから、心配してたんだと思うけど。健君がデートに連れて行った、って言ったらなんだか怒ってたわよ。」

「ゲッ、駿にまで怒られんのはごめんだなあ。アイツ、デカいし迫力あんだよな。」

大げさに怖がる振りをする健を見て零は少し笑うが、心の中でざわめく不安のような影を押さえられずにいた。理由はどうあれ、いろいろと心配して助けてくれたかおるや駿に何も言わずに出かけてしまったのは事実で、そのせいで、ただでさえ嫌われている駿に、さらに嫌われてしまったかもしれない。

「零ちゃん？・・・だ、大丈夫さ！とりあえず、この荷物、部屋に置きに行こう。」

《帰ったらまっすぐに僕の部屋に来て・・・》

電話の向こうのかおるの言葉が甦る。どうするのが正解なのか、もはやわからない。

健に背を押されるようにして、零は自室に戻る。健は買ってきた荷

物を部屋の中まで運び込むと、零に方に向き直る。

「どっちから謝りに行くよ？」

「とっ、とりあえず、かおる君・・・かな・・・。」

多分、二人ともドアの開く音や廊下を歩いてきた物音で帰ってきたことには気付いていると思われ、それが返ってプレッシャーとなっていた。どんな顔で、どんな言葉で謝ればいいんだろう？けど、そもそも、これって悪い事だったのかな？などと様々な思いが心の中を渦巻く。

「そっ、そんな顔すんなよ？大丈夫だって。ちよつと顔だして悪かった、って言えばそれで終わるさ。」

終わらなかつたら俺が強制終了させてやるから心配すんな、と健に言われ、零は重い足取りですぐ向かいのかおるの部屋をノックする。
「はい、どうぞ？」

中から、かおるの声がする。

ドアも開けてくれないんだ・・・。

自分からドアを開けて人の部屋に入るなんて、ただでさえ相手が怒っているかわかっているのに気まずすぎる。そんな零の心中を察してか、健が入るぞ、と声をかけてドアを開けた。

「おかえり、零ちゃん。」

かおるが怒っている事を覚悟していた零は、優しく微笑みながら近づいてくるかおるに少し戸惑う。

「あ、あのっ、勝手に、出かけて・・・心配かけて、ごめんなさい・・・。」

かおるの笑顔と言うプレッシャーに耐えかねて、後半の声が消え入るよつに小さくなる。とてもまともにかおるの顔を見れなかった。

「零ちゃん、」

「は、ハイッ！」

「約束は？」

「えっ？」

「ただいまのキスは？」

「何バ力な事言っただよッ?！」

黙って零の後ろに立って事の成り行きを見守っていた健が声を荒げる。

「健は黙ってて?これは零ちゃんと僕の約束。健には後でじっくり話を聞くから一旦部屋に戻ったら?」

「だ、黙ってられるかッ!お前勝手なことばっか言っただじゃねーよ。別に零ちゃんは何も悪い事してねーじゃねーかよッ!」

「でも零ちゃんは、悪い事をしたと思ったから謝りに来たんだよね?」

かおるは完全に健をスルーして零に問いかける。

うつ・・・悪い事って言うか、なんていうか・・・後ろめたくはあったけど・・・。やっぱりこれは悪い事、だったの?

かおるが怖すぎて思わず謝りにきてしまった、と言う表現が、多分一番正しい気がする。

どう答えるべきか言葉に詰まり、おそろおそろかおるの顔を見上げる。

「そんな可愛い目をしたってダメだよ。今日は許さないって決めたからね。」

かおるはそう言って、身体を屈める。

「ハイ、キスして。」

「えっ、あ、あのっ、わ、私ッあ、あの」

近づけられるかおるの顔に零は真っ赤になった。

キ、キスって、む、無理、絶対無理。無理!!

「零ちゃん、こんなヤツの相手することねーよ。行こうぜ、」

見かねた健が零の腕をとって部屋を出ようとした瞬間、かおるの腕が零を捕らえる。

「・・・ッ!」

「零ちゃん、おかえり、」

背後からかおるに抱きしめられ、チュッ、とわざと音を立ててこめかみにキスをされて、零は完全にフリーズした。

「健、いつまで人の部屋にいるつもり？用事がないなら出て行ってくれると嬉しいんだけどな。」

フリーズしている零を腕の中に捕らえたままでかおるは健をにらむ。「今から、零ちゃんの足の手当てをしなきゃいけないし、それが終わったら零ちゃんの部屋へ行つて、今日買ってきたものの片付けを手伝ったりしなきゃいけないから、僕は忙しいんだ。」

「なっ、おまっお前なあ！」

「零ちゃんの足がひどくなっていたらただじゃおかないと、言ったよね？」

いつも穏やかなかおるの瞳がスツと冷酷とも思える光を宿す。健が視線を落とすと、出かける前に湿布を外していた零の足首が、赤く腫れている。

「あ・・・」

「きつと零ちゃんは痛いって、言わなかったよね？だけど、これだけ腫れていたら間違いなく痛むはずだし、隣にいてそれに気付きもしないなんて、健はエスコート役失格。だから、退場。」

半ば強引にかおるは健を部屋の外へ追い出すと、腕の中で固まったままの零に苦笑した。

011：オシオキ？

かおるに部屋を追い出された健は、目の前の、鍵の掛かっていないドアをもう一度開けて中に入ることができなかった。

《エスコート役失格》とかおるに言われた言葉が胸に突き刺さってひどく痛む。確かに、歩いていて少し遅れることが何度かあったけれど、身長差があるせいだとは思わなかった。

確かに、失格かもな・・・。

健は心の中で呟き、赤く腫れていた零の足首を思い出していたたまれない気持ちになった。後で、きちんと零に謝ろう、と思う。きつと街へ誘った自分に気を使って、痛いと言い出せなかったんだろうと思うと、そんな思いをさせてしまった自分が情けなくもあった。

「おい、健、」

自分の部屋へ戻ろうとしかけた健を、部屋から出てきた駿が呼び止める。

「んだよ、」

自分を責めていた健は、振り向かずに返事をする。

「あの考えなしのチビを無理させるのはやめておけ、」

「なっ？」

「どうせ今頃、かおるに手当てされてるんだろう、足。」

「・・・チツ」

健は舌打ちして、そのまま部屋へ帰っていく。かおるの言葉も、駿の言葉も的を得ている。よく考えれば昨日足を捻って歩けなかった零が街を歩き回るにはまだ早かった、と自分でも思う。

何か、調子狂うんだよな。

健は心の中で呟く。ぬいぐるみのような、ペットのようなかわいらしさを持つ零の事が気になって仕方がない。ほんの少しでも話したいと、思ってしまう。こんな思いは、初めてだ。

「零ちゃん、足、見せてごらん、」

健を部屋から追い出したかおるは、零をソファアの上に座らせてその前に跪く。

朝見たときは腫れもひいて、痛みもなさそうだった足が今はまた赤く腫れあがって痛々しい。

「ごめんね、零ちゃん。僕がもう少しちゃんと、考えなしに行動する健が余計な事しないように見ておけばよかった。」
痛む？とたずねると、零は黙って首を横に振る。

どうして、かおる君が謝るんだろう。どうして、健君が責められているんだろう？もともと、一人で出かけようとしていたのは私で、たまたま健君がそれに付き合ってくれただけなのに。

かおるに《退場》と言われた時の傷ついたような健の顔を思い出すと、零の胸の奥に鋭い痛みが走る。・・・私のせい、なのに。

「はい、できたよ。・・・零ちゃん？」

零の心の中で様々な思いが渦巻き、今にも泣き出してしまいそうだった。私のためを思っ一緒に街へ買い物に行ってくれただけの健が悪者にされて、心配してくれているだけのかおるが謝ってくれるのは何故なんだろう？

手当てを終えたかおるは、辛そうで不安げな零の顔を認めると、フウ、と大きく溜息をつく。

「零ちゃんごめんね、ちよっとお仕置きがきつかったね。ごめん、もう怒ってないから、そんな辛そうな顔しないで？」

本当はすごく怒っていたはずなんだけど、とかおるは思う。零が部屋にいないと気付いてからどれだけ心配したか、このお姫様はきつと分かっていない。

「健君は、悪くないんだよ。」

「え？」

「健君は、私が一人で出かけようとした時にたまたま誘ってくれただけで、」

「それで？」

「荷物持ってくれたり、してくれただけで」

「うん。」

「だから、悪いのは私で・・・」

健君の事を責めるのは、やめてほしい、と言おうとしたところで、ずっと我慢していた涙が一粒こぼれる。

「れ、零ちゃん？！ごめん、ごめんね？泣かないで。健の事も零ちゃんのことも、責めてないから。ただ僕が勝手に焼きもち焼いて心配していただけだから、」

焦って必死に謝ってくれるかおるに、泣くのは卑怯だ、と零は思う。だから絶対泣かないつもりだったのに。

「泣いてないもんツ！」

とっさに零が叫ぶと、かおるは困ったような笑顔になり、必死に涙を堪えようとしている零を思わず抱きしめる。

このお姫様は、どうしてこんなに可愛いんだろう。この僕を慌てさせたり、不安にさせたり、散々翻弄しておいて、その自覚なしとはね。

「これじゃ、どっちがオシオキされているのか、わからないな。」
かおるは小さく呟く。

「零ちゃんが泣いてないっていうなら、泣いてないんだと思うよ。でも、泣きたいくらい辛い気持ちにさせたのは僕だよ？それに・・・もしも零ちゃんが泣いていてもいなくても、僕は同じように謝っていると思うから、」

「零ちゃんがいなくなっただって気付いて、でもすぐに健と一緒にだって分かって、心配と焼きもちと、いろんな気持ちが渦巻いて、正直、自分でも驚くぐらい慌てちゃった。」

「最初は怒ってたんだよ。どうして声をかけてくれなかったんだろう、って。でも、よく考えたらそれだってただの焼きもちだよ？」

僕の焼きもちで零ちゃんを責めて、泣かせちゃうなんて、僕の方こそエスコート役失格だよな。」

抱きしめられていて、顔は見えなかったが、口調から辛そうな顔をしているのだろっ、と思う。

違う、かおる君が悪いんじゃない、謝ってほしいんじゃない、言葉にしようとする、余計に涙があふれそう、零はただ首を横に振る。

「ごめんね、零ちゃんは何にも悪くないよ。ごめんね。もう泣かないで。」

かおるが優しい言葉をかければかけるほど、心の痛みは広がり、これがかおるのオシオキだとしたらどんなオシオキよりも効果的なオシオキだ、と零はかおるに抱きしめられたまま、そんな事を考えていた。

011：オシオキ？（後書き）

お気に入り登録して下さっている方、ポイントを付けてくださった方、超テンションあがっております
これからあまあまで頑張ります（笑）

012：涙の跡

泣いてない、と言いながら散々泣いた零はようやく泣きやみ、ずつと立て膝をして抱きしめてくれていたかおるに、小さくごめんなさい、と謝った。

「勝手なこととして、心配掛けたのに、謝らせてしまってごめんなさい。」

まだ涙の乾き切っていない瞳でまっすぐに見つめられると、さすがのかおるも頷く事しかできない。

今までにたくさんの女性に告白され、たくさんの女性の涙を見て来たかおるだったが、零の涙にはなぜか、抗えなかった。今までは別に、目の前で女が泣こうが、特別何も思わなかった。形式的に慰めたりした事はあっても、自分の心まで痛くなったのは初めてで、そんな自分に戸惑う。

「もう、謝らないで、零ちゃん。ごめんね。僕の方こそ反省しなきゃいけないのに……。ところで、今日は街で何を買ってきたの、」
これ以上、不毛な謝り合戦をしないよう、かおるは話題を変える。
今日一日、健に取られた零のエスコート役、否言い換えれば零とのデートがどんなだったのか、気になって仕方がない。かおるはそんな自分に苦笑した。

「あ、あのねっ、ソファアとセンターテーブルとラグと、TV台、後、TVと・・・」

「お部屋に置くのにルームフレグランスとネコの置物と、可愛い目覚まし時計があったから、目覚まし時計と、あっ、それと雑貨屋さんでかわいい飾棚を見つけてね、」

「後、雑貨屋さんで、ルームシューズを健君が、買ってくれて・・・健が？」

「いろんな色があって悩んだんだけど、白が似合っって、選んでく

れて、

買い物をしている時の事を思い出して、思わず笑顔で話す零を見て、なぜか心の奥が痛くなったかおるは、そんな自分を誤魔化すようにソファアの上に座っている零を抱き上げる。

「ハイ、掴まって？」

お決まりの様に真っ赤になって視線を逸らす零。

「ほら、暴れると危ないから」

につこりと微笑むかおるに零は撃沈する。耳がピンク色になっている零を見てかおるは小さく笑う。女の子をお姫様抱っこなんて、実はしたのは初めてだけど毎回こんな反応をされたら楽しくて、つい必要以上にからかいたくなる。

零を腕に抱えたままかおるは自室を出て、零の部屋のドアを開ける。ドアの開け閉めをする音を聞いてか、駿が部屋から顔を出した。

駿はかおるに抱き上げられている零にチラリと目をやり、その足に再びしっかりと包帯が巻かれているのを見ると、ハア、と呆れた顔で溜息をつく。

「お前、本当にバカなんだな。自分の体の事くらい、自分で管理できないのか？」

駿の呆れているような、責めているような口調が零の心に突き刺さり、鈍い痛みが広がる。駿の言う事は最もで、もう少し考えていれば今こうやってかおるに抱えられている事はなかっただろう。

「駿、心配する気持ちはわかるけど、あまり零ちゃんを責めないであげて？もう十分、反省したから。ね？」

「ばっ、心配なんかしてねーよ。」

「そう？僕には心配しているように見えたけど。」

「勝手な事言うな、こんな考えなしのチビ・・・ッ？」

駿は苦々しい顔をして零の方をにらみ、一瞬目が合い、息をのむ。
「？」

零は駿が突然言葉を飲み込んだ理由がわからず、じっと駿を見てみると、駿は視線を逸らしたまま悪かった、と呟いた。

「……ああ、駿も、やっぱり零ちゃんには敵わないんだね。口ではああ言っても。」

かおるはクスクスと笑う。

「だから、悪かったって言ってるだろ?!」

やっぱり、怒ってるんだ?

零の心に影が差す。どうして急に謝ったのかはわからないけれど、それでもやはり不機嫌な駿にどう接していいのか見当がつかなかった。

「零ちゃん? 駿はね、零ちゃんを泣かせたと思ったから謝ってるんだよ。零ちゃんの目がまだ真っ赤に潤んでいるから。」

「え……?」

「駿、これ、駿のせいじゃないよ? どっちかと言うと僕のせい。健のせいでもあるけど……多分僕が一番悪い。」

「なっ、かおる、お前、泣かせたのか?!」

ギツ、と駿の切れ長の瞳がかおるをにらむ。その瞳の奥に閃いた怒りの感情を見て、零は身をすくめた。

「まあ、結果的にはそう言うことになっちゃうね。」

当のかおるはいつも通り飄々と答え、ビクリと身をすくめた零に大丈夫だよ、と笑いかけた。

「駿、零ちゃんが怖がってるから、にらむのをやめてくれないか。

殴りたいなら、後で。」

「……チッ」

駿は忌々しげに舌打ちし、二人に背を向けて自室へ入っていく。かおるは諦めたような溜息を付くと、零の部屋のドアを閉めた。

「どうして駿は素直じゃないんだろっね? 零ちゃんを心配してました、って言えばいいのに。」

かおるは零をいつも通りドレスサアの椅子に座らせ、傍らに立つ。

「私、昨日から久遠君を怒らせてばかりで……」

しゅんとして俯く零を見て、かおるは微かな苛立ちを覚える。その苛立ちが、零に対してのものなのか、駿に対してのものなのか、自

分に対してのものなのかの判断が付かず、その事実にうろたえる。

このお姫様が来てから、振り回されてばかりだな、

かおるは内心想う。いつも冷静に的確な判断をする、と皆に言われる通り、自分でも慌てる事などないと思っていたのに、昨日から慌てっぱなしだ。おまけに、原因不明のイライラに襲われている。

「零ちゃん、駿は恥かしがり屋で口下手なだけだから、怒ってるわけじゃないと思うよ。」

そう言つて、かおるは無造作に置かれているたくさんの紙袋に目をやる。

「家具は明日？なら、この荷物は今日片付けておいた方がいいね。」

かおるは零の合意の下、梱包を解き、中身を順に床に並べていく。ネコのオブジェが二つ、実用性のなさそうなアンティーク調の目覚まし時計、クリスタルとレースがあしらわれたゴシック時代を彷彿とさせる小物入れなど、かおるの今までの人生では触れ合う事なかった物たちがずらりとならぶ。

「あれ、ルームシューズ、ない？」

全ての袋を開けて中身を並べ終わると、その様子を一つ一つの道具について解説をしながら楽しそうに見守っていた零がたずねる。

「ん？これで全部だよ？ルームシューズって、さっき健が買ったって言つてたやつのこと？」

「うん。私、置いてきちゃった？落としちゃったのかな？どうしよう・・・せっかく健君が・・・」

明らかに、動揺して慌てふためき、泣き出しそうな顔で助けを求めように自分を見てくる零を見て、かおるは思わず目を逸らす。零にこんな顔をさせる健がうらやましくもあり、自分を頼ってくれているようでうれしくもあった。

「多分、健が持つてるんじゃないかな？荷物運んだのって、健でしょ？零ちゃん自分で持ってたの？」

「え、あ・・・持っていない、かも・・・」

「じゃあ心配いらないさ。落としたとしても、健が落としたんだし、

そういつてかおるは笑い、どうせ健のことだから、後で自分で渡そうと思ったか、今日の事を謝る口実がほしくて持つて行ったか、そんなところだろうと思う。

「これが片付いたら、健の部屋へ行こうか、」

微笑みかけると、零はまだ慣れない男前の笑顔に思わず赤くなった。

013：贈り物

零が買ってきた物を所定の位置に収め、ゴミの片付けが終わると、かおるは相変わらずガランとしている零の部屋の床の上に座り、息を付く。

「ありがとう、かおる君。・・・ごめんね？」

「いいんだよ、このくらい。それに、僕も楽しかったよ。一つ一つが女の子だなあって。」

こう言うの、僕は選ばないから、とかおるはキラキラと蛍光灯の光を反射している小物入れを指し、あ、と思い出したように立ち上がった。

「また忘れてた。僕、何か飲み物を買ってくるから、少し待ってて、」

かおるが出て行くと、零は大きく深呼吸をする。息が詰まるわけではないが、かおるといっていると緊張して背筋が伸びる。まだ初めて顔をあわせてから2日しか経っていないのに、零が思う事を、零が感じる事を、敏感に察知して手を差し伸べてくれるかおる。気がつくといつもかおるの手の内にいるようで居心地が悪くなる。こんなにも優しくしてもらっておいて居心地が悪いなんて言ったら罰が当たるな、と零は思う。

せっかく治ってきてたのに・・・。

かおるに手当てされた足首を見て、溜息をつく。少し足先を動かそうとすると鋭い痛みが走り、零は顔をしかめた。

そう言えば、一週間後には3年生としての新学期が始まるんだよね。寮の他の人たちはいつ頃戻ってくるんだろう？

昨日から続くドタバタと、男前3人組にすっかり思考回路を乱されているが、本来の零は一生徒として転校してきた立場であり、自分は高校3年生として新しい未来を選択するための準備をしに来た

のである。

は・・・はやく冷静にならなきゃ・・・。そう言えば、制服もまだもらってないし・・・。

後一週間しかないにも関わらず、《何もわかっていない》自分に気づいて零は愕然とした。

教科書はいつどこで買うの？そもそも、私って何組なんだろう？最初って職員室へ行くのかな？でも担任の先生が誰かも分かんないし・・・。職員室がどこにあるのかもわからないし・・・。

零が急に新学期への不安にとらわれて青ざめていると、かおるが出て行った後のドアを控えめにノックする音がして我に返る。

「はっはいっ」

思わず背筋を伸ばして返事をする、遠慮がちにドアが開く。

「た、健君・・・。」

姿を現したのは健で、再び手当てをされている零の足を見て、しゅん、と肩を落とした。

「あの、あのさっ、今日は、ごめん。俺が誘ったから・・・その、こんな事になって・・・。」

健の様子に零は慌てた。もともと一人で出かけるつもりだったのに、健だけが悪者になっている。

「ちっ、違うよ、健君が誘ったから出かけたんじゃない、もともと、一人で行くつもりだったの。だから健君は何も悪くないし、かおる君が誤解してるだけで・・・。そのせいで健君が責められちゃって・・・。」

まだ泣き止んだばかりの零は、やたらと緩んでいる涙腺から涙が零れそうになって慌てる。小さい頃からいつもそうだ。滅多に泣かないかわりに、一度泣き出すと少しの刺激でも涙が出てしまう。

違う、泣きたいんじゃないのに。今泣いたら健君絶対困るし！

「あっ、っそうだ、健君・・・買ってくれたルームシューズ、持っていない？買ってきた物整理してたんだけど、見当たらなくて・・・。」

零は元氣のない健と、泣きそうな自分を紛らわすために、慌てて話題を変える。

「あ、そうだった。コレ、渡そうと思って。」

零の言葉に健は手にしていた雑貨屋の袋を零に手渡す。ありがとう、と受け取ると、わざわざ、プレゼント用にしてもらったのだろう、綺麗にラッピングされていて、ただそれだけの気遣いが零はとても嬉しかった。

「あけて、いい？」

零がたずねると、健はもちろん、と頷く。パステルピンクのファアのボンボンがついた白いルームシューズは見るだけでも癒される。履いてみようと身体をかがめると、スツと健の手が伸びた。

「足、痛むだろ？ごめんな。気付かなくて。かおるが言った事は当たってるよ。無理に連れ出したかどうかじゃなくて、一緒にいたのに、零ちゃんの足が痛いって事に気付かなかった俺が悪い。」

言いながら、零の手からルームシューズを奪い、足元に跪いて片足ずつ丁寧に履かせていく。

「やっぱ、似合うな。」

健が照れたような笑顔を浮かべてそう言うと、零は気恥ずかしくて耳を赤く染めた。

「健君、そろそろ、僕の零ちゃんにちょっかいを出すのはやめてもらっていいかな？」

壁にもたれた姿勢でコンコン、と空いたままだったドアを叩いてかおるが部屋に入ってくる。いつからそこにいたのだろう、と思うと零はさらに恥かしくなって俯いた。

「はい、どうぞ。」

かおるは買ってきたミネラルウォーターを零に手渡し、足元のルームシューズに目をやる。

「零ちゃんにぴったりだね。よく似合ってる。」

につこり、と100%の笑顔を向けられ、零は恥かしさに耐えられずにかおるの笑顔から目を逸らした。

「・・・フウ・・・」

当然のように零を抱き上げて食堂へ連れて行き、戻ってシャワーを浴びた後はロフトの上へ抱き上げたかおるは、艶やかな笑顔でおやすみ、と自室へ戻って行った。

わかんない・・・。

零はロフトの上で溜息をついた。優しくされる理由がわからない。優しいというよりもまるで傷つける事を怯えるかのように、真綿で包むように大切に扱われる事への不安。私はそんな風に扱われるべき人間ではない、と心のどこかで叫ぶ声。彼らが尽くすべき相手を間違えた、と気付いた時一体どうなるのだろう、と思うと恐ろしくて仕方がない。零は不安を紛らわすために傍らのクマのぬいぐるみを抱きしめた。

013：贈り物（後書き）

男前で優しい男子に囲まれて生活してみたい……。としみじみと想う今日この頃……。まだ零が誰を選ぶか決めてないのでー（笑）ご希望があればメッセージくださいませ（笑）後もう一人、キーマンが出てきておりませんが……。

014：勢ぞろい（前書き）

最後のキーマンが登場します

014：勢ぞろい

街へ買い物に行った時に買いそろえたものはすべて部屋にそろい、ガランとしていた零の部屋は居心地の良い部屋へ様変わりしていた。少し大きめのローソファーにふかふかとしたファーが心地よい白いラグ、ダークブラウンのテレビ台に、一人の部屋には十分な大きさのテレビ。

もともとあまりテレビを見る習慣のなかった零は、一人で部屋にいる時もテレビをつけず、小さなスピーカーで音楽を聴くことが多い。この寮にやってきて一週間。夕食の時間になるといつもかおるが部屋に迎えに来てくれる。もしもかおるが迎えに来てくれなかったら、正確な時間を思い出す事は難しい。

明日から始まる新学期を控え、実家へ戻っていた生徒達が戻ってきているようで廊下で話す聞きなれない声が響き、零はふと時計を見て溜息をついた。昨日までの夕食とは違い、今日は自分が《転校生》であると言つ自覚をさせられるようで怖かった。

「零ちゃん、食事の時間だよ、」

コンコン、とドアをノックする音と同時にかおるの声が響く。

「・・・はい、」

第一印象が一番大事！笑顔で元気に！

心の中で自分を奮い立たせ、零はドアを開ける。いつものように笑顔のかおるとともに食堂へ向かう。きつとかおるはいつものようにそつと手を差し伸べてさりげなくエスコートしてくれるに違いない。《王子が姫を》エスコートするように。

「・・・緊張してる？」

階段を降りながら問いかけられ、零は黙って頷く。こう言う時は何を話すんだろう。自己紹介って、何？そう言えば、かおるたちにも自分のことをほとんど話していない事に気付いた零は少なからず動

揺した。何も聞かれなかったから話さなかった。自分の事を話したのは、健と買い物に出かけた時に少し話しただけだ。

「零ちゃんはいつも通りにしていればいいよ。無理に笑う事もないし、無理に話す事もない。そのままの零ちゃんが、僕は一番好きだから。」

サラッと、かおるは零の心臓を止める発言をする。いつも、いつもそうだ。

「かおる君、そう言う事、あんまり言うとか誤解されるよ？みんなにも、私にも・・・」

「どうして？何を誤解するの？僕が零ちゃんの事を好きだって？」

「・・・そう、だけど」

「それは誤解じゃないから別にそう思ってもらって構わないんだけど？隠す必要もないでしょ？」

「か、かおる君って、もしかして帰国子女、とか？」

零は幼いころ数年間アメリカにいたが、アメリカの男の子はみんなそうだった事を思い出した。仲良しの女の子にはみんな「I LOVE YOU」と真顔で言える国民性を、零は不思議な気持ちで見つめた事を思い出す。

「ん？そうだよ。中学までイタリアにいたんだ。まだ日本に戻って丸2年かな、」

そう言って、かおるはウィンクする。なるほど、イタリアならなおさら、女性に対する優しさや執着のような愛情表現は理解できる。

「なんか、安心したかも。」

不意に笑顔になった零に、かおるはいぶかしげな視線を投げる。

「うっん、なんでもないの。私も小学生のころアメリカにいたんだけど、その時のお友達に何だか似てるなって、そう思ったから。」

「そうなの？」

「うん、」

「それで零ちゃんが安心して心を開いてくれるなら僕は太歓迎だよ。さあ行こう、お姫様。」

・・・やっぱ、イタリアンだと思つと、何だか納得しちゃうかも。今まで恥ずかしくてまともにみれなかったかおるの顔をまっすぐに見れる事に、零は気がつく。すつと差し出された手につかまって階段を下りて行くことも、今はなぜか自然に思える自分が不思議だった。

零とかおるが食堂に付くと、すでに寮生の大半が食事を取り始めていた。駿や健の姿もあり、健は零を見てこっちこっち、と手招きする。それほど広くはない食堂だが4人掛けの丸テーブルが2つと2人掛けのテーブルが4つ、大き目の3人掛けのソファールとローテーブルの席がある。春休みの間の事を話しているのか、4人掛けのテーブルに集まって食事をしている生徒が多く、その中に健の姿もあった。

・・・駿君は、一人なんだ、少し離れたところで2人掛けのテーブルに一人で座り、片手に本を持って食事をしている駿を見て零は思う。今までは4人しかいなかった事もあり、自然と4人テーブルに集まって食事をしていただけに、少しの違和感を覚える。

「・・・まだ、全員そろってないみたいだね、」
ホールを見渡してかおるはつぶやき、健のいるテーブルに零をいざなう。ほかの生徒たちは初めて見る《転校生》に興味津津、と言った体で視線を投げかける。

「健、ごめん、零ちゃんの食事を運ぶのを手伝ってくれる、」

「ああ、いいぜ、」
かおるは零を席に座らせると、健を伴って食事を取りにカウンターへ足を運ぶ。すぐ目と鼻の先にいるにもかかわらず一人ぼっちで取り残されたような、頼りない気持ちになった。

「ねえ、佐倉零ちゃん、だよな？佐倉サンって何科なの？」
「どっから来たの？」

「超かわいいじゃん、

「彼氏とかいんの?!

「あ……あの……」

突然、5人の新しく顔を合わせた寮生達が零の周りに集まる。零はある程度予想していたとはいえ、取り囲まれて思わず身をすくめる。「おまえら、よってたかつてみつともねえ、」

「え……?く、どう君?」

離れた席に座っていた駿が5人を遮るように声をかける。一瞬、5人の視線が駿に向かう。

「優等生の久遠は黙ってるよ。どうせ女には興味ない、って言いたいんだろ?」

久遠君って、優等生、なんだ……

零は心の中で思う。確かに、駿は女性には興味がなさそうなイメージが強い。

「はい、そこまで。零ちゃん、おまたせ。」

食事の乗ったお盆を手し、かおるが戻ってくる。にっこりと笑って持っていたお盆を零の前に置くと、健が運んできたお盆を受け取って、ありがとう、と穏やかに微笑む。

「健君、ごめんね?ありがとう。私、自分で行けばよかった。」

「……ああ、気にすんな。」

健は照れたようにそう言い、零の隣の椅子に腰を下ろす。

「さあ、食事にしようか、」

にっこりとかおるが微笑むと、寮の食堂が高級レストランであるかのように思えてくる。

「いただきます、」

食事の前にきちんと手を合わせ、目を閉じて挨拶をする。それは零が幼いころから続けている週間でもある。その様子を見ていた寮生たちは、改めて《転校生》について一つ、新しい発見をした、と思う。

零とかおるが食事を始めた時、食堂のドアが開いて、スーツを着崩

したスラリと長身で赤茶色の髪が目を引き男性が入ってきた。

「・・・お前が転校生？ふうん、かわいいじゃん。おまえ、俺の彼女にしてやる。」

まっすぐに零の元へ歩み寄った男性は零の顎をつかんで自分の方を向かせ、顔を間近に近づけてそう言つと、口元に小さく笑みを浮かべる。少しきつめのムスクと、ふんわりとかおるグレープフルーツのような柑橘系の香りが入り混じった香りが辺りを包む。

・・・え、え、えええええっ？な、何この人ッ！

固まる零。

「俺の名前は高花伊織だ。たかはないおり お前は？」

「えっ、あ、あの、わ、私ッ、」

ち、近いッ！近い近い近いッ！！

伊織の長いまつげが触れそうなほど近づけられた顔、顎を掴まれて逃げる事も出来ずに固まる。

「伊織、そのくらいにしる。僕の零ちゃんに気易く触れるな、」
立ち上がったかおるが伊織の腕を掴んで零から引き離す。聞いた事のない、かおるの怒気を含んだ声に食堂の空気が凍りついた。

015：問題児

・・・高花伊織。たかはないあり登場早々やってくれる。やっぱり問題児は問題児だな。

かおるは内心思う。ある程度の事は想定していたが、目の前で零に手を出された瞬間、自分を支配していく怒りの感情に気付く。

「お前の女？フン、もう手を付けたのか？・・・まあこんだけ可愛い女なら手を出したい気持ちは理解できるけどな。俺には他人の女だろうがそんな事関係ないね。」

かおるに手を掴まれた伊織は挑戦的な笑みを唇の端に浮かべてその手を振り払う。

「おい、お前、後で俺の部屋へ来い。」

伊織は零に向かつてそう言い捨てて食堂を出て行く。その後ろ姿を見送り、かおるは大きくため息をついた。

「・・・ごめんね？零ちゃん。驚いた？あれ、この寮の問題児。た高花伊織。彼も海外進学科コースなんだ。」

立ち上がったいたかおるは再び席に着き、食事を始めながら告げる。

「伊織の言う事は真に受けなくていいし、気にしないで。」

「あの・・・でも、」

「ほっときゃいいさ、アイツ、何が彼女にしてやる、だよ、ふざけやがって。」

隣にいた健もかおるに同調する。

「さあ、じゃあ改めて、みんなを紹介するよ。」

かおるは早々に食器を片づけて残っていた5人を次々と紹介していく。はじめは『かわいい転校生』とお近づきになろうとしていた面々だったが、かおると伊織のやりあいを見たせいか、それほど積極的になる生徒はおらず、簡単に自分の自己紹介をして三々五々、部屋へ戻って行った。最初から最後までずっと隅の席で一人本を読ん

でいた駿も立ち上がる。

「お前、どうする気？」

立ち去り際、駿は零の後ろに立ち止まる。

「え？どうって・・・？」

駿の問いかけの意図が掴めなかった零が聞き返すと、駿はいつものように呆れた溜息をついて不機嫌そうに眉間にしわを作る。

「わからないなら、いい。」

「えっ？あ、あのっ久遠君？」

そのまま立ち去ってしまった駿を追いかけようと立ち上がったところでやんわりとかおるに止められる。

「いいよ、零ちゃん。駿は、零ちゃんの事を心配しているだけさ。」

・・伊織にとられるんじゃないか、ってね。」

「とられる・・・？」

「そう。零ちゃんが伊織の言葉通り、伊織の彼女になるつもりか、って聞きたかったんだと思うよ。」

そう言うかおるもいつもの彼らしくなく、零の方を見ずに小さくため息をつく。

「僕も、それにはちよつと興味があるけど、

そう言つて、悲し気ともとれる笑顔を零に向ける。

「か、彼女って、そんな、急に言われても、困る、し・・・」

「困るし？」

「私、ちよつと・・・」

我の強い人は苦手だ、と言おうとして口ごもる。初対面で会ったばかりの人に対して、ただの第一印象だけで苦手だと決めてしまうのは、そしてそれを公言してしまうのははばかられた。

「零ちゃんがどう思っているのか、僕にはわからないけど、もし零ちゃんが困っているのなら、僕は全力で零ちゃんを守るよ。伊織は強引だし、一度言い出したら聞かないから。」

そう言つてかおるは溜息をつく。

「お、俺だつて、零ちゃんが困ってるなら何だつてするぜ？だから、

一人で悩むなよな？」

隣にいた健も同調して、困惑している零の肩を抱く。

「健、どさくさにまぎれて、勝手に零ちゃんに触らない、」

即、かおるに叱られて思わず手をひっこめた健だったが、ふと思いついたように声を荒げる。

「つか、かおるてめえなあ！お前自分は散々やりたい放題やってッ！

「やりたい放題って、人聞きが悪い言い方するのはやめてもらえるかな？僕はエスコート役として必要な事をしてるだけだよ。」

「お前が勝手に自分をエスコート役だっつつてるだけだろーがよッ！

「そうだけど、ほかに適任もないし、何か問題ある？」

「おおありだッ！！」

冷静なかおるにいいようにあしらわれている健を見ているとその掛け合いが面白くてついつい吹き出してしまふ。言い争いの内容は自分の事なのに、他人事のように思えてしまっている自分がいた。

「じゃあ、零ちゃん何かあったら声、かけてね。」

いつものように部屋の前でかおるはそう言って微笑み、自室へ戻り、零はありがとう、と礼を言って自室に戻る。部屋の電気を付けようとスイッチに手を伸ばした瞬間、その手を掴まれて零は声にならない悲鳴を上げた。

「おそかったじゃねーか、」

掴まれた手を引きよせ、耳元でささやかれる声。驚きすぎて、驚きは恐怖となって零の体を支配する。ムスクと柑橘系の入り混じった複雑な香りが零を包む。

「待ちくたびれたぜ、」

この人、さっきの・・・

《問題児》だ、と零の心の中に食堂でのかおると伊織のやり取りが浮かぶ。

「こっちこいよ、」

手を掴み、零の体を抱きかかえるようにしてソファーに連れていくと、ひよいと抱きかかえて座る。

な、な、何、何なのこのヒトッ！

「はっ、離して、

同じ抱きかかえられるのでもかおるのそれとは違う、強引さが恐怖心を煽る。

「離す？どうして？お前は俺の女だったただろ。」

間近に寄せられる顔。窓から差し込む月明かりが明るく、伊織の挑戦的な瞳が闇に閃く。月明かりの下で見る伊織の顔は妖艶とも思える美しさを含んで長いまつげに彩られた自信に満ちた瞳は危険なほどに強く輝いている。

「い、イヤッ！離してッ！

一瞬、伊織の美しさに見とれかけた零はそんな自分に慌て、掴まれた手を振りほどこうともがく。

「いやだね。俺はお前が気に入ったからな。」

伊織はそう言い放ち、腕の中の零を見つめる。

「お前、近くで見るとホント《よくできてる》な。」

まるで品定めをするかのように、額、眉、瞳、鼻、唇、とじっくりと見られて零は真っ赤になる。電気がついていなくてよかった、と思わずそんな事を考えてしまっていた。

「さっきも言ったが、お前がほかの男とデキてようがそんなことは俺には関係ない。俺は俺の欲しいものを手に入れる。絶対にお前に俺を選ばせてやるからな、」

きらり、と月明かりの闇に光る伊織の瞳。こんな自信を、一体どうすれば手に入れる事ができるのだろう。妖艶で強い美しさを持つ彼だから、なのだろうか。

「このまま押し倒して、襲ってやろうか？」

お前みたいなチビ、襲うくらい簡単だ、と言う伊織の瞳は妖しくきらめき零の背筋を凍らせる。それまで驚きや恐怖、恥ずかしさなど

様々な感情に翻弄されて大人しく伊織に掴まれていた零だったが、その瞳の毒に悲鳴を上げた。

015：問題児（後書き）

私は強引なヒトは基本的に好きですが・・・（笑）。

016：静と動（前書き）

今回は少し短めです

016：静と動

「どうしたッ?!」

パンツ、と勢い奥ドアが開いて部屋に駿が飛び込み、少し遅れてかおるも駆けつける。

暗い部屋の中、ソファーに押し倒されている零の姿を見た二人は一瞬フリーズし、次の瞬間諸悪の根源でもある伊織の体を零から引き離す。

「伊織ッ！貴様何やってやがるッ！」

駿が伊織の胸倉を掴んで壁に叩きつける。

「零ちゃん、大丈夫っ?!」

かおるはソファーの上で茫然としている零を助け起こす。かおると駿の姿を見とめた零は極度の緊張から解放され、体の力が抜けてかおるの腕の中に倒れ込んだ。

「・・・んだよ、そろいもそろって血相変えやがって・・・離せよ、」

伊織はいまにも殴りかかりそうな駿の手を振り払い、かおるの腕の中でまだ少し青ざめている零に目をやる。

「ま、続きは今度、ゆっくりとな。」

「伊織ッ！いい加減にしろよ、」

駿に怒鳴られて伊織は小さく肩をすくめ、そのまま何事もなかったように部屋を出ていく。その背にかおるが声をかける。

「伊織、僕は君を許さないよ。零ちゃんに手を出す奴は誰であつても許さない、」

かおるの静かな怒り。零のいる場所からかおるの表情は見えなかったが、肩に触れる掌の熱さがかおるの怒りを零に伝える。

「えらくそのお人形がお気に入りなんだな、かおる？だがそいつは人形じゃなくて人間だ。お前が気に入っても、そいつがお前を気

に入らなきゃその思いは成立しないんだよ。そいつが誰を選ぶのか、見ものだと思わないか？」

戸口で立ち止まった伊織は挑発的な笑みを浮かべてかおるにそう言う、零の上に視線を落とす。

「今はそのお優しいナイト様がいいかもしれねーが、絶対に俺を選ばせてやるからな。」

毒を含んだ艶のある瞳。大人の色気、とても評するべきか、そんな目で見すえられると一瞬心臓が跳ねる。

伊織が去ると、かおるは零の肩を抱いていた手を離し、ごめんね、と小さく謝った。

「伊織のヤツ、」

駿が怒りを抑えきれずに壁を殴りつける。

「零ちゃん、大丈夫だった？・・・何も、されてない、よね？」

不安に満ちた瞳でかおるが零の顔を覗き込む。部屋に入った瞬間の、伊織に組み敷かれた零の姿が脳裏をよぎり、かおるは思わず強く目を閉じた。

「だ・・・大丈夫・・・。」

背筋がぞくぞくするような、伊織の瞳が目には焼き付いて離れない。強く掴まれた腕にまだ手の感触が残り、ソファーに抑えつけられた時に肩に食い込んだ指先の後が少し痛い。零は思わず両手で自分の体を抱きしめた。

「・・・怖かった・・・。」

思わずつぶやくと、再び駿が壁を殴りつけた。

「お前が隙だらけだからこんな事になるんだ。人騒がせも程々にしろッ！」

駿の権幕に零は思わず身をすくめ、傍らに佇んでいたかおるの腕に手を伸ばす。

「・・・駿、零ちゃんを心配する気持ちはわかるけど、女の子に怒鳴っちゃダメだよ、」

かおるは安心させるように、伸ばされた零の手にそっと自分の手を

重ねて微笑みかける。

「・・・チッ」

駿は小さく舌打ちし、何も答えずに部屋を出て行き、隣の部屋のドアが荒々しく閉じられる音が響くと、かおるは小さくため息をついた。

「ごめんね、零ちゃん。・・・伊織ならこのくらいの事やりかねない、って気付くべきだったのに、」

「ごめんね、怖い思いしたよね?・・・ちゃんと守ってあげられなくてごめん、」

・・・なぜ、かおる君がこんなにも謝るんだろう。なぜ、かおる君がこんなにも辛そうなんだろう。悪いのは、隙のあった私と、酷い事をしたあの人はずなのに、

今にも泣き出しそうなほど悲痛なかおるの声に、零は思う。

「こんな事があると、夜も、不安だよな?僕、出来る限り気を付けて、零ちゃんの部屋に誰も近づかないように見ているから、安心して?」

かおるの微笑みは穏やかで、その微笑みを見ると少し安心する。零が小さく微笑むと、かおるも微笑み、おやすみ、と部屋を出て行った。

016：静と動（後書き）

みんなに守られるシチュエーションって憧れるわぁ・・・。私もちよつとか弱く生まれたかった（笑）

017：新学期（前書き）

やっと学校が始まりますー。ここまで長かったですね（汗）このままのペースで行くと高校三年生の一年間が終わるまで一体どんな長さになるのか・・・。

ここからちよいとペースを上げて行きます（予定）

017：新学期

・・・結局、あまり眠れなかった・・・。

浅い眠りで、眠ったり起きたりを繰り返しながら朝を迎えた零はいつもよりすつきりしない寝起きを迎えていた。今日から新学期、寮生たち以外の、たくさんのクラスメイトや同級生に会う日。授業も始まり、高校三年生としての一年が始まる。そう思いながら、まだ届けられたばかりの制服に袖を通し、鏡の前に立つと少し緊張する。

・・・この制服、ちょっとスカート短いんじゃない？

胸元にセンスのいい校章のワッペンがついたワイン色のブレザーに白いブラウス、ブレザーと同じ色の細いタイ、ワイン色を基調としたチェックのスカートはひざ上15センチほどの長さしかない。

これって、絶対短いよね？でも、これが標準ってこと・・・？昨日受け取ったばかりの制服が最初から改造されている、とも思えないが、標準でこの長さだとするとかなり短い、と零は思う。

これしかないし、仕方ないか。

零は真新しい制服に身を包み、いつもより少し念入りに髪を整える。もともとストレートだが猫毛のため油断するとはねるので後ろまで念入りに櫛を通して、ドアをノックする音が響いた。

「零ちゃん、朝食の時間だよ、」

穏やかなかおるの声に安心してドア開けると、そこには駿の姿もあった。

「おはよう、かおる君、久遠君、」

「おはよう、零ちゃん。制服とっても良く似合ってるよ。可愛すぎて抱きしめたいくらい。」

「あ、ありがとう、」

いつものことながら、サラッと殺人的なセリフを口にするかおるに零は頬を染める。イタリア人だと思えば納得できるが、それでもや

はり気恥ずかしい。3人で連れ立って食堂へ向かう途中、階段の踊り場でウロウロしている健に零は声をかけた。

「健君、おはよう！」

零の声が階段に響くと健は顔を上げ、おはよう、と笑顔になった。

「おはよう、健。朝から待ち伏せなんていい趣味だね？」

「ま、待ち伏せなんかしてねーよ！朝からいちいちつかつかつてくるんじゃないよ、」

「そう？気のせいならいいんだけど、どう見ても誰かを待ってるように見えたから、」

それじゃ、と何事もなかったように健の脇をすり抜けていくかおると、言葉に詰まる健。いつもかおるにいいようにあしらわれる健を可哀想に思いながらも零はかおるに続いて階段をおりようとしたが、数段下りたところでおおるは足を止め、後ろにいる零に手を差し出した。

「階段は危ないから、つかまって？」

「・・・は、はい・・・」

かおるの身のこなしはまるで貴族のようで隙がなく、穏やかなその言葉にはなぜか抗えない強さがある。穏やかな口調で、穏やかに微笑んでいるのにどうして従ってしまうのだろうか。

零が差し出されたかおるの手に手を添えると、かおるは軽く握り返してゆっくりと階段を下りる。エスコート、と言う言葉がぴったりと当てはまるその行為に、いつもなら文句を言う健も黙ってその後が続いた。

始業式、と言う事もあり、食堂に着いた時にはすでに食事を済ませている生徒もあり、今までとは違う慌ただしさに満ちている。食事をしている生徒の中に伊織の姿を見つけた零は思わずかおるの影に隠れた。

「零ちゃん、大丈夫だよ。今日は昨日みたいにはさせないからね、」かおるは小声で零にそう言い、開いている4人掛けのテーブルに零

を座らせると、ここで待って、と健を伴って食事を取りにカウンターへ向かった。

「久遠君は行かないの、」

零の隣に座って面白くなさそうな顔をしている駿に、零は恐る恐る声をかける。いつも不機嫌そうで、どう声をかけていいのか、まだよくわからない。

そう言えば、昨日の夜も怒らせたんだっただけ……。

『人騒がせも程々にしろ、』と怒鳴られた事を思い出し、零は俯く隣の部屋だと言っただけで何かと迷惑をかけている事実は否めない。

「あ……あの……昨日はごめんなさい……迷惑、かけて……」

謝りかけて駿の怒りを含んだような呆れたような瞳とぶつかった零は思わず目をそらせてしまう。

「迷惑だと思うなら、隙を作るな。」

「う、ごめんなさい、」

やっぱ、怖い……。

零はまっすぐに駿の顔を見れず、早くかおるたちが戻ってきてくれないかとカウンターの方へ目を泳がせた瞬間、フワリ、と強いムスクの香りに包まれた。

「……キャッ!」

「おい、離れろ。」

背後から抱きしめられて零が悲鳴を上げると同時に、駿が鋭い声をあげて立ち上がる。

「どうして?俺が自分の女を抱いて何か問題でも?」

「離れろ、と言ってるんだ、」

椅子ごと体を抱きしめられ、身動きのとれなくなった零の耳元に鼻をすりよせて、伊織はいい匂い、と囁く。伊織の身体からは強いムスクとフワリとかおるグレイプフルーツのような柑橘系の香りがする。激しい行動をとる彼らしい香りだ、と零はそんなどうでもいい事をぼんやりと考えてしまうほど動揺していた。

「伊織、それ以上続けると僕も容赦しない、」

戻ってきたかおるは食卓の上のお盆を置き、零を抱きしめている伊織の肩に手を置く。穏やかなその口調とは裏腹に、冷たく鋭い瞳が周囲の空気を凍らせた。

「・・・フン、ナイト様が出て来たんじやしょーがねーよなあ？お姫様？・・・また、後でな、」

伊織はゆっくりと零から離れ、そのまま食堂を後にする。伊織の後ろ姿に目をやり、かおるは小さくため息をついた。

「伊織は、すごく零ちゃんの事が好きみたいだね、・・・大丈夫だった？」

「だ、大丈夫、だと、思う、」

まだ鼻に残るムスクの香り。炎のような伊織、湖のようなかおる、夜の闇のような駿、明るい太陽のような健、4人の寮生とこれから始まる一年間を、零は苦しいような胸の痛みを抱えながらぼんやりと思い描いていた。

017：新学期（後書き）

ああいいなあナイト様 私にもそんな人いないかしら・・・。
誰か守っておくれ・・・。と思いつつ、ちっちゃくてかわいい零は
私の理想の女子でもあります。可愛いのに自信なしというあたりに
萌（笑）あんな子なら私でも守りたくなるなあきつと。誰か絵のう
まい人絵を描いてくれないかな（笑）。

018：初登校（前書き）

今回少し長めです。

018：初登校

「零ちゃん、学校行こうか、」

朝食を終え、部屋で身支度を整えていた零の部屋をかおるがノックする。

「あ、ハイッ!」

思わず背筋を伸ばし、真新しい通学かばんを手にする。肩から斜めにかける、どちらかと言うとラフなイメージの萌葱色のかばんは男子生徒が持つていても違和感のないものだ。

まだ教科書のない零はとりあえず数冊のノートとペンケースをかばんに入れて部屋を出る。

「今日は忙しいよ? 零ちゃんは職員室へ行つて、教科書を買つて、生徒手帳もらつたり、校章もらつたり、校則とかの説明を受けたり・・・。クラスは何組になるんだろうね? 僕と同じクラスならいいんだけど、」

そういつてかおるは微笑む。

「海外進学科には3クラスあるんだよ。僕はキングクラスなんだ。」

「キング?」

「そう、ジャック、クイーン、キングの3クラス。変わってるよね、この学校つて。」

・・・そういえば、寮の名前も剣とか盾とか、そんなだったよね。確かに変わってるかも。

寮の名前を思い出した零は内心想う。

「キングって強そう。」

零がそう呟くと、かおるは声を立てて笑う。

「駿もキングで、伊織はクイーンで、あと同じ寮で言う・・・。」
学校までの路を歩きながらかおるが説明を続ける。

「後ね、お昼は学食で、海外進学科は棟の中に学食があるから、お

昼は一緒に食べようね。」

そう言つて、かおるは微笑む。

木漏れ日の下で見るかおるの微笑みは、本当に王子のようだ、と零は思う。かつこよくて、優しく、強くて完璧な王子だ、と。

「職員室は一般教養棟にあるんだよ。少し離れているから、案内するね。」

「一般教養棟では、美術とか、書道とか、音楽とか、家庭科とか、後・・・保健体育とか？そう言う講義があるんだ。その時だけ、他の科の人たちと合同での講義があるんだけど、そう言つてかおるは少し溜息を付く。

「正直、僕は少し苦手。」

「苦手つて、何が？」

「うーん、何がって聞かれると答えに困るけど・・・この学校には通常進学科つて科があつてさ。

「うん。」

「いわゆるバカの集まりつてこと。」

少し後ろを歩いてた駿が口を挟む。

「駿、そう言う言い方はよくないよ、」

困つたようにかおるは駿を諫めたが、否定はしない。

「僕は音楽を選択してるから、零ちゃんも音楽を選択してくれたらうれしいな。」

話題を変えてかおるはそう言つて微笑む。

「講義の時以外、僕等はあまり一般教養棟へは行かないんだ・・・その、あまり騒ぎに巻き込まれたくないからね、」

「騒ぎ？」

「だから、バカどもが寄つてたかつて騒ぎたてるんだよ、王子だの、硬派だのつてな。」

ああ、かつこいいからみんな集まつちゃうつてこと？納得・・・。

「かおる君が王子で久遠君が硬派？なんか、わかる気がするな。」
零が笑うと、かおるも微笑む。

「ちなみに、健が一番人気なんだよ。もう大騒ぎになるんだ。伊織のファンも多いけど伊織は自分が気に入らない相手にはすごく冷たいから怖れつつ慕われてるというかね。」

「へえ……。一般教養棟の方には女の子もたくさんいるんだ？」

「いるよ……。でも、零ちゃん気をつけてね？一般教養棟の男子はある意味伊織よりタチが悪かったりするから。」

「私は大丈夫。みんなみたいに騒がれたりしないから。」

「……お前、いい加減に学習しろよ、バカ」

「……え……？」

「駿、またそう言う言い方をする。心配なら心配って、そう言えないの？……。だけどね零ちゃん、零ちゃんはもう少し、自分を大切にしなきゃダメだよ？零ちゃんは自分で思っているよりもずっと可愛いんだよ？なのにごく無防備で、だから心配なんだ。」

「……はい……」

返事はしたものの、零にはまだ無防備、と言われる理由がよくわからず、風にもてあそばれる髪を手で押さえて空を仰いだ。

海外進学棟の前で駿と別れ、かおるに連れられて零は職員室があるという一般教養棟へ向かっていた。大きな木がたくさん植えられている中庭は歩いていても心地よく、少し離れた距離でもあまり気にならない。

「……ホラ、あれが一般進学科の生徒達。制服の色が違うでしょ？」

少し離れたところで、こちらを見てなにやら騒いでいる女生徒が数人。零たちがワイン色の制服を着ているのに対し、深いグリーンの制服を着ている。

「零ちゃん、あまり深入りしない方がいいから、零ちゃんは黙ってね。僕が相手するから、」

女生徒達に近づくと、お決まりの「この女誰」的視線をなげられる。「おはよう、みんな。」

通り過ぎながら、かおるがにつこりと微笑むと、黄色い声上がる。・・・まるで芸能人扱い・・・。

零は内心そう思いながらも、かおるに言われた通り黙って会釈をしてかおるに続いた。

「ね、うるさいでしょ？だからあまり来たくないんだ。」

「ご、ごめんね？私一人で来たらよかった・・・」

「あつ、そう言う意味じゃないんだ。零ちゃんのためなら平気。それに一般教養棟を零ちゃんを一人で歩かせるなんて絶対にできないから。」

じゃあ行こうか、とかおるに促され、一般教養棟の中に入る。

「職員室は2階、音楽室は5階、美術室と書道室は1階、後、講義ホールが3つ。」

かおるが構内の説明をしながら一步前を歩く。

「エレベーターもあるけど、ややこしいから僕は使わないんだ。」

「ややこしい？」

「そう、いろいろとね。」

かおるは困ったような笑顔を浮かべ、2階の職員室へと零をいざなう。

「おつ、何？あの可愛い子、」

「でも王子が一緒だぜ？」

「あの制服、海外進学科ってこと？」

「なんだよ、コッチの子じゃないのか、」

ざわざわ、と廊下にいた数人の男子生徒が話す声がある。

「無視していいよ、行こう。」

かおるはそつと零の肩を押して職員室のドアをノックする。

「失礼します、」

かおると共に職員室に入ると、数人いる教師の内の一人がこちらに近づいてきた。

「佐倉零さん？」

「あ、ハイ、佐倉零です。はじめまして。宜しくお願い致します。」
ぺこり、と頭を下げると、まだ年若いその教師はニヤリ、とおよそ教師には不釣り合いな笑みを浮かべる。

「やつと、あの男臭い棟に目の保養ができるコが来たな！おい、か
おる！お前もそう思うだろ？」

・・・え？この人、センセイ、だよな？

無精ひげがやたらと似合う、ワイルドな印象の男性。

「そうですね。」

「かおる、ご苦労だったな。後は俺に任せろ。」
がしっ、と肩を抱かれ、零は固まる。

こ、こ、この学校って、先生もこのノリ？！

「先生、たとえ先生でも、零ちゃんに手を出すと許しませんよ？」
かおるは穏やかに微笑みながら、先生、と呼んだ男性の手から零を
奪い返す。

「珍しいな、お前が女に優しくするなんてよ？鋼鉄笑顔の王子様が。」

「人間きの悪い事言うのはやめてください。僕が女性に冷たいとで
も？少なくとも貴方の様に無節操に手を出すよりよっぽどいいと思
いますけど、」

「お前は愛想はいいがお世辞にも優しくはないだろ。にっこり笑っ
てハイさようなら、ってヤツが？」

「笑いもしない駿よりマシでしょう。」

「あ・・・あの・・・」

先生と対等にやりあうかおる君って一体・・・
そう思いながらも、間に挟まれた零はどうしていいかわからずに戸
惑う。

「・・・ああ、ごめんね、零ちゃん。どうやら彼・・・竹川先生が
零ちゃんの担任みたい。」

「竹川、先生・・・」

「そう、僕と同じ、キングクラス、だね。」

うれしそうにかおるは微笑み、不信感満載の瞳を竹川先生に向ける。

「後、お任せしても大丈夫なんでしょうね？」

「おお、任せとけ！ゼロからヒヤクまで教えてやるからよ、」

「零ちゃん、身の危険を感じたら大きな声、出していいからね。僕はここで待つてるから。」

「・・・んだよ、信用ねーな、俺。ま、行こうか、零ちゃん。」

れ、零ちゃん・・・って。先生が・・・

すっかりと肩を抱かれ、なんだかもう、ここに来てから抱きしめられたり抱き上げられたり、そう言う事が重なりすぎて完全に感覚が麻痺している、と思う。

普通、先生って生徒の肩抱かないよね？普通、階段下りるときって手をつながないよね？普通、足挫いたからってお姫様抱っこなんてしないよね？？？もう普通がなんだかわかんなくなっちゃったよ・・・。

019：教室へ（前書き）

今回も少し長めです。

019：教室へ

竹川先生から、一年間で使用する大量の教科書や参考書の山をもらい、選択コースの登録をした零は簡単に学校のルールの説明をされ、校章と生徒手帳を受け取る。

「校章はその襟のトコにつけとけばいい。後これがキングのクラス章。これも校章の隣くらいにつけといて。」

とランプのキングを思わせるデザインのピンを渡される。

「お前、ホントよく見るとこんなちっこいのに綺麗にできてんなあ。」

一通りの説明を終えると、竹川は顔を近づけてじつと零の顔を見る。

「・・・な、何ですか、先生ッ」

「いや、かわいいなあと思ってさ。かおるがご執心なのも頷けるな。」

「ご執心、ってそんなこと・・・。」

「お前は今までのアイツを知らないからわからねーだけさ。ホント、冷たいんだぜ？何人女を泣かせてる事か。」

「そ、そうなんですか・・・。」

「誰に対しても、同じ笑顔ってのは、罪だと思わねーか？」

「や、優しいですよ？とつても親切にしてくれるし・・・。」

「ま、そのうちわかるさ。一年間、宜しくな。」

ガシガシ、と頭を乱暴に撫でられ、零は言葉に詰まる。今までの先生とは全くタイプの異なる、いい意味でフランクな、悪い意味では適当な、零はそんな印象を持った。

「・・・零ちゃん、おかえり。何もされなかった？」

「う、うん、大丈夫。」

零がたくさんの教科書を抱えて職員室を出ると、かおるは大勢の女生徒に囲まれていたが、零の姿を認めると優雅に微笑んで女生徒達に道を開けさせて近づいてくる。

「髪、乱れてる、」

「えっ?! あ、」さつき頭、撫でられた時だ、と思った瞬間かおるの手が伸び、優しく整えてくれる。途端、周囲の女生徒達から悲鳴のような非難のような声が上がった。

「か、かおる君、ちよっ・・・」

「無視すればいい。さ、零ちゃん、行こう。」

周りの声を完全に無視し、零が手にしていた大量の教科書を当然の様に奪い取るとかおるは零を守るように壁側を歩かせる。

無視するったって、皆さんの視線が怖いよっ

「大丈夫、ここへ零ちゃんを一人で来させるようなことはしないから安心して?」

零の心中を察してか、かおるはそう言って微笑み、足早に一般教養棟を後にする。

「もう始業式も終わってる頃だろうし、教室へ行こうか。」

木漏れ日の心地良い路を並んで歩きながら、竹川先生の行った言葉を思い出す。

「冷たい、かなあ・・・」

「どうしたの?」

思わず呟いてしまった零の言葉にかおるが振り向く。

「えっ、あ、別に・・・」

零が慌てるとかおるは小さく笑う。

「それ、竹川先生が言ったの? 多分、正しいと思うよ。僕が優しくするのは今のところ零ちゃんだけだから、」

につこり、と100%スマイルを向けられると今更ながらに恥かしくなって目をそらせてしまう。

「おいおい、こんなところで女を口説くのはやめてくれよ。」

その時、後ろから追いついてきた竹川先生が二人の間に割って入る。
「口説いているように見えましたか？」

「どう見ても口説いてたぜ。」

「先生、そうやって零ちゃんに触るのはやめてください、」

登場と同時に零の肩を抱いて歩き出した竹川にかおるはすかさず突っ込み、竹川から零を引き離す。

「あの後、女子が大変だったんだぞ、あの女は誰だ、とか大騒ぎ。」

「放っておけばいいんです。勝手に騒いでいるだけですから。僕には関係ない。」

「相変わらず、冷たいこった。」

「全員の相手ができないなら、誰の相手もしないと言うのも優しさではないですか。」

「言ってくれるねえ。そんならこのお姫さんはどうなんだ？」

「・・・零ちゃんは特別です。僕が守るべきお姫様ですから。」

お前、よくそんな事サラツと言えるな、と先生に突っ込まれてもおるは顔色一つ変えずに零に微笑みかける。

「ね、零ちゃん？」

「えっ?! あ、そ・・・うなの？」

《僕が守るべきお姫様》について、一体どう答えるのが正解なのか、零にはわからず、肯定も否定もせずに問いを返すと、かおるはクスリと笑ってみせた。

「かおるは先に教室に入ってる。」

竹川先生に言われ、かおるは零の教科書を抱えて先に校舎の中へ入って行き、零は竹川と共に海外進学科の棟の前に残る。

「まだ説明してなかったかもしれないが、この棟と、隣の国内理工系進学科は構内でも特別扱いでな、」

「一般の生徒が立ち入りできないようになっている。」

「へえ・・・」

「一人一人指紋認証で中に入るんだ。お前の分も登録するから手、出せ。」

言われるままに右手を差し出すと竹川は零の手首を掴み、細ツと声を上げた。

「お前ほつそいなあ・・・。ここに手のひらを乗せて・・・そうじやない、手を開いてこうやって・・・」

「えっ、こう、ですか？」

「そう、そう、」

手を開いて液晶の上に乗せると、よしよし、と竹川は零の頭を撫でる。

しばらく待つと、ピツと電子音がして、登録完了、と言う文字が現れた。

「次からは、」

と竹川は言い、液晶に表示されている『入館』の文字を押して手のひらをかざせばドアが開くから、と説明して実演する。

「お前も入って来い」

ドアの内側から声をかけられて言われた通り操作すると、音もなく扉が開いた。

「なんだか、すごいですね。」

零が呟くと、竹川は当たり前だ、と胸を張る。

「このやつらは余計な事に振り回されなくて、自分の道を歩くためにここに居るんだからな。お前も、安心していい。」

「はい、ありがとうございます。」

零が頭を下げると、竹川はよしよし、とまた頭を撫でる。

「先生っ、髪をぐちゃぐちゃにするのはやめてください、」

両手で乱れた髪を戻しながら抗議すると、竹川はニヤリと笑い、お前がチビだから撫でなくなるんだ、と悪びれもせずに答えて教室に向かつて歩き出した。

「フツーに自己紹介すればいい。名前と・・・目標とか。」

「はい。」

竹川に連れられて教室がある2階にあがると、ジャック、クイーン、キング、と見て明らかにわかる部屋が3つ。教室のドアがトランプのカードそのままのデザインになっている。

「この学校って、変わってますね、」

「何が？」

「ネーミングとか・・・デザインとか？」

「ああ、そうだな。これは理事長の趣味だからな。」

あの人のセンスにはついていけない、と竹川は言い、教室のドアを開けて、零もそれに続いた。

春休み明けで、皆休みの間の話をしていたのだろう、ざわついていた教室がシン、と静まり返り、零は急に胸が苦しくなるのを感じる。《転校生》。まさに全員の好奇の瞳が自分の上に注がれ、痛いほど注目される。

「お前ら・・・全員そろってんな？コイツ、今日から一年間このクラスの一員になる佐倉零。」

視線で促され、零は教壇の上でペコリと頭を下げる。

「佐倉、零です。よろしくお願いします。」

一瞬、目指す大学の事を言おうかと思ったが、壇上の居心地の悪さもあり名乗るだけで口を噤む。教室の中のどこを見ても自分を見つめる瞳にぶつかり、心臓がドキドキと暴れだす。

「見ての通り、」

と竹川が言葉を継ぐ。

「コイツは女だ。わかってると思うが、間違いは起こさないように。」

「そう言って、ニヤリと笑う。」

「俺から簡単に紹介すると、佐倉は寮生で、シュヴェールトに居る。選択コースは音楽とドイツ語。アメリカ育ちで英語は授業の必要なし。得意科目は・・・」

竹川が零の紹介をしている間、零はどこを見ていいかわからず、視

線をさまよわせていると、窓際の後ろの席に座っているかおると目が合い、思わず笑顔になる。

「と、言うわけで、よろしく頼むぞ。」

竹川はそう言うと、席に着け、と空いている席を指した。

「あ、ハイ。」

廊下側壁際の後ろから二番目の席。零が自席へ向かおうと壇上から降りると、通路脇の生徒達が次々と声をかける。

「よろしくなっ！」

「よろしく！」

両側から同時に声をかけられ、零は一瞬戸惑い、笑顔でよろしく、と頭を下げる。席に着き、一息ついたところで隣の席から声がかかる。

「・・・よろしく。」

「よろしく・・・あ、久遠君、」

教室でもお隣なんて、すごい偶然、と思っていると、フッと駿が笑う。

「お前、ホントわかりやすいヤツだな。」

「え・・・？」

今、笑った？！

初めて見た駿の笑顔に零は驚いたが、駿が笑ったのは一瞬で、すぐにまたいつもの無表情に戻って視線を前方へ戻す。

「今日はホームルームが終わったら解散、明日から通常授業だからな！」

竹川先生はそう言い、《高校3年生の心構えたるもの》についてを話し始める。

「受験ももちろん大切だが、高校生として、できる事を精一杯やることも大切だ。来月には修学旅行もあるからな、勉強だけじゃなく、思い出作りも一生懸命、やってくれよ。」

・・・何か、チャラいけどいい事も言っただ、先生。

零は話を聞きながら思う。前の高校では、思い出したい思い出、な

なんて一つもない。

「今年の時間割は後で張り出すから各自で控える事。後は・・・今からクラスリーダーを決めてくれ。リーダーとサブと二人、誰か立候補あるか？」

「僕、やりますよ。」

スツとかおるが立ち上がり、教室を見回す。異議が出る理由もなく、竹川も小さく頷く。

「リーダーの独断と偏見で、サブは佐倉サンにお願いしたいんだけど？」

かおるはにつこりと微笑んで、まっすぐに零を見る。

「え・・・えっ私ッ?!」

突然名前を呼ばれて思わずガタリ、と席を立つと、その慌てぶりに教室からクスリ、と笑いが漏れる。

「大丈夫、僕がちゃんとエスコートするから。その方が早くクラスに溶け込めるし、一石二鳥だと思うよ。」

「かおるの言う事も一理あるな。どうする、佐倉？」

竹川に言われ、断る理由もない零が頷くと教室から拍手が起こった。

020：帰り道（前書き）

今回はあんまり甘くないですー。

020：帰り道

ホームルームが終わると、零の周囲に人だかりができ、身体の小さな零は完全に埋もれてしまう。

クラスメイトは皆、《転校生》に興味津々で次々と自己紹介を試みたり、質問を試みたり、零が言葉を発する隙がないほどだった。「はいはいはいはい、それくらいにして、皆さん今日は帰りましょう。」

クラスメイトの人垣をかきわけて姿を現したかおるは、壁際に小さくなっていた零に手を差し伸べる。

「帰ろうか？ 零ちゃん。」

「何だよ、かおる！ ちょっとくらいいいじゃねーか」

「そうだよ、佐倉さん、この後ヒマ？」

「ケーキがおいしい喫茶店知ってるんだけどさ、」

「あ・・・あの・・・」

皆が一斉に口を開くため零は誰に対して返事をすればいいのかわからずおろおろする。

「零ちゃんはこの後、僕との約束があるから忙しいの。はい、だからみんな解散！」

かおるは強制的にクラスメイトを追いついて、フウ、と息を吐き出した。

「お前がいると騒がしくて仕方ないな、」

隣の席で、クラスメイトの人垣に飲み込まれていた駿は不機嫌にそう言い、ガタリと席を立つ。

「ご・・・ごめんなさい、」

一瞬だが駿の不機嫌な視線と目が合った零はまた駿の機嫌を損ねてしまった事に胸が痛んだ。

「零ちゃん、教科書持って帰るよね？・・・駿、ちょっと待って、」
帰りかけていた駿をかおるは呼び止め、零の大量の教科書を指す。

「コレ、運ぶの手伝って。零ちゃんの教科書なんだけどさ。」

「あつ、私、自分で運ぶから大丈夫！ごめんね、久遠君呼び止めて、

ただでさえ不機嫌な駿をこれ以上不機嫌にしくなくて零は慌てて
そう言い、大量の教科書を抱えようとしたところで駿に手首をつか
まれた。

「・・・え、」

「お前みたいなチビがこんなにたくさん運べるわけないだろう。」

「そうそう、零ちゃんが重い荷物を運ぶ必要なんてないんだよ。そ
うだな・・・零ちゃんはこれを運んでくれる？」

かおるは駿の言葉とは裏腹な優しさを見て小さく笑い、手ぶらで帰
る事を気にするであろう零に一枚のプリントを渡す。

「？」

「3年生の時間割表。さつき竹川先生にもらったんだ、壁に張り付
いて書くの、大変でしょ？」

と人だかりの出来ている壁際を指してにっこりと笑うと、さあ行こ
う、と零を促した。

まだ午前中の、春の穏やかな陽の光が木々の間を通り抜けて降り注
ぐ路を3人で歩きながら、零はたくさんの教科書を運んでくれてい
るかおると駿を振り向く。

「・・・ごめんね、助けてもらって・・・。ありがとう。」

いえいえどう致しまして、とにっこり微笑むかおると、無表情のま
ま歩く駿。本当に対称的だな、と思っていると、遠くから自分を呼
ぶ声がする。声のした方を振り向くと、手を振りながら走ってくる
健の姿があった。

「ハア、追いついた。」

全速力で走ってきた健は呼吸を整え、今日はどうだった、と零に問
いかける。

「えつとね、竹川先生にいろいろ説明してもらって・・・」

零が言いかけたところでおおるが微笑みながら口を挟む。

「零ちゃんは僕達と同じキングクラスで、今日は僕と一緒にクラスリーダーになったんだよ。」

僕がリーダーで、零ちゃんがサブ、とおおるは続ける。

「初日からみんなに大人気で連れて帰ってくるの、大変だったんだから。」

「へえ、リーダーやるんだ。大変だけど頑張れよ！リーダーやってたら早くみんなと仲良くなれると思うぜ。」

健はいつもながらの全開の笑顔でそう言うと、おおるに向き直って口を開く。

「寮でさ、零ちゃんの歓迎会やろうと思うんだけど、」

「ああ、それはいいね。この週末にでもみんなでやろう。」

おおるが微笑むと、俺幹事やるから、と健は勢いよくそう言って寮の方へと走っていく。

「健君って、いつも元気だね。」

零がそう言って笑うと、おおるがふと真顔になる。

「零ちゃんは健がいるといつも楽しそうに笑うんだね、」

「え？」

「健といると、楽しい？」

「た・・楽しいって言うか、元気になるって言うか・・・」

突然の問いかけに、零は戸惑う。自分では意識していなかったが、おおるが言うのだからきつとそうなのだろうと思う。

「僕と居ても楽しくない？」

問いかけるおおるの瞳に影が差したのを見て、レイはさらに戸惑った。

「楽しいとか、楽しくないとかそう言うんじゃない・・・」

「えっと、」

「おおる君が居てくれると、とっても安心する・・・って言うか・・・」

思わず本音を口にした、零は恥かしさに頬を染める。言ってしまったから一緒に居て安心する、なんて取り方次第で告白にも聞こえる言葉だ、と思う。

「そう？本当にそう思ってくれているなら嬉しいんだけど、」

かおるは少し笑ってそう言っていると、黙って隣を歩く駿を見た。相変わらず不機嫌そうな顔で、零の方を見る事もない。そのくせ伊織の行動に真剣に腹を立てたり、寮生達からさりげなく守ったりするのはやっぱり零の事を気にしているからなのだろうと思う。

「何だよ、」

かおるの視線を感じたのか、駿が不機嫌そうに問いかける。

「いや、何も。ごめんね、手伝ってもらって、」

かおるがいつも通りに微笑んでそう言っていると、駿は面白くなさそうな顔で別に、と呟いた。彼を硬派と言って騒ぐ女生徒達は笑わない彼が好きなのか、それとも彼の笑顔を見たいと願っているのかどちらなのだろうと思う。2年間一緒に過ごしているかおるだったが、それでも駿の心からの笑顔を見たのは数えるほどだ。

「ねえ、今日寮に帰った後って、何かある？」

不意に、一歩前を歩いていた零は振り向いて尋ねる。

「特に、何も？」

「じゃあ私、街へお買い物に行ってくるね。今日説明受けてたらしいる必要な物を買って忘れてたから。」

ジャージとか運動靴とか、家庭科で使うエプロンとか、と指を折る零を見てかおるは微笑む。

「それなら荷物持ちが必要だね、零ちゃん。前は健に取られちゃったけど、今回は僕がお供するよ。」

「あ、大丈夫だよ？道も多分覚えてるし、一人で平気。」

「僕も買いたい物があるしね。それに、もしもの事があつたら大変だから。」

もしもの事って、何なんだろう・・・？一人でお買物くらい、今までだつてずつと行ってるし、別にこの街が特別危険だつてわけで

もないよね・・・？

零は内心想うが、正直まだ不慣れな街でもあり、一緒に行ってくれるのは心強いと思う。

「じゃあ、宜しく願います。」

ぺこり、と頭を下げると、かおるは小さく笑ってお供します、と答え、ちらりと隣を歩く駿に視線を送る。相変わらず無表情で彼の思いを知る事はできなかった。

021: かおると零（前書き）

今回はちょい甘です。

もっとあまあまにしてやりたい（よだれ）。

021：かおると零

思いがけず零と街へ出かける事になったかおるは寮の自室に戻ると、制服を脱いでクロゼットを開ける。いつもそれなりにきちんとした服装をしているかおるだが、普段はあまりつけない腕時計をつけたり、少しヒールのある革靴を選んだり、無意識にいつもより念入りにコーディネイトを考えている自分に気付いて苦笑する。

もともと、寮に女子が来る、と聞いたときはあまりいい印象は受けなかった。3年生の春から海外進学科へ編入できるくらいだからそれなりに『できる子』なのだろうとは思ったが、それでもかおるのこれまでの人生において女と関わってろくな目に合った事がなかったからだ。

・・・それに、どうせ僕には関係のない話、だから。

かおるは姿見の中の自分の姿を見て心の中で呟く。僕が誰かを好きになる事自体、意味がない、と。

せいぜい、当たり障りなく穏やかに一年が過ぎればいい、と思っていた。たった一年、上手くすれば関わらずに済むかもしれない、とさえ思っていたのに、あの日、校門で彼女を見かけた時に心の中の歯車が動き始めた。何故か、無視する事ができなかった。見た目が綺麗だと言うだけなら代わりはいくらでもいるが、彼女の纏う不安気で、繊細な、今にも風の中に溶けてしまいそうな儚さのせいだろうか？

・・・いくら想ったところで、どうにもならないんだけど、

かおるは鏡の中の自分に微笑んで見せる。どうせ叶わないのなら、せめて彼女が傷つかないように、笑っていられるようにしてやりたいと思っている自分に気付いた時、かおるは自分自身に驚いた。

一方零は、誰もが認める完璧王子と二人で街へ出かける事に大いなるプレッシャーを感じ、自室に戻った後クロゼットの中を見て溜息を付く。何を着て行っただって、かおるの隣に居てつりあわない事は目に見えていたし、どうせなら制服の方が気が楽かもしれないとさえ思う。

「春だしな・・・やっぱり、ピンクのワンピースとか・・・？でもかおる君大人っぽいからなあ・・・」

パンツスーツがビシッと着こなせる体型ならよかったのに、と零は自分の体型を恨めしく思いながら、自分の中で最も大人っぽいと思われるワンピースを選ぶ。薄手のジャケットを羽織るとそれなりにかっちりに見える。

かおるに少しでも釣り合う様にと、高めのヒールの靴を選んでいると、ドアをノックする音が響いた。

「零ちゃん、もう出かけられる？」

かおるの声。零は慌ててかばんに財布やハンカチなど必要な物を入れて部屋を出た。

「さあ、行こうか。そのワンピース、よく似合ってるね。零ちゃんにはピンクがよく似合う、」

につこり、微笑みながら褒められるとどうしても居心地が悪くなる。褒められ慣れていない零にとって、些細な事でも無条件に褒めてくれるかおるの言葉は嬉しくもあり、くすぐったくもあり、どう答えていいか言葉に詰まる。

「か、かおる君もすごかったいいね。・・・かおる君はいつもだ

けど・・・。」

正直言つて、かおると話す時はいつも顔にばかり目が行つて、どんな服を着ているか、と考えた事がなかった自分に気付いた零は今更ながらに顔が火照る。いつもかおるといて、自分は彼の顔ばかり見ていた、と言う事実はかおるにどんな印象を与えているのだろうと思うといたたまれなくなる。

「零ちゃん、どうしたの？」

「えっ、あ、あの、何も・・・。」

私はいつもかおる君の顔しか見てなかったんです、なんて言える訳ないしっ！

真つ赤になつて俯く零を見たかおるはふわりと微笑んで、行くよ、と零を促した。

「くらつち、行つてきます、」

寮の玄関口でかおるは革靴を履き、倉口さんに声をかけると、しゃがんで靴のストラップを留めていた零に手を差し伸べる。この一週間で、かおるのその自然なエスコートにすっかり慣らされた零も自然とその手に掴まつて立ち上がった。

「零ちゃん、危ないから、こつちへおいで、」

街へ続く木漏れ日の心地よい路を歩きながら、かおるは少し前を歩く零を呼び戻す。歩道の端の縁石の上を歩く姿は見ていて危なっかしい。

「大丈夫だよー?・・・キャッ・・・。」

呼ばれて振り向いた零は途端バランスを失う。

「・・・ほら、だから危ないって、言つたでしょ?」

アスファルトの固い衝撃を覚悟して目を閉じた零は、想像した衝撃

の代わりに耳元で囁かれた声にハッと顔を上げ、自分が跪いて零の身体を受け止めたかおるの胸の中にいることに気付く。

「あ、あ、あ、ご、ごめんっ！ごめんなさいッ！」

声が裏返るほど慌てて立ち上がろうとする零の背中に手を回したかおるは、小さく笑い、暴れると危ないよ、と囁く。

「ほら、慌てないで・・・どこも怪我してない？大丈夫？」

「だ、大丈夫。大丈夫！全然ッ！」

かおるに抱き起こされた零は真っ赤になった顔を隠すように激しく首を横に振る。

「よかった。零ちゃんに怪我させたりしたら大変だからね。」

「ご・・・ごめんね？かおる君も・・・大丈夫だった？」

「僕は大丈夫。心配してくれてありがとう。だけど、」

「言う事を聞かなかったバツとして、今日は一日手をつないで歩く事。」

「えっ!？」

「さ、行こう。」

かおるは零の手に指を絡めてにつこりと笑い、零の歩調に合わせて歩き始める。

こ、こ、これって、これって、カップルつなぎだよね?!

かおるの形のよい綺麗な指が、掌のぬくもりが、零を慌てさせる。暴れている心臓の鼓動が掌を通じてかおるに伝わるのではないかと思うと余計に鼓動が早くなった。

「零ちゃんの手は小さくて柔らかいね。」

ギョッ、とつなぐ手に力を込められると心臓が跳ね上がる。どう答えていいかわからず、零がただ俯いていると、かおるの不安げな声が響く。

「嫌なら、嫌って言うてくれていいんだよ？」

「えっ?い、嫌じゃないよ・・・ッ!」

「嫌じゃないって、それは嬉しいってこと？」

につこりと微笑んだかおるに問いかけられ、とっさに嫌じゃない、

と答えた零は赤面する。

「零ちゃんって、本当に可愛いね。」

かおるは零のピンク色に染まった耳を見て微笑んでそう言うと、零の手を握ったまま歩いていく。零がそつとその横顔を見上げると、ほんの少し、頬が赤く染まっているような気がした。

021：かおると零（後書き）

今はまだ誰とも付き合っていないのでいろんな人と日替わりで（爆）甘くなってるけど・・・いつかどこかで誰かを選んだらその人とだけ甘くなるんですよー。と、思うとだれともくつつかせたくなくなるダメな私・・・。

一応、決めてるんですよ、ちゃんと心の中では・・・。

かおるの心のつぶやきの詳細は物語の中の7月くらいではつきりする予定です

通常の授業が始まってから数日が経ち、零は少しずつ学校の様子にも慣れ始めていた。

毎朝朝食の時間に迎えに来てくれるかおるや、いつも待っていてくれる健と共に寮で朝食をとり、連れ立って学校へ向かう。

さすが、と思われる高度な授業を受け、構内の食堂で昼食を取り、授業が終わるとそれぞれ、帰宅する者、寮へ帰る者、部活へ行く者、居残りで勉強する者、と様々だ。

まだ学校の中のことには詳しくない零は今のところ、放課後になるとかおると共に寮に帰っている。

「ねえ、かおる君、この学校って図書室、ある？」

「あるよ。でも、一般教養棟にあるんだけど・・・」

口ごもるかおるに隣の席で帰り支度をしていた駿が珍しく口を挟む。
「図書館へ行くなら今から行くから連れて行ってやる、」

「あ、本当？お、お願いしても・・・いい、かな・・・？」

「・・・いいから言ってるんだ。早く来い、」

「あつ、は、はいっ！」

・・・やっぱ怖いよ、久遠君・・・。

チラリと零を一瞥して大股に教室を出て行く駿を小走りに追いかけるながら零は思う。他の寮生やクラスメイトとは少しずつ話すようになったが、駿だけはいつも本を読んでいたりと、寝ていたりして必要以上の事を一度も話せずにいる。

背の高い駿の背中を小走りに追いかけていく零の姿を見たかおるは小さく溜息を付き、慌てて置いてしまった零のかばんを手に取りるとゆつくりと二人の後を追う事にする。行き先は分かっているから、慌てる事もない。三人揃って歩けばまた騒がれるだろうから、追いつかない方がいい。

「・・・ま、待つて、久遠君！」

大股で早足に歩く駿を一生懸命追いかけていた零だったが、次第に息切れしはじめて前を行く駿を呼び止める。

「・・・なんだよ、」

・・・ふ、不機嫌そう・・・。

足を止めて振り向いた駿は明らかに不機嫌そうに眉間に皺をよせている。

「ご、ごめん、久遠君歩くの早いから、ちょっと・・・」

小走りに追いついて、乱れた呼吸を整えている零を見て駿は少し驚いた顔になり、やがて小さな笑みを浮かべる。

「・・・悪かった。お前がチビだって事、忘れてた。」

「チ、チビって・・・」

「悪かったよ。もつと早く言えば良かったのに、」

く、久遠君が笑ってくれた！

零は駿の笑顔を見て、心の中の何かが晴れていくような気がして思わず笑顔になる。

「うん、でも大丈夫！ありがとう。」

華が咲くような笑顔を向けられた駿は一瞬戸惑い、自分の顔が火照るのを感じて零から目を背けて再び歩き始める。付いて来る零が走らなくてもいいように、零の歩調を横目に見ながら生まれて初めて他人に合わせてゆつくりとした速度で歩いていた。

「わあ、すごいね、図書館みたい！」

図書室につくと、重厚な両開きの重い木の扉の向こうに広がった静かで少し暗めの照明の空間に零は思わず声を上げた。広く取られたスペースに向こう側が翳むほどに並べられた本棚、天井までぎっしりと様々なジャンルの本が整然と並べられている。

「ここの図書室の所蔵量は高校としては国内随一なんだ。」

口元に笑みを浮かべてそう言う駿を見上げ、零はいつも本を読んでいる駿の姿を思い出す。

「久遠君、本、好きなんだね。私も好きなんだ。」

小さな共通点を見出した零は思わず声を弾ませる。

「・・・別に。無駄な時間を過ごすくらいなら知識を増やした方がいいと思ってるだけだ、」

「え・・・、」

急に、いつもの無表情で、少し苛立ったような表情に戻ってしまった駿を見て、零は戸惑う。

「・・・私、何か怒らせるようなこと・・・言った？」

「借りる本を見つけたら借り方を教えてやるからここへ戻って来い。」

駿はそう言っていると、自分は手にしていた本を手にカウンターの方へ歩いて行く。

「・・・待たせたらまた怒らせちゃうよね。急がないと！」

零は慌てて本棚の立ち並ぶ通路に向かい、お目当ての作者を探す。

膨大な書物の中からお目当ての一冊を探し出すのは困難とも思われたが、運良くすぐに見つけることができた。

「・・・けどあれって、どうやって取るんだろ・・・」

天井まで届く高い本棚の、手の届かない場所に収められたその本を、どうしたものかと周囲を眺めていた零は通路のところどころに置かれたはしごに気付く。

「・・・なるほど、あれに登って取るんだ。」

零は最も手近に置かれていたはしごを移動させ、おそろおそろ登ってみる。

「・・・ちよつ、何やってんだお前ッ！」

零がはしごを5段ほど登ったところで通路に駿の焦ったような声が響き、驚いた零はバランスを崩す。

「キャアッ！」

「バ、バカッ！危いッ」

零は自分が床に叩きつけられる痛みを想像し、一瞬世界がスローモーションになる。が、その瞬間は訪れず、ふわりと甘いネロリの香りに包まれる。

「このバカ、もうちょつと考えて行動しろ。」

「・・・え・・・？」

強く瞑っていた目を開くと、間近に駿の整った顔。ものすごく不機嫌そうにも、少し笑っているようにも見え、零は固まる。

「え、」

「普通、女がスカートではしごに登るか？」

「え、あつ、」

言われて、零は今更ながらに真っ赤になる。

「まあ今回は、お前がチビでバカだって事を忘れて一人で行かせた俺が悪かった。」

「チ、チビでバカ・・・」

クスクス、と駿がおかしそうに小さく笑ったのを見て、零はその笑顔に見惚れる。

・・・いつも、こんな風に笑ってたらいいのに・・・。

「駿、黙って見てたら、いつまで零ちゃんを抱っこしてるつもり？ 零ちゃんを助けた事は認めるけど、ちよつと顔、近すぎるんじゃないかな？」

悠然と近づいてきたかおるが、駿の肩に手を置いて声をかける。

「零ちゃん、はい、これ忘れ物。」

かおるに言われて、零は自分が駿の腕の中にいることに気付き、耳まで赤くなる。

「最初からお前が案内してりゃ良かったんだ。エスコート役なんだから、」

ふと見ると、駿の頬も赤い。

「そうだね。でも駿が行ってくれるならいいかなと思って。僕らが揃って歩くと目立つでしょ？」

悪びれる風もなく答えるかおるに駿は舌打ちし、そのまま大股で通

路を横切って図書室を後にする。

「あ、く、久遠君・・・」

「零ちゃん、駿は照れてるだけだから、そつとしておいてあげて？」
おだやかにかおるに遮られ、図書室の中で大声を上げて呼び止める
事もはばかられた零はおとなしく従う事にする。

「・・・で、どの本を取ればいいの？」

「あ、あの、長田まゆ子さんの・・・」

零が指をさすと、かおるは少し背伸びをして零が取りたかった本を
零の手に渡す。

「ありがとう。」

「せっかくだから、僕も何か借りて行くよ。また返す時は一緒に来
ようね、」

抱きしめられたり抱き上げられたり、そんな事にはもう慣れたと思
っていたのに、しっかりと抱きとめてくれた駿の腕の熱さに、間近
で見た笑顔に、零の心臓は高鳴り続けていた。

022：図書館（後書き）

抱きとめてもらってどんな気持ちなんだろう……。小柄じゃないと絶対無理だと思うけど……。女子のあこがれお姫様だった

023・謝りに（前書き）

今回少し短めです

023：謝りに

図書室から戻った零は、かおるにありがとうを言って部屋に入る。伊織の一件があつて以来、かおるはいつも、零が部屋の電気を付け、中に誰もいない事を確認してから自室に戻るようになっていた。

とはいえ、授業が始まってからは皆各教科毎に出される課題に追われて部屋に籠る事が多く、寮の中でも他の生徒に会う事が少なくなった。そんな中いつも飄々としているのは駿とかおるで、彼らがいかに優秀なのかが分かる。

・・・久遠君に、ちゃんとお礼、言えてないな・・・。

部屋に戻った零はかばんから課題のプリントと借りてきた本を取り出して溜息を付く。

・・・結局、迷惑かけただけで終わっちゃったし・・・。

抱きとめてくれた腕の熱さを思い出すと思わず顔が火照る。夕食の時に声をかけようかとも思ったが、駿の性格を考えると皆がいる前で声をかけるのはあまり得策ではない気がして携帯を手に取り、溜息をつく。隣の部屋にいるのに電話をかけるのもどうかと思うとダイヤルもできず、零は意を決して直接お礼を言いに駿の部屋を訪ねることにした。

駿の部屋の前に立つと、俄かに心臓が暴れだし、これ以上なく緊張している自分に気付く。何度かノックしようと手を上げては逡巡を繰り返していると、不意に中からドアが開いてドアの間近に立っていた零の額にぶつかった。

「痛ッ、」

「・・・ッ？！おま、そんなとこで何やって・・・大丈夫か？・・・悪かった・・・」

「あ、ごめ、大丈夫っ」

・・・ああもう何やってんの私・・・これじゃまた久遠君を怒らせ

ちやうよ・・・。

「あ、あのっ、さっきは、ありがとう・・・」

「何が、」

・・・ああやっぱり不機嫌だ・・・。

「あの、図書室、連れて行ってくれて・・・あの、はしこの・・・」
無表情な駿の怒りを含んだような口調に零はへこむ。お礼を言いに来て怒らせては何をしているのか分からない。

「お前なあ・・・」

呆れたような声に、顔を上げられずにいると不意に駿の手が伸び、零の額に触れる。

「腫れて来た・・・ちよつとこっちこい、」

「え・・・?!」

駿に腕をひかれ、駿の部屋に入った零は駿に掴まれた腕が熱くなるのを感じて、心臓が跳ねる。

無駄なものが一切なく、整然と片付けられている部屋。本棚にはびっしりと本が並び、彼の優秀さを物語る。

「・・・悪かったな。大丈夫か？」

部屋の奥から救急箱を持って来ると駿は屈んで零の額に冷却材を貼る。

「冷た・・・」

「・・・しばらく、安静にしとけ。」

言って駿は救急箱を片付け、部屋を出て行こうとする。

「あ、久遠君、」

慌てて呼び止めると、また不機嫌そうな顔で振り向く。

「すぐに戻るから、大人しくそこで待ってる、」

・・・やっぱ、怒ってる・・・よね？

零は駿の部屋の少し固いソファに座り、所在無くあたりを見回す。飾り気のない整頓された部屋は彼らしく、微かに甘いネロリの香りがする。

しばらく待っていると、足音が近づき、駿が部屋に戻ってきた。

「・・・」

「あ、ありがとう・・・」

無言で差し出されたのはペットボトルのミネラルウォーターで、零は受け取って礼を言う。

「・・・大丈夫か、」

駿はソファーには座らず、デスクの椅子に座って足を組む。

「だ、大丈夫だよ、このくらい。・・・迷惑かけて、ごめんなさい・・・」

「・・・なんか、何でこんなに緊張するんだろう。何しゃべっていいのかわかんないよ・・・」

駿と二人つきりになったのはこれが初めてで、零は何を話しているのか分からずにいた。何を言っても怒らせてしまいそうで怖かった。

「お前さ、

零が所在無く俯いていると、不意に駿が口を開く。

「お前みたいなバカは誰かが守らないと何もできないんだから、もつとみんなに頼ればいいんだ、」

「え・・・？」

駿の口から漏れた意外な言葉に零は思わず駿を見つめる。

「だから、一人で解決しようとせずに、やりたい事でもしたい事でも何でも言えればいい、って言ってるんだ、」

「・・・あれ、久遠君、ちょっと顔が、赤い・・・？」

あまりにも唐突に優しい言葉をかけられた零はぼんやりと、そんな事を思う。

「・・・バカ、口、開いてるぞ。」

苦笑に近い笑顔。それでも零は駿が笑ってくれる事がうれしくて笑顔になった。

023：謝りに（後書き）

いいねえ、いいねえ（笑）硬派な人が笑ってくれるってもう超デーションあがるし。しかも貴方にだけ優しいっていうのがまた最高に好き。硬派最高。私の周囲には一人しか硬派がおりませんが・・・。硬派って貴重なのか・・・？

024：朝寝坊（前書き）

今日は休日なので朝から投稿してみました。
ちようど寝起きネタだしちようどいいかな（笑）
感想やダメ出しなど頂けたら泣いて喜びます。

024：朝寝坊

駿の部屋から戻った零は、大きく深呼吸をして暴れている心臓を落ち着けようと試みる。

《お前みたいなバカは誰かが守らないと何もできないんだ、》
そう言つて、一瞬向けられた優しい瞳。ほんの一瞬ですぐいつもの怒つてゐるような目に戻つてしまつたけれど、それでも零はその言葉を思い出すと苦しいほど胸の奥が締め付けられた。

転校してきてまだ数日。まだまだ慣れない事ばかりで緊張の連続だが、それでも気にかけてくれる人がいてくれると思うだけで少し安心できる。

かおるの王子様のエスコートはもちろん無条件に心地よく、無意識に頼つてしまつてゐる自分がいる。いつも元氣いっぱい笑顔の健がいると、自分も笑顔になれる。いつも怒つてゐるようだけれど、困つてゐると黙つて手を差し伸べてくれる駿。不安や緊張をやわらげてくれる人がいてくれてよかった、と零は心から思う。

零は早々に課題のプリントを終わらせ、借りてきた本を開く。零の大好きな作家の一人で、儂くおぼろげなパステルカラーのもやがかかったような繊細な文章は辿つていくだけで心が落ち着く。

「・・・あれ？」

数ページ目をめくつたところで、ヒラリ、とはさまれてゐたメモが床の上に落ち、零はメモを拾い上げた。

「・・・これって・・・、」

「心から、君が好きだよ。」

君が好きだよ、誰よりも。

いつも見てる。遠くから。

一人ぼっちの君を守りたい。』

メモに書かれていた数行の言葉。詩、なのか、手紙、なのか、判断しかねる文章だが、零は胸の奥が苦しくなるような切なさを覚えた。こんな風に思いを伝えられたら、こんな風に誰かに想ってもらえたら、どんなに幸せだろうと思う。流れるような美しい文字はその文字を書いた人の繊細ささえも伝えるようで、零はしばらくそのメモをじっと見つめる。

・・この思い、ちゃんと伝わるといいな。

そう思っ、小さく微笑む。このメモを挟んだ人は、きっとこの思いが《彼女》に伝わる事を祈って挟んだにちがいない。まだ読み始めたばかりの本だが、そんな切ない思いを届けるにはぴったりの内容だ、と零は思う。

こんな事をする人はとてもロマンチストで、繊細な人なのだろう。そう思うと、零はなぜかとても幸せな気持ちになった。

物語の世界に引き込まれた零は明け方近くまで本を読み、そのままソファで眠ってしまっていた。まだ4月の朝の肌寒さに目覚めると、あたりはまだ夜明け前の静けさに包まれている。

「・・・寒・・・」

零は小さく呟いて、数時間でもしっかり眠ろうとシャワーを浴びて布団にもぐりこむ。お気に入りの毛布はフワフワと肌に心地よく絡みつき、零はすぐに眠りに落ちた。

「・・・ちゃん、起きて、零ちゃん、零ちゃん！」

「・・・ん・・・」

「零ちゃん、朝食の時間だよ？そろそろ起きないと・・・」

「・・・？えっ！？あっ！あ、あ、」

ぐっすりと眠っていた零は目覚まし時計の音にも気付かず、鳴り続ける目覚まし時計に心配して起こしに来たかおるに驚いて飛び起きる。

「おはよう、零ちゃん。・・・よく眠ってたね？」

につこりと微笑まれ、零は恥かしさに真っ赤になる。かおるはすでに制服に着替えていて、まだ何もできていない零は慌ててロフトを降りる。

「あ、あの、ごめん、ありがとう。急いで準備するから、先に行つてて？」

少し寝癖のついた髪を気にする零を見てかおるは優しく微笑む。

「大丈夫、部屋で待つてるよ。準備ができたら呼んで、」

かおるが部屋を出て行くと、零は慌てて制服に着替え、顔を洗う。

・・・くまができてる・・・。

夜更かしは美容の敵、とはよく言ったもので、これは少し恥ずかしい。

・・・あんまりメイクは好きじゃないけど、仕方ないな、

零はできてしまったくまを隠すために手早くメイクをして部屋を出てかおるの部屋をノックした。

「早かったね、零ちゃん。もう少しゆっくりでもよかったのに。」

かおるは穏やかに微笑んでまだ少しはねている零の髪に手を伸ばす。

「あれ、零ちゃん今日はメイクしてるの、」

「えっ、あ・・・うん。昨日夜更かししたらクマができちゃってたから隠したくって、」

本当はあまりメイクするのは好きじゃないんだけど、と零が笑うと、かおるは優しく微笑む。

「零ちゃんはメイクなんかしなくても十分可愛いからそんなことする必要はないと思うよ。だけど、メイクしてる零ちゃんも可愛いね。唇がぷっくりしてて食べちゃいたいくらい。」

「た、食べるって・・・」

「ああ、表現が悪かった？キスしたいくらい、って言えばよかったかな。」

100%スマイルのかおるに完全に悩殺された零は真っ赤になって俯く。

「今度デートするときは、クマを隠す程度じゃなくて、バツチリメイクした零ちゃんを見てみたいな。きつと、目もぱっちりしてお人形さんみたいになるんだろうね。」

素顔でも十分可愛いけど、とかおるは念を押す。相変わらず、殺人的なセリフを平然と口にするかおるに、慣れてきたとは言え、どうしても恥かしくなる。今まで自分は褒められて伸びるタイプだと思っていたが案外そうではなかったのかもしれない。

いつもより遅れて食堂に着くと、すでに生徒の姿はほとんどなく、すでに食事を終えて悠然と本を読んでいる駿と、ウロウロと歩き回っている健の二人だけが残っていた。

「健君、久遠君、おはよう、」

零が声をかけると、健はいつもの様に全開の笑顔で近づいてきた。

「おはよう。遅いからさ・・・何かあったのかと思って心配したんだぜ？」

「ちよつと寝坊しちゃった、」

昨日遅くまで本を読んだの、と笑う零の顔を健が間近で覗き込む。
「零ちゃん何かさ、今日いつもと違う、」

・・・た、健君、顔が近い・・・

思いがけず間近に迫った健の顔に零は思わず真っ赤になって固まる。

「おい、朝から食堂でナンパはやめとけ、見苦しい。」

「ちよつ、何だよッ！掴むなっ！おいッ！」

固まっている零を尻目に、健の制服の襟元を掴んで悠然と立ち去る駿の姿を見送ったかおるは二人分の食事を運んでくると、小さく溜息を付く。

「零ちゃん、食事にしようか・・・それにしても、零ちゃんは相

変わらず無防備だね、誰に対してもそうだから、ちょっと嫉妬しちゃうな。」

「そ、そんな・・・」

戸惑う零を見て、かおるはますます溜息を付いた。

このお姫様は、どうしてこつても自覚がないんだろう？自分が笑う事で周囲がどれほど明るくなり、自分の視線で、その仕草一つで一喜一憂する人がいると言う事に、いつになったら気付くのだろう。

024：朝寝坊（後書き）

ちよつとメイクとか、ちよつと髪型変えたとか、気付いてくれる男子は素晴らしいと思います。しかもそれを上手にほめたりしたらもう最高。やっぱ王子キアラは最強かなあ・・・。

025：歓迎会（前書き）

本日2回目っ！お休みだしー。頑張りました（笑）
ポイントつけて下さっている方、お気に入り登録して下さい
方、超テンションあがります ありがとうございます

025：歓迎会

教科毎に出された大量の課題と共に初めての週末が訪れた。さすが超進学校だけあって出される課題のレベルもかなり高い。土曜の夜に、と健が計画してくれた零の歓迎会は零以外の皆で準備をしてくれているようで、零は一人部屋で課題を進めていた。

得意な物理、科学、歴史、古典、現代文などはすぐに片付くが、あまり得意でない数学の超ハイレベルな問題と耳慣れないドイツ語に頭を抱える。息抜きをしようと、授業には出ていないが課題だけ出される英語のプリントを開いて溜息を付く。英字新聞を読んで、訳すだけの、零にとっては文字通り朝飯前の課題。物の数分で訳してしまうと、再び数学の問題に向き合った。

・・・数学は閃きだっけ言うけど・・・一回詰まるとなかなか閃かないんだよね・・・

部屋を広く使うためにデスクを置かず、センターテーブルで勉強している零はそのままゴロン、とラグの上に寝転ぶ。そのままの姿勢で窓の外に目をやると、空が夕暮れの色に染まり始めていた。

朝からずっと課題に取り組んでいた零は昼食さえ食べに行く事を忘れていた自分に気付く。もともとあまり食に執着がある方ではなく、食事を抜いてもあまり苦にはならないが、ここに来てからはいつも誰かが呼びに来てくれて一緒に食べる事もあり、食事を抜いた事はなかったが、今日は皆何かと忙しかったのだろう。

フウ、と大きく息をついた零はふと携帯の着信ランプが光っている事に気付いて携帯を見ると、お昼過ぎに健からの着信があった。

・・・私、携帯音切ってたんだ・・・。

気付かずに悪い事しちゃったな、と思いながら、零は健の携帯を鳴らす。

『零ちゃん、ああよかった、』

ワンコールもせずすぐに携帯に出た健は開口一番そっくり、繋が

らないから心配していた、と言う。

「ごめんね、音切つてて忘れてたの。」

『あ、いや、いいんだけどさ俺今街に出てきてるからさ、何か……ほしいもんある？』

「え、ほしいものって？別にないよ？強いて言うなら今喉が渴いてるからミネラルウォーターくらいかな。」

『いや、そうじゃなくって、何かないの？好きなものとかさ……』

「好きなもの？好きなものならいっぱいあるよ。綺麗なものなら何でも好き。」

綺麗なもの、と電話口で絶句する健。電話の向こうで数人の聞き覚えの声がある。きつとみんな歓迎会の買出しに行ってくれたりしているんだろうと思うと零は嬉しくなった。

結局、数学の課題が終わらないまま時間だけが過ぎ、零はどうしても解けない最後の問題に苛立ちを覚えていた。イライラを紛らわせるためにお気に入りクマのぬいぐるみを抱きしめて寝転がる。窓の外は暗くなり始め、ふと時計に目をやると18時を回っている。零は溜息を付いて起き上がり、クマを膝の上に乗せて目を閉じる。

……この一週間、あつという間だったな……。

慣れない環境で、初めての講義ばかりを受ける新鮮さと緊張は思った以上に疲れる事を知る。講義の大半が選択性であるために教室移動も多く、休み時間と言ってもなかなかゆつくりする時間はない。

一般教養棟で行われる音楽の時間はかおると一緒だったから良かったが、それはそれは衝撃的なものだった。音楽、と言っても一風変わった授業で、数局ある課題曲の中から好きな曲を選択し、各々が得意とする楽器で演奏する、と言うもの。半年間で一曲を弾きこなせるようになるまで練習をして、半年に一度、皆の前で披露するらしい。

かおるの選択はヴァイオリンで、彼がヴァイオリンを奏する姿はそれはそれは美しく、皆が見惚れるのは分かるが、授業中であるにもかかわらず黄色い声を上げたり、お構いなくかおるの近くに集まって騒いだりする一般教養科の女生徒を見て零は少なからず驚いた。課題曲の中には協奏曲などもあり、仲のいい者数人で協奏曲を選択する人も多いようだ。3年生が始まって最初の講義で課題曲を選択する事になり、零は悩んでいた。

「零ちゃんは何にするの？」

迷っている零を見たかおるが近づいて零に声をかける。

「あ、うん、えっとね……。多分一番得意な楽器はハープなんだけど、ハープはなさそうだし、家からも持ってきてないし、」

「零ちゃん、ハープ弾くんだ？」

「うん、」

「だから、どうしようかなと思って。ヴァイオリンはちょっと苦手だし、次に選ぶならピアノかフルートか……。」

「じゃあピアノにしたら？僕と協奏曲にしない？課題曲にあったでしょ？ラフマニノフのピアノ協奏曲第二番。」

「それいいね。じゃあピアノにしようかな。」

零が微笑むと、かおるも小さく頷き、二人で課題曲の提出をする。一般教養科の生徒達の突き刺さるような視線が痛かったが、かおるに無視するようにと囁かれて敢えて見ないフリをした事を思い出して溜息をついた。

「……そういえばピアノの練習もしとかないとかおる君に迷惑かけちゃうよね。また放課後にも練習しに行こう。」

ラフマニノフは好きな作曲家の一人だが、ピアノはここ半年ほど弾いていないだけにかおるの足を引っ張るのではないかと不安だった。

・・・そう言えば、家庭科の調理実習もすごい本格的だったな・・・。

家庭科、と言うと調理実習よりも必須アミノ酸だのなんだのという授業を受けていた零は料理教室さながらの調理実習に驚いた。何でも、この学校の最終目的は《社会に出てからすぐに通用する人間の基礎を育てる事》で、文武両道はもちろん、社会的適合性を育てるための様々な要素が取り入れられている。日本人が苦手だと言うディスカッションや、プレゼンなどもその一つだ。

一週間の出来事を取りとめもなく思い返していると、部屋をノックする音が響き、ドアを開けるとにつこりと微笑んだかおるの姿があった。

「姫、お迎えに上がりました、」

スーツ姿でおどけて跪いて手を差し伸べるかおるに零は思わず頬を染める。あまりにもはまり過ぎていて突っ込む事もできない。

「あ・・・ありがとう。」

《おしゃれておいてね、》といわれていた零はお気に入りのピンクのシフォンワンピースに、髪をハーフアップにして少しだけメイクをしていたが、本物の王子かおるを見てもう少し頑張っておめかしすればよかった、と後悔する。

「零ちゃん、今日も可愛いね。本当にお姫様みたいだよ。」

どうしてかおる君ってこんなに殺人的なんだろう・・・。

何度見ても慣れない100%スマイルと殺人的なセリフに零はまっすぐにかおるを見られずに俯いた。

かおるにエスコートされて食堂に着いた零は、寮生達の大歓迎を受ける。食堂の入り口から一列に並んだ面々が、各々用意してくれたのだろっ、一人一人からプレゼントを手渡される。

思いがけない演出に、零は驚きと嬉しさと言葉に詰まる。

「零ちゃん、これ、気に入るといいけど、」

照れくさそうにそう言っ、健は綺麗にラッピングされた包みを渡す。

「ありがとう、健君、」

零が笑顔で受け取ると、健も嬉しそうに笑う。

「・・・はい、」

「あ、ありがとう、」

いつもと変わらないつまらなそうな顔で、それでもプレゼントを用意していた駿。大きさを重さから、中身はきっと本だろうと推測できた。

「お前、花言葉は知ってるか、」

伊織に差し出されたオレンジと黄色のバラの花束を受け取る。フワリ、とバラの甘い香りがする。

「えっ、あまり詳しくないけど・・・」

「オレンジのバラは無邪気、黄色のバラはジェラシー。お前にぴったりだろう。」

久しぶりに話したと思ったらこの超上から目線。黙って笑っていは超男前なのにこの性格が惜しい、と零は内心思う。

「私、誰にも嫉妬なんかしてないよ？」

少しムツとして言い返すと、小さく笑って零を抱き寄せて耳元でささやく。

「お前が、じゃない、お前に、だ。」

「伊織、零ちゃんに気安く触れるな。」

「伊織ッ、」

かおると健の怒気を含んだ声がとび、伊織はほらな、と唇の端で笑う。

「お前に触れるとみんなが嫉妬するんだよ、面白いくらいにな。」

「今日は大人しくしてるさ、せつかくの歓迎会だからな。」

お前らも大げさに怒んなよ、と伊織は零から離れ、零は行列の最後にいるかおる方を見る。かおるはにっこりいつもの穏やかな微笑

みを浮かべて零に一歩近づき、大きなリボンをかけた小箱を渡す。
「ようこそ、お姫様、」

025：歓迎会（後書き）

歓迎会でもらったプレゼントの中身とかー、歓迎会で起こった出来事とかー、そう言う事は別途、『番外編』を書く予定です

026：修学旅行の計画（前書き）

今回はあんまり甘くないかもです。

026：修学旅行の計画

4月も後半に差し掛かり、クラスリーダーになった事も手伝って零はクラスのみんなともかなり打ち解けていた。5月の中旬に予定されている修学旅行に向けて、今は何かと忙しく、放課後も学校に残る事が多い。

皆で同じ場所へ行くのかと思っていたが、行き先も選択制で、設定された3箇所から好きな行き先を選べるらしい。

・・・もし選ぶ先がみんなバラバラだったら、修学旅行、楽しくなくなっちゃうかもしれないな・・・。

「・・・でね、零ちゃん、零ちゃん？聞いてる？」

「えっ、あ、ごめん、ちよっと考え事しちゃってた。」

「もう、仕方ないなあ。考え事って？」

「え、あ・・・あのね、

「うん、

「修学旅行、みんな行き先が違っちゃったら淋しいな、って思っ

「みんな、って誰の事？」

「えっ？あ・・・

改めて問いかけられて零は言葉に詰まる。クラス全員、というわけではなく、零が思い描いたのはいつも一緒にいてくれるかおるや健、駿のことだった。

「あの・・・寮の、みんな、かな・・・」

名前を出す事をためらった零がそう言つと、かおるは小さく微笑む。「そうだね、寮のみんなとはずっと一緒だし、旅行も一緒に行けるといいね、」

「かおる君もそう思う？」

ぱつと、花が咲くような笑顔になった零を見て、かおるは息を飲む。心の中心を射抜かれる様で、一瞬呼吸を忘れるほどに心の奥が苦しくなった。

「そ、そう思うよ。僕は零ちゃんと同じ行き先を選ぶから、どこにするか教えて？」

本当は、僕が君と一緒にいたいんだけど、と内心思って小さく吐息を付く。このお姫様はいつもそうだ。無意識にこうやって周囲を虜にする。きつと寮のほかのメンバーにも今と同じように声をかけるに違いない。

「ホントに？よかった！もうみんな決めちゃってると思ってた。」嬉しそうに笑う零を見ていると、微かに苛立ちを覚える。自分にだけ向けてほしいと思うその笑顔を、分け隔てなく誰にでも向けてしまう無防備な姫。もしも僕が、他の人には言うな、と言えば言わずにいてくれるんだらうか、そう思ってかおるは零から目を逸らせた。

いくらそう願っても、決して叶うはずのない願いだと分かつているのに、どうして心惹かれるんだらう？今まで一度も人を好きになどならなかつたのに、今になって何故、と思うとかおるはなおさら苦しくなった。

今年の修学旅行の行き先は沖縄・北海道・韓国の3箇所。基本的に何事においても自由が尊重される校風で、旅行先の行動も班の単位で好きに決めていいらしい。好きに決められる、と言う事は逆に言うと自分達で責任を持たなければいけない、と言う事でもあり、その作業は楽しくもあり苦痛でもあった。

「私は沖縄がいいな！5月だし、もう海も入れるでしょ？」

韓国は辛い食べ物苦手だし、北海道は行ったばっかりなの、と無邪気に笑う零を見てかおるは溜息を付く。沖縄の海、確かに楽しいだらうと思う。だがこの姫は一歩間違えば自分が野獣の群れの中にいると言う事を本当に分かつているんだらうか？無防備と言っただけ

では足りないこの天真爛漫なお姫様をどうすれば守れるのだろう。

「かおる君、沖縄は嫌いなのか？」

よほど浮かない顔をしてしまっていたのだろう、ふと気付くと零が不安げな瞳でこちらを見ている。かおるは少し苦笑して、首を横に振った。

「ごめんね、そんな顔しないで？ちよつと考え事してただけだよ。」
微笑んでそう言うと、零は再び笑顔になる。

「じゃあ、いろいろと決めないとね。5人で一つの班を作って行動だから、僕等はリーダーの独断と偏見でメンバー決めちゃおうね。」
とかおるはいたずらっぽく笑い、零も頷く。

「多分、違うクラスでも行き先によって班を作るはずだから、零ちゃんが見えたら健も同じ班にできると思うよ、」
かおるの言葉に、零は嬉しそうに笑う。

「5人だもんね、じゃあメンバーは、かおる君と、私と、健君、久遠君、後一人は・・・ッ！」

「俺しかいないだろ？」

不意に、背後から抱きしめられ零は言葉を失う。ムスクの香りがあったりに漂い、顔を見なくても伊織だと分かった。

「伊織、離れろ、」

かおるににらまれた伊織は名残惜しそうに零から離れ、零の前の席に後ろ向きに座って間近に顔を覗き込む。

「なっ、何？伊織君、」

「久しぶりに近くで見たけど、やっぱりお前、かわいいな、」

「きゅ、急にそんな事、」

いつもの高圧的な視線ではなく、笑いかけられると戸惑う。照れもせずにそう言う事を言ってしまう辺り、かおると伊織は案外似たもの同士なのかもしれない、と零は思う。

「零ちゃんは可愛いに決まってる。邪魔だから帰ってくれないか、」
微かに怒りを含んだかおるの声。

「邪魔なんかしねーよ。見てるだけさ。可愛いお姫さんをね、」

伊織はそう言つて少し顔を離し、机に頬杖をつく。

「で、5人目のメンバーは誰にするんだ？」

「えっ、あ……、」

「目の前にいるのに、外すつて言えないだろう？普通、」

諦めたように答えるかおるに伊織はニヤリと笑い、姫がいるなら行き先はどこでも構わないぜ、と言い置いて教室を出て行く。

「……た、健君と久遠君にも、聞いてみなきゃね。行き先、もう決めてるかな？」

気を取り直した零は携帯を取り出して健に電話をかける。いつもワソコール以内に電話に出る健に零は毎回驚かされる。

「……健君、今平気？」

『平気平気、何?!』

電話の向こうで弾む声に零もつられて笑顔になる。

「あ、あのね、今かおる君と修学旅行の準備の班決めをやつてて・

・

「寮のメンバーで同じトコにいたらいいねって話を……」

『行く行く、どこでもいいいぜ俺！零ちゃんと同じとこ行く!』

「沖縄がいいなつて思つてるんだけど、いい？」

『沖縄なら海だな！楽しみだ!』

耳が痛いほどの大声に零は苦笑する。

「じゃ、じゃあまた相談するね、また後で。」

零は健との電話を切り、小さく息を吐き出すと、駿の名前を探してコールする。健にかける時とは違って、なぜかとても緊張している自分に気付く。

「……」

零から電話をかけるのはこれが2度目。一度目はまだ寮に入つてすぐの夜だった。何度目かのコールで、零は緊張に耐えかねて携帯を切った。

「出ない？」

駿が電話に出なかった事にホッとしているようにも見える零に問い

かけてかおるは小さく笑う。

「じゃあ駿には寮に帰ってから聞こうか。きっと、大丈夫だと思うよ。」

かおるが微笑むと、零も笑って頷いた。

026：修学旅行の計画（後書き）

修学旅行、また行きたいなと思いつつ。私の修学旅行はスキーでした。最近では海外も多いんですねー？うらやましい限りです。

027：飴と鞭？（前書き）

今回は伊織×零のお話です。

027：飴と鞭？

ある日の放課後、かおるが職員室に呼び出されたため教室で一人になった零はここぞとばかりに集まってきたクラスメイトに囲まれていた。

週末の約束を取り付けようとしていたり、携帯番号の交換をしようとしていたり、ちょっとした小競り合いが起こるほどで零は改めてかおるの存在の大きさを思い知る。

「あ、あの、ちよつと・・・」

小柄な零は男子生徒達に取り囲まれて身動きがとれず、どうやって脱出しようかと悩んでいると、フワリ、とムスクの香りと共に伊織が現れた。

「零、行くぞ、早く来い。」

・・・イキナリ呼び捨て？

内心、そう思いながらも伊織の出してくれた助け船に乗る。

「あつ、ごめんっ！ごめんね？みんな、私もう行かなきゃ！」

慌ててかばんを掴み、伊織の方へ歩み寄ると、クラスメイトから伊織を非難する声上がる。

「伊織、お前何様だ？」

喧嘩っ早くていつもどこかしら怪我をしているクラスメイトの滝沢が伊織に詰め寄る。

「何様、つて零の彼氏。何か文句ある？」

「かつ、彼氏ッ？！」

「ち、違うよっ！伊織君、いい加減な事言わないで！」

クラスメイトの反応に焦って否定しても伊織は余裕の表情を浮かべる。

「そのうち彼氏になる、なら問題ないか？」

そう言つて伊織は零の顎を掴んで顔を覗き込むと、ニヤリ、といったもの毒を含んだ笑みを浮かべる。

「も、問題ですッ！」

零は赤くなつて伊織の手を振り払つて教室を出た。

「・・・まあそう怒るなよ、お姫さん。助けてやっただから感謝しろよな。」

伊織の行動に怒つて早足に歩く零を大股でゆつくりと追いかけながら伊織はそう言い、別に黙つて見ても面白かつたんだぜ、と付け加える。

「・・・あつ、あれは・・・。ありがとう・・・。」

不本意ながら、自分一人ではあのクラスメイトの輪から抜け出すのは相当困難だつたろうと思うと、伊織の助け舟はありがたかった。

「素直でよろしい、」

伊織はそう言つて零に追いつき、頭を撫でる。

「ちよつ、それやめて！」

かおるにも頭を撫でられた事があつたが、それとは違い、何故か嫌悪感を覚えた零は伊織を睨む。

「零、」

「呼び捨てにしないで、」

「どうして？」

「どうしてって・・・」

「理由がないなら別にいいだろ？」

「だ、ダメだよっ！イヤなんだもん。」

「だから、どうして？」

「と・・・特別な人みたいだからイヤ。」

「特別だろ？お前は俺の女なんだから、」

毒のある瞳。どうしてこんな目でこんな風に見つめる事ができるんだろ。背筋がぞくぞくするような居心地の悪さを覚える。

「違います。」

零は伊織から視線を逸らし、その場を逃れようと早足になるがあっさりと伊織に腕をつかまれる。

「俺はこんなにもお前の事を想っているのに、お前は俺の事を見てもくれないんだな、」

「えっ……」

いつもの毒のある、自信に満ちた瞳ではない、不安に揺らぐ瞳に見据えられて零は絶句する。こんな頼りない表情の伊織は初めて見た。

「そんなに、俺のことが嫌いか？」

「えっ、き、キライじゃない、けど……」

「じゃあ、そんなに避けるなよ、」

「さ、避けてない……」

風が零の髪をもてあそんで通り過ぎ、フワリと辺りにムスクの香りが漂う。

「俺の事、避けないって、約束して。」

「えっ?!」

掴んだ腕を強く引き寄せられ、零は伊織の腕の中に倒れこむ。

「約束しないなら、離してやらない、」

見上げると、いつもの毒を含んだ瞳にぶつかる。

「や、離してッ！」

校舎から寮へ戻る途中の道の真ん中で思い切り抱きしめられた零は恥かしさで真っ赤になってもがいたが、しっかりと抱きすくめられた腕からは逃れられず、伊織は小さく笑う。

「お前って、単純。そんなんじゃすぐに騙せそうだな、」

「なっ、何でそんな事するの?!」

「何でって、お前の事を手に入れるために決まってるんだろ？」

「私、意地悪な人はキライなのッ！」

零の言葉に伊織の動きが止まる。

「……そうか、嫌われてるなら、仕方ないな。」

ポツリ、と呟いて、零を抱きしめていた腕を離す。再び伊織の瞳から自信に満ちた光が消え、悲しみを宿した瞳が地面をうつろう。

零から距離を置いてゆっくりと歩き出した伊織を、零は戸惑いながら慌てて追いかける。

・・・これって、またフェイクだよね？またさっきみたいに・・・
零はそう思いながらも、《キライ》と言うキーワードを出してしま
った事を後悔していた。《キライ》といわれて傷つかない人などい
ないはずだ。何よりも、自分が一番その事を知っていたはずなのに。
「ごっ、ごめん、伊織君、そのっ、私・・・」

伊織の背を追いかけている零は声をかける。

「いいよ、無理しなくて、」

前を歩く伊織から呟くような返事が戻り、零は軽率な自分を責める。

「ごめんなさい、もう避けたりしないって約束するし・・・キラいな
んて嘘だからっ！」

零がそう言つと、振り向いた伊織の瞳はまたいつもの毒を含んだ強
い瞳で・・・。

「その言葉、忘れんなよ、お姫様？」

・・・だっ、騙されたっ・・・。

027：飴と鞭？（後書き）

俺様キャラって、私は好きなんですが。硬派と俺様は私的ツボです。硬派な人や俺様な人が見せる優しさにやられる私。

028：修学旅行・1（前書き）

修学旅行編は全部で5部くらいに分ける予定ですっ

028：修学旅行・1

5月のよく晴れた日に私たちは待ちに待った修学旅行に旅立った。一番人気はやはり韓国で、沖縄行きのメンバーは数十人。運良くか悪くか、引率の中に竹川先生の姿もあった。

「おう、お前ら揃ってどこへ行くつもりなんだ？」

4泊5日の沖縄旅行。すでに修学旅行という名の卒業旅行に近い零たちの計画では離島へ渡つてのんびりと海で遊んだり、琉球ガラスの工房で思い出のグラスを作ったりする予定で埋まっている。

「沖縄と言えば、肝試しだろう？お前ら離島へ渡るなら打ってつけのスポットがあるから連れて行つてやるよ、」

竹川先生はそう言つて、お前らだけを単独行動させるような危険な真似はさせないからな、とニヤニヤ笑いながら搭乗手続きをしに行つてしまった。

「何だよ竹川の野郎、」

邪魔すんな、と健は竹川の背中を睨む。

「零ちゃん、荷物、持ってあげる。」

「あつ、大丈夫だよ。自分の荷物くらい持てるし・・・」

「女の子が大きな荷物を持つてるのを黙って見てられないから、お願い、それ、貸して？」

かおると零のいつものようなやり取りに駿は呆れたような溜息をつく。

「それにしても、お前らが揃うとヘタな芸能人よりオーラあるんじゃないの？」

搭乗手続きを終えた竹川はそう言いながら零たちのところへ戻つてくると、ポンポン、と零の頭を叩く。

「なっ、何ですか、いきなり！」

零が両手で頭をかばつて竹川をにらむと、先生は面白そうに声を立

てて笑う。

「白金台高校のイケメン人気ランキング上位4人が集まればそりゃあ目立つわな。」

それにこのお姫さんがいるからなおさらだ、と竹川はさらに零の頭をぐしゃぐしゃと撫でる。

「竹川、お前いい加減にしとけよ！嫌がつてんだろ、」

零の隣にいた健が髪を乱されて顔をしかめている零をかばうと、竹川は減るもんじゃねーのに目くじら立てんな、とおよそ教師とは思えない発言をして笑い、遅れんなよ、と言いながら搭乗口へ歩いて行った。

「着いたー！」

数時間のフライトの後、沖縄の地へ降り立った一行は5日後の搭乗2時間前までに空港へ集合する事、と言うきわめてアバウトな指示を受けて解散となり、各々自分達で決めた行き先へ散っていく。前半の3日間を離島で過ごす予定の零たちはフェリー乗り場までタクシーで移動し、ちょうど出発間際だったフェリーに飛び乗った。

「潮風、気持ちいいね」

甲板の上に出ていた零は隣にやってきた伊織に声をかける。

「ああ、天気もいいし、楽しくなりそうだ、」

空を見上げて目を細める伊織を見上げる。何となく、伊織に青空は似合わないと思っていたが、案外似合うんだな、と思って小さく笑う。

「何だ、人の顔を見て笑うな、」

「ご、ごめん、別に笑ってないよ。」

「ウソつけ、」

「……ッ！ついてないッ！ついてないよっ！」

顎をつかまれて零は慌てる。いつもの毒のある瞳に見据えられると

どうしようもなくドキドキしてしまう。

「何故笑ったか言えよ、」

顎を掴んだままスツと顔を寄せる伊織に零は慌てふためいて言い訳を考えるが、諦めて素直に思っていた事を告げると伊織の瞳がさらに妖しい輝きを増す。

「人をヴァンパイアみたいに言うんだな？ならお望みどおり、首に噛み付いてやるのか？」

開いている手で零の腰を引きよせ、顎を掴んだまま首筋に顔を寄せる伊織に零は慌てる。

「エツ？！やつ、そう言うんじゃないかってツ！

「伊織、佐倉から離れろ、」

静かな怒りを湛えた駿の声が響き、伊織は零の顎を掴んでいた手を離して声のした方を振り向く。

「ナイト様はどうした？その役目、いつもならかおるだろ？」

「・・・知るか、そんな事。」

「へえ？優等生の駿がねえ？」

伊織はそういつてニヤリと笑うと思いい切り眉間に皺を寄せた駿の肩を叩いて零に聞こえないようにその耳元で呟く。

「お前みたいな堅物でもこの姫さんの虜になるんだな、」

「・・・適当な事を言うなッ！」

肩に置かれた伊織の手を払いのけた駿はそのまま船室へ降りていく。二人の様子を見ていた零はいつもの事ではあったが少し心がふさぐ。

「ねえ、伊織君、せっかつくの旅行なのに、ケンカしないで？」

「・・・また久遠君、怒っちゃったよ・・・。」

「ケンカなんかしてないぜ？アイツが勝手に怒ってるだけさ。」

「でも怒らせたんじゃ？」

「まあな・・・悪かったよ。そんな顔すんな。」

「・・・伊織君も謝ることあるんだね、」

「何だそれ？俺が謝ったら悪いか、」

「ちよつと意外だっただけ。」

「悪いと思ったら謝るさ。さっきお前、泣きそうな顔してたからな、
ふわり、と伊織が優しく微笑む。」

「え・・・？」

「俺だって、お前は笑ってるほうがいいと思うさ。泣かれたら困る
しな。」

そう言っただけで伊織は照れたような笑顔になったが、またすぐにいつもの
挑戦的な、自信に溢れた光が瞳に宿る。

「俺といると、楽しいだろ？ 優しいだけのかおるとか堅物の駿とか、
ワンワン犬みたいな健より俺がいいと思わないか？」

「・・・よく、わかんない。」

「なら、分かせてやろうか？」

不意に零の腕を引き寄せ、顔を間近に寄せて耳元で囁く。

「・・・伊織ッ！ てめえ何やってやがるッ！」

「ああ、ワンワンうるさいヤツが来た。」

続きはまた今度、と伊織はいつもの毒のある微笑みを残して甲板を
後にした。

028：修学旅行・1（後書き）

沖縄いきたーい。イケメン達といけたらどんなに楽しいでしょうかねー！。

029：修学旅行・2（前書き）

引き続き修学旅行です。

029：修学旅行・2

離島に到着した一行は予約しておいたホテルにチェックインを済ませる。

散々悩んだ結果みんなで決めた、ビーチに程近いロジタイプのホテル。家族の長期滞在用などでも利用される、多人数で泊まれるキッチン付きのホテルだ。

せっかくだから、と少し金額を弾んだ事もあり、寝室は3つに別れていて、零は個室をもらい、荷物をおろした。ホテルからビーチまでは歩いて数分で、さっそく水着に着替えてリビング集合することになっている。

・・・やっぱりちょっと恥ずかしいよね・・・。

部屋で水着に着替えながら零は思う。今年流行の胸元に大きなリボンがついたセパレートの水着。フリルが着いていておへその少し上まで隠れるデザインだ。零は長い髪をおだんごにまとめ、水着の上に大きめのパーカーを羽織って部屋を出た。

「お待たせっ！」

部屋から海、見えてたね、と恥ずかしさを紛らわすためにわざとハイテンションにリビングに顔を出した零は男前達の水着姿に少し赤面する。思った以上に全員ガッチリした体型で、特に健は普段から鍛えている事もあり美しい筋肉が目をはく。

一見線が細そうなかおるもしなやかな筋肉に覆われていて直視することがためらわれた。

「・・・んだよ、つまんねーの。それ脱げば？」

パーカーを羽織っている零を見て面白くなさそうに呟いた伊織に、零は自分が皆の身体に目を奪われていた事を誤魔化すためにわざと大げさに恥かしがって見せる。

「まあまあ、とにかく海、行こうぜ！」

健のその一声で外へ出かけようとした瞬間、バン、と勢いよく扉が

開いて竹川が現れた。

「・・・いきなりですね、先生？」

最も冷静に対応したのはかおるで、皆一様に突然登場した竹川に視線を注ぐ。

「俺は教師だからな。お前らが間違いを犯さないように見張るのが役目だ、」

「何だよ間違いつて！」

声を荒げる健をチラリと一瞥し、零の鼻先に指を突きつける。

「お前らみたいな野獣の群れにコイツを放り込んで見過ごせるわけがない、と言ってるんだ。お前らの事だから何やらかすかわかったもんじゃねえ、」

「つか、お前と一緒にすんなよこのエロオヤジ！」

「そんな事言つて健、お前コイツのこの胸を見て興奮してんじゃないのか？え？」

竹川は零の肩に腕を回して羽織っていたパーカーの前をはだける。小さな身体の割には形のよい膨らみが谷間を作り、きれいにくびれたウエストが露になると健は頬を染めて目をそむけた。

「せつ先生ッ！やめて下さいッ！」

零は真つ赤になって竹川の手を振り解き、パーカーをかきよせて胸の前で押さえる。

「お前、いい身体してんじゃん、隠すなよもつたいない、」

伊織の毒のある瞳に見られると恥かしさも倍増し、零はいたたまれなくなつてリビングから逃げ出して部屋に駆け込んだ。

・・・もう、何なのっ？先生のせいだよっ！あんな事言つて！

火照った顔に手を当てて座り込む。どんな顔で行けばいいのかさえ分からない。

「・・・先生？この状況、どうやって責任を取ってくれるおつもり

ですか？」

冷静なだけに凄みのあるかおるの聲がリビングに響き、竹川は決まり悪そうに頭を掻く。

「悪い悪い。やりすぎた。けどお前らだって少なからず、下心あるんだろぅが、」

「・・・ありませんよ。少なくとも僕には。零ちゃんが傷つくようなことは絶対にしないし、他の人にもさせません。」

きっぱりと言い放つかおるには周囲を従わせる力があり、竹川も言葉に詰まる。

「別と同じホテルに居て頂いても結構ですが、余計な口出しは無用です。」

では僕は零ちゃんを迎えに行ってきます、と竹川を完全に黙らせる、かおるはリビングを横切つて零のいる部屋の扉を叩く。

「・・・零ちゃん、竹川先生は僕からよく言っておいたから、機嫌直して？」

そつとノブに手をかけると、中から鍵がかけられていてかおるは小さく溜息を付く。

「零ちゃん、お願い。零ちゃんがいてくれないと楽しい思い出が作れないから・・・」

こういう時はどう言うのがいいのだろう、とかおるは頭の中で考えながら言葉をさがす。

「零ちゃん、ごめんね、僕がさつきちゃんと守ってあげられていたら嫌な思いをさせずにすんだのに・・・僕のせいだよ、ごめん。」

優しい零の事だから、かおるが自分を責めればきつと扉を開いてくれる、と選んだ言葉に力チャリ、と鍵を外す音がして、そつと扉が開く。

「・・・かおる君のせいじゃないよ？・・・ごめんね、」

零は小さく微笑んで、それでもまだ赤い顔をして俯いてしまう。

「行こう、みんな待ってる。」

気を取り直してビーチに出た零たちは目の前に広がる美しい海に心を奪われ、我先にと海の中へ走りこむ。真っ白な砂浜、覚めるような青い海、5月下旬の沖縄は海に入るには丁度いい気候で吹く風もさわやかだ。泳ぎの得意な健は沖まで泳ぎ、熱帯魚がいる、とはしゃいでいる。持ってきたビーチボールでビーチバレーの真似事をしたり、波打ち際でじゃれあったり、それほど人の多くないビーチでは思う存分騒いでも問題なく過ごせそうだった。

ひとしきり大騒ぎし、疲れた零は海から上がって白いパラソルの下に入る。誰が一番長くもぐれるかを競っている面々を砂浜から眺めているだけで自然と笑顔になった。

・・・駿君も普通にあんな風に笑ったりはしゃいだりするんだ・・。
。

いつも一人で本を読んで、あまり他人と話したがない駿がみなと競い合っている姿は何か新鮮で、零は無意識に目で追っていた。

「零ちゃん！零ちゃんもこっち来いよっ！」

海の中から健が叫ぶ声に答えて、零も青い海へと飛び込んだ。

029：修学旅行・2（後書き）

細いくせに適度に胸がある。女子の理想ですね（笑）いいなー。零ちゃんみたいな子に生まれてたら間違いなく人生変わったと思う今日この頃。私と零ちゃんの唯一の共通点はチビだったことのみです。ああ悲しい。

030：修学旅行・3（前書き）

修学旅行三話目

昼間に思いきり海で騒いだおかげで、ホテルに戻った零たちは気だるい体をリビングのソファに投げ出してうつろう時間を過ごしていた。波の音だけが響き、ゆっくりと時間が流れていく。沖縄時間、とはよく言ったもので、普段の生活にはない、時計の針を気にしないで済む穏やかな昼下がりに零は心地よく身をゆだねていた。

「おいおいお前ら、若いくせにダラダラしやがって、」

唐突に部屋のドアが開き、竹川が姿をすと、皆普段の週間で思わず姿勢を正す。

「お前ら、メシはどうするんだ？ココで作る気か？」
部屋に備え付けのキッチンを指す竹川に、零は頷く。

「今日の夕食は私が作るって、約束なんです。明日はみんなで食べに行く予定ですけど、」

「へえ、お前がね。そんなら俺も混ぜてくれよ、

明日おごるから、と言う言葉に惹かれた一行は竹川の同席を許す事にし、食材の買出しに行く事にする。

幸いすぐ近くに商店街があり、様々な食材を手に入れることができた。

夕食のメニューは商店街の魚屋さんで安くしてもらった不思議な青い色をした魚の煮付けと、サラダにゴーヤチャンプル、からあげ、健がどうしても作ってほしいと言って聞かなかった肉じゃが。

男の人5人が食べる量ってどのくらいなんだろうと心の中で思いながら、大量に買って来た食材を次々とさばく。いつも父親についていってしまう母が不在である事が多かった零は、どんな料理でも一通り作れると言うのが唯一自分の特技だと思っている。

ちょうど太陽が沈み始め、空が夕焼けから夜の色に変わり始める頃に出発上がった料理をリビングへ運ぶと、メンバーから歓声があが

った。

「お疲れ様、こんなにたくさん、大変だったでしょ？」

優しい微笑みを浮かべてねぎらいの言葉をかけてくれるかおるに零は少しはにかんで、待ちきれずにつまみ食いをしている健を見て笑う。多めに作った事もあり、余るだろうと思っていた料理は結局きれいにたいらげられ、食べ過ぎた、と苦しがる面々を見て零は不思議ととても幸せで満たされた気分になる。

「お前結構やるじゃねーの。これならいい嫁になれるな、」

俺が保障する、と竹川はぐしゃぐしゃと零の頭を撫で、髪が絡まるからやめてください、と嫌がつて両手で乱れた髪を整える零をかおるがかばって竹川を睨む。

「先生、退場したいんですか？」

ちよつとくらいいいじゃねーか、と言いながらも竹川は零に謝り、ささやかなディナーは終了となった。

作ってくれたから片付けは僕らで、と言つかおるの言葉に甘えて零はリビングのソファーに座り、窓から見える海を見る。すっかり闇に包まれた外の世界は神秘的で、闇の中から響く波の音に耳を済ませていると宙に浮いているような気分になった。

早朝からの移動や昼間の海での大騒ぎの疲れもあって、気がつくとな零はソファーにでうとうととまどろんでいた。窓から吹き込む穏やかな風と波の音が優しく零を包み、いつしか零は眠りの世界に引き込まれていった。

「・・・相変わらず、隙だらけだな、」

最後の片づけを他のメンバーに任せて一足先にリビングに戻った伊織はソファーで眠っている零を見て呟く。天使の寝顔、とよく言うが、コイツの寝顔はちよつと反則だな、と内心思う。

開いたままの窓から吹き込む風が眠っている零の髪を弄び、零は小さく身じろぎして風から身体を守るように自分の身体を抱きしめて

丸くなる。

・・・これで襲われても、文句言えなねえよな、俺たちが全員男だって、コイツは本当に理解しているんだろうか、と伊織は思う。何度も何度も、襲う真似をして警告してやっているのに全然わかっていない、と内心溜息をついた。

「・・・おい、起きろ、」

軽く肩に触れても零は起きる気配がなく、いやいやをするように小さく首を振って丸くなる。

・・・殺人的だな、コイツは。

伊織は自分のこめかみを強く抑えて理性を保つ。それでも眠る零の頬に手を伸ばして耳元に唇を近づける。

「起きろよ、起きないとお前の首に噛みつくぜ?」

微かに伊織の唇が零の耳に触れる。それでも目を覚まさない零から身体を離し、伊織は大きく深呼吸をして自分が羽織っていたパーカーを眠っている零にかけてその場を離れた。

030：修学旅行・3（後書き）

料理を作ってくれたから僕が片づけるよ、と言える男子は最高です。
かおる様完璧なり。

031：修学旅行・4（前書き）

みなさん海ほたるの光る海、見た事ありますか？

それはそれは神秘的なんですよ！。私初めて見た時一時間くらいずーっと見てました。

031：修学旅行・4

ソファで転寝をしていた零は目を覚まして身体にかけられていたパーカーに気付く。リビングの電気は消されていて部屋の中は静かだった。

・・・私、どのくらい寝ちゃってたんだろう・・・？みんなはもう寝たのかな？

ホテルの部屋に時計はなく、腕時計をしていない零は正確な時間を掴めないままそっと立ち上がる。

・・・明日の朝、みんなに謝らなきゃ、

窓の外から響いてくる波の音。零は真つ暗な窓の外に目をやって、ふと波打ち際がほの白く輝いている事に気付く。

・・・波が光ってる？

月明かりを反射しているのかとも思ったが、不規則に輝く不思議な波の輝きにひきつけられる。零は好奇心を抑えられず、そっと窓から外に出た。

間接照明を使ってライトアップされたホテルの中庭を抜けるとすぐに広がる砂浜。半舷の月が照らす明かりを頼りに波打ち際に近づくとき、光る波の正体は神秘的に輝く海ほたる。波が打ち寄せるたびにボウッと輝いて波を蒼く彩っている。

「綺麗・・・ッー！」

零は小さくつぶやいて波を見つめる。そしてふと空を見上げると、見た事のない数の星が瞬き、その美しさに零は言葉を失った。

幼い頃から遙か天空で瞬く星を見るのが好きだった。いつしかそれは憧れに変わり、宇宙の謎に一番近づけるNASAへの憧れに変わった。

幼い頃に両親に連れられていったNASAの研究所。いつかきつと、あの場所に立って、あの場所で研究をしたい、と強く願うようになったのはいつの頃だったろうか。

零は一人、砂浜に寝転んで今にも星が零れ落ちてきそうな空を見つめる。プラネタリウムでしか見たことのない天の川が流れる空。このまま闇に溶けてあの場所へ行きたいと願ってしまうほどに美しい。

その頃、夜中に目が覚めた駿はふと窓の外に目をやり、波打ち際に佇む人の姿に息を飲む。月明かりに照らされ、海ほたるが幻想的に輝く波打ち際を歩く美しい少女。瞬きをする一瞬で闇に溶けて消えてしまうのではないかと思える儚さをまとうている。

「・・・アイツ・・・」

駿は小さく呟いて、手早く服を着替えて同室の健を起こさないようにそっと部屋を出る。いくらなんでも、真つ暗な夜の海に女一人で出て行くななんてバカを通り越して怒る気にもなれない。

・・・全く、どこにいても人騒がせなヤツだな、

心の中で呟いて駿は外に出た。

波打ち際を蒼く輝かせる細かな蒼い粒子に惹かれた零は、靴を脱いで波に足をひたして足をさらう波と戯れる。素足に絡みつく波が輝く海ほたるを零の足に届け、小さな輝きが肌の上に残る。

・・・波が蒼く光るなんて、知らなかった、

零は延々と打ち寄せる波と、その度に表情を変える蒼い輝きを飽きることなく見つめながら、たくさんの事を知っているようで、実は知らない事の方が圧倒的に多い事を今更ながらに痛感する。昼間とは違ってひんやりと冷たい海の水が素足に絡みついて零は思わず身震いした。

零を連れ戻しにホテルを出た駿は、波打ち際で波と戯れる零の姿を見て足を止める。海から吹いてくる風が零の細い髪をもてあそび、蒼く輝く波の中にたたずむ零が一瞬、闇に消えてしまいそうな気がしたからだ。

「おい、佐倉、こんなところで何してる、」

わざと、声に怒りを含ませて駿は零に近づく。

「あ、久遠君！星を見に来てたの。ホラ、すごい星、初めて見た。」いつも怯えたように目をそらしておどおどする零が、うつとりと空を見上げて微笑む。その微笑みに駿は一瞬見惚れ、慌てて零の指す空を見上げる。

「・・・これは、すごいな、」

今まであまり星空など見上げた事のなかった駿だが、頭上を覆い尽くす星々に思わず感嘆の声をあげた。

「ね？すごいよね？天の川だよ？」

声を弾ませる零に駿は思わず苦笑する。人が心配していることなど、気付いてもいないのだろう。

「星を見るのはいいが、一人で夜の海に来るのはどうなんだ？」

「え？」

「誰にも言わずに出てきて、もし何かあったらどうするつもりだ、」

「え、だ、だって、すぐ近くだし・・・」

駿が語気を強めるとさっきまで笑顔だった零は叱られた子犬のようにしゅんとなる。

「お前は・・・本当に・・・」

・・・お前を見てると、ペースが乱される。

駿は内心呟き、波の中に立つ零をひよい、と抱き上げる。

「えっ、あっ、ちよっ、」

慌てまくる零にあえて冷静に声をかけて砂の上におろす。

「お前靴どこへやったんだ？はだしで帰るつもりか？」

「え・・・っと、多分その辺で脱いで・・・あれ？ないよね？どこ
いっちゃったんだろ・・・。」

どうしよう、と自分を見上げる零の瞳に、駿はこんな目で見られて
手を差し伸べないヤツなどいないだろう、と思って小さくため息を
つく。

「・・・探してきてやるから、そこで待ってる、」

031：修学旅行・4（後書き）

いつも読んで下さっている方 ほんつとに励みになっております。
誰かダメ出しでいいから感想書いてほしいな・・・（ずっずっしい
けど）。

032：修学旅行・5（前書き）

みんなで過ごす夜と言えばー・・・肝試しっ！

夏じゃなくても肝試し（笑）まあ沖縄だしいちお、夏ってことで。

翌日も朝から散々海で遊び、フラフラになるまで大騒ぎした零たちはホテルの部屋に戻って穏やかに過ぎる時間を過ごす。なんとなく、みなリビングに集まって同じ時間を共有していた。

「離島、やっぱり正解だよな。本島だともっと人も多くてうるさそうだし、」

誰にともなく健が呟く。

「そうだよな、静かだし、人少ないし、海綺麗だし。」

ソファーに寝そべっていた零も、静かな昼下がりの心地よい風に吹かれて思う。二度と戻らないこの瞬間を穏やかにみんなで過ごせる幸せを、ずっと忘れたくないと思える楽しい思い出を作れる幸せを与えてくれるこの瞬間に感謝しながら。

その日の夜は昨晚の公約通りに竹川に夕食をごちそうになり、その後は竹川の提案で肝試しを行う事になった。零は気が進まないまま皆の後について歩く。それでなくても人が少なく、街灯もほとんどない離島はホテルのある場所から離れると真っ暗で気味が悪い。「二人一組で、最初の組はこの森を抜けてあの丘の上にある慰霊碑にこの花を置いてくること。次の組はそれを持って帰ってくる事。いいな?」

「二人一組って、僕等は5人ですよ。まさか先生も入る気ですか?」

「おう。当然。」

俺の提案だからな、と言い放つ竹川が準備したくじ引きでメンバーを決め、零は駿と組む事になった。

「ちえっ、何で俺が竹川と行かなきゃならねーんだよ、」

ブツブツ文句をいいながら健と竹川が出発し、残ったメンバーは手近にある石碑のふちに腰を下ろす。満点の星が輝いているが、真っ

暗な道を小さな懐中電灯一つで丘の上まで続く森を歩くのはどう考えても気持ちの良いものではなさそうだ。

・・・久遠君、何か話してくれるかな・・・。

黙ったままずっと歩くのはきつと辛いに違いない。懐中電灯は二人に一つしかなく、いつもの様に黙って一歩前を歩いていかれたらどうしよう、と零は出発前から泣きそうになった。

「・・・零ちゃん、大丈夫？こういうの苦手なの？」

俯いたまま黙っている零を見たかおるは優しく声をかける。

「・・・うん。苦手。人生で一度もホラー映画見たことないのに、肝試しなんてありえない。」

零の言葉にその場にいた3人は思わず笑う。

「笑い事じゃないよ。肝試しだよ？それに慰霊碑に行くって言うし・・・。」

しゅん、と耳を垂れた子犬のような零に抱きしめなくなる衝動を抑えてかおるは微笑む。

「大丈夫だよ、駿は優しいから、ちゃんと守ってくれるさ。ね？駿。」

「・・・さあな、」

駿のそっけない返事に零の心が痛む。駿にとっては肝試しなどただの子供だましで、夜の散歩とそう変わらないのかもしれない、と思う。

「そんなに不安なら俺が駿の代わりに行ってやってもいいぞ、」

「伊織はだめ。別な意味で危険だから、」

「なんだそれ？」

「言葉通りさ。自覚してるんでしょ？」

「まあな、そう言うお前はいつになったら本音を出すつもりだ？」
かおると伊織の会話はいつもこうだ。お互い牽制しあっているのか、
際どいキーワードを応酬する。

「お前ら、うるさいんだよ。もうメンバーは決まってるんだ、ごちやごちや言つな。」

「じゃあ駿、ちゃんと零ちゃんを守ってね？」

「・・・だから、うるさいんだよ、お前らは。」

不機嫌にそう言い放つと駿はそれきり黙りこむ。

「・・・やっぱり、やっぱり機嫌悪いし・・・。絶対しゃべってなんかくれないよね・・・。とにかく置いていかれないようにして行かなきゃ、」

「おう、今戻ったぞ、」

零がもんもんとしていると、竹川と健が戻ってきた。二人で何を話していたのか、健は怒っているような、すねたような顔をしている。「じゃあ次、行ってこい。さっきの花を持って帰ってくるんだぞ、」竹川に言われ、零は慌ててすでに歩き始めている駿を追いかける。

「・・・あいつら、大丈夫かねえ？」

「心配なら、後をつけますか？」

「お前、そうしたいの？」

「まあ、出来る事なら駿の代わりに行きたかったですけど。」

あいかわらずはつきり言うねえ、と竹川に突っ込まれながらもかおるは闇の中に消えていった二人の姿を見送った。

「あつ、あのっ！ま、待って、久遠君っ！、」

一生懸命追いかけてくる足音に、もうここまで来れば他のやつらからは見えないだろうと駿は足を止めて振り向き、今にも泣きそうな顔をしている零の瞳を見て苦笑し、昨日は一人で夜の海にいたくせに、と言いかけてやめる。

「・・・悪い、大丈夫か？」

微笑んで手を伸ばすと、躊躇いもなく繋がれた手に駿は思わず赤くなる。

「ほら、行くぞ、」

ギョツと力を入れて握り返すと、零は闇に怯えるように身体を寄せ、もう一方の手で駿の腕を掴む。

「・・・歩きにくい、」

「だ、だって、」

「置いていたりしないから、安心しろよ、」

「う・・・うん・・・」

頷きながらも離れようとしないう零に駿は苦笑する。つないだ手が微かに震えている。

こんな時、かおるだったらどうするんだろう、と駿は思う。優しく微笑んで肩を抱き寄せるのか、それとも悪びれもせずお姫様抱っこをして歩くのか。かおるの特殊な事情を知ってはいるが、男から見ても優雅で完璧な身のこなしと、完全に感情を隠す微笑みはさすがだと思う。

・・・それにしても、お姫様抱っこはやりすぎだろう、駿は心の中で呟いて零を見下ろす。こうやって見るとやっぱりチビだな、と思っていると、見上げる零と目が合った。

「・・・何か話しても、いい？」

「え？・・・ああ、」

返事はしたものの、何を話すべきなのか、検討もつかない。

「あの・・・いつも、迷惑ばかりかけて、ごめんね？」

駿が黙っていると、零が突然切り出した。

「何か、いつも怒らせちゃってばかりで、邪魔ばかりしちゃって、私がいると、迷惑だよな？」

「え？あ・・・ま、まあな、」

・・・別に、怒ってなんかないけど、と内心想う。いなければ起こらないドタバタが零がいることで日々発生している事は確かだが、別にそれが迷惑だとは思っていないかっただけに少し驚く。

やっぱりそうだよな、と肩を落とす零を見ると、知らず微笑んでいる自分に気付く。暗闇に怯えてくっついてきて、子犬のようだ。

「お前ってホントに犬みたいだな。」

「わんわんうるさいってこと？」

「・・・いや、子犬みたいで、小さくて弱くて、守ってやりたくない

る。」

思わず本音を口にした駿の言葉に驚いて目を見開く零と目が合い、駿は思わず顔を背ける。

「とにかく、早く行くぞ、もたもたしているとまたあいつらがうるさいからな、」

零に赤く火照った顔を見られないように前を向き、わざと零の手を離して歩調を速めた瞬間に、懐中電灯の明かりが消え、フツと辺りが闇に包まれた。

「キャアッ!」

突然やみに包まれて思わず悲鳴を上げてその場にしゃがみこんでしまった零は、暗闇に駿の姿を捜す。辺りは真っ暗で、まだ闇に目慣れない零の目にはどこまでも続く闇しか見えない。

「・・・く、久遠君?」

「久遠君、どこ?」

自分でも驚くくらい小さな声。その時零は、戻ろうにも来た道を覚えていない事に気付いてさらに心細くなった。

「佐倉、おい、佐倉っ、」

携帯を開いて小さな明かりを点し、零の姿を見つけた久遠はすっかり怯えている零に駆け寄る。

「大丈夫か?・・・ごめん、悪かったよ。まさか電池が切れると思わなかったから・・・」

「く・・・久遠君?」

怯えた瞳。暗くて良く分らないが、一瞬涙が光ったような気がして駿は息をのみ、思わずしゃがみこんでいる零を抱きしめる。

「ごめんな?大丈夫だから。」

震えている身体を抱きしめると、今更ながら手を離れた事を後悔する。

「立てるか?」

跪いて零の身体を支えて立たせると、自分も立ち上がって零の手を取る。

「・・・さあ、どうするかな。」

電池の切れた懐中電灯と怯えている零を見て駿は溜息を付く。

「・・・どうする？行く？帰る？」

「・・・り、たい。」

「ん？」

「帰りたい・・・です。」

俯いて小さな声で訴える零の手を安心させるように強く握り、じゃあ帰ろう、と来た道を戻る。どうせみんなに散々言われるだろうが、これ以上この子犬を怯えさせる必要もないだろう。

032：修学旅行・5（後書き）

感想を下さった方ー 超やる気です！超うれしい ありがとうございます。
ざいまーす。

お気に入り登録やポイントもホントに励みになっております
これからもがんばります！！

033：修学旅行：6（前書き）

修学旅行最終話ですつ。

033：修学旅行：6

4泊5日の日程は、始まる前には少し長いような気もしていたが、始まってしまふとあつという間で、最後の夜を迎えていた。空港への移動を考えて最終日は那覇市内のビジネスホテル。遅めの夕食を取りに連れ立ってホテルの外へ出る。那覇市内には修学旅行生や観光客も多く往来を行く人の数も多い。

「零ちゃん、」

皆の後ろを歩く零を振り向いたかおるは人ごみの中に埋もれてしまふ零を気遣ってそつと隣に並ぶ。

「僕と駿の間を歩くといいよ、僕は後ろにいるから、」

かおるは一步前を歩いている駿と自分の間に零を歩かせ、零が歩きやすいように空間を作って歩く。今まであまり意識した事はなかったが、きつと見えている景色も違うのだろうと思つてふと身をかがめてみたかおるはその息苦しい世界に少なからず驚く。零の視線から見えている世界は人の背中ばかりで往来の店の看板も、空さえもほとんど見えない。

・・・こんなにも違うとは思わなかったな、

かおるは心の中で呟く。同じ人ごみの中でも頭一つ分出ていて遠くまで見渡せるかおるは特別な息苦しさも感じず、それなりに観光気分を味わえていたが、きつと零は前を歩く駿の背中を追いかけるだけで精一杯なのだろうと思う。

「零ちゃん、大丈夫?」

思わず声をかけると、零は振り向いて何が?と首をかしげる。

「人ごみ。大丈夫?息苦しくない?」

「うーん・・・景色が見えないから好きじゃないけど、大丈夫。」

・・・多分、僕が零ちゃんの見ている景色を知らなかったのと同じように、零ちゃんも僕らが見ている景色を知らないんだろうな、とかおるは心の中で呟く。

「もう少しだからね、」

こんな往来で抱き上げて歩くわけにも行かないし、とかおるは思いながら零に微笑みかけた。

「なんだか、あつという間だったね。」

夕食を終え、ホテルに戻った零はお風呂上りに集合、と言う健のメールに呼び出されてロビーにいた。

「・・・みんな、遅いね？」

ロビーの大きなソファーに深く腰をおろした零は珍しく忘れずに持ってきた携帯をもてあそぶ。スライド式のピンク色の携帯。転校と同時にそれまで使っていた携帯を解約して新しく契約したばかりの新品はまだ使い慣れない。

「誰も、こないよ、」

「え？どうして？」

「俺が零ちゃんしか呼んでないから、
そう言っただけは気まずそうに目をそらせる。」

「そうなんだ。集合って書いてあったからみんな呼んでると思ってた。」

につこり笑う零を見て、健は溜息を付く。時計の針はまだ10時過ぎで、眠るにはまだ早い。この旅行の間、毎日の様に夜中まで騒いでいただけに最後の夜が静か過ぎて寂しい気もする。

「あ・・・あのさ、」

「あ、かおる君だ、」

健が口を開きかけた瞬間、零の携帯が光り出し、零はちょっとまってね、と携帯を取る。

『零ちゃん、今どこにいるの？』

「ロビーだけど、どうかしたの？」

『一人で？』

「違うよ、健君もいるけど・・・。」

「健が？・・・そう、ならいいんだ。また一人で出かけちゃったか
と思って心配しただけ。一人じゃないならいいよ。」

「あつ、ごめんね？うん、大丈夫だよ、」

「健に伝えて。余計な事したら怒るから、って。」

「うん、分かった、」

短い電話を切ると、零はごめんね、と健に謝る。

「かおる君からの伝言。《余計な事したら怒るから》だって。」
かおるの伝言に、健は小さく舌打ちする。

「なあ、零ちゃん、旅行、楽しかったな。」

気を取り直して健は口を開く。

「うん、すごく楽しかったよ。いっぱい思い出、出来たよね。」

写真もいっぱい取ったし、と嬉しそうに携帯を見せる零を見て、健
も笑う。

「なあ、今から写真、撮っていいか？」

「今から？写真？何の？」

「俺らのツーショット。」

健はそう言って、零の隣に座り、肩を抱き寄せる。スパイシーな柑
橘系の香りが零を包む。

「ちよつ、健君？！」

「じつとしてるよ、ブレるから、

ギョツと肩を抱き寄せて頬をすり寄せて来る健に零は慌てる。

「ほら、ちゃんとくつつかないと撮れないだろ？」

耳元で囁かれる健の声に零は真っ赤になるが、健はそれ以上に激し
く高鳴る鼓動を抑えるのに必死だった。零が間近にいるだけに、そ
の鼓動が伝わるのではないかと思うと余計に呼吸が苦しくなる。

「もつ、もう離して？」

シャツターを押しても離れようとしない健に、零は小さく訴える。

健が触れた腕が熱く、顔が火照る。

「イヤだ。」

「このままがいい、」

零を抱き寄せる腕に力を入れて、自分の方へ引き寄せると、簡単に腕の中におさまってしまう零は想像以上に柔らかくしなやかで、子猫を抱いているような錯覚を覚える程だ。目を閉じて零の髪に顔を埋めると、零が小さく身動きした。

「た、健君っ、誰か来るよ?!もう離して、」

「・・・ちよつと、苦しい・・・。」

身体を離そうと健の胸を押しても身動きがとれず、零は息苦しさにあえぐ。

「・・・健、何をしている?」

その時、ロビーに姿を現した伊織が近づき、零を抱きしめている健の腕を掴む。

「・・・ッ!」

突然腕を掴まれた健は驚いて零を離し、とつさに立ち上がった瞬間伊織の拳が健を殴りつけ、健がその場に崩れ落ちる。

「・・・!!」

突然息苦しさから解放された瞬間に起こった出来事に零は声をあげることも出来ずに固まる。健を殴りつけた伊織は怒りの閃く瞳のまま倒れている健の服を掴んで立ち上がらせた。

「貴様、俺の女に手を出してただで済むと思うか?」

「だ、誰がてめえの女だ、勝手に決めんなボケ、」

「ワンワン尻尾振ってるしか能のないヤツが色気ついてんじゃねーよ。」

「んだと、この野郎!」

「俺に勝てるわけないだろ、バカ。」

殴りかかる健を軽くかわした伊織は容赦なく健の鳩尾を殴りつけると、崩れ落ちた健を放置して呆然としている零の腕を掴む。流れるような動きはまるで完成された舞いを見るような美しささえあった。

「行くぞ、」

「・・・え、・・・え?た、健君は・・・?」

「ほっとけ。」

伊織は零の腕を掴んだまま、大股にホテルを出ると、ホテル脇にある緑地公園のベンチに零を座らせた。吹く風は肌に心地よく、零の火照った頬を撫でて通り過ぎる。

「お前、隙を見せるのも大概にしるよ、」

いつもの毒を含んだ瞳ではなく、少し呆れているような視線を向けられた零は何となく居心地が悪く視線を逸らす。

「隙なんて、見せてない。」

・・・隙、って何？写真を撮ることが隙、なの？

前に駿にも言われた。かおるにも無防備になるな、と言われるが、何が隙で、どういう状態が無防備なのか、零にはまだ分からない。

「見せたからああなっただらうが。それとも、お前が望んで抱かれてたのか？」

キラリ、と伊織の瞳が意地悪く輝く。

「ちっ、違っよっ！記念に写真を撮ろっって言われて、それで・・・」

「気を許したんだろ？それが隙だっつってんだ。」

「・・・・・・・・。」

・・・じゃあどうするのが正解なの？写真なんか撮りたくない、って言うの？写真は撮ろっと思ったんだもん。あんな風にされると思わなかっただけで・・・。

零は心の中で思う。それを隙だと言うのだろうか。

「お前のナイトがいつも見張ってるから何も起こらないだけで、みんなお前に手を出したいと思ってるんだ。少しは自覚しろ。」

「そんな・・・」

「お前が隙を作らなければ済むだけの話だろう。」

「だから隙なんか作ってない！」

零の瞳の奥に怒りの感情を見た伊織は溜息を付き、零に並んでベンチに座る。

「こっちこいよ、」

「イヤ。」

「こいつて、」

強引に腕を引くと、零の大きな目が伊織を睨む。伊織はまっすぐにその瞳を受け止めて溜息を付く。

「・・・どうしてそんなに嫌がるんだよ。俺はただ・・・お前を守りたいと思ってるだけだ、」

意地悪で毒のある瞳に影が差し、泣き出しそうなほど頼りない口調になった伊織に零は戸惑う。

「健に抱かれてるお前を見て思ったんだ、お前を一人にしておけない、って。」

「い・・・伊織君？あ、あの・・・」

目を伏せて辛そうな表情を浮かべる伊織に、零は思わずその肩に手を触れる。

「・・・ほらな、簡単に隙を作る。お前、優しすぎるんだよ。」

「えっ！？・・・ちよつ、やだっ！」

一瞬で零を胸の中に引き寄せた伊織は、いつもの毒のある瞳で零を見下ろす。

「そう言うのが隙だ、つつってんの。これで分かったか？」

033：修学旅行：6（後書き）

楽しかった修学旅行も終わってしまいましたー（笑）。

次は6月ッ！体育祭の季節ですね

これから頑張りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

034・伊織について（前書き）

伊織君のお話です！。少しずつ皆さんの素性を明らかに・・・（笑）

034：伊織について

たくさん思い出を残して高校生活最大のイベント、とも言える修学旅行が終わり、またいつも通りの学園生活が戻ってきた。6月初旬に予定されている実力テストに向けて生徒達は皆それぞれ課題に取り組んでいる。

零は相変わらず苦手な数学と慣れないドイツ語に頭を悩ませながらも、教室に残ってテスト勉強をしながらクラスリーダーとして企画を頼まれている6月下旬の体育祭の種目について考えていた。

・・・やっぱりクラス対抗種目とか、必要だね。・・・そう言えば、みんなはスポーツ得意なのかな？健君は得意そうだけど・・・。他のメンバーってスマートすぎて何となく想像できないな。

かおる君はフエンシングとか似合いそうだけど、と想像して零は思わず笑う。イメージ的に、駿は弓道、伊織は・・・

「伊織君って、スポーツって言うより、拳銃持ってそんなイメージがあるんだけど、」

と呟く。

「なんだそれ、俺は殺し屋か、」

「・・・ッ！」

突然背後から声をかけられ、零は叫びそうになった口を押さえる。

「い、伊織君、いつからいたの？」

「さっきから。お前が妖しげな事を妄想してニヤニヤしてるのを見てた。」

「もっ、妄想って・・・。体育祭の種目を考えてただけだよ、」

「それで俺が拳銃を持つてるって話？」

「ち、違うけど・・・。」

まあいいけど、と伊織は意地悪く笑って零の前の席に座る。

「お前ドイツ語専攻してんだろ？俺、ドイツ語ペラペラなんだけど、

「零が辞書を片手に訳している課題に目をやった伊織は零の机の上に肘をついて探るように零を見る。」

「えっ、そうなんだ。」

「俺、ドイツ帰りだから。」

「へえ・・・」

「・・・そうなんだ、初めて聞いた。そういえば、私みんなのこと全然知らないな。」

零は心の中でそう思いながら、出されている目の前の難解な課題に溜息を付く。

「教えてやってもいいぜ、」

「・・・結局上から目線は変わらないんだ。」

教えてほしいけど教えてもらいたくない、と思ってじつと伊織の顔を見ていると、伊織は急に笑い出し、零の頭をガシガシと撫でた。

「おまえってさあ、何にも聞かないのな。一般教養棟の女どもは根掘り葉掘り何でも聞きたがって群がってうっとおしいけど、お前、興味ないの？」

「・・・興味、って・・・。」

「だって、話さないことは言いたくないことなんじゃないの？別に聞きたくないわけじゃないけど、聞き出そうとは思わないし・・・。」

「・・・私にだって、聞かれない話もいっぱいあるし、と心の中で呟く。」

「思わないし、なんだよ？」

「探るような伊織の目に零は戸惑う。」

「それぞれみんな、育った環境とか、いろんな事情とか、あると思うけど、どんな人かって言うのは直接会って話して理解するものですよ？」

零の言葉に伊織は少し驚き、小さく笑う。

「お前には聞いてほしいと思うてるヤツ、結構いると思うぜ？今更

言いたくても言い出せないって事もあるだろ？」

「伊織君は？」

「俺？聞きたいなら話してやってもいいぞ、」

「・・・別に無理に話してくれなくていいよ。聞いても聞かなくても伊織君は伊織君だし、」

「話してやるつつつてんだ、おとなしく聞けよ、」

「話したいなら話したいって言ったらいいじゃん・・・もう髪くちやくちやにしないでよ！」

零がガシガシと頭を掴む伊織の手を避けて睨むと、伊織は大げさに怖がって見せ、いつもの毒のある意地悪な笑みを浮かべた。

「俺、高花財団の跡取りなんだぜ、」

「え、そうなの？御曹司？」

「まあ、そうとも言うな。」

「御曹司がドイツ帰りで海外進学するの？」

「ドイツ帰りは置いといて、海外進学は社会勉強のためさ。国際経営学を学びに行く。」

いつもの意地悪な瞳ではなく、未来を見据えるような鋭い瞳に零は思わず見惚れる。こんなにもはっきりと未来を語れる人を初めて見た。

「俺が拳銃持つてそうってのは案外当たってるぜ。俺は身を守るための護身術と射撃の訓練を受けてるから、」

へえ、と目を丸くする零を見て伊織は笑う。

「いざとなったらお前の事も守ってやる。」

「ねえ、」

「何だよ、」

「私、御曹司って、初めて見たけど、御曹司って言うともっと品がよくて、かおる君みたいな人を言うと思ってたんだけど、案外違うんだね、」

「・・・お前さ、ホント面白いよな？まあ、アイツは完璧だからな。俺はアイツの真似はできねーよ。」

「アイツって、かおる君のこと？」

「それ以外に誰がいるってんだよ。アイツほど完璧なヤツ俺だって初めてだし、ちよっと同情もするけどな。」

「同情？」

「まあ人それぞれ事情があるって事さ。知りたいなら直接本人に聞けよ。」

伊織はそう言って席を立ち、まだ帰らないのか、と問いかける。

「うん・・・部屋に戻ると集中力が欠けるって言うか・・・」

「だから、ドイツ語なら教えてやるから、今日は帰れ。もう暗くなるぞ、」

窓の外を見ると、いつの間にか夕闇が迫っていた。寮では集中できないからと無理に先に帰ってもらったかおるも心配しているに違いないと思った零は素直に従い、伊織と共に教室を後にした。

034：伊織について（後書き）

登場人物の名前を決めるのも悩むけど、タイトルつけるのも悩むんです・・・。

今回いいタイトル思いつかずに・・・中途半端なタイトルで済みません・・・。

035：体育祭・1（前書き）

体育祭です！。あまり場面切り替えるのは好きじゃないのですが、今回あっち行ったりこっち行ったりしちゃってます。すみません。

035：体育祭・1

憂鬱だった試験が終わると、目前に体育祭が迫っていた。クラスリーダーのかおると零はなにかと駆り出される事も多く多忙な毎日を送っていた。

「・・・どうしたんだ、溜息なんかついて。」

授業が終わると同時に無意識に深いため息をついた零に隣の席の駿が声をかける。

「えっ?! あっ、ううん、なんでもない・・・ごめんね、」

駿から声をかけられる事に慣れていない零は少し慌て、とっさに謝る。

「・・・なんで謝るんだ?」

「・・・うっ、不機嫌になっちゃった・・・?」

じろりと睨むような駿の瞳とぶつかった零がそれ以上話をする勇気を出せずに口ごもると、駿はいつものあきれたような溜息をついて黙って席を立つ。

「あ・・・」

「・・・行っちゃった・・・。せつかく声、かけてくれたのに・・・。零が教室を出ていく駿の背中を見送って零は溜息をつく。駿とは挨拶以外の会話はほとんどしたことがない。

「・・・零ちゃん、どうしたの?」

「あっ、かおる君。なんでもないよ。もう集合時間かな?」

「なんでもない、って顔じゃないけど? 駿がどうかしたの?」

「えっ?! あ・・・ううん、何かいつもうまく話せないなって思っただけだよ。いつも怒らせちゃって。」

零の悲しげな顔にかおるの瞳にも影が走る。

「・・・零ちゃんにそんな顔をさせるなんて・・・」

言いかけて、かおるは口を噤み、いつも通りの微笑みを向ける。

「打ち合わせの時間に遅れちゃうから、急ごうか？」

そして迎えた体育祭当日、学校の全体行事と言う事もあり、全校生徒が校庭に集まるとかなりの人数がいることに零は初めて気付く。学校指定のジャージがないため統一性はなく、クラブに所属している生徒はユニフォームを着ていたり様々だ。

一般教養科の生徒達は普段あまり見ることのない別棟の海外進学科や理工系進学科の生徒達に興味津々で、特に女生徒達はお目当ての男前を見に集まってくる。

「零ちゃん、気をつけてね、」

不意に、かおるが零に声をかける。大きく分けて各種目に推薦された、いわゆる『運動神経のいい生徒』によるエキシビジョンの種目と、全員が参加できるクラス対抗の種目に分かれているため、零はかおるや駿と共にキングクラスのテントにいたが、もうすぐ健が200M走に出ると言うので応援に出てきている。

「何に？」

隣を歩くかおるは少し前にいる男子生徒の集団に視線を送り、眉を寄せる。

「一般教養科の男子。伊織よりタチが悪いから。」

「俺がなんだって？」

「ああ、いたの？伊織がいてくれたらきつと大丈夫だね、」

「？」

腑に落ちていない零に微笑みかけ、かおるは零を促して健がいる場所の近くへ移動した。

「あつ、零ちゃん！応援きてくれたの？」

いつもながらの全開の笑顔がまぶしい健に零は離れた場所から小さく手を振る。絶対優勝するからな！、と大声で叫ぶ健に零は笑顔で頷く。

「・・・またあのバカは考えなしに・・・」

隣に立っていた伊織が呟く。零が不思議に思っていると、後ろの方で女生徒たちの声がした。

「あの女、かおる様だけじゃなくて健クンも？」

「だって、寮生なんでしょ？オトコ目当てってバレバレだよな、」

「前に久遠クンと一緒に図書室いたって話も聞いたしさ、」

「伊織様に抱かれたって話も聞いたよー、」

ウソー、とひととき大きな声があがる。わざと聞こえるように言われる陰口。前の高校でイヤと言うほど聞かされてきたから慣れているはずなのに。

「チビのくせに、どうせうまく演技して取り入ってるんでしょ、」

零の心に鋭く刺さる言葉。聞こえないフリをしようとしても、平気なフリをしようとしても、俯いてしまふ。せつかく忘れかけていた心の傷が開いて酷く痛む。

・・・絶対、こんなくらいで泣かないつ。

泣きそうになる心を必死に押さえつけてギュツと強く手を握り締める。ふと気がつくと、隣にいたはずの伊織とかおるの姿はなく、顔を上げるとスタート位置につきながら零に向かってVサインを出している健と目が合った。

「健君、頑張つて！」

泣きそうな自分を誤魔化すために大声を上げて手を降ると、健からも100%の笑顔が戻ってくる。それだけでも少し、心が救われる様な気がしていた。

「おい、お前ら、」

伊織は心の奥に揺らめく怒りの炎をおしとどめながら、ギヤアギヤアと騒ぎ立っている女生徒達に近づく。

「俺がいつ、アイツを抱いたって？」

伊織の言葉に、女生徒達の動きが止まる。

「えっ、あの・・・」

「勝手な事言っでんじゃねえよ！」

伊織の怒声に、噂話をやめさせようと近づいていたかおるは足を止め、少し離れた場所から様子を伺う。

「お前ら、言いたい事があるなら俺に言ってみろよ、」

残忍、とも思える伊織の視線。かおるは遠巻きに見ながら溜息を付く。伊織は気に入らない相手は徹底的に殲滅する。たとえ相手が女子供でも容赦しない。それが伊織、だ。

「直接言えない様な事を大声でベラベラしゃべりやがって、今度そんな事言いやがったら殺すぞ、」

泣きそうな女生徒達を見下ろして伊織は言う。

「お前らみたいな低レベルな人間、相手にされると思っなよ。さっさと消えろ、目障りだ。」

健のレースが始まり、レース前の公約通りハイペースで走る健に零が声援を送っていると、不意に背後から肩を叩かれて振り返る。気が付くと見たことのない顔の男子生徒が数人、零を取り囲んでいた。

「君、海外進学科の子だね？」

「前に見かけてからずっと気になっててさ、

「ちょっと向こうで話そうよ、

「あつ、ちょ、ちょっと待って、」

背の高い男子生徒に囲まれてしまうと身動きがとれず、意図しない方向に連れて行かれる。

「大丈夫何もしないって、

「そうそう、ちょっとお話するだけ。」

「ちょっと、ヤダッ、離して！」

腕を掴まれると、急に怖くなって零は声をあげた。

「そんな怖がなくてもいいじゃん、ホラ、あっちいこうよ？」

零はそのまま、いた場所から離れたクラブハウスの裏まで連れて行かれた。

「かおる、アイツいないぞ、」

「えっ?!」

女生徒達を追い払った伊織が零のいた場所に目をやり、そこに姿がない事に気付く。

「・・・しまった、」

・・・僕とした事が、あの子達の陰口に気を取られて・・・。
周囲を見回してもそれらしき姿は見えず、想像以上に焦っている自分に気付く。

・・・彼女達の悪口に耐えかねてこっさり泣いているのか、それともタチの悪いやつらに絡まれているのか・・・。
どっちにしても最悪だ、とかおるは思う。

「ああクソ腹が立つ！あのアマぶっ殺してやる、」

「・・・伊織、彼女達は十分反省してるよ、物騒な事言わないで、」
伊織を諫めながらも、かおるは内心素直に感情を表に出せる伊織をうらやましく思う。

「お前はあんな事言わせといて平気なのか？アイツの顔、見ただろ
うが！」

そう言っつて伊織はハッと口を噤む。

「・・・伊織、僕は君がうらやましいよ。」

「ご、誤解すんな、俺は勝手なウワサを立てられるのが気に入らないだけだ、」

「そうだね。僕も、気に入らないよ。」
かおるは寂しげに少し微笑んで、零を捜して校庭に目をやった。

035：体育祭・1（後書き）

自分の知らないところで自分の事を守ってくれてる人がいると思う
と・・・。キュン・・・。まっ、零ちゃん知らないんですけどね
（笑）。

036：体育祭・2（前書き）

体育祭はいつもリレー選手とかやらされてたなあ……。と、懐かしく思い出しつつ。

「ここなら誰も邪魔は入らないだろ、」

クラブハウスの裏までくると、掴んでいた腕を離れた男子生徒が零を取り囲む。逃げ出したかったが後ろは壁で、前に立たれては逃げられない。

・・・健君、優勝したのかな・・・？

こんな状況なのに。少し離れているだけなのに遠くから響いてくるように感じる体育祭の歓声を聞いて零は思う。少し前に女生徒達に言われた陰口がまだ心に突き刺さったままズキズキと痛む。

・・・どこにいても、一緒なんだ、私。

不意に悲しくなる。

・・・結局、みんなに嫌われるんだ。

前の学校では、こういう場所に呼び出されて水をかけられたりしたっけ、と忘れていた記憶が蘇る。

「・・・もう、やだ、」

呟く。泣かないって思ってたのに、と心の中で叫ぶ。開いた心の傷と同時に溢れ出した涙が止まらない。

「貴様ら、俺の女に手を出して、ただで済むと思うなよ、」

その時、恐ろしいほどの怒りを湛えた伊織の声が響き、零を取り囲んでいた男子生徒がざわめいた。

「死んで後悔するか、死ぬほど後悔するか、好きな方を選ばせてやるよ。」

そう言った伊織は手近にいた二人をあつという間に殴り飛ばし、悠然と零に向かって歩いてくる。

「どうした？いくらでも相手してやるからかかってこいよ。貴様らそのくらいの覚悟でやってんだろが！」

ダン、とクラブハウスの壁を殴り、伊織が吼えると、残っていた生

徒達は蜘蛛の子を散らす様に逃げ出し、地面に座りこんで泣いている零と伊織だけが残される。

「・・・おい、大丈夫か、」

少しためらいがちにかけられる声に零は両手で顔を覆ったまま黙って頷く。

「・・・泣き止まなきゃ、泣き止まなきゃ・・・」

心の中で必死に涙をこらえようとしても、一度溢れた涙は止まらない。

「ほら、こっちこいよ、そんなとこに座ってないで、」

溜息をつきながら伊織が近づいてくるのが分かる。いつもの強引な伊織ではなく、そつと零の手を引いて立ち上がらせる。

「・・・ごめ、私、だいじよ、ぶ」

「これが大丈夫か？俺は泣いている女を一人にするほど冷たくないぜ？」

伊織はそう言つて地面に座り、零の手をひいて自分の膝の上に座らせる。

「・・・?!」

「じつとしてる。この方が落ち着くだろう？」

いつも毒のある伊織の瞳が今は優しく微笑みかける。地面に座ったまま、お姫様抱っこをするように胸の中に抱きしめられた零には伊織の優しさが辛かった。こんなところを見られたら、またあらぬウサを立てられるだけだ。

零が身じろぎをして伊織の腕から逃れようとする、伊織は想定内とばかりに抱く腕に力を込めて零に顔を近づけ、泣いている顔を覗き込んだ。強いムスクの香りに包まれて苦しいほどだ。

「あのバカな女どもには二度と同じ事は言わせねえよ。・・・その、悪かったな、俺らに関わったせいであんな事言われちゃってさ。」

「え・・・？」

伊織の言葉に驚いた零が顔を上げると、鼻先が触れそうなほど間近に迫った伊織の瞳とぶつかる。

「バカどもが何を言おうと俺が守ってやるから、もう泣くな。それに・・・」

「俺がお前の事を抱きたいと思ってるのは本当だしな、」
フツと、伊織の瞳がいつもの毒のある光を宿し、零はハッと我に返る。

「・・・伊織、帰りが遅いと思ったら、こんなところで何をしてるの？」

ひどく冷静で、返って凄みのあるかおるの声に、間近にあった伊織の顔が離れる。

「登場が遅いんだよ、ナイト様。今日のところは俺様に任せとけよ、」

「残念だけど、そう言うわけにも行かないんだ。もうすぐクラス對抗の借り物競争が始まるから、伊織も早く戻った方がいいよ。」

かおるの完璧な微笑みは時として周囲を従わせる強さを持ち、伊織は軽く舌打ちして零を抱きしめていた腕を離す。

「行こう、零ちゃん。」

解放されて立ち上がった零をかおるは優しくエスコートして人が溢れる校庭へいざなっていく。

「あの野郎、いつもいいところで、」

忌々しげに呟いた伊織だったが、ズボンのホコリをはらって立ち上がり、クラスの待機場所へと戻っていった。

「零ちゃん、零ちゃんのことには必ず守るよ。零ちゃんは何も気にしないで、今まで通りの零ちゃんできてね。」

かおるはまっすぐに前を見据えながら呟くようにそう言って、遠巻きに自分達を見ている女生徒達の非難を含んだ瞳視線を受け止める。かおると目が合うと女生徒達は一様に目を逸らして俯くが、それがかえってかおるを苛立たせた。

・・・多分今、僕は笑えてないだろうな、
内心そう思いながら、かおるは俯いて隣を歩く零に目をやる。間違はなく、さっき泣いていた。零を泣かせたのが彼女達の陰口なのか、

彼女に手を出そうとしたタチの悪い男子生徒のせいなのかわからないが、そのどちらであつても二度目はない。かおるはそう思つてかばうようにそつと、俯いて歩く零の肩に手を置いた。

クラス対抗の借り物競争が始まると、選手に選ばれた生徒は出されたお題に従つて人や物を選んでゴールを目指す。キングクラスからは駿が選手として出場しており、零はかおるとや他のクラスメイとと一緒にクラスの待機場所での様子を見守る。レースが始まつて出されたお題を見た駿はしばしその場に固まり、フツと顔を上げる。

・・・今、目が、合つた？

駿を見守つていた零が一瞬合わされた視線に驚いていると、走つてきた駿に腕を掴まれた。

「一緒に来い、」

「えっ、私?!」

もともと身長差がある上に、真剣に、とは言わないまでもそれなりの速度で走る駿についていくのは至難の業で、時折つないだ手が離れそうになる。それでも駿に迷惑をかけないように必死に走っていると、駿の開いている左手が伸びて走りながらひよいと零の身体を持ち上げた。

「あーあ、あれじゃまた、避難の的だな、硬派な駿クンまで!とか言うんだぜ、あいつら」

いつの間にか隣に来ていた伊織の苛立つた呟きを聞いたかおるは少し苦笑し、軽々と零を抱えて走る駿を見る。

・・・確かに、あの硬派な駿がね、

去年の体育祭はほとんど参加もせずずっと待機場所で本を読んでいたあの駿が、と思うと笑つていいのか、怒つていいのかよく分からない感情に囚われるが、駿に出されたお題が何だったのか、その方が気になる。

「零ちゃんにとって、僕らって、どういう存在なんだろうね。」

まるで自分自身に問いかけているようなかおるの呟きに伊織は驚く。

「さあな、おまえはナイトで、俺は厄介者、だろ？ 駿は怖い人で健は面白い人、ってどこじゃねーの？」

「伊織が厄介者？ そうかな。」

「自分がナイトだってのは否定しないんだな、」

「まあね、」

「お前、アイツに自分の話してねーの？」

「自分の話？」

「俺は話したぜ。まあ、俺の場合はお前とは違うけどよ、」

「したって、意味がないでしょ。」

かおるの顔から微笑みが消える。

「意味がない話は、しない主義なんだ。」

悲しいのか、怒っているのか、量りかねる感情を宿したかおるの瞳は結局一着でゴールしてあの硬派な駿と笑い合っている零を見つめる。

・・・話したって意味がない。結局変わらない未来が訪れるだけだ。かおるは心の中で思う。今まではそれでも仕方がないと思っていた。諦めと言うよりは、当然受け入れるべき未来だと。それなのに、今はできる事なら抗いたいと願ってしまっている自分がいる。

「でも、僕にはもう時間がないんだ。」

小さく呟いた言葉。タイムリミットは18歳の誕生日。後一ヶ月で、一体何が変わると言うのだろうか？

優勝したよー、と笑顔で待機場所に戻ってくる零を見て、かおるは微笑む。

「お疲れ様、零ちゃん。・・・駿、駿のお題って何だったの、」

「・・・別に、」

微かに頬を染めて視線を逸らせた駿に、零が笑いかける。

「どうせ、バカとかチビとか、書いてあったんでしょ？」

「・・・まあ、そんなとこだ。」

ほらやっぱり、と拗ねてみせる零にその場が和む。そんな中駿は複雑な表情でポケットの中の紙を握り締めた。

・・・いつも怯えたような目で俺を見るくせに、今は救われた、と思う。皆に深く追及されたら見せざるを得なかっただろうお題の紙。この先誰にも見せるつもりも、言うつつもりもない。

《あたなの大切なもの》

036：体育祭・2（後書き）

僕が守るよ、とか言われたーい！ー！守って守ってー

037: 雨の中 (前書き)

今回ちょっとまじめな感じで・・・。

037：雨の中

体育祭が終わり、またいつもの日常が舞い戻る。6月特有の梅雨の雨が続く日。紫陽花が日増しに色を変え、雨の中に美しい色添える。

体育祭以来、零は一般教養棟での講義があるたびにふさぎ込むようになっていた。

・・・私、やっぱり嫌われてるんだよね。みんな、どう思ってるんだろう・・・。

常に非難するような視線が向けられているような気がして、女生徒達がいる方を見ることができない。

・・・雨の日はいつも、傘がなくなつて濡れて歩いてたっけ、窓の外に目をやって零は思う。忘れてしまいたいと、過去をリセットしてしまいたいと願っているのにどうしても忘れられない。結局、場所が変わっても同じ事が繰り返されるだけなら、自分がここにいる意味とは一体何なのだろう？

零は心の中に渦巻く形容し難い感情を押し殺しながら、音楽の課題曲の楽譜を眺める。ピアノ協奏曲。かおるのヴァイオリンとの協奏曲を選択したのは間違いいではなかったかと今更ながらに思う。

・・・今更悩んでも仕方ないし、とにかく迷惑かけないように練習しよう。

零は気を取り直して数台あるピアノの前に行き、心を落ち着ける。

・・・ピアノなんて、久しぶりだけど。

心の中で呟いて、ラフマニノフの紡ぎ出した美しい旋律をたどる。過去に一度覚えたことのある楽曲でもあり、弾き始めると自然に指が鍵盤を辿っていく。音楽の作り手がその楽譜に込めたであろう想いを心に描きながら音を辿る作業は心の中を無にできる瞬間でもあり、零は心地よくその瞬間に身をゆだねた。

無心、に近い状態で最後の一言を弾き終えた零がふと我に返ると、いつの間にかヴァイオリンを抱えたかおるがピアノ脇に佇み、小さく拍手をする姿が目に入る。

「零ちゃん、どこで習ってたの？」

「えっ？別に・・・どこって言うほどの所では習ってないけど・・・」

「じゃあ独学？ならすごい才能だね。聞き惚れちゃった。」

「そ、そんなこと・・・。久しぶりに弾いたし、途中で間違えちゃったし。」

皆がいる前でも堂々としているかおるに対して恥かしがって俯く零。女生徒達の視線が気になって顔も上げられずにいると、かおるは小さく吐息を付いた。

「零ちゃん、気にしちゃだめだよ？大丈夫だから、」

皆に聞こえないように小声で言うかおるの言葉に、零は黙ったまま小さく頷く。

・・・気にするなって言われても・・・。

心の中で思いながら、それでも零はかおるの前では笑っていないければ心配させてしまう、と顔を上げる。

「一回、合わせて弾いてみようよ、」

零の言葉にかおるは微笑んで頷き、二人の協奏曲はその場にいた生徒達を魅了した。

一日の講義が終わり、自分の教室で帰り支度をしていた零は音楽の講義の後、一般教養棟に傘を忘れてきた事に気付いて窓の外に目をやった。昼間一度やんでいた雨はまた降り出しており、零は小さく溜息を付く。

・・・取りに行かなきゃ・・・。

心の中でそう思っても、あの場所に一人で行くと思うと心が締め上げられるような苦しさを覚える。それにどうせ、もうなくなってい

るかもしれない、とも思う。

・・・取りに行っても、そのまま帰っても濡れるんなら、このまま帰ろっかな。

一瞬、かおると駿の姿を捜した零だったが、二人の姿はなく、そのまま帰ろうと教室を出る。

雨は本格的に降り出して、寮につく頃にはかなり濡れているだろうと思うと溜息が出た。かばんを抱えて雨の中を小走りに走っていると、じよじよに雨が身体をぬらしていく。頬を伝って流れ落ちる雨が嫌でも過去の記憶を呼び覚まし、零は走っていた足を止めた。・・・何やってんだろ、私。

逃げてちゃ何も変わらないのに、と心のどこかで叫ぶ。あの場所から逃げて、ここで新しい自分になって生まれ変わって頑張るはずだったのに、と思う。結局、自分では何一つできていない。かおるや健、駿や伊織が助けてくれていなければ今までだって何もできていないに等しい。彼らが助けてくれるから、今ここでやっていているのだ、と思うとなおさら虚しくなった。

「零ちゃんっ！何やってんだよッ！」

「?!」

不意に、腕を掴まれて零は我に返る。走って来たのか息を切らして傘をさしかける健の姿。

「バカ！こんなに濡れて、風邪ひいたらどうするつもりなんだ！」
早く帰るぞ、と零の腕を掴み、傘を傾けて歩き出す健にひきずられるように零は歩く。

「・・・かおるから聞いたよ。・・・ごめん、俺のせいだよな。」
歩きながら、健が呟く。

「え・・・？」

「バカどもがくだらないこと言っただろ？そんなの、相手にする必要ねーけど、でも・・・」

「言われたら、傷つくよな？気に・・・なるよな？俺、変わってあげられたらいいけど、あのバカどもはどうしようもないからさ・・・」

。できる限り、一緒にいるし、何も言わせないからさ。その・・・元気出してほしいんだ。このごろ零ちゃん、元気なくて、俺心配で・・・」

「健君・・・、」

「零ちゃんが元気ないとき、ほら、みんなもテンション下がるんだよ。飯^{メシ}んときとかさ・・・。やっぱ、笑^{メシ}ってて欲しいし、」
そう言^{メシ}って健は赤くなって上を向く。

「とにかく、風邪ひかないように、早く帰ろうぜ、

笑顔の健につられて、零も思わず笑顔で頷く。冷たい雨を遮^{メシ}つてくれる健の傘は大きくて、引^{メシ}張^{メシ}つてくれる手の温^{メシ}かさは零の心まで届^{メシ}いていた。

寮に戻^{メシ}った零は部屋に戻^{メシ}り、熱いシャワーを浴^{メシ}びる。雨に濡^{メシ}れた制服は倉口さんをお願いしてクリーニングに出^{メシ}してもら^{メシ}う事にした。熱いシャワーは雨で冷えた身体に心地よく、零は目を閉^{メシ}じる。

《笑^{メシ}ってて欲しい》と言^{メシ}つてくれた健の言葉が嬉^{メシ}しかった。自分の事を見てくれている人がいて、励^{メシ}ましてくれている人がいてくれる。

・・・私、一人じゃない、んだよね？

今までずっと一人だった。誰も助け^{メシ}てくれないし、誰にも頼^{メシ}れなかつた。でも、と零は思^{メシ}う。今は助け^{メシ}てくれるみんながいる。零はシャワールームの鏡に向^{メシ}かって、にっこり笑^{メシ}つてみる。

・・・私大丈夫。みんながいるから、ちゃんと、笑^{メシ}えるよ。

037：雨の中（後書き）

なんか、ものすごくラブラブであまあまな感じに飢えて来たので、（でもこのお話がそういうところにたどりつくのにはまだ時間がかかるので）、スピンオフを書くことにしました。次回は健の妄想（笑）を書く予定です。この小説の次話ではなく、『いつも君がいた：another side』と言うタイトルで分けますので、そこらもぜひよろしくお願いいたしますっ

038：夜更けの会話（前書き）

今回は次話へのネタふりの位置づけなので・・・面白くなかったらすみません。

038：夜更けの会話

体育祭が終わり、零はそれまで以上に気を使ってくれるかおる達の優しさをいつの間にか辛く感じるようになっていた。多分、それは自分にも原因がある。忘れてくても忘れられない過去をひきずって、あんな少しの陰口に傷ついてしまう自分の弱さが優しい周囲の人たちを巻き込んでいる事を零は理解していた。

前の学校にいたときの様に一人ではない、と思える心強さはあったが、それでも同じ痛みを共有させる痛みは、一人で耐える痛みよりも辛い、と零は思う。

苦手な数学の講義。難解な公式を紐解く作業は苦痛で頭の芯が痛くなる。些細な事がきっかけで雲が晴れるように理解できた時の爽快さはあるにしろ、そこにたどり着くまでの長いプロセスはいつも零を悩ませた。

・・・久遠君は、いつも淡々としてるよね・・・。

隣に座る駿にチラリと視線を投げて零は思う。初めて会った時から全く変わらないポーカーフェイス。寮でもいつも一人で部屋にいるか、食堂でも一人本を読んでいてあまり誰とも関わろうとしない駿。修学旅行先の沖縄で皆と笑い会ってふざけていた駿の姿を思い出すと、一人でいるより他のみんなと同じようにいろんな事を話して笑っていて欲しいと願ってしまう。

・・・ちよつと笑ってくれるだけでも、すごいテンション上がるんだけどな、私。

表情一つ変えずに淡々とノートにペンを走らせている駿を見て、零は小さく溜息を付く。

「佐倉、次の問題、お前やってみろ、」

「あつ、はっはいっ！」

駿の事を考えていた零はと当然名前を呼ばれて焦って席を立つ。慌てすぎて机の上のペンケースを派手に床に落としてさらに慌ててしまう。

「・・・お前、大丈夫？」

真つ赤になつて床に散らばったペンを拾う零に呆れた視線を投げる駿。拾ってくれた消しゴムを受け取る瞬間指先が触れて零は慌てて手をひっこめた。

・・・あ、あれ？

手の中に、消しゴムと一緒に渡された小さなメモ。広げてみると今出された問題の回答が書かれている。

「?!」

驚いて駿の方を見たが、駿はいつも通りのポーカーフェイスで頼杖をついて次の問題を解いている。零は渡された回答のおかげで卒なく回答する事ができ、ほっと胸をなでおろしていた。

・・・零ちゃんは相変わらず・・・分かりやすいね。

授業中、一番後ろの席で授業を受けているかおるは時折零に目をやって思う。ああ今の問題は分からないんだろうな、とか、あ、今解けたんだろうな、とか、ずっと見ていても飽きない。けど、とかおるは軽く目を伏せる。

・・・見たくないものまで、見えるのはどうかと思うけど。

零の目が、駿を追っていることに気付いたのは少し前。寮で食事の時にいつも駿の方を気にしたり、授業中に隣に視線を投げたり、放課後に図書室へ向かう駿について行ったり、いつもポーカーフェイスの駿に少し怯えたようにおどおどして、それでも近づこうとしている零に気付いた時、零に冷たい態度を取る駿に怒りさえ覚えた。常にポーカーフェイスの駿が零の事をどう思っているのかは分からないが、それでも零に対する態度は他の生徒に対するそれとは違

うと思う。それは零が女の子だからなのか、それとももっと別な理由でなのか、と思いをめぐらせる。

・・・駿も、零ちゃんの事が好きなんだろうな、きっと。

ぼんやりと思う。好きだから、距離を置く。駿らしいといえば、駿らしい。近づかなければ傷つく事も、傷つける事もない。もしも駿が僕や伊織の様にまっすぐに思いを告げていたら、と思うと急に心が苦しくなった。零が他の男と手をつないで笑いあっている姿を想像しただけで、今まで感じた事のない感情に囚われた。

・・・嫉妬？焦り？僕がそんな事したって、僕が零ちゃんと手をつなげるわけじゃないのに、

かおるは零から目を逸らせて窓の外を見る。梅雨が明けたばかりの夏空。もうすぐ7月がやってくる。出来ることなら避けて通りたい日が訪れる。そう思っただけで憂鬱になって、かおるは小さく溜息を付いた。

「だから、ちゃんと行きますよ、約束通り、・・・連れて。・・・僕は！再生医療の研究をしたいんだ。治らない病を治せるかもしれない奇跡の医術を・・・聞いてください、お父さん！・・・」

夜中に喉が渴いて目が覚めた零は部屋を出て、かおるの部屋から途切れ途切れに聞こえてきた、めずらしく切羽詰ったようなかおるの声に驚いて足を止める。

・・・電話、してるのかな。再生医療の研究、かぁ。すごいな、かおる君。電話の相手はお父さん？お父さんに敬語使うんだ・・・。かおるの口調から、何となく聞かないほうがよかったのかもしれない、と少し後悔する。そういえば一度もかおる自身の事について聞いた事がないから、あまり話したくない理由があるのだろう、と思う。

・・・でも、かおる君のことだから、超セレブでお父さんの命令は絶対なんですー、とかありえそうだね。夢を持っても、お父さんが許さなければダメ！とか。

心の中で、王子様が次期国王となるために教育されて、自分のしたい事を許されない悲運を描いた物語を思い出す。

・・・王子かー。それでもかおる君なら別に驚かないよね。

零は内心勝手に納得して食堂へ足を運び、食堂の隅の自動販売機でミネラルウォーターを買う。そのまま部屋に戻ろうかとも思ったが、何となく食堂でコップを借りて飲んでみる。いつもみんなで過ごす食堂に一人できると不思議な寂しさに囚われた。いつの間にかみんながいる事に慣れて、みんなと過ごす事が楽しくて、出来ることならずっとこのままでいたいと願ってしまっている。

・・・他のみんなは何処を目指しているんだろう、

零は思う。自分の夢は知っていても、みんなの夢は知らない。みなそれぞれ、自分の思う夢があつてその夢の為に今ここで頑張っているはずなのに。

・・・伊織君は国際経営学を学ぶ、って言ってたよね・・・。国際経営学の権威って、どこだったっけ、

卒業したら、みなバラバラになることくらい分かっていたはずなのに、それがすごく寂しく感じる。もしかしたらもう二度と会うことがなくなるかもしれない別れがやってきてしまう事に気付いた零は言い様のない寂しさを覚えた。

・・・零ちゃん、こんなところで何してるの、

「ッ?! かつ、かおるクンッ?!」

ぼんやりと、未来に訪れる別れの日の事を考えて哀しくなっていた零は突然声をかけられて椅子から飛び上がるほど驚く。

「・・・ごめん、驚かせちゃったね。」

優しい笑顔で近づいてきたかおるは自販機でブラックのコーヒーを買う。

「珍しいね、零ちゃんが夜中に起きてるなんて、」

につこりと微笑むかおる。いつも通りで零は少し安心する。

「何だか目が覚めちゃって。いつもは一回寝たら起きないんだけどね、」

零の言葉にかおるが笑う。いつも優しいかおる。さっきの話を聞いた、と言ったら怒るのだろうか？

「ねえ、零ちゃん、零ちゃんと話すと落ち着くから、少し話し、してもいい？」

コーヒーを一口飲んで、零の隣に座ったかおるが問いかける。零が無言で頷くと、かおるはありがとう、と小さく微笑んで手にしていたコーヒーを飲む。

「ねえ、かおる君、今コーヒー飲んだら眠れなくなっちゃうよ？」

「え、ああそうだね。・・・大丈夫、僕は平気だから。」

そうなの？と不思議がる零にかおるは微笑みかけ、目を閉じて小さく溜息をつく。

「今日の数学の時間、大変だったね。」

「え？あ、急に当てられたからびっくりしちゃって、」

「あの問題、わかんなかったんでしょ？」

「えっ？！な、何でそんなことわかるの？」

カマをかけてみたらやつぱり、とかおるは内心想う。

「だって零ちゃん難しそうな顔して考え込んでたからさ。僕、一番後ろの席だからよく見えるんだ。」

「実はね・・・でも久遠君がこっそり答え、教えてくれたから助かつちやった。」

「駿が？」

「ふでばこ落とした時にね、消しこむひろってくれて一緒に答えのメモを渡してくれたの。」

いたずらっぽく笑う零につられてかおるも笑う。

・・・僕にその事を話してくれるって言う事は、零ちゃんの中では特別な事ではない、と言う事か？

深読みし過ぎか、と心の中で苦笑する。

「そう言う事だったの。心配してたんだよ、解らない問題あてられちゃったなって。」

「そんなにわかりやすいかな？」

「零ちゃんの考えている事なら大体ね。」

えー、と不満そうな声を上げる零にかおるは笑う。僕は、いつも零ちゃんの事を見るから、と心の中で呟いて、小さくため息をついた。

038：夜更けの会話（後書き）

昨日、Another sideをUPしましたので、ぜひそちらも読んでみてくださいね！

039：星に願いを（前書き）

七夕です。だんだんとかおるの素性が・・・。

039：星に願いを

7月：星に願いを

長い雨の季節も終わり、夏を感じる日が次第に増え始める。カレンダーを眺めていた零はふと今日が七夕である事に気付いて窓の外をに目をやった。例年、なぜか七夕の日は雨や曇りの日が多く、なかなか星空を見ることはできない。

窓の外の晴れた空を見た零は今夜はきっと星空が見えるだろうと小さく微笑んだ。

「どうしたの？ 零ちゃんニコニコして。」

次は教室移動だよ、とのんびりしている零を促しながらかおるが声をかける。

「今日は七夕だから、星が見えるといいなと思って。」

零の言葉に窓の外に目をやったかおるも晴れた空を見て微笑む。

「きっと今日は夜も晴れだよ。一緒に、星を見に行こうか？」

よく見える場所があるんだよ、と続けるかおるに零は喜んで頷く。久しぶりに見る零の笑顔にかおるは内心、我ながらいい提案をした、と思う。

「零ちゃん星を見るのが好きなんだね。」

嬉しそうに笑いながら頷く零にかおるは少し苦笑する。

「言ってくれたらいつでも一緒に行くから、一人で出かけちゃったりしないで声かけてね？」

かおるの言葉はいつも穏やかに零の心に響く。はちみつのように優しい言葉に甘えなくなるが、その言葉のままに甘えてしまえるほどは幼くなく、零はいつも苦しくなる。

そんな話をしながらかおると共に選択科目であるドイツ語の教室に向かっていると、同じドイツ語を選択している理工系進学科の顔

見知りの生徒が零に声をかけた。

「佐倉さん、今日の放課後、何か予定ある？」

「えっ?! 私? あ・放課後はないけど、夜はあります、」

突然声をかけられた零は驚いて思わず敬語交じりのおかしな日本語を返す。

「あ、じゃあ、放課後、少し時間もらってもいいかな? 海外進学棟の前で待つてるから、」

「・・・この人、なんて名前だったっけ・・・思い出せないけど確か健君と同じクラスの・・・」

向こうは覚えてくれてるのになんて失礼なんだろう、と思いながら名前を思い出そうとする零の前にすっとかおるが割りこむ。

「片岡君、ごめんね、今日は僕が零ちゃんを予約してるんだ。少して言うのはすぐに終わる用事なら僕も同席しても構わないかな?」

「月島君が?・・・そう、なら仕方ないな。また日を改めるよ、」

少し残念そうに去っていく背中を見送ったかおるは軽く吐息を付く。なぜだろう、零が他の寮やクラスメイト以外の男子と話しているのを見ただけに苛立つ感情を抑えられなかった。

「行こう、零ちゃん。」

同級生を追い払ってしまったかおるに戸惑っている零を促してかおるはドイツ語の教室へ向かう。ドイツ語の教師は厳格で、遅刻は許されない。

・・・僕とした事が、多分、さつき片岡君を睨んでいただろうな。

かおるは歩きながら思う。嘘をついてまで同級生を追い払った自分の事を零はどう思っているのだろう。そう思うと胸の奥がざわめく。

・・・今日は七夕。星に願いをかける日、か。

かおるは唇の端に笑みを浮かべる。

・・・今更、そんな願いをかけたところで、僕の未来は変わらないさ。

後数日、僕に残された自由は後数日しかない、かおるはそう思っやりきれない思いを抱えたまま、教室へ足を踏み入れた。

その日の放課後、昼間の言葉を裏付けるように零と共に校舎を出たかおるは彼にしては珍しく黙りこんで歩いていった。心の中に芽生えた未来への違和感が頭の中で不協和音を奏でている。今まで諦めていた未来を、もう一度自分の手に取り戻したいと願う事は罪なのだろうか？

「・・・ねえ、大丈夫？かおる君、」

「えっ？ああ、大丈夫だよ。ごめんね、零ちゃん。」

「何か悩み事？何だかとても辛そうな顔してたよ？」

一歩前を後ろ向きに歩きながら見上げる零から、かおるは思わず目を背ける。いつもならにつこり微笑んでくれるかおるが辛そうな顔で目を逸らした事に、零は少なからず驚いた。

「あ、あの、私でよかったら、話してね？一人で悩むよりは、少しはマシかもしれないし・・・」

戸惑いがちに声をかける零に、かおるはいつもの彼らしい微笑を向ける。

「ありがとう、零ちゃん。」

いつも通りの夕食を終え、部屋に戻った零は窓から見える空に輝く星を見る。昼間と同じように晴れた空にはほとんど雲はない。

「零ちゃん、入ってもいい？」

ドアをノックする音と同時に、かおるの声。零が返事をする静かにドアが開いてかおるが顔を出す。

「星、見に行こうか？出かけられそう？」

昼間元気のなかったかおるが今はいつも通りの穏やかな笑顔で話しかける。零にはかおるの心中を察する事はできないがひとまずいつ

も通りのかおるに安心する。

「この学校は山の中腹に建てられているから、裏手に行く結構な夜景スポットなんだよ。おまけに私有地だから邪魔者はいないしね。」

寮を出て、中庭を通り越して進むと次第にあたりは暗くなる。表側はあるなにも明るいのに、と零は内心想う。

「零ちゃん、離れちゃだめだよ、」

寮から遠ざかるにつれて次第に明かりのなくなる路に不安になり始めた零にかおるは手を差し伸べ、安心させるようにそつと肩に手を置く。かおるの持つている懐中電灯は小さいながら鮮明な光を放つLEDであたりを照らし出している。

「そこを曲がればすぐだよ、」

「・・・すごい！」

かおるにいざなわれるままにたどり着いたそこは視界がひらけ、高台になっている。眼下には遠く街の夜景が輝き、空には街に程近いとは思えない数の星が輝いていた。

「ね、素敵でしょ？」

瞳を輝かせて空を見上げる零を見て、かおるは微笑む。この零の顔を見られただけで満足だ。

「すごいね、本当に綺麗・・・。」

零が呟く。星々を巡る探查衛星が日々天空を巡り、その役目を終えては遙か宇宙に消えて行っている。果てしない宇宙の、たった一つの星の片隅で思い悩む自分の存在が恐ろしく小さく思える瞬間だ。やわらかい下草の生える場所に腰を下ろし、空を見上げて寝転んだ零は遙か闇に輝く星々を見つめる。

・・・今日は願い事、叶いそう。

気の遠くなるような時をかけて届いた光に零は思う。

《みんなの夢が、叶いますように。みんなが、笑っていられますように。》

心の奥で強く願いながら、自分の夢よりも、自分が笑う事よりも、

周りのみんながそうであって欲しいと願っている自分に少し驚く。
今まで何度も星に願いをかけてきたが、他人の為に祈ったのはこれが初めてだ。

「零ちゃん、何を願ったの、」

零の隣にそつと腰をおろしたかおるは静かに零に問いかける。

「・・・星に願い、か。」

「え？・・・みんなの夢が叶いますように、って。みんなが笑っていられますように、ってお願いしてたの。」

そう言つて恥かしそうに笑つて起き上がった零を見て、かおるはめまいがするような苦しさを覚える。

「・・・みんなの夢・・・。今日今ここで、僕が願いをかけたらあの星たちは聞き入れてくれるんだろうか、空を見上げて思う。」

「ねえ、かおる君、何を悩んでるのかわかんないけど・・・早く元気になつてね？かおる君が元気ないと私も辛いのに。」

言いながら零は、このセリフ、どこかで聞いた気がする、と思う。そつと、少し前に健に言われた言葉だ。あの時言われた《笑つていて欲しい》と願う気持ちが今なら少し理解できる。

「・・・零ちゃん、お願いがあるんだけど、」

かおるは零から目を逸らしたまま、彼らしくない思いつめたような声で切り出す。

「うん、何？」

じつと、自分を見ている零の視線を感じる。かおるは片膝をたてて座った姿勢のまま空を見上げて続ける。

「今度、父親が主催するパーティーがあるんだ。・・・僕の、誕生日に、」

「誕生日！もうすぐなんだ。おめでとう、」

無邪気に笑う零。笑いたいけど、今は笑えない、と思つてかおるは零から目を逸らしたまま続ける。

「その、パーティーと一緒に行って欲しいんだ。・・・ただ、僕の家

は少し・・・変わってて、大掛かりなパーティーでね、俗に言う、社交パーティーって言うか・・・」

言いにくそうに言葉を搜すかおるに、零は何故か妙に納得していた。「かおる君のおうちはお金持ちで、普通のパーティーじゃない、ってことだよな？」

「えっ、ま、まあそう言うことだけど、」

「なんか、安心したな。かおる君は王子様みたいだから、それで一般家庭で普通に育ちました、って言われるより、お金持ちでセレブなんです、って言われた方がずっといいもん。」

零の言葉に、かおるは少し笑う。

「そう？敬遠されるかと思ったけど。」

「敬遠なんてしないよ？セレブでも一般人でもかおる君はかおる君だし、お誕生会ならお祝いしたいし。」

・・・お誕生会、か。そんな可愛いものじゃないんだけどね。

心の中で思いながら、全てを話せない自分を責める。本当の事を、全て話してもこのお姫様は同じように言ってくれるのだろうか、と思うと息苦しいほどの胸の痛みに襲われた。

039：星に願いを（後書き）

七夕、大人になるとやらなくなりますよね……。来年は久しぶりに、お願いしてみようかな！。なんて思ったり。

040：パーティーへ（前書き）

今回はちよびつとシリアスモードです。ああ早くラブラブモードに入りたいいい。

040：パーティーへ

《パーティーがあるんだけど、付き合ってくれる？》

いつものかおるらしくない、少しさみしげな微笑みが気になってOKしたけれど、いざ当日が来てしまうと零はものすごく緊張している自分に気付く。

そもそも、正式なパーティーにはまだ参加した経験がない。パーティードレスは僕が準備するから、とかおるは言っていたが、そもそもドレス自体着た事がないのにそんな場所に行く事が許されるのかどうかさえも不安だった。

かおるに渡されたドレスや靴、ネックレスなどの装飾品を身につけ、精一杯背伸びをしたメイクをする。髪型は悩んだ末、自分的に最も《可愛く》見えると思われるハーファアップの巻き髪にした。

誘ってくれたかおるに恥をかかせるような事をしたくないと願うが、生まれて初めての経験なだけに不安だけが募る。

「零ちゃん、準備できた？」

遠慮がちにドアをノックする音。いつものかおるらしくない少し寂しげな声。

「う、うん、大丈夫。」

零が返事をする、そつとドアが開き、かおるが姿を現す。正装をしたかおるは、似合いすぎていて、素敵過ぎて零は思わず見惚れたが、同じようにかおるも零に見惚れていた。

「零ちゃん、可愛すぎて綺麗すぎて、言葉にできないな。」

唯一、零がイギリス人の血を引き継いだと思われる、長く濃いまつげを綺麗にカールして、ほんのりとパステルカラーのシャドウを入れた瞼、くつきりと入れたたれ目がちなアイライン、ほんのりと淡いチーク、潤んだようなピンクの唇。かおるはしばらくうつとりと

零を見つめ、自分が選んだ自分好みのドレスとはいえ、これほどまで似合うとは思わなかった、と思う。目の前に佇む零は、目を背けたくなる程美しい。

「さあ、姫、行こうか。」

いつも通り、微笑んで手を差し伸べたが、かおるは自分がいつも通りに笑えているのか自信がなかった。

「・・・ねえ、かおる君、今日ってどんなパーティーなの？私、こういうの初めてだからちよつと怖くて・・・」

不安気に見上げる瞳にかおるはいつになく辛そうに眉根を寄せる。

いつか話す日が来ると覚悟はしていたが、いざ話すとなると、自分が思っていた以上に心が痛んだ。

「零ちゃん、今まで何度も話そうと思ってたんだけど、辛そうなかおるを見て零は不安になる。」

「僕は月島財閥の跡取り息子なんだよ。」

言って、かおるは小さく微笑む。

「え、そ、そうなんだ・・・」

驚いて、目を見開く零から、かおるは目を逸らす。

「僕には幼い頃から決められた未来があって、その未来にはフィアンセもいるんだよ。」

「フィアンセ？」

「そう、3歳くらいのときに一度会ったきり、二度と会っていないフィアンセがね、」

皮肉気な口調に零の心が痛む。

「今日は正式に僕が跡取りになると言う、お披露目のパーティーなんだ。」

そう言って、かおるは辛そうに口を嚙む。

・・・跡取り、お披露目・・・フィアンセ・・・。

零は雲の上のような話に瞬時に状況が理解できずにかおるを見上げる。

「黙ってて、ごめん。」

かおるはそこでまた言葉を選ぶかのように間をおいてまっすぐに零の瞳を見つめる。

「今日のこの日までに、僕が僕自身の手で、僕が目指すべき道と、愛すべき人を見つけることができれば、高校卒業と同時に結婚することを約束させられる日、でもあるんだ。」

「え・・・？あ、」

「本当は、先に話しておくべきだったんだけど、ごめん、言えなくて、」

辛そうなかおるを零が黙ったまま見つめているとかおるはさらに言葉が続ける。

「僕が目指すべき道はもうずっと前から心に決めてるんだ。僕は高校卒業と同時に、アメリカへ留学して再生医療の研究をする。そう、決めてるんだ。・・・そして僕が愛すべき人は、零ちゃん、だと思ってる。」

でもね、とかおるは強くて哀しげな瞳をまっすぐに零に向ける。

「僕がどんなに零ちゃんを好きでも、この思いは絶対に叶わないんだよ。僕と、そのフィアンセの結婚はずっと前から決まっっていて、僕が他の誰を愛したとしても、覆される事はないんだ、」

「あ、あの、私・・・」

戸惑う零に、かおるは力なく微笑みかける。

「ただ、時間稼ぎができる、と言うだけ。そんなしょうもない事に、巻き込んでごめん。」

・・・愛すべき、ヒト。

「好きだよ、零ちゃん。決して叶わない想いだけど、今日一日だけ、僕の彼女になってほしい。今日だけ僕の為に、側にいて欲しい。」
見開かれた零の瞳をじっと見つめ、かおるは小さく吐息を付く。

「・・・ごめんね、こんな時に告白するなんてずるいよね。ごめん。」

「辛そうに謝るかおるにかける言葉が見つからず、零はただ黙っておるの隣に佇む。」

好きって、どういうこと？かおる君が、私を、好き？でも、フィアンセがいて、フィアンセとの結婚は決まってるのに？

頭の中で、様々な思いが渦巻く。いつも完璧で優しく強いかおるが今は酷く弱っているようにも見える。

「私・・・私、かおる君のフィアンセはきつと、とても幸せだと思う。かおる君みたいな素敵で優しい人が一生エスコートしてくれるって言う未来が約束されているなんて、女の子にとってそんな幸せな事ってないと思う。」

零が呟くようにそう言うと、かおるは力なく微笑む。

「その相手が、零ちゃんならよかったんだけど。」

「零ちゃん、僕は零ちゃんが誰の事を想っているか、分かっているつもりだよ。分かかって、今日こうやって連れ出して、告白して、上手くいけば独り占めしてしまいたいなんて考えているような卑怯な男だけど、」

「それでも、僕は君が好きだ。」

・・・言っただってムダなんだけど。言っただって未来は変わらないけど、それでも、僕は・・・。

想いを告げて、かおるの心の中の黒い闇は晴れることはなく、ただ苦く広がる後悔がかおるを苦しめた。

040：パーティーへ（後書き）

零ちゃん、かわゆす。

妄想して一人でニヤニヤしてしまいました。

普段スツピンの高校生が正装してバッチリメイクって、いいですよ。
ね。

041：パーティー・1（前書き）

お待たせしました・・・（って誰も待ってないか・・・グスン）。
今回、長いです・・・。いつもの2話分くらいあります。

校門に横付けされたリムジンに乗り込み、かおると共に向かった先は高級ホテル。間違いなく場違いな空気に物怖じしている零をおるがそつとエスコートする。

零の脳裏から、《今日一日でいいから僕の恋人でいて、》と言われた時の、泣き出しそうなかおるの瞳が焼きついて離れない。

あのかおるが日本を代表する財閥の跡取りで、すでにフィアンセがいて、その未来に抗いたくてもがいている姿を、そんな現実を知った零は驚きと同時に不思議と自然にその現実を受け入れていた。日常に見せるかおるの振る舞いや決断力などはきつと生まれ持ったの資質なのだろうと思えば全て納得できた。

・・・私がここにいて、少しでもかおる君が楽になるのなら、

零はそう思って、かおるに手を引かれて会場の中に入る。見たことのない景色、たくさんの《上流階級》の人たちが正装して談笑する姿。

《僕は君が好きだ》と言った時の、初めて見たかおるの真摯な瞳。いつも冗談めかして好きだと言われていた時とは違って、心が震えた。

でも、と零は思う。かおるが話してくれた現実離れた現実には驚きすぎているせいだろうか、かおるの言葉が心の表面を滑って通り過ぎてしまう。現実には起きていることなのに、まるで夢の中で話しているような、そんな気分になくなった。

会場に着くと、迎えに出てきた初老の男性がかおるを見るなり泣きそうな笑顔で駆け寄ってきた。

「かおる様、お久しぶりでございます。」

「高田さんも、元気そうでした、」

「・・・この感じ、執事ってやつ??本物初めて見た！」

零は二人の様子を見て内心思う。明らかに住む世界の違う人だ、と実感する。

「こちらのお嬢さんは？」

「紹介するよ、こちら佐倉零さん。ぼくの恋人。零、執事の高田さんだよ、」

「はじめまして、佐倉零です。」

「なんと美しいお嬢さんでしょう。かおる様、お二人よくお似合いです。」

「・・・きつ、緊張するんだけど・・・零って呼び捨てだし何か恥かしい・・・。」

零の耳がピンク色に染まったのを見てかおるは小さく笑い、そっと零の腰に手を回して会場へいざなう。

「零ちゃん、今日は僕等は恋人、だからね。全部僕に任せて。何があっても僕が守るから。僕から離れないでね。」

耳元で囁かれ、零は黙って頷く。明らかに場違いな場所でのように振舞うのが正しいかも分からない。着慣れていない胸元の開いたドレスを気にしながら、履きなれない高いヒールで歩くだけでも零にとっては緊張の連続だった。

「かおる様、おめでとうございます。」

「ありがとう、久しぶりだね。」

会場内ですれ違う人がかおるに声をかける。どう見ても年上の人たちが敬語を使い敬称をつけて話しかける様子を見ていた零は、かおるが本当に王子だったのかと錯覚しはじめていた。

みな、かおるに声をかけながら、隣にいる零に興味あり気な視線を投げる。目が合ったら笑顔で会釈すればいい、と言われていた零は

目が会ったたびににつこり笑って軽く頭を下げていた。

「かおる！」

会場の奥から一際大きな声でかおるを呼ぶ声。視線を上げるとまさにちよい悪親父を地で行っているような、スマートな男性が手招きしている。

「・・・僕の、父だよ。」

「えっ、あれが・・・」

・・・お父さんもかつこいいんだ。あんまり似てないけど・・・でもステキな人・・・

零はかおるにエスコートされて会場を横切り、かおるを手招きした父親のところへたどり着く。広すぎる会場にはたくさんの人が歓談していて、慣れない零は姿勢を正してかおるについて歩くだけですでに疲れていた。

「零ちゃん、大丈夫？」

かおるは慣れないヒールを履いて歩いている零を気遣っていつもよりゆっくりと歩いていたが、それ以上にこの場の空気が零を追い詰めていないかが気がかりだった。ただでさえ目立つ自分と一緒にいるのだから自然と注目も集まっている。

「・・・うん、大丈夫。何かすごいね。」

無理しているのか、本当に平気なのか判断できなかったが、かおるの予想に反して零は笑顔でかおるを見上げる。高いヒールのおかげでいつもより顔が近い。いつもと違う髪形できれいにメイクをしている零の笑顔は直視出来ないほど美しく、かおるは少し頬を染めた。

「かおる、久しぶりだな。」

「ええ、7年ぶりですね。」

・・・えっ？7年？そんなに会ってないの？？

驚く零の隣で親子とは思えない作り物の笑顔で会話する二人。

「ところで、・・・こちらの美しいお嬢さんは・・・？はじめまして、かおるの父、月島崇つきしま たかしです。・・・貴方の様に美しいお嬢さんに

出会ったのは初めてだ。」

「……ちつ、近い！近い近い！お父さん、近いっ！」

かおるの父、崇はかおるの隣に佇んでいた零の両手を取って掌で包み込むように握り、ぐっと顔を近づけてくる。

「いや、本当に美しい。ずっと見つめていたい程だ、」

「……お父さん、零から離れてください。」

「なんだ、うるさいな、」

「零は僕の恋人です。お父さんでも手を出したら許しませんよ、」

「……お前の？恋人？この美しいお嬢さんが？」

零の手を握り締めたまま姿勢を戻し、かおるに問いかける崇。

「今日恋人を連れて来いと言ったのは貴方でしょう？」

呆れたように吐息を付くかおるに崇はニヤリと笑う。

「まあ言ったが、まさか本当につれてくるとはな。しかも……

こんな美しいお嬢さんを。」

「……近いよ、近いって！」

再び近づいた崇に零は思う。

「お父さん、離れてください。……紹介するよ、こちら、佐倉零

さん。零、父だよ。」

「はじめまして、佐倉零と申します。」

零ちゃんと言うのか、と完全に目じりの下がっている崇は眩き、零の肩を抱き寄せる。

「かおるのどこがいいのかね？私の方が言いたいと思わないか？私も独身なんだ。私の方がかおるよりも甲斐性があると思うがね、」

肩を抱き寄せて顔を間近によせてくる崇に、零はどうしていいのかわからず固まる。

「……かつかおる君のお父さんって、軽い人？？すごい人なんじゃないの??」

「お父さん、それ以上零に触れると、たとえ父さんでも許さないよ、」

怒りに燃えるかおるの瞳。いつもとは違う冷たい口調に固まったのは零。

「・・・まあそう怒るな。ちょっと試ただけさ。・・・それにしても、美しい。」

うっとりとして零を見つめる父親を冷たく一瞥して零を自分の傍へ引き寄せると、かおるは不満を隠さずに呟く。

「そんな目で零を見るのはやめて下さい。零、行こう、」

かおるは父親の手から零を奪い返し、かばうように抱きしめる。

「・・・お前にはもつたいない。」

「貴方に言われる筋合いはありません。」

「零ちゃん、零ちゃんはどう思う？私とかおるとどっちが魅力的だと？」

「えっ？！そ、そんな・・・」

「そんな赤くなって・・・可愛いすぎるじゃないか、かおる。お前どうやってこんなお嬢さんを見つけてきたんだ？ん？」

「・・・なんか、かおる君とこのお父さんって、すごく対称的と言うか・・・」

「同じ高校のクラスメイトです。零、もう行こう、」

あまりにも積極的に零に絡む父親に呆れたかおるが零の手をひいてその場を離れる。かおるは零の肩を抱き寄せて大勢の人が行きかう会場を縫うように歩きながら給仕を呼びとめた。

「彼女に飲み物を、」

その毅然としたその態度は本物の王子のようで、零は思わず見とれる。自分とは住む世界が違う人なんだ、と心の中で思いながらその端正な横顔を見つめた。

「・・・ごめんね、零ちゃん、驚いた？」

「えっ？あ、うん。なんか住む世界が違うなーって。」

「・・・そうだね。僕もそう思うよ、」

かおるはそう言って小さく微笑み、給仕が持ってきた飲み物を零に渡す。小さなグラスに入った飲み物は淡い琥珀色をしている。

「大丈夫、アルコールは入ってないよ。」

かおるに微笑まれ、零は手にしたグラスに口を付ける。飲んだこと

のない、不思議な味。甘いような、甘くないような、それでいてスツキリとした後味だ。

「零ちゃん、向こうで少し休もうか、足疲れるでしょ？」

慣れない高いヒールの靴を履いている零を氣遣ってかおるはテラスへと零を誘う。途中、両親に連れられた年若い女性とすれ違った。

「あ……」

すれ違いざま、女性が何か言いたげに口を開いたのを見た零は軽やかおるの手をひくが、かおるは見向きもせず、零の肩を抱き寄せて通り過ぎ、テラスに出ると手すりにもたれて大きく息を吐き出した。
「……さっきの、フィアンセだよ。」

「え……？よ、よかつたの？何か言おうとしてたけど……」

「僕は何も言う事はないし、勝手に決められたフィアンセに突然会わされて突然好きになれる？僕も彼女も、3歳の時に一度会って以来会うのは二度目なんだよ？もしそれで彼女が僕の事を好きだと言うならそれは偽りでしかない。そんな人の話なんて、聞く意味もない。」

冷たく言い放つかおる。決められた道を歩かざるを得ない苦痛を、怒りに近いその感情をどこにぶつけていいのかわからない、と言った様に呟く。

「僕には、何も選べないんだよ、」

「かおる君……」

「ごめん、零ちゃん。零ちゃんに八つ当たりなんかして、」

辛そうに目を伏せたかおるに零は戸惑う。いつも、そんな不安や辛さを抱えてあんな風に微笑んでいたのかと思うと、胸が苦しくなった。

「かおる君、私には……その、そう言う気持ち、多分分かってあげられないと思うけど、でも、一人で抱え込んで辛い思いしているならもつと話して欲しいな。かおる君いつも笑ってて、そんな悩みなんてないって思ってたけど、本当はすごく辛いんでしょ？私には話を聞く事しかできないかもしれないけど、それでも少しでもかお

る君の心が晴れるなら・・・ッ！」

零の言葉を遮って、かおるは零を抱きしめる。かおるの心の中に言葉にできない想いが渦巻き、ただ黙って零を抱きしめていると少し心が落ち着いた。

「・・・ごめんね、」

かおるは小さく謝って零から身体を離して微笑む。

「僕は幸せだよ。心から大切にしたいと思える人に出会えて、そしてその人が今目の前にいてくれる。」

「零ちゃんが誰の事を想っていても、僕は君を想うよ。零ちゃんが幸せに笑っていられるように、ずっと祈ってるから。」

「かおる君・・・。」

「アイツの事が、好きなんですよ？」

名前を出さずに問いかけると零は微かに頬を染める。自分ではない人に零の心が向かっている事に気付いた時、どれほど辛かっただろう。だけどそれは同時に、かおるを少し慰めもした。

・・・もしも零ちゃんが自分の事を好きだと言ったら、僕はこの自分が置かれている現実を、受け入れる事ができなかっただろう。そう思うと、他の男の側であっても、ずっと幸せに笑っていてくれるならそれでいい、とそう思うことにした。

「零、こっちに来て」

不意に、かおるが零の手を引き寄せ、手すりにもたれた体制のまま腕の中に抱き寄せる。僕にもたれて、と小さく囁かれ、零は言われた通りに体重を預ける。

「・・・あ・・・」

「何か、用？」

零の視線の先に、こちらを見ているフィアンセの姿が映る。戸惑う零とは対称的に冷たく問いかけるかおるに、いつだったか竹川が言っていた《かおるは冷たい》と言う言葉をぼんやりと思い出す。

「あ・・・あの・・・」

口ごもるフィアンセに、かおるは用がないのなら邪魔しないで、零

を抱く腕に力を込める。零はフィアンセが泣き出してしまうのではないかと気が気ではなく、かといって、何か口出しをする立場でもなく、ただ黙って成り行きを見守る。いつも優しいかおるが、こんな風に冷たい態度を取れることに変に感心したりもしていた。

フィアンセは、特別な美人とは言えないが、清楚でおとなしそうな印象の女性。年齢は少し上ではないかと思う。立ち居振る舞いには品があり、きつとお嬢様なんだろうと思って見ていると、意外にもその女性は零を鋭くにらんだ。

「貴方のような、品のないお方がかおる様のお側にいらっしゃるのはいかがなものでしょう？」

「え・・・？」

彼女の口から出た鋭い非難の言葉に零は驚いたが、零の驚きと同時にかおるが手すりにもたれていた身体を起こして彼女を睨んだ。

「僕の零を侮辱するのは僕を侮辱するのと同じ事だとわかった上でのお言葉ですか？不愉快だ。僕の前から消えろ、」

「か・・・かおる、君・・・？」

「零、不愉快な思いをさせてごめん。向こうへ行こう。」

有無を言わせぬその言葉に零は戸惑いながらも従う。かおるは零をいざないながら、敵意に満ちた視線を見た瞬間に自分の中に生まれた彼女に対する嫌悪感をもてあましていた。

この場所に零を連れてきたのは自分で、ここで零が好奇の視線や嫉妬の視線にさらされる事は分かっていたのに。

「ごめんね、かおる君、私のせいにかおる君が恥かいちゃうよね・・・」

「」

「えっ、な、何言って・・・」

「だって、彼女の言う事、間違っていないよ？私は明らかに場違いだし・・・品がないって言われても仕方ないと思うの。」

「・・・そんなこと・・・」

・・・僕は、守っているつもりで、零ちゃんに守られているのかも、しれないな。

かおるは心の中で呟く。もしも零がこの場に来てくれていなかったら、今頃どうなっていたのだろうと思うと背筋が寒くなる。

「そんなことないよ、零。そこにいてくれるだけで、隣で笑っていてくれるだけで、僕は本当に救われるんだ。」
かおるはそう言って零の身体を抱きしめた。

041：パーティー・1（後書き）

パーティー、行ってみたいですねえ。

かおる君って、大人ですよね・・・私はあんな風にはなれないなあ・
・・。

誰かのそばでも幸せに笑っていてくれたらいいよ・・・キヤーツ
言われたいっす。

042：パーティー・2（前書き）

お父様暴走中（笑）

「かおる、搜したぞ・・・零ちゃんも、こっちへおいで、」

フィアンセを避けて、再び会場に戻った二人をみつめたかおるの父親は満面の笑顔で二人を引き連れてパーティー会場を抜け、ロビーのソファーに零を座らせる。

「主賓が抜けて、いいんですか？」

かおるの問いかけを完全にスルーした崇はソファーに腰を下ろした零の足元に跪くと零の手を握ってうつとりと零を見つめる。

「本当に美しいお嬢さんだ。このまま時間を止めてしまいたい、」
「えっ、あつ、あの・・・」

「お父さん、そんな事をするために会場を抜けたんですか?!」
かおるの声に混じる怒りの感情に崇はフウと息を吐き出し、再び零の手を握りなおす。

「零ちゃん、零ちゃんの夢はなんだい？」

「えっ？私の?!」

・・・かおる君のじゃないの?!

驚いた零が言葉に詰まって崇を見つめると、崇は一層目じりを下げてニコニコと微笑む。

「そんなに見つめられたら、その気になっちゃうから。」

「お父さん!」

見かねたかおるが崇の肩を掴んで零から引き離す。

「そんなに怒らなくてもいいじゃないか。おまえ独り占めする気が?」

「独り占めも何も、零は僕の恋人です。」

・・・何か、すごい恥かしいんだけど・・・。

「お前がなあ?もつたいたい、本当にもつたいたい・・・」

「お父さん？話がないなら僕はもう失礼しますよ？」

「まあ待て、私は零ちゃんの話聞きたいんだ、」

かおるは諦めて小さく溜息をつき、ベンチに座っている零の肩にそつと手を置く。

・・・夢、なんて人に話すの初めてなんだけど・・・。

零は内心思いながら、にこにこ笑いかける崇を見て話し始めた。

「私の夢は、NASAで宇宙開発の研究者になる事なんです、」

星を人口的に作り、人類を移住させる事の出来る新しい星を作る研究や、地球をボーダーレスに調査できる探査衛星、遙か天空に輝く星々の構成要素や歴史など、宇宙に対する興味は尽きない。

好きな事を話しているうちに零はパーティー会場にいる事を忘れてしまっていた。

「素晴らしい夢だ。NASA希望と言う事は、ハーバードを？」

「はい、」

「それならかおるも同じじゃないか。再生医療の研究を、するんだろ？」

「そつ、そうだけど、」

崇と同じく零が楽しそうに話すのを聞いていたかおるは不意に自分の話題を振られ、らしくなく動揺する。

「いいじゃないか、二人で同じ大学へ進学して、それぞれの夢を叶えて大きくなつて帰ってきたらいい。」

「えっ?!」

「但し、一つだけ条件がある。」

「零ちゃんは必ず、年に一回・・・いや、二回・・・いや、三回は帰国して我が家でパーティーを開く事、」

「お父さん?!」

「約束通り、発表は延期する。こんなに可愛いお嬢さんを見せ付けられたらダメと言えないだろうが、」

・・・何か、話がよく見えないけど・・・。

「零ちゃん、もう一度聞くけど、かおるじゃなくて私を選んでくれ

たつていいんだよ?」

「お父さん、いい加減にして下さい、これで零に振られたら僕は一生恨みますよ?」

「私としては、お前を振って私のところに来てくれるのが最も素晴らしい選択だと思うんだがね、」

ねえ、と笑いかけられて零は言葉に詰まる。

「とにかく、フィアンセの件はなかった事にしておくから、心置きなく再生医療を極めて来い。」

「・・・いいんですか、」

「いいから言ってるんだ。さあ零ちゃん、一曲私と踊ってくれないか?」

優雅に腰を折ってダンスを申し込む崇に零は戸惑う。ダンスなどしたことがないし、いろんな意味で注目されるのも怖かった。

「お父さん、念のために申し上げますが、零は貴方が望むような作法の教育を受けて育っているわけではありませんよ、」

「そんな事、見れば分かるさ。そんな事は問題じゃない。今から学べば済む事だ。」

ねえ、零ちゃん、と鼻の下をのばして零に笑いかける父親にかおるは溜息を付く。

「・・・ダメだ、これじゃただのエロオヤジじゃないか。」

「とにかく!ダンスをするのは僕です。零は僕の恋人ですから、」
かおるはそう言って半ば強引に零の手を取ってパーティー会場に戻っていった。

「・・・ごめんね、零ちゃんいろいろ驚いてるよね、」

僕に任せておけば大丈夫、と言われた通り、ゆつたりとした音楽にのって踊る。ダンスなど初めてだったが、かおるのエスコートは完璧で、一応それなりに踊れているかも、と零は内心思っていた。

「あつ、で、でも良かったんだよね?かおる君、好きな事していい

って言われてたし、」

「・・・さっきの結論って結局、かおる君はハーバードへ進学して、再生医療の研究をしていい、ってコトだよな？」

「・・・そうだね。」

ずっと心にひっかかっていたフィアンセの存在も、父がなかったことにしてくれると言う。おそらく、ただ単純に、父が零に一目ぼれをした結果そうなったのだろうが、理由はどうあれ結果はかおるの望むとおりの未来になった。

ただ一つ、零と自分の関係を除いて。

「零ちゃんのおかげで僕の未来が開けた。君は、僕の恩人だ。」

パーティー会場のダンスフロアの真ん中で思い切り、抱きしめたいなる衝動を抑えてかおるはそう言っていると、照れたように笑う零にっこりと微笑みかけた。

042：パーティー・2（後書き）

うーん、フィアンセ可哀想だけど・・・。

一回しか会った事なくても次あったら超かっこよかったら惚れるよねえ。

043：パーティー・3（前書き）

最近毎日更新できず・・・すみません。これからもがんばります。
よろしく願いいたします

話がややこしくなるから、とパーティーの途中で帰る事になった
かおると零はリムジンの中にいた。

まさかあの父が、あっさりと持論を覆すとは思わなかった。先日
の電話では、全く僕の言い分に耳を貸さなかったのに。

・・・親子の血は争えないのか・・・。あの厳格な父が、零ちゃん
の前では全く見る影もなかったな。

思い出すと、少し笑える。確かに、今日の零は直視できないほどの
美しさと、目を離せば消えてしまいそうな儚さをあわせ持っていて、
いつも一緒にいてよく知っているはずのかおるでさえも視線を合わ
せる事をためらうほどだった。

・・・あのフィアンセはどうなったんだろうな、

今まで気にかけてこともなかった、名前も覚えていないフィアンセ
の事を思う。あの時零に向けた侮辱の言葉は、裏を返せば零への嫉
妬。もしかすると零が言うように彼女は自分の事を少なからず想っ
ていたのかもしれないな、と思うと微かに心がざわめいた。

・・・零ちゃん、僕は冷たい人間なんだよ。君が思うよりずっと。
かおるは心の中で思う。慣れない環境によほど疲れたのだろう。リ
ムジンのクッションにもたれて眠ってしまった零の肩をそっと抱き
寄せる。小さな零の身体は簡単に腕の中に納まり、肩にもたれかか
る体重が心地いい。

「無防備になっちゃだめだ、っていつも言ってるのに、」
自分の腕の中で穏やかに眠る零にかおるは囁く。うつすらと開いた
唇が、少し頬にかかる髪が、かおるの心を締め付ける。もしここに
いるのが自分ではなく伊織だったら、と考えると恐ろしくなる。火
の様に激しい伊織なら間違いなく手を出している事だろう。

「僕だって、いつまでも紳士でいられるとは限らないのに。」

そつと零の頬に触れる。もう、自分の気持ちを抑える必要はない。フィアンセとの婚約は解消され、自分の夢を叶える事を許された。零の気持ちが生他の男に向かっているのならこちらを振り向かせる努力をすればいいだけだ。

・・・でもそれじゃ、伊織と大差ないな。

《お前を彼女にしてやる。必ず俺を選ばせてやる》と豪語している伊織を思い出し、かおるはふと唇の端に笑みを浮かべる。この無防備な姫を手に入れたいと願うのが自分だけならどんなに楽だっただろう。こんなにも小さくて頼りなくて、誰かが守っていなければすぐに攫われてしまいそうな子なのに、はつきりと自分の夢を語れる強さがあって、本当に驚かされる。ただ怯えているだけかと思えば、その澄んだ瞳で見つめられると何もかも見透かされているような気分にもなる。感情を素直に映す瞳を見ていると、いつまでも見ていたくなる不思議な魅力。笑う事も泣く事も起こることもためらわない強さをうらやましく思うのはかおるだけではないはずだ。

「好きだよ、」

腕の中で眠る零にそつと囁く。

・・・たとえ零ちゃんが、アイツの事を想っていても、僕に未来をくれた君を、僕はずっと想い続けるよ。

音もなくリムジンが校門の前に止まり、運転手がドアを開ける。

眠ってしまった零を起こさないようそつと抱き上げたかおるは運転手に軽く頭を下げて校門をくぐった。

・・・相変わらず、軽いな、零ちゃんは。

抱っこしたのは何ヶ月ぶりだろう、と思う。思えば出会った頃は目が合うだけで真っ赤になっていたな、と出会って間もない頃を懐かしく思い出す。腕の中の零を起こさないように、と言うよりは、この時間を少しでも長く続けたくてかおるは寮までの路をゆっくりと

歩く。

・・・今日一日、って約束だからね、

時計の針は10時前。かおるは小さく溜息を付いて、零を抱いたまま寮の自分の部屋のソファーに深く腰を下ろす。窓から差し込む月明かりが照らす零の寝顔は美しく、いつまで見ても飽きない。

「どうしてそんなに無防備になれるの、」

眠る零に問いかける。

「僕はもう、遠慮しないって決めたから、僕だって安全じゃないのに、」

そつと、額に口付ける。

「目を覚まさないなら、このまま襲ってしまうよ?」

もう一度、額に口付けると、零が小さく身動きしてうつすらと目を開ける。

「零ちゃん、目が覚めた?」

間近に寄せられたかおるの顔と、かおるの後ろの窓に浮かぶ月、抱きしめられている腕の熱さに零は瞬間的にパニックになる。

「えっ、わ、私、寝てた?!こ、ここ、今、どこ?!」

「寝てたよ。ここは寮の、僕の部屋。」

につこりと微笑むかおるに、零は真っ赤になる。

「ご、ごめんね、迷惑かけて、私、部屋に・・・ッ!」

慌てて腕から逃れようとする零をぎゅっと力を入れて抱きしめ、その髪に頬を寄せる。

「今日一日は、僕の恋人になってくれるんでしょ?」

「えっ、で、でもそれってパーティーの・・・」

「ひどいな、パーティーが終わったらもうおしまいなんだ。僕はずつと一緒にいたいのに、」

「えっ、で、でも、」

「言ったよね、僕は零ちゃんの事が好きだって。今まではずっと、フィアンセの事や、跡継ぎの件があったから踏み込まないようにつと我慢していたけど、もうその必要がなくなったから。」

言つて、強く抱きしめていた腕の力を抜き、まっすぐに零の瞳を見つめる。

「もう誰にも遠慮しないし、自分を偽る事もしない。僕は零ちゃんの事が好きだ。誰にも渡したくないし、誰の事も見て欲しくない。僕の事だけを頼つて僕の事だけを見つめて欲しい。」

窓から差し込む月明かりの下で少し潤んでいるようにも見えるかおるの瞳にまっすぐに見据えられた零は呼吸を忘れるほど胸が苦しくなる。どうしてこんなにもまっすぐに想いを伝えられるんだろう。どうしてこんなにも人の事を好きだと言えるんだろうと頭の片隅で思う。

「今は零ちゃんの目が、アイツの事を見てるって分かってるけど・

・僕の事を見てもらえるように、努力するから。いつか、僕の事を見て欲しい。」

かおるはそう言つと、腕の中の零を再び抱きしめた。

「・・・どうして、かおる君がそんな事、言うんだらう・・・？」

かおるの腕の中で苦しいほどに抱きしめられた零は苦しくて悲鳴を上げ始めた心を抱えながらぼんやりと思う。突然いろいろなことが起こりすぎて心が付いて行っていない。つい数時間前までのパーティーの事も現実ではなく夢だったのではないかと思えるほどだ。

「・・・かおる君が？私を？好き？そんなことって・・・」

ありえない、と思う。完璧に美しい王子様が何故？日本を代表する財閥の跡取りで、容姿端麗、成績優秀なだけでなく穏やかで優しく、こんな完全な人間がいるとは思えない程に完璧なかおるが、嫌われ者の自分の事を好きだなどと俄かに信じられる話ではなかった。

「零ちゃん、」

零を抱きしめたままかおるが小さく呟く。

「もう、今日が終わってしまうね、」

悲しげなかおるの声に零の心が締め付けられる。かおるはそつと零の身体を離し、ソファーに座らせると、自分は床に跪いてまっすぐ

に零の瞳を見つめる。ずっと抱きしめられていた零はかおるの体温が離れると急に一人にされたような気になってそつと自分の腕を抱く。

「今日は本当にありがとう。零ちゃんのおかげで僕の夢が叶うんだ。」「零ちゃんが迷惑だと言つても、僕はずっと零ちゃんの事を想うよ。僕に未来をくれた君の事を。」「

かおるは強い意思を秘めた瞳でまっすぐに零を見る。

「・・・だから、僕の前でもう無防備になっちゃだめだよ？僕だつていつまでも紳士ではいられないと思うから。」「

そう言つて、少し辛そうに目を伏せたかおるは戸惑いを隠せないままの零の手を取つて立ち上がらせる。

「約束の時間だから、部屋まで送るよ。」「

ドアを開ければすぐ目の前にある零の部屋。かおるはそのドアを開けて電気をつける。

「おやすみ、零ちゃん。」「

いつものようににっこりと微笑んで、ドアを閉める。ただそれだけの事が今のかおるには辛く、閉めたドアにもたれて深く溜息をついた。

《僕はずっと零ちゃんの事を想うよ。》

まっすぐに自分を見つめたかおるの瞳が脳裏から離れない。何故急にそんな事を言うのだろう？頭の中が混乱して心の整理がつかない。《アイツの事が好きなんですよ？》

そう言つた時のかおるの哀しげな瞳。誰にも言つた事のない、自分でさえも、はつきりと気付いていない零の気持ちを、なぜかおるは知っているのだろう？

ふと、ドレッサーの鏡に映る自分の姿に目をやった零は、見慣れない自分の姿に溜息をつく。かおるが持つて来てくれたドレスは零の

好みのデザインでもあり最初は心躍っていたがやはりこう見ると借り物の様に見える。キラキラと輝くネックレスやイヤリングも自分には似合わないと思うと、今日かおると共にいた時間が辛くなった。ダンスも上手く踊れない零を完璧にエスコートしてくれたかおる。周囲の目には一体どう映っていたのだろう。

・・・私は、かおる君には釣り合わないよ。

鏡の中の自分に呟く。好きだと言ってくれたかおるの言葉が真実でも、かおるの隣に立っている自分の姿など想像できない。それに、と零は思う。

・・・私は・・・。

043：パーティー・3（後書き）

お気に入り登録して下さった方っ！

ポイントを付けて下さっている方！！！！

ホントに、ホントにテンションあがりまくります
これからよろしくですっ！

044：零の気持ち

「おはよう、零ちゃん。朝食の時間だよ、」

翌朝、いつもと変わらず朝食の時間に部屋のドアをノックするかわるの声に少しホツとする。今まで通り何も変わらない朝。

「おはよう、かおる君。」

零もいつも通りの笑顔で部屋を出る。

「零ちゃん、今日もかわいいね。」

いつも通りに微笑むかおるに零は笑顔を返した。

食堂につくと、いつも通り、一人悠然と本を読んでいる駿の姿が目に入る。目に入る、と言うよりは探している、と言う表現が当てはまる零の視線にかおるは溜息をついた。

唯一、零と距離を置く駿。多分零にとって最も近寄りがたく、遠い存在だろうと思うのにその目が駿を追うのは何故なのだろう。

「零、おはよう。」

その時、ムスクの香りとともに現れた伊織が後ろから零を抱きしめて、首筋に顔を寄せる。

「おっ、おはよっ！ちよ、やめ、」

・・・だから、その登場と呼び捨てはやめて、ってば！
「なんで？」

・・・近い、近いって！

首筋に唇が触れるほど近くで囁く伊織の声に零は真っ赤になる。

「だ、だからっ！」

「伊織、やめろ。」

いつものかおるとは違う、硬質な声。伊織の腕を掴んで捻りあげる。
「・・・痛ってえな・・・」

顔をしかめて零から離れた伊織はいつもの挑発的な、毒のある瞳でかおるを見る。

「ふうん・・・何があつたか知らねえが・・・そう言うことなら俺も本気で行くぜ？」

「勝手にしろ。」

「まあ、お互い同じ立場なんだ、せいぜい頑張ろうぜ、」

かおるの耳元でそう囁いた伊織は二人のやりとりを困った顔で見守っている零を見て小さく笑い、かおるの肩を叩いて食堂を後にした。

「・・・大丈夫だった？」

かおるは零の隣に腰をおろし、いつも通り微笑んで零を見る。

「・・・うん、ちょっと慣れてきたかも、」

朝の遅い伊織と朝の食堂で会う事は少ないが、会う度同じように扱われるため不本意ながら少しずつ慣れてきた自分がいる。それでも呼び捨てにされる違和感や、強すぎるスキンシップはできる事なら遠慮したいもので、毎回訴えても伊織の行動は変わらない。

・・・久遠君は、どう思ってるんだろう・・・。

一瞬、窓際で本を読んでいる駿に目をやると、隣のかおるが小さく溜息をついた。

「零ちゃん、そんなに駿の事が気になるの、」

「えっ?! や、べ、別にそう言う訳じゃ・・・。」

とつさに慌てて首を振る。

「じゃあどうして？」

哀しげなかおるの瞳が零の心に突き刺さる。

「な、何が・・・?」

真剣なかおるの瞳に見つめられると動けなくなる。苦しくて、心が痛い。

「こつちを向いて? 零ちゃん・・・髪にホコリがついてる。」

小さく微笑んだかおるの手が伸び、零の髪に触れる。今までなら、どうと言う事はない、いつものかおるの行動のはずなのに、俄かに心臓が暴れだす。

「はい、とれたよ。もう大丈夫。」

急に頬を染めて俯いてしまった零を見て、かおるは微笑む。零はき

つと、自分の気持ちをもてあましているに違いない。友達と思っていた人が急に、異性になった瞬間の戸惑いを。

・・・かおる君・・・本気、なのかな・・・？

授業中、零の脳裏にかおるの哀しげな瞳が蘇る。いつも優しく微笑んでいるかおるの笑顔にずっと救われてきた。何も言わなくても言いたい事を分かってくれて、気付かないうちに零が心地良いようにあらかじめ準備してくれているかおる。

好きだとか、嫌いだとか、そう言う恋愛感情ではない、もっと特別な何か。

ふと、隣の席の駿に目をやると、いつもと同じ、じつと涼しげな瞳を前に向け、ノートにペンを走らせる横顔。いつも無表情で何を考えているのか分からずに戸惑う。毎日会っているのに目を見てくれなければ、滅多に声をかけてもくれない。挨拶をしてもそっけなくてきつと嫌われているんだろうと思う。そう思っているにも、伊織の強引さに困っていると必ず助けしてくれる駿の存在がいつの間にか零の中で大きくなっていった。ほんの少しでいいから笑って欲しい、少しでもいいから、声をかけて欲しい、とそう願うようになってたからだろうか？

・・・でも、

零は小さく溜息をつく。

・・・嫌われている人の事を想っても、辛いだけ、だよな・・・。
本気なのかどうか図りかねるが、いつも《俺の女になれ》と言い寄ってくる伊織や、最初は挨拶に等しかったが、今となっては冗談ではなくなってしまったかおるの《好きだよ》と言う微笑みを無視して駿の事を想い続ける事は愚かな事とさえ思える。

・・・私、どうしたいんだろう・・・。

誰かに相談に乗って欲しいと思ってても相談できる相手もない。誰

かを好きになる事も、誰かに好かれる事も、こんなにも辛いことだったのか、と零は心の中で溜息をついた。

一日の授業が終わり、零が出された課題をまとめてかばんに入れていると、ムスクの香りと共に伊織が姿を現し、零は思わず身構える。

「んだよ、今日は珍しくガードが固いじゃねーの、」

ニヤリと笑った伊織は、そんなことしてもムダだけだね、とつぶやいて零の腕を掴む。

「何の用？」

「まあまあ、そう睨むなつて。まあ俺はお前のその怒った顔も好きだけどな？お前そう言う顔見せるの、俺だけだろ？他の奴等には見せない特別な顔、ってやつ、嫌いじゃないぜ？」

「そう言うんじゃないッ！」

「・・・もう、何でいつつも伊織君はそう言うこと言うの？！」

怒り、と言うわけではないが、あまりにも堂々と過激な言動をする伊織といるとイヤでもみな視線が集まってしまふ。怒って見せなければ、伊織の際どい行動を受け入れていると思われてしまうことが怖かった。

「ちよつと、付き合えよ、連れて行きたい場所があるんだ。」

「ちよつ、ちよつとっ！」

「寮に戻ったらすぐ出かけるぞ。着替えたらすぐに降りて来い。」
傍目にはあきらかに伊織に引きずられていく零の姿をクラスメイト達はどう思っているのだろっ、と思いながら零は強引な伊織の腕を振り解く。

「痛いよっ！そんな強く掴まないで！」

「ああ、悪かったな。お前がジタバタ暴れるからだろっが、」

悪びれもせずそう言った伊織は掴んでいた手を離し、ニヤリと笑う。
「今日はナイト様は理事長呼び出しで、堅物は進路面談だからな。
お前を連れ出すには絶好のタイミングなんだよ。」

お前はお目付け役が多いからな、と言いながら伊織は不満気に自分を睨む零を見る。

「可愛い顔しちゃって。そんなそる顔されたら襲っちゃうよ?」
「……」

「……もう、返す言葉も見つかんない。伊織君って、何考えてんだろ?」

零が黙って睨んでいると、伊織は諦めたように小さく肩をすくめ、ブツブツとドイツ語で独り言を言う。

「えっ?何て言ったの?」
「……さあな。」

気になるか?と顔を覗き込まれた零は、赤くなって別に、と顔をそむけた。

044：零の気持ち（後書き）

もつたいない。もつたいなさすぎる。ちゅーか、選べないよねえ。
私だったら・・・選べない。無理・・・。無理・・・。誰か一人つ
てえええ。無理ー。

045：恋愛相談？（前書き）

零×伊織です。

045：恋愛相談？

寮に戻った零は制服を着替えながら小さく溜息をつく。決して伊織のことが嫌いなのではないが、強引過ぎて少し怖い。一つ一つの行動や、選ぶ言葉の毒が強すぎて一緒にいると疲れてしまう。

7月も後半に差し掛かり、すっかり夏の日差しが強くなってきている窓の外を見た零は、ハーフパンツにシフォン地のチュニックを着て寮を出ると、すでに伊織が待っていた。

「行くぞ、」

黒いパンツに黒のシャツ。革靴を履いた伊織は見た目高校生には見えない。

・・・何か、迫力あるよね、伊織君って・・・。

内心そう思いながら、前を歩く伊織についていくと、校門近くに止めてあるバイクにまたがった。

「乗れよ。」

「えっ？これに？」

真っ赤な大型バイクに零は戸惑う。

・・・似合ってるけどさ、かつこいいけどさ・・・

思いながら、零は渡されたヘルメットを受け取りながら伊織を見上げる。

「免許なら持つてる。心配すんな、」

言いながら差し出された手に掴まってバイクの後ろにまたがると、

伊織はヘルメットをかぶり、エンジンをかけた。

「しっかり掴まってるよ、落ちたらシャレになんねーからな、」

「えっ？！ちよっ、待ってっ！！」

有無を言わずバイクをスタートさせた伊織に、初めてバイクの後ろにのった零は恐ろしいほどのエンジン音とスピードに驚いて慌ててしがみついた。

「どうだ？ ちょっとはスッキリしたろ・・・っていつまで抱きついてんだお前、」

「え、あ・・・ごめん・・・」

どの位走っていたのだろう。景色を見る余裕もなく必死に伊織にしがみついていた零は伊織の声で我に返る。手を離して降りようとすると、いつもかおるがするように伊織が手を差し伸べてくれた。

「あ・・・ありがとう。」

バイクから降りた零が大きく伸びをして緊張して固まってしまっていた身体をほぐしていると、バイクを止めた伊織が近づいて彼がいつもそうするように肩を抱く。

「さ、行くぜ、お姫様？」

「ちよつ、伊織君！ 離してッ！」

ムスクの香りに包まれるとイヤでも伊織を近くに感じてドキドキしてしまう。

「イヤだね。」

いつもならこの辺りで誰かが助けってくれるんだけど、と零は内心思うが、今は無理だと諦める。暴れても無理なら大人しくしているほうがいいだろうと大人しく従った。

「素直でよろしい、」

伊織は満足げにそう言っ、高台のベンチに零を座らせた。

「ここって、街外れになるの？」

眼下に街並みの広がる高台の公園。眼下の町街がいつも買い物に行く街なのか、違う街なのか、まだ地理感のつかめていない零が問いかけると伊織は小さく笑う。

「街外れ、っちゃ、そうだな。今見えてる街がいつも行く街、その向こうの山の中腹に見えてるのが学校だ。」

「あ、あそこが学校なんだ、」

じゃあここは学校の反対側なんだね、と納得する零を面白そうに眺めていた伊織だったが、不意に目を細めてじっと探るように零の瞳

を覗き込んだ。

「お前、駿のこと好きなんだろ？」

「なっ、何急に?!」

ギョツと心臓を掴まれた様な苦しさと同時に頬が赤くなる。

「お前ほんつと、わかりやすいよな、」

伊織はそう言つて、彼にしては珍しく零と距離をとつて座る。

「まともにしゃべったこともないヤツの事好きでどうしようつての？」

「・・・こ、これつて、相談、乗ってくれるつてこと?どうして伊織君が急にそんなこと・・・。」

零が戸惑つて黙っていると、伊織は小さく笑つて眼下に広がる街に目を泳がせる。

「お前さ、いつも怯えたような目でアイツの事見てるだけだろ?正直、見てるこつちが痛くてやつてらんねーんだよな。」

「お前、どうしたいの?聞いてやるから言つてみるよ、」

いつも攻撃的な伊織の瞳に優しく笑いかけると、ドキン、と心臓が跳ねる。

「ど、どうしたいつて・・・よく・・・わかんない。」

「なんだそれ?好きなんじゃないの?」

「・・・もついいや、思つてること、言つちやお・・・。」

「す、好きつて言うか・・・気になつちやうつて言うか・・・だつていつも一人でいるし、全然笑わないし、なんか心配つて言うか・・・。」

「それだけ?」

「・・・うん、」

「お前さあ、

いつもの伊織らしい、人を少しバカにしたような口調。

「そんなくらいであんな目して見つめてたわけ?!

・・・あ、あんな目つて、私どんな目してたんだろ・・・。」

「言つとくけど、寮のやつら全員、お前が駿のこと好きだつて、思

つてるぜ？まあ本人はどう思ってたのかしらねーけどさ、」

アイツ完璧ポーカーフェイスだからな、と伊織は言って零の反応を見るようにじっと零を見る。

・・・みんな、ってみんなって・・・

思わず顔が火照る。そんなに私、久遠君のこと見てたんだ、と思うとさらに恥かしくなった。

「ま、悪い気はしないだろうな。姫さんがじつと自分の事見つめてたら勘違いも含めてオトコは舞い上がるってもんだ。」

まるで人事の様にそう言って、伊織は立ち上がり、柵にもたれて零を振り返る。

「でも・・・

「でも、何だよ？

「私、久遠君が話してくれるとうれしくって、笑ってくれたりするとすごいテンションあがるし、」

「で？」

「だから、

「だから私は久遠君のことが好きなんだと、思う・・・」

・・・私、何言ってたんだろ。何で伊織君にこんなことしゃべってたの？！

「それって、健とかかおるとかでも同じじゃねーの？

「えっ？あ、まあ・・・そうなんだけど・・・」

・・・わかんなくなってきたやつた・・・。

「好き、ってどういうことなんだろうね？」

「何だよ、いきなり哲学的な事言い出しやがって」

「だって、分からなくなってきたから、

「何が？

「だから、好きって言うのがどういうものか、

・・・久遠君に笑って欲しいって思うけど、でもそれは久遠君が笑わないからで・・・

・・・かおる君や健君が笑いかけてくれたり助けてくれるのもすごい

く嬉しいし、今だって、伊織君がちゃんと話聞いてくれてるの、すごく嬉しいし・・・

「好き、ってのはソイツの事を独り占めして自分の事だけを見て欲しいって思うことじゃねーの？俺はそう思うけど。」

《僕のことだけを見て欲しい》

パーティーの夜にかおるに言われた言葉が不意に蘇り、零は思わず頬を押さえる。

「俺はお前を独り占めしたいと思うぜ？それに、俺なら好きなヤツにはいつも幸せでいて欲しいと願うけどな。」

辛そうな顔や泣き顔なんか見たくねーし、と続けた伊織は少し赤い顔をして、それでもじつと零の瞳を見つめる。

「俺にしとけよ。お前が俺を選ぶなら、絶対に不安になんかせないから。」

いつも自信に満ち溢れている伊織の瞳に微かによぎる不安の影。初めて見る照れたような笑顔に目を奪われる。

「・・・チツ、邪魔が入りやがった」

その時鳴り出した携帯に伊織は舌打ちし、大げさに溜息を付いてみせる。

「ナイト様からだぜ？お前出るか？」

言いながらも携帯に出た伊織はいつもの彼に戻っていた。

「いいところで邪魔してくれて、ありがたい話だな、」

『邪魔されて困るような事をしている君がいけないんじゃないの、』

「言つたろうが、俺も本気で行くってな。悪いけど、手加減しないぜ？」

『好きにしる。だけど傷つけるような事したらただではすまさないよ、』

「そんな事するわけねーだろ？いくら俺でも好きな女を泣かせるような事はしねーよ。」

・・・私、また携帯持つてないや・・・。

伊織が電話をしている間、かばんの中を探っていた零は自分が携帯

を持つていないことに気付いて溜息を付く。また無駄に心配をかけたに違いない、と思うと気が重かった。

「・・・かおる君、怒ってた？」

電話を切った伊織に問いかけると、伊織は少し驚いた顔をして、すぐにいつもの毒のある表情に戻る。

「いや？俺と一緒に安心だ、って言ってたぜ。」

そっか、と納得する零を見て伊織はかねてから感じている疑問を口にする。

「お前さ、何でかおるじゃないわけ？」

「へっ?!」

「だからさ、なんでかおるを好きにならないわけ？」

「・・・なんで、って、そんな事聞かれても・・・。」

「・・・好きだよ？」

「そう言う好きじゃねえよ、」

「そんな事聞かれたってわかんないよ！一緒にいてドキドキするか、笑ってくれたら嬉しいとか、そう言うの好きっていうんでしょ？だったら好きだよ？かおる君も健君も、伊織君も。」

零の言葉に、伊織は少し驚く。

「そこに、駿は入らねーのかよ？」

「・・・久遠君は・・・。」

「・・・よく、わかんない。」

目を見てもくれないし、笑ってもくれないし、挨拶さえほとんどしてくれないし、きつと嫌われているから。好きと言うよりは、嫌われたくない、んだと思う。

零が素直な思いを口にする、伊織は声をあげて笑い、なるほどね、と頷いた。

「じゃあもし、駿が俺達みたいに普通にお前に接していればそうは思わないわけだ？」

「・・・そ、そりやそうでしょ？普通に話してくれる人に話して欲しい、って思うわけないじゃん。」

「じゃ、俺もお前に構うのやめるわ。それで追いかけてくれるならそんな楽な事ねーし。」

「そう言う意味じゃないよ！・・・無視されたら哀しいから、そんなのはイヤ・・・」

「・・・冗談だよ。んな顔すんな。悪かったよ、」

哀しげな顔をした零に慌てて謝った伊織は、決まり悪そうな顔でポケットに手を入れる。

「もし、駿がお前のこと好きだったたら、お前どうすんの？」

「えっ？！久遠君が？！・・・そんな事、あるわけないじゃん。」

伊織の言葉に一瞬、心臓が跳ねる。瞬間的に頬を染めた零の反応を見た伊織は軽く舌打ちして零から目を逸らせる。

「悪い事言わないから、俺にしとけ。俺の側にいたら不安になることもなくなる。」

「き、急にそんな事言われたって・・・」

「俺、ずつと言ってなかったか？お前に会った瞬間から言ってると思うけど？」

「えっ？！あ、で、でもっ、冗談だと思って・・・」

「冗談でそんな事言うバカがいるもんか。・・・だいたいお前鈍すぎるんだよ、」

照れた笑顔で、伊織は零の頭を軽く叩き、帰るぞ、いつものように零の肩を抱いて歩き出した。

045・恋愛相談? (後書き)

うーー。俺様キャラの照れ顔。ツボ。ヤバイ。想像すると。。。
やばい。

046：課題の山（前書き）

夏休みに入る前の前フリです。すみません・・・。

046：課題の山

伊織と話してから余計に自分の中の気持ちに混乱した零は出来るだけ何も考えないように、本来の姿である受験生としての毎日を過ごしていた。

つい先日、1学期の終わりに行なわれた学力テストの結果が廊下に張り出され、生徒達は教科毎の自分の成績に一喜一憂している中、どの教科を見ても上位3人までに名を連ねているかおると駿の優秀な成績に、零は納得をしながらも驚いていた。

「零ちゃん、どうだった？」

「うん・・・予想通りって言うか、」

・・・得意科目と苦手科目の差がすごいよね、私。

「零ちゃんは数学苦手なの？」

「うん、ドイツ語も。」

苦笑する零にかおるはいつも通り微笑かける。

「かおる君はすごいよね。全教科優秀だもんね。」

「零ちゃんの物理には負けるけど、」

と言って張り出されている唯一満点を取っているの零の順位を指す。

「物理だけだよ？数学なんて下から数えた方が早いし・・・ドイツ語だって全然だし・・・。」

しゅんとする零はいつ見ても可愛い、とかおるは内心想う。

「苦手科目の夏休みの課題、びつくりするくらいたくさん出るから。」

・・・頑張ってね、零ちゃん、

「えっ、そうなの？」

「残念ながら。だから多分零ちゃんは数学とドイツ語の課題がね、」

「・・・そ、そうなんだ・・・。」

「だって、得意科目を強化する必要ないでしょ？」

「まあそうだけど・・・。」

憂鬱そうな表情を浮かべた零にかおるは微笑む。

「零ちゃんは夏休みは、どうするの？」

「どうするって？」

「寮に残るの？実家へ帰る？」

「あ、私ね、両親が海外にいるから・・・寮に残るよ。」

「じゃあ、僕と同じだね。街で夏祭りもあるし、花火もあるし、課題ばかりじゃなくて少しは遊びにいけるといいね、」

「お祭りあるんだ！花火も見に行きたいな、」

ぱつと顔を輝かせる零を見てかおるは苦笑する。こんな顔が見られるなら、お祭りでも花火でも、何処へでも連れて行きたいと思ってしまうのは自分だけではないはずだ。

「他のみんなはどうするんだろうね？みんな実家へ戻るのかな？」

「さあ・・・多分ほとんど帰るんじゃないかな？春休みもそうだったでしょ？」

「俺は帰らないぜ、今年は姫君がいるからな。」

いつもの様に、突然現れて後ろから零を抱きしめる伊織。ものすごく不本意ながら、そう言う状態に慣れてしまった自分が悲しい。

「みんながいるところでそう言うことしないでッ！」

「人がいなりやいいんだな？」

「そう言う意味じゃないっ！」

クラスメイトも毎回繰り上げられる光景にすっかり慣れてしまったらしく、誰一人反応しない。

「伊織、僕の目の前で零ちゃんを抱きしめるなんて、相変わらずやつてくれるね？」

「・・・おっと、いたのかナイト様？」

「ずっといたよ。」

「俺の目には愛しい姫君しか見えてなかったんだ、悪かったな。」

「いい加減、僕の零ちゃんに手を出すのはやめろ。」

「残念だが、零は俺のもんだぜ？いくらナイト様でもそう簡単には渡せねーな。」

「じゃあ、真剣で決闘でもする？」

「ああ望むところだ。いつでもいいぜ?」

「ちよ、ちよつと!ちよつと!もうやめてよ二人とも……。」

……二人とも、過激すぎるよ……。

かおるはあのパーティー以来、前にも増して零の側にいるようになり、それに呼応するように伊織の過激さも増しているような気がする。前まであまり公然と発言をしなかったかおるが今は堂々と零の事を好きだと言い、零に声をかけようとする生徒達に対して怒りを露にする。

そんなこともあり、気が付くといつも3人で行動している事が多く、いつのまにかそれが当たり前のようになってしまうていた。顔をあわせればすぐ口論を始めるかおると伊織だったが、お互いに牽制しあっているだけで手を出すわけでもなく、お互いを認めつつ競い合っている。

「お前ら席に着け!夏休みの課題を配るからな!覚悟しとけよバカども!……おい、伊織はクイーンだろうが。零を放してさっさと行け、」

「とんだ邪魔が入りやがった。じゃまた後でな。」

……せんせー呼び捨てやめてくださーい。

「先生こそどさくさにまぎれて零ちゃんの肩を抱いたり呼び捨てにするのはやめてください。……零ちゃん、行こう、」

おー怖い怖い、と竹川は大げさに怖がって教壇に上がる。個人別の成績に応じた課題。一人ずつ名前が呼ばれ、各教科のテスト結果の一覧と共に、その結果に応じた個人別の課題が手渡される。

「次、かおる!……相変わらず優秀なこつた。これ課題。」

「どうも、お褒めいただきまして、」

次々と呼ばれるクラスメイト達。かおるに手渡される課題は明らかに量が少なく、彼の優秀さを物語る。

「……佐倉!」

「はっはいっ！」

「お前は・・・数学とドイツ語。自覚アリか？ならいい。お前まだ優秀な方だぞ。」

手渡された課題は数学の問題集が10冊にドイツ語の本が5冊とその5冊分の感想文を全てドイツ語で書いて提出する、と言うもの。受け取った零はその重さよりも内容に眩暈がした。

「零ちゃん、持ってあげる・・・大丈夫？」

すかさず、いつの間にか横に来ていたかおるが零の手から課題の束を奪い取る。

零の次に呼ばれたクラスメイトは持ちきれない課題を出されてすでに撃沈していた。

「零ちゃんは優秀だよ？とっても。自信持つてね。」

につこりと微笑むかおるに零は少しはに cand、大量の課題に溜息を付く。これだけの量が本当に夏休みの間にこなせるのか不安になる量だ。

・・・数学の問題週10冊って単純計算でも3日で一冊くらいはやらないとダメってことだね・・・しかもあのドイツ語の本超分厚いし・・・感想文もドイツ語って殺人的だよ・・・。

得意科目の課題がない、ということは息抜きをする時間もない、ということだ。要するに、夏休みと言う名の苦手克服教科月間と言うわけだ。さすが超進学校だな、と零は内心思いつつ、深い溜息を付いた。

046：課題の山（後書き）

強引なヒト好き……。そろそろかおると伊織から離脱して駿と健が登場します。

激甘モードに突入するのは早くて9月後半（小説内）か、10月くらいを予定しております……。早くそこにたどりつきたい私……。

047：プラネタリウム・1（前書き）

夏休み初日のお話。 零×かおるです。

047：プラネタリウム・1

気が遠くなるような課題と共に始まった夏休み。寮生達のほとんどは実家へ帰省してしまい、残ったのは零とかおる、伊織、駿、健の5人。修学旅行の時みたいだね、と笑う零にそれぞれ複雑な思いを抱いて笑い返す。

夏休みの初日から、零はとにかく膨大な量の課題を一刻も早く片付けたくて朝食の後部屋に籠って数学の問題集を開く。何となく読書は夜にするもの、と決めていて分厚いドイツ語の本は後回しになった。

「・・・一問目から超難しいし・・・。」

普通問題集の最初って、単純に因数分解とか、そう言う頭の体操的問題が載ってるものじゃないの？と内心毒づきながら、問題集を眺めて溜息を付く。これでは先が思いやられる。

悩むより、出来る問題からサクサク行こう、と零が問題集をめくっているのとドアをノックする音がしてかおるが顔を出した。

「・・・あ、ごめんね？邪魔しちゃった？」

「うっん、邪魔って言うか、すでに一問目からギブアップ状態なの。」

私には数学の才能がないみたい、と肩をすくめる零の肩越しに問題集を覗き込んだかおるは結構難しいね、と零に同情して微笑む。

「・・・この問題は、ここをエックスと仮定して・・・。」

「あつ、そうか、そうだよね、かおる君すごいなあ、見ただけですぐ解っちゃうんだ、」

「たまたま、この問題は、ね。数学なら健に聞くといいよ。彼は数学だけは天才的だから。」

今頃数学以外の課題の山に埋もれてると思うけどね、とかおるは笑う。

そういえば、健は数学100点だったような・・・と張り出されて

いた順表を思い出す。数学の順位は確か、健、かおる、駿の3人がトップスリーだったな、と順位表を思い出して溜息をついた。

「大丈夫だよ、零ちゃん。僕でよければ少しくらいアドバイスできると思うし、そんなに哀しそうな顔しないで？」

「あ、うん……。頑張るね。ありがとう。……。かおる君の用事は？」

膨大な課題の量に落ち込んでいた零だったが、思い出したようにかおるに尋ねる。

「ああ、零ちゃんの手が空いた時でいいんだけど、ちょっと付き合っただけいい場所があつてね。そのお誘いに来たんだ。」

「うん、いいよ。どこへ行くの？」

「期間限定のプラネタリウム。聞いた事ない？日本人が作った世界最大の星の数を映すプラネタリウム。」

「あつ！知ってるよ！観たかったんだ！」

「お父さんが零ちゃんのために、ってチケットを送ってきたんだ。」

僕には一度も贈り物なんかくれた事がないのに、と冗談めかして笑うかおるの言葉が耳に入らない程に零は舞い上がっていた。世界最大の星を映すと言うプラネタリウムのウワサはかねてから聞いている。星空の好きな一個人が開発したもので、上映権や場所の確保の問題で過去に一度しか上映されていないというのもプレミアが付く一つの要因だ。

「……。ただけだね……。聞してる？零ちゃん？」

「えっ？！あつ、すごいんだよねっ！そのプラネタリウム！私絶対行く！」

「……。全然聞いてないんだから。」

「えっ？！」

このお姫様は本当に星が好きなんだな、とかおるは思う。まるで夢を見ているようなうっとりとした瞳をしている零を見て、内心気の利いた事をした父を褒める。

「お父さんが、このチケットの代わりに一緒に食事に行こうって。」

交換条件付きなんだけど、」

イヤなら断っていいんだよ、と小さく微笑むかおるに零は首を横に振る。

「行くよ！だってちゃんとお礼も言いたいし。あつ、でも・・・」

「でも、何？」

「かおる君のお父さんと一緒に行くような場所に着ていく服を持っていないかも・・・」

「ああ、そんなこと？いつも通りの零ちゃんでもいいよ。僕も正装なんかしないから安心してて。」

「楽しみだなープラネタリウム！絶対、絶対すごいんだよっ！いつ行く?!」

こんな笑顔、初めて見るかもしれない、とかおるは思う。つい数分前まで浮かない顔で数学の問題を解いていたと思ったのに。

「ぼくはいつでも。零ちゃんが行くというなら今日でもいいよ。」

「ホント?!じゃあ今日行く!急いで準備するから待って!」

「・・・了解しましたお姫様。せっかくのデートだから、かわいい格好、期待してるよ?」

「わかったツ!頑張ってオシャレするから待って!」

零の飛び跳ねんばかりのテンションにかおるもつられて笑顔になる。この笑顔を作ったのが自分の父親だと思うと少し腹が立つが、それでもそんな零と共に過ごせる一日を手に入れた事を思えば感謝すべきだろうと思う。

・・・やったあ・・・あのプラネタリウムに行けるなんて!!

零は念願だった場所への入場が許されたことに半ば舞い上がり、うきうきしながら着て行く服を選ぶ。淡いグリーンの3段フリルのミニスカートに白いパフスリーブの甘いトップス。パフスリーブの袖の部分はレース素材で背中には大きなシフォンのリボンがついている。

「そう言えば、次デートする時はバッチリメイクして、って言われてたっけ・・・」

思い出して、ドレッサーの前に座る。あまりメイクをするのは好きではないが、メイクをすると背筋が伸びるというか、気分がONになる気がしてダラダラしてしまいがちな予定のない休みの日にわざとメイクをしたりもする。

・・・かおる君のバッチリメイクってどのくらいのメイクを言うんだろう・・・。

零は内思いながらアイラインを引いてマスカラをつける。ブラウンのシャドウでグラデーションをつけて最近流行の垂れ目メイクにしてみる。淡いピンクのチークを入れて、唇にグロスをのせた。

・・・こんなもんかな？

鏡の中の自分を見て、小さく溜息を付く。どうせ頑張ったって美人になれるわけじゃないし、と思いながら自分にOKを出して部屋を出ると、先に準備を終えたかおるが廊下の壁にもたれて待っていた。

「あつ、ごめんね？・・・遅かった、よね？」

「大丈夫だよ。おしゃれしてくれてる零ちゃんを部屋でのにびり待っていていらなくて・・・零ちゃんはかわいいね。本当にこのまま攫ってしまいたいよ。」

「か、かおる君それはちよつと大げさ・・・」

「大げさじゃなくて、本心だよ？さあ行こうか、お姫様。」

数分の後、零とかおるは校門の前で迎えの車を待っていた。

「ごめんね、零ちゃん、今日の夜の食事の件を連絡したら、どうしても迎えを出すって言ってきかなかったんだ、」

「ううん、大丈夫。またあのすっこいリムジンに乗るの？」

「さあ・・・どうかな？どの車が来るかわからないけど・・・。」

・・・どの車が、って、かおる君の家は何台も車があるんだ・・・そうだよ、セレブなんだし・・・。

やっぱり住む世界が違う、と零は思う。

「あ、一応、父がいる前では恋人のフリしてね？・・・僕としてはフリじゃなくて本当の恋人になりたいんだけど・・・」

少し哀しげな瞳で微笑むかおるに零はどう答えていいかわからずに曖昧に微笑んで視線をそらせる。

「零、こっち向いて？」

急に呼び捨てにされるとドキン、と心臓が跳ねる。

「僕は零ちゃんの事が好き過ぎて、どうしてもいいかわからなくなる時があるんだ。零ちゃんの気持ちに僕の方に向いていないってわかっていても、それでも一緒に居たいと願ってしまう。零ちゃんが笑ってくれたら嬉しくて、その笑顔を守りたいいつも想ってるよ？すぐ無防備になっちゃうからそばにいないと心配だし・・・。零ちゃんはどうしてもアイツじゃなきゃだめなの？」

澄んだ湖のようなまっすぐな瞳。かおるの想いが心に染みてズキズキと痛む。伊織の時もそうだった。まっすぐな瞳は零の心を惑わせる。何故こんなにもまっすぐに想いを伝える事が出来るのだろう。

・・・わかんないよ・・・。私、本当にどうしたいんだろう・・・？

伊織と話をしてから、《好き》だと言う想いが一体どういうものなのか解らなくなってしまうていた。一緒に楽しくて、側にいたいと思う事を《好き》だと言うのなら、かおるの事だって間違いない《好き》だ、と零は思う。

「私・・・かおる君の事も好きだよ？一緒にいたいって思うし、側にいてくれたら嬉しいし、けど・・・わかんないの。《好き》って、どういうことなのか、わからなくなっちゃったの・・・。」
零が戸惑いながらも一生懸命に言葉を選んで話す様子をかおるは小さく微笑んで見つめる。零の言葉は本心なのだ、と見ていればすぐにわかる。

・・・どうして零ちゃんはこんなにも・・・まっすぐに裏表なくいられるんだろう。本当に・・・惹きつけられる。

「僕の事をそんな風に思ってくれていてうれしいよ。・・・零、そ

んな顔しないで？」

自分の心をもてあましているような、困ったような辛そうな表情を浮かべた零の頬にそっと触れる。呼び捨てにすると頬を赤らめる零の反応が可愛くてつい呼び捨てにってしまう。

「零は笑っているのが一番可愛いから、笑ってて？・・・あ、迎えが来たみたい。」

目を上げると、真っ黒な高級車が一台走ってくる。リムジンでなかったことと強制的に会話が終了された事に、零は少なからずホッとしていた。

047: プラネタリウム・1 (後書き)

夏休み突入 夏休みは多分長ーーーーーになります(笑)。

048: プラネタリウム・2 (前書き)

引き続き、零×かおるのデートです。

048：プラネタリウム・2

8月：プラネタリウム・2

迎えの車に乗り込み、よく冷えた車内の空気にほつと息をつく。

8月ともなると外の空気は熱く熱せられて時に呼吸をする事さえ困難になる程だ。

「零ちゃん、すぐにプラネタリウムへ行きたい？少しお買物でもしようか？それとも少しドライブはどうか？」

せっかくのデートだからね、と微笑むかおるに零は少し赤くなる。

《なんでかおるじゃないわけ？》

不意に伊織に言われた言葉が蘇る。こんなにも優しくて、こんなにも素敵で、こんなにも想ってくれているのに。

・・・多分、私が一人を選べないだけ。

零は心の中で思う。過激なほどの想いを惜し気もなくぶつけてくる伊織、穏やかで優しく包み込んでくれるかおる、不器用だけどいつも見ていてくれる健、そして孤高の駿。その誰が欠けてもこの場所での思い出は成立しないような、そんな気がして。誰か一人を選ぶ事で何かが壊れてしまう事が怖いのかもしれない。

「お父さんとの約束は夕方だから、それまで零ちゃんが行きたいところへ行こう。」

「うん、ありがとう。プラネタリウムは早く終わっちゃうともったいないから、最後にとつとくね。」

いたずらっぽく笑う零にかおるは微笑む。

「じゃあ、お買物でも行こうか？零ちゃん雑貨屋さんとか、好きでしょ？」

雑貨屋、と言うキーワードに零の目が輝く。本当にわかりやすいな、とかおるは心の中で呟いて運転手に指示を出した。

「一つ、聞いてもいい？」

何？と首をかしげる零にかおるは立ち入った事かもしれないけど、と前置きをしてから切り出した。

「零ちゃん、前にN A S Aの研究者になりたい、って言ってたでしょ？」

「うん、」

「どうして、そう思うようになったのかな、って。」

「うーん、どうしてって聞かれるとちょっと困るんだけど・・・。」

私、星が好きでしょ？それで小さい頃アメリカにいたからよく両親がN A S Aへ連れて行ってくれてね、」

うんうん、と微笑みながら相槌を打ってくれるかおると話していると心が落ち着く。ふと、もしこの相手が駿だったら、と思うとそれだけで少し緊張してしまう。

「その時に宇宙の仕組みとか、今研究している事とか、いろんな話を聞いたり見たりして、自分もそこで一緒に研究したいって思ったのが最初で、」

「今はスペースコロニーとかね？アニメの世界みたいだけど宇宙で暮らせる擬似地球みたいな。それは大げさだけど、地球上の資源がなくなる前に、いかにして少ない資源や動力で暮らせるかって言う、そう言う研究をしたいと今は思ってるの。」

零ちゃんらしい夢だね、と微笑んでくれるかおるに零は少しはにかむ。

「かおる君は再生医療の研究、するんだよね？何だか地に足が着いてて、すごいな・・・。」

零の素直な印象にかおるは小さく笑う。

「さあ、ついたよ。お姫様？お気に召すといいんだけど。」

運転手がドアを開け、かおるが先に降りて手を差し伸べる。

・・・こういう所、本当に王子様みたい・・・。

いつの間にか、かおるの自然な行為に慣れてしまった零だが時々急に我に帰って恥かしくなる事がある。かおるの手に掴まって車を降りると、かおるはそのまま零の手を握って歩き出した。

数分歩いた先にあつた雑貨屋は、輸入物やアンティークなど品揃えが豊富で店内に入った瞬間から零のテンションは上がりっぱなしだった。目をキラキラさせて店内を見て回る零の姿をかおるは微笑んで見守る。

「・・・今日の零ちゃんはまた、とびきり可愛いな、

アンティーク調の小物入れを手にとつてうつとりと眺めている零を見てかおるは心の中で呟く。いつもストレートの髪が今日はふわふわの巻き髪で、思わず触れなくなる衝動に駆られる。

「欲しいものがありすぎて困っちゃうよー。どうしよう?」

「・・・せっかく来たんだから、買って行こう。今日の記念に。僕から姫への贈り物。」

そう言つて、かおるは零が手にしている小物入れを手取る。正直、こつと言う物のどこがいいのかあまり理解はできないが、キラキラしていたり、フワフワしているものを見ると零のテンションが上がる事をこの数分で理解した。それならこの小物入れは零にとってはドストライクなのだろうと思う。

「あつ、ダメだよ!それ高いし!今日の贈り物はプラネタリウムだけで十分だから。」

「プラネタリウムは僕の父からのプレゼントだから、僕からも何か贈らせて?お願い。」

かおるは半ば強引に零を説得して、ゆっくり見てて、と言い置いて会計をしに店の奥のカウンターへ向かう。途中、見た目にも美しいアンティークの万華鏡が目に残り、かおるは小物入れとともにラッピングする様店員に依頼した。

「・・・おい、あの店の中の子、見てみるよ、」

「超カワイイじゃん、」

「次のターゲット、決定?」

大通りを挟んだ向かい側を派手に学ランを着崩した3人の男子生徒

がアンティークショップの中を指差す。すれ違う人たちが皆彼らと目を合さないようにそそくさと通り過ぎていく。

「・・・あれ、白金の月島じゃねーの、」

「ああ、そうだな。」

「ふうん、そりやまた、面白いじゃねーか。」

「ごめんね？ かおる君。ありがとう。」

かおるが手にしている綺麗にラッピングされた贈り物を見て零は嬉しそうに笑う。かおるはいつも通りそんな零に優しく微笑みかけ、待たせていた車に乗り込むと次の行き先を運転手に告げる。

「この後、ゆつくり食事をしてからプラネタリウムへ行こうか。プラネタリウムまでは移動に少し時間がかかるから、丁度いいくらいの時間になると思うよ。」

「・・・さっき、北高の奴等がいたな。」

かおるは車の窓からチラリと外を見て思う。さっき一瞬目が合った気がした。自分を見ていたのか、零の事を見ていたのか、と思うと心がざわめく。

「・・・かおる君？ どうかしたの？」

不意に厳しい表情で黙り込んだかおるに不安を覚えた零が問いかける。

「え？ ああ、何でもないよ。ごめんね、ちょっと考え事しちゃって。」

かおるの表情がいつもの穏やかな笑顔に戻ったのを見て零は安心して車のソファーにもたれる。

「・・・プラネタリウム、楽しみだな・・・。」

「零ちゃん、プラネタリウム、楽しみ？」

「えっ？ 私、声に出してた？」

「うつん、顔にそう書いてあるから。」

かおるの言葉に思わず顔に手をやる零を見て、かおるは楽しそうに

笑う。本当にどうしようもなく無防備で、側にいないと心配で仕方がない。自分の前でだけこうあって欲しいと願っても、このお姫様はどこにいても誰といっても同じように無防備で、そのせいで関わった者達を虜にして行っている事に気付いてさえない。

「零ちゃん、好きだよ。」

不意に真剣な眼差しになったかおるの呟きに零は少し驚いた表情で頬を染める。

「・・・かおる君、ずるい、」

「・・・そうだね、でも、ずるくても少しでも零ちゃんの側にいられたら僕は幸せだから、」

できることなら、ずっと独り占めしたいと思ってるんだけど、とまっすぐに零の目をみてにつこり微笑むかおるに零は真っ赤になる。

「・・・どうしてそんな事、サラっと言えちゃうんだろっ・・・。」

頭の芯がククラクラするほど恥かしくて俯く。

「零ちゃん、もう少し側に行ってもいい？」

広い車内で離れて座っている零にかおるは問いかけ、零が答えるよりも先に肩を抱いて引き寄せる。

「・・・キャ・・・」

「僕では、零ちゃんの一番にはなれないかな？絶対に辛い思いや寂しい思いはさせないって約束するよ。零ちゃんは僕の側で笑っててくれたらいいから、」

かおるの腕の中は温かくて、居心地がいい。抱き寄せられていても強引ではなくそつと守られているように感じて安心できる。でも、と零は思う。その優しさに甘える事が、何故か出来ない。答えられずに黙っている零にかおるは続ける。

「僕は零ちゃんが誰の事を想っていても零ちゃんの事が好きだよ。

だから、いつも零ちゃんの隣にいられるように努力するつもり。零ちゃんにふさわしい男になってみせるよ、」

「そ・・・そんな・・・」

「・・・私にふさわしい、ってそんなの、言いすぎだよ・・・。どっ

ちかといえば、私がかおる君にふさわしくない、の方が正しいのに。戸惑う零にかおるは微笑む。

「誰が何て言つても僕は零ちゃんのことを好きだよ。他の男の人と話しているのを見るだけでも心が乱れるくらいに。」

それにね、とかおるはいたずらっぽく笑って続ける。

「僕は零ちゃんと思うよりもずっと零ちゃんの事を知ってるよ。何が好きで、何に喜んだり笑ったり怒ったりするのかも。」

「零ちゃんの好きなところをあげたらキリがないけど、僕は零ちゃんの全てが大切なんだ。」

眩暈がするようなかおるの言葉に零は胸が苦しくなる。物腰も言葉も穏やかだけれど、情熱的な言葉はやはりイタリアンだ、と零は思う。好きな女性にはとことん積極的で、情熱的なイタリアの男性。かおるほどの容姿と家柄があればそんな事必要ないだろうに、と思うと零は不思議で仕方がない。婚約を破棄してまで一般庶民の、何のとりえもない自分をここまで好きだと言い切るかおるの気持ちが零には理解できずにいた。

048: プラネタリウム・2 (後書き)

情熱的な告白・・・(* / \ *)

049: プラネタリウム・3 (前書き)

引き続き零×かおるです。UP遅れました・・・すみません・・・。

049：プラネタリウム・3

オープンスペースのあるおしゃれなカフェについた二人は、外の景色がよく見える席でゆつくりと昼食を取る。パスタと飲み物、デザートがセットになったセットメニューだが、全てのメニューから好きなものを選ぶ良心的なシステムで女性に人気がある。

店内は女性客が大半で、店に入った時からチラチラとかおるに視線が投げられている。

・・・やっぱり、かつこいい人は注目されちゃうよね・・・。

零は内心そう思いながら、同じテーブルについている者として、かおるに恥をかかせないように、と少し姿勢を正す。かおるのテーブルマナーは完璧でいつ見ても参考になる。

「零、どうしたの？」

そわそわと少し落ち着かない様子を見せた零にかおるが微笑みかける。いつもそうだ。ほんの少しの変化を敏感に察知してくれる。

「え？う、うん、なんでもないよ。ちよつと冷房の風が寒くって・・・」

零の言葉にふと見ると、零の柔らかな髪が風にゆれている。

・・・僕とした事が、零ちゃんに見惚れて気がつかなかった・・・。
かおるは内心、もっと早くに気付いてあげられなかった事を悔いながら、持ってきていたジャケットを零の肩にかける。その様子を見ていた周りの女性達から一斉に羨望の眼差しが注がれた。

「ごめんね、もっと早く気付いてあげられなくて・・・肩、冷えちゃってるね。」

そつと零の肩に触れたかおるが呟く。

「あ、大丈夫だよ？ごめんね。ジャケットありがとう。」

いつもなら、言われなくても絶対に気付いたはずなのに。零と出かけることに舞い上がっているのか、もっと別なことが原因なのか、とかおるは内心思う。

さつきから、二人でゆつくりと食事を取りながら今まで聞いた事のなかった様々な話を聞いていた。零の家族のこと、前に住んでいた場所の事、好きな作家の本の話や、音楽の話、幼い頃に住んでいたアメリカでの話など、零に対する興味は尽きない。

「ねえ、かおる君は？ かおる君の話も聞かせて？」

2時間以上かけて昼食を取り終えると、再び車に戻ってプラネタリウムへ向かう。移動には2時間ほどかかるため今から移動して丁度夕方頃につくはずだ。

車に乗り込んでしばらくの間テンション高く星座の話をしていた零だったが、途中でうとうとし始める。

「・・・小っちゃな子供みたいだな。」

かおるは小さく微笑んで零の身体を抱きよせる。自由奔放と言うか、無邪気と言うか、自分に素直でまっすぐな零は見ていて飽きない。

「・・・また目が覚めた時真っ赤になって慌てるんだろうな、

想像すると少し笑える。何度無防備になっではいけないと忠告してもすぐに無防備になってしまう可愛い姫。心配で目が離せなくて、そんな零を守りたいと思ってしまう。

「・・・零・・・」

そつと名を呼んでみる。自分の肩にもたれかかる零の肩を抱き寄せて名を呼ぶだけでこんなにも幸せな気持ちになれるのに、とかおるは思う。

「好きだよ、零。」

プラネタリウムに着いた二人は予想通りの盛況ぶりに圧倒されながら長蛇の列を尻目にVIP用の入り口をくぐる。招待券のある人は少なくともすぐに待合室に通された。

「かおる様、お待ちしておりました。」

「・・・ああ、武智さん！こんなところで会いするなんて。」

「・・・知り合い？」

「・・・噂通り、美しいお連れ様ですね？さすがかおる様。」

「その情報は父からですか？・・・零が綺麗なのは本当ですから別に噂が一人歩きするのはかまわないですが・・・。」

かおるの答えに零は思わず頬を染める。武智さんはその様子を見て、しきりにうらやましいと呟く。

「お二人のために、特別シートを準備してありますから。」

意味深にそう言っただけで微笑んだ武智さんは、準備があるのでこれだと待合室を出て行った。

「・・・零、急にごめんね。さっきの・・・武智さんは父とは旧知の仲なんだよ。自分のやりたい事を思うままに実現してる自由人。でもどんな事も実現させてしまう才能は本当に尊敬できるよ。」

それにしても、とかおるは呟く。

「このプラネタリウムが武智さんのプロデューサーだったとはね・・・。正直驚いたよ。こう言うロマンチックなことには興味がないんだと思ってたから。」

彼は超リアリストなんだよ、といったずらっぱくかおるは笑い、待合室のソファアーに零を座らせた。

程なくして上映の準備が整った、と武智さんが待合室に戻ってきた。

「かおる様はこちらへ・・・。」

意味深にニコニコと笑いながら自ら二人を案内する武智さんは何故かとても楽しそうで、零とかおるは思わず顔を見合わせる。超リアリスト、と言うかおるの評価は案外間違いないのかもしれない、と零は内心想う。

「・・・ここは？」

「特等席です。お二人用の。」

ではごゆっくり、と武智さんはかおるの肩をポンと叩いて忙しい忙しい、とアリスの白ウサギを思わせるセリフを口にしながら小走りに去っていく。

「とりあえず、座ろうか？」

「う・・・うん。」

二人が案内されたのはプラネタリウムの丁度中心に程近い場所で、大きな球体の中に大き目のソファーのような椅子。

「ねえ、中に入っちゃったら上、見えないよね？」

「・・・そうだね。」

球体の中に入ると、宇宙の雰囲気を出すためか蒼色LEDの仄かな明かりが点され、外のざわざわした人の声が遮断されてさながら宇宙にいるような気分になる。

「なんか、ホントに宇宙みたいだね？ 静かだし・・・」

ちよっとワクワクしちゃう、と楽しい笑顔を向けられると思わずつられて笑ってしまう。

「零ちゃん、立ってないで座ったら？」

一見ソファーの様に見える椅子は座るとふかふかとして心地いい。

「attention please・・・」

邪魔にならない音量で警告音が鳴り、継いで武智さんの声が響く。

『かおる様、特別室はいかがでしょう？ ではこれから夢の世界へとお二人をお連れいたします。心行くまでご堪能下さい。座席は動きますので、深く腰をお掛けになってお待ち下さいませ。』

武智の声が途切れた後、二人の座っているソファーのリクライニングがゆっくりと倒れ、球体の部屋そのものが回転してちょうど仰向けに寝ているような形になった。

「・・・なんか、すごいね？」

「そうだね。」

フカフカしたベッドに寝転んで天空を見上げているような感覚。会

場全体のライトが落とされているため、辺りは真っ暗ですぐ隣にいるはずのかおるの姿さえ見つけることは困難だ。

「・・・零ちゃん、」

小さな声で名を呼ばれる。

「何？」

「零ちゃんがいなくなってしまうそうで不安だから、もう少し、近くへ行ってもいい、」

「・・・え・・・？」

零が問い返したその時、フワリとかおるの手が伸びて零の身体を抱き寄せる。

「えっ、あ、ちょ・・・」

「それに、この方がきつと、見やすいと思うよ。」
すぐ耳元で囁かれる声。

「・・・う、う、腕、腕枕？！」

一気に心拍数が跳ね上がる。暗くて見えなくても、すぐそばにかおるの鼓動が聞こえる。かおるの鼓動も零と同じで、冷静な声のトーンとは裏腹に暴れている。

「・・・わぁ・・・すごいっ！」

ドキドキが加速しすぎて頭の中が沸騰しかけた時、真っ暗だった視界に見たことのない星空が広がった。人間が成しえる事の出来る最大数といわれている星の数を再現したプラネタリウム。奥行きさえも感じる圧倒的で、言葉を失うほどの美しさに零は息をのむ。

星々は互いの輝きの中にその身を隠し、よく知っているはずの星座でさえも見失いそうになる。会場には、囁きかけるような声で誕生したばかりの星や星雲についての解説が流れていた。

零と同じように見たことのない星空に魅入っていたかおるだったが、ふとすぐそばの零の顔を見る。

うつとりと、空を上げる零の瞳。ささやかな星々の光に照らされた零は本当にフツと闇にまぎれて消えてしまいそうに儚く見える。星々の輝きを通り越して宇宙そのものをを見つめているような、透明

で澄んだ瞳にかおるは見惚れる。

時間の流れとともにゆっくりと姿を変える星空。零はただじっと、星の行方を見つめている。今彼女は何を感じ、何を思っているのだろう、そう思わずにはいられない程の美しい横顔を、かおるは見つめていた。

「三日月の雫を受けて星は夜空に時を刻む・・・」

「・・・え？」

「小さい頃、おばあちゃんがね。泣き虫な私に言ってたの。零の涙は三日月の雫になって、零れ落ちる雫が星を輝かせるんだよって。その星が夜空を回ってみんなに時間を知らせているんだって、だから零の流す涙は綺麗で無駄じゃないんだよって。」

「・・・素敵なおばあさんだね。」

「うん。大好きだよ。なかなか逢えないけど・・・。」

「でも、よつぽど零ちゃん泣き虫なんだね。あんなにたくさんの星を輝かせるなんて。」

かおるの言葉に零は思わず笑う。そう、あれだけの星を輝かせるほど、私はいつも泣いていた。幼い頃だけじゃない。ここに来る、ほんの少し前まで。だけど、泣くたびに涙が星の輝きになるとそう信じる事でほんの少しだけ救われてきたんだ。

「私ね・・・」

零の瞳はまっすぐに星空を見つめながら、小さな声で話し始める。転校するまでの、一人ぼっちの時間の事を。

「零、もういい。」

「・・・っ?！」

零の言葉を遮ってかおるは腕枕をしていた腕で零を抱き寄せ、そのまま強く抱きしめる。少し聞けばすぐにわかる、ただの嫉妬ですつと零を苦しめていた”友人”に対する怒りと、それでもその友人達を悪く言わない零への愛しさと、泣かずにはいられなかった零の心の痛みを思うと胸の奥が苦しくて息が出来なくなる。

「僕は・・・絶対に零を一人にしない。何が事が起こっても絶対に

零の味方だから。だから、ずっと僕の側にいて。僕の手が届かないところで零が少しでも辛い思いをしているんじゃないかと、そう思うだけで苦しいんだ。」

「どんなことからでも、零を守るよ。お願いだから、側にいさせて欲しい。」

「・・・かおる・・・君・・・」

「好きだよ、零。これ以上零が傷つくのを、僕は見たくない。」

強く抱きしめられる腕が熱い。熱いかおるの胸の中で、暴れ狂うその鼓動を感じる。

「《好き》と言う事がどういうことか分からないって、言ったよね？分からなくてもいい。僕の事を好きじゃなくてもいい。僕が零の事を好きな気持ちは変わらないから。だから・・・」

いつも穏やかで優しいかおるの腕が痛いほどに強くて、切ないほどにまっすぐな言葉に零の心が悲鳴を上げた。

049:プラネタリウム・3 (後書き)

プラネタリウムはこれでおしまい！

次は・・・夏休み恒例の・・・です (笑)

050：届いた手紙（前書き）

今回はお手紙、のみです。

050：届いた手紙

夏休みの初日にかおるとプラネタリウムに出かけて以来、零はほとんど部屋にこもって鬼のような課題と格闘する日々を送っていた。昼間は数学、夜はドイツ語、気がつくとき深夜になることも多い。

零ちゃんに手紙が届いてるわよ、と寮母さんに手渡された一通の手紙。差出人の名前はなく、美しい流れるような文字で書かれた宛名。手紙なんて珍しいな、と思いながら零は部屋に戻って封を切った。

『突然の便りに驚く君の顔を想うと幸せな気分になれる僕がいる。

ぼくの心にはいつも君がいて、

君の幸せを願っている。

時が過ぎ、時代が変わっても絶対にこの想いは変わらない。

君に出逢えた偶然は必然で、その必然を運命と呼べるのなら

僕はその運命に従って生きる。

今と言う瞬間に一生懸命向き合う君の姿が

僕と共にあればと願う。

今と言う瞬間は未来でもあり、過去でもあるから。

今この瞬間は最も新しい未来で、
今この瞬間が重なって過去を作る。

だから、そんな今を君といたい。

僕の全てに、いつも君がいるように、

僕の思い出の全てに　いつも君がいるように。

この命を捧げて君を守りたい。一人ぼっちにならないように。

ほんの一瞬でも、一秒でもいい、

君が僕を見てくれるなら、その瞬間のために僕は生きる。』

淡い桜色の便せんに美しい文字で書かれた短い、詩の様でもある
手紙。

・・・あの、本のメモと同じ・・・？

零の脳裏に、図書館で借りた本に挟んであったメモの記憶が蘇る。

美しい文字で綴られたラブレター。熱くて切なくて心の奥をしめ
つけられる。こんな風に思われたらどんなに幸せだろう、と心が温
かくなつた日の事を思い出す。

転校してきたばかりだったあの日に読んだあのメモが自分宛だつ
たとは思えないけれど、心臓がドキン、と高鳴る。零がここにいる
事を知っている人。図書館の本にメモをはさめる人、この学校の生

徒であることは間違いない。

・・・誰、なんだろう・・・？

見たこともない、誰かも分からない差出人の事を思う。きっと、ロマンチストで繊細で、とても情熱的な人なのだろう。

・・・会って、みたいな。

ラブレター、と言うよりは恋文、と言うほうがぴったり当てはまる手紙。持っているだけで一人じゃないと勇気付けられるような気さえしてくる。いつも見守ってくれている誰か。それが誰でも、その人が側にいてくれたらきつと幸せだろうと思う。

不思議と高鳴りはじめた心に戸惑いながら、零はそつと手紙を抱きしめた。

050：届いた手紙（後書き）

恋文・・・。

メールじゃなくて、手紙。

しかも字が綺麗。NICE！

051：夏休みの課題・1（前書き）

すみません、最近週一ペースになってしまっています・・・（>

）
これからも頑張って更新します どうぞよろしくお願いいたします。
今回はオールスターです

051：夏休みの課題・1

夏休み、とは言ってももしかすると普段の学園生活以上の課題に埋もれ、零は夏休みの初日にかおるとプラネタリウムに出かけて以来、ずっと寮に引きこもって課題の山と格闘していた。食事の時間にかおるが迎えに来てくれなければずっと部屋に引きこもっているのではないかと思うほどに、あつという間に時間が過ぎる。朝から夕食の時間までは数学、夕食の後はドイツ語、と自分の中で時間を割り振ってはいるものの、両方とも苦手な科目だけになかなか思うように進まない。

「はぁ……」

「どうしたの、零ちゃん。溜息なんかついて。」

夕食の時間、いつもよりゆっくりと食事を取った零はかおるが淹れてくれた香りの良いコーヒーを飲みながら思わず溜息をつく。

「課題。難しすぎて頭が沸騰しそうなの。」

「そんな眉間にしわ寄せてちゃだめだよ、」

につこりと微笑んで額に触れられると今更ながらドキドキしてしまう自分に零は慌てる。

「そうなんだけど……」

しゅんとする零にかおるは微笑む。

「健に比べたら零ちゃんはまだまだ楽なんだから、あんまり落ち込まないで。」

ほらみてごらんよ、とかおるはちょうどその時食堂に姿を現した健を指す。片手に英語の課題図書と思われる本を持ってふらふらと現れた健を見て零は「数学以外がダメ」だと言っていた健の課題の量を思い出す。

「零ちゃん……助けて……」

食堂に零の姿を見つけた健はふらふらと近寄って空いている隣の席

に座る。

「ひ・・久しぶりだよな？健君最近食堂でも会わなかったし・・・大丈夫・・・？」

二教科でも泣きそうな自分の課題を思うと、健の事を笑えない、と零は思う。

「零ちゃんの顔見たら元氣出たぜ！さあ飯食うぞー！」

英語の本を置いてカウンターへ食事を取りに行った健を見て零は思わず笑う。健はいつも元氣で話すたびに笑顔になれる。

「・・・英語なら、すぐ終わるのになぁ・・・」

健の置いていった本をパラパラとめくって零は溜息をついた。

「ドイツ語なら、俺が教えてやる。零はリスニングが得意なんだろ？俺様が朗読してやつてもいいぜ？」

「いつ、伊織君っ！」

慣れてきた、とはいえ、いつもいつも現れてすぐに背後から抱きしめられると心臓が飛び跳ねる。

「伊織、離れろ、」

「いやだね。」

かおるに睨まれると伊織の腕がさらに強く零を抱きしめる。

「ちよ、ちよっと！伊織くん、離してっ！」

「おい、そのくらいにしておけ、」

ふらりと現れた駿が伊織の肩を掴む。相変わらずの無表情で、少し不機嫌そうな声。

「・・・痛つてえな・・・そんな力入れんなよ。お前も姫さんを守りたいってか？硬派な駿様が姫に構うとまたバカどもが騒ぐぜ？」

不満そうに駿を睨みながらも伊織は零を離し、自分より背の高い駿に挑戦的な視線を向ける。

「俺はお前達と違ってそう言う事には興味がないんだ。」

「へえ？興味がないのにいちいち俺に絡む理由が知りたいね。興味がないなら姫が誰に抱かれていようが関係ないだろ？」

「・・・だ、抱かれるって人聞き悪いっ！」

そう思いながらも零は伊織と駿のやり取りに口を挟むことが出来ずに黙って見守る。当事者であるはずなのに、かおると伊織と駿、そして今は我関せずを決め込んで食事をしている健、と4人の男前に囲まれていることに気付いて今更ながらに困惑する。もしこの4人が本気のキメ顔で写真を撮ったら本当にヘタなアイドルよりもかっこいいと思う。

「ああ、関係ないね。だが自分の力で何も出来ないチビを助けたってバチは当たらないだろう。嫌がられてる事くらい、いい加減気付け。」

駿は零の方を見向きもせずになんか言つと不機嫌そうに伊織を睨む。身長があるだけに駿が怒ると迫力がある、といつか健が言っていた言葉を思い出す。

「嫌がられてるかどうかは、抱いてる俺が一番良く分かってるさ。なあ零？」

「えっ?! なつ、何、」

「言つてやれよ。いつも抱きしめられて体温が上がるくらいドキドキしてます、ってさ。」

「ちよっ! な、何言つて・・・!」

伊織の言葉が真実なだけに、零は反射的に真っ赤になる。

「ほらな?」

ニヤリ、といったもの毒のある笑みを浮かべた伊織を駿は一瞥して、呆れたような溜息を残して食堂を後にする。

「素直じゃないねえ、相変わらず。」

せっかくチャンスをくれてやってるってのにバカなヤツ、と伊織は駿の背中を見送りながら呟いて、ニヤニヤ笑いながら零の隣に座る。「で、どうすんだ? ドイツ語? 特別講師やってやろうか?」

・・・読んでほしいけど、何かヤダ。

なぜか伊織の言葉は素直に受ける気になれない。からかうような口調のせいなのか、探るような視線のせいなのか、と零は思う。

「お前のは下心が見え見えだからダメなんだよ、バーカ。いい加減

にそのやりたい放題、やめたらどうなんだ？」

食事を終えた健が食器を片付けながら伊織に声をかける。

「ね、零ちゃん、俺の英語の課題、手伝ってよ。俺もリスニングは得意なんだ！零ちゃんが読んでくれたら間違いなく上達すると思うし！」

「え？私？うん、いいよ。」

零の返事にざまあみろ、とでも言わんばかりの得意げな表情で伊織とかおるを見る健と、珍しく少し慌てるかおる。

「れ、零ちゃん？健の手伝いしてて平気なの？」

「え・・・？あ・・・一日くらいなら大丈夫かな、って・・・」

「俺、零ちゃんの数学手伝うし！それなら大丈夫だろ？！」

「あ、うん！ありがとう。」

数学を手伝う、と言われて嬉しそうに笑った零を見て、かおると伊織は内心舌打ちをする。

後で零ちゃんの部屋へ行くよ、と100%の笑顔で食堂を後にした健を見送り、零も席を立つ。

「一人でやってるよりはかどるかもっ！頑張ろーっと・・・あれ？二人ともどうしたの？」

「零ちゃん？数学なら、僕も教えてあげられる、って言ったのに僕には頼ってくれないんだね。」

「えっ？！そ、そんなつもりじゃ・・・」

「俺だって零の役に立ちたいと思ってるだけなのに、健は良くて俺はダメなんて信用ないんだな、俺って・・・」

「えっ？！ち、違うよ、そんなんじゃないって・・・」

目に見えてテンションの下がった二人に零は慌てる。

「か、かおる君に迷惑かけちゃいけないって思ったし、伊織君だって、自分の課題あるでしょ？だから、私自分の事は自分でやろうと・・・」

「僕は零ちゃんを助ける事を迷惑だ何て思ったことは一度もないよ」

「俺はもう課題なんかとづくに終わってんだよ。だからこの身体は

零のために空いてるんだ。だったら問題ないよな？」

「えっ?! あ、そ、それじゃあ、いい、けど・・・」

「じゃあ、今日は健に譲るけど、明日からは僕に数学を聞くこと、いいね？」

「明日からは俺様が直々にドイツ語レッスンしてやるから夜は開けとけよ?」

いいながら、明らかに二人の間に飛び散る火花に零は溜息をついた。
・・・な・・・なんでこうなっちゃうの・・・?

051：夏休みの課題・1（後書き）

お気に入り登録して下さっている方 マジテンションMAXになります！

まだまだへたくそな文章ですが、どうぞよろしくお願いいたします

052：夏休みの課題・2（前書き）

今回も引き続きオールスターです

洋書のタイトルは、フィクションですう r（^ ^*）（）

052：夏休みの課題・2

《何もないと思うけど、部屋のドアは開けておくようにね。》

かおるに言われた通り、零は部屋の外開きのドアを開け、閉まっ
てこないようにストッパーをかける。部屋で二人きりになる、と言
えば確かにそうだ。

「零ちゃん、お待たせ！」

いつもの100%スマイルで健が開いたままのドアをノックする。
手にはノートと英語の分厚い本。

「あれ？辞書要らないの？」

「零ちゃん辞書持つてないの？」

「・・・英英辞典ならあるけど・・・英和辞典は持つてないんだ。」

「すっげ、マジでネイティブ並みなんだ。ちよつと借りて来るわ。
かおるー！！」

「・・・相変わらず、元気いっぱいだな、健君・・・。

健の様子を見て、零は思わず微笑む。

「・・・相変わらず健は騒々しいね。何か用？」

めずらしく、明らかに少し不機嫌そうなかおるの対応に零は少し驚
きつつ、部屋の中から小さく手を振ってみる。かおるは目を上げて
零の姿を認めると、いつもの様になつこりと優しく微笑みを浮かべ
た。

「いや、英和辞典借りようと思ってさ。零ちゃん持つてないって言
うから。」

「ああ、そうだろうね・・・はい、どうぞ。なんなら僕も参加しよ
うか？零ちゃんの綺麗な発音を僕も聞いていたいし。」

「じ、邪魔すんなよっ！せっかく俺が苦労して・・・」

「邪魔はしないけど、少しでもおかしなマネしたら、どうなるか分
かってるよね？」

「お、おかしなマネって、伊織と一緒にすんじゃねーよ！」

ならいいけど、とかおるは健に辞書を手渡し、零に向かって微笑む。
「零ちゃん、少しでも健がおかしなことしたら、大きな声出すんだよ。」

「しねえつつてんだろ！」

・・・かおる君って時々本気なのか冗談なのかわかんないな・・・。

「じゃあ、始めよつか！私、ゆつくり読むね。だから、健君は後で感想文が書けるように訳しながらノートにメモを取ってね。」

本のタイトルは『Freedom on the other side of the wall』壁の向こうの自由、日本語で読んでも難しそうだな、と零は読みながら思う。

健がリスニングは得意だ、と言ったのは本当のようで、ゆつくりと読み進めると途中で辞書を引くこともなくノートにメモを取っている。別に英語が苦手なわけじゃないんだな、とよそ事を考えながら読んでいると不意に視線を感じて目を上げた。

「い・・・伊織君・・・？」

「俺に気にせず、続けるよ？面白そうな内容だから聞きに來ただけだ。」

「・・・気になるんだけど。」

「僕も仲間に入れてもらっていい？いい本だね、それ。」

「・・・かおる君まで・・・」

「俺も内容を知りたい。」

「くつ、久遠君・・・」

「はい、零ちゃん続きよろしくね。」

「・・・もう、結局みんな集まっちゃったよ・・・。何か人数が多いと読みにくい・・・。」

本の内容は、壁で別たれた東西ドイツを題材にした悲恋の物語。人と人が対立する哀しさ、戦う事の愚かさ、自由や愛の尊さを壁と言

う無機質なもので表現していて引き込まれる。どんなに想っても届かない想い。言葉さえも届けられない苦しさ。冷たい壁に遮られたほんの一メートル足らずの距離が全てを別つ現実。

「・・・ちよつと、休憩にしようか？」

読み進めていくうちに、すっかり感情移入していた零の声が少し悲しみに震えたのを感じたかおるが、物語を遮る。

「・・・うん、そうだね。」

「・・・危ない、もうちよつとで泣くとこだった・・・。」

ふう、と息を付いて時計を見ると時間は12時前を指している。本の残りは後20ページ程度。これなら後数分で読破できそうだな、と零は小さく微笑んだ。

「私、お水買ってくるね。みんなも何か飲む？」

「あ、俺、行ってくるよ。読んでもらってるから、お礼に。」

「じゃあ俺コーヒー頼むわ。ブラックで。」

「僕もお願い。」

「俺も」

「なっ、何でお前らの分まで買ってこなきゃいけないーんだよ！」

「健の課題に付き合ってたやってんだ。あたりまえだろ？」

「そう言うこと。」

なんだよ、と文句を言いながらも健は部屋を出て行く。その様子を見て結局みんな仲良しなんだな、と零は少し嬉しくなって微笑む。

「どうしたの？ 零ちゃんなんだか嬉しそうだね？」

ずっと読んでたけど、疲れてない？とかおるは零を気遣いながら微笑みかける。

「みんなが仲良しだから、見てて嬉しくなっただけ。」

「仲良し？ 俺たちが？ 冗談じゃねえよ、なあ？」

「・・・俺はどっちでも？」

「僕は仲良しだと思ってるけど？」

「俺は零とだけ仲が良けりゃそれでいいんだよ。」

小説読みながら泣きそうになって可愛いやつ、言いながら伊織はソ

ファーに座っていた零の隣にひよいと座って肩を抱き寄せる。

「なっ、泣きそうになんかなってないしっ！」

慌てて否定するが、ばれていたと思うと恥かしくて顔が火照る。かおるが休憩と言って止めてくれたのもきつと、泣きそうになっている事に気付いてくれたからかもしれない、と思う。

「そうやって赤くなつて否定するあたり、ホント可愛いんだよねあ、零は。泣きたい時は泣いていいんだぜ？俺が慰めてやるから。」

零を自分の膝の上にのせる勢いで抱き寄せた伊織は間近に零の瞳を覗き込む。

・・・ちよ、ちよ、ちよ、ち、近い！近いって！

近すぎて焦点があわせられない程近づいた伊織に零は思わず硬直する。

「伊織、やりすぎだ、」

駿の不機嫌そうな声に伊織はニヤリと笑い、零を抱き寄せたままで言う。

「俺が俺の好きな女を口説いて何が悪い？」

「口説くのと無理強いするのは違うだろう、」

「へえ？無理強いねえ。これが無理強いしてるように見えるか？」

言って、腕の中で大人しくしている零を指す。

「・・・私、諦めてるだけだよ？」

指差された零は少しむっとして伊織を睨む。最初は心臓が止まるほど驚いたりしたが、慣れたというのもある。強引で、時折怖く感じる事もあるが基本的に優しく困っている時にふらりと現れて助けてくれたりする事に零は気付いていた。

「まあそう言うなよ、零。そのうち、こうされないと淋しく感じるようになるさ。」

伊織は余裕の笑みでそう言うと、これ以上やつてるとあいつらに殺されそうだと明らかに怒りの表情を湛えているかおると駿を見て零を解放して部屋を出て行った。

052：夏休みの課題・2（後書き）

久しぶりに連日更新できました（、、*）
次回は零×伊織です。

053：夏休みの課題・3（前書き）

前回いろいろと・・・不備があるまま投稿してしましまして（^^）
大変お見苦しくて申し訳ありませんでした・・・。
今回はかなり甘めですう

053：夏休みの課題・3

「ようやく、俺に頼る気になったのか？おせーんだよ」

・・・や・・・やっぱりやめとけばよかったかも・・・。

零は先日自分が英語の本を朗読した事で、思った以上に健がすなり英語を受け入れていたのを目の当たりにして、意を決して伊織に声をかけたのだが、予想していたとは言え、超上から目線でガシガシと頭を撫でられて早くも後悔していた。

零の部屋を訪れた伊織はソファに腰を下ろして零の課題図書のパラパラとめくると、なるほどね、とニヤニヤ笑い、こっちへこいよ、と零を手招きする。

・・・自分の部屋なのに、この居心地の悪さってなんなんだろ・・・。

伊織がソファに座っている事で零は座る場所を見つけれず、センターテーブルの脇にクッションを置いてその上に座ってみる。

「・・・んな警戒すんなって。」

伊織は立ち上がって零の側まで来ると、ひょいと零を抱えてソファへ戻る。

「ちよっ、ちよっとっ！」

「まあ落ち着けて、」

真っ赤になって慌てる零とは対称的に落ち着き払った伊織はソファに座り、膝の上に零を座らせて後ろから抱きかかえるとその前で本を開いた。

「この方が、零は文字が追えるし、俺は大声で読まなくて済む。こ
ういうのを一石二鳥って言うんだぜ？」

「でっ、でもっ！」

・・・こんなんじゃ落ち着かないよっ！

それでもとりあえず、顔が見えないから赤くなっていることはばれずに済みそうだと思っていると、伊織は零の耳元で小さく笑い、《Du bist sch?n》と囁いた。

「えっ？今何て言ったの？」

「耳がピンク色になって可愛いつて言ってるの。」

・・・もう、やだ・・・

伊織の言葉に撃沈する。こんな状況で、ドキドキしない女子なんていないよ！とキレたいところだが伊織にそう言う事を言うと余計に酷い目にあいそうで言葉を飲み込む。

「じゃあ、始めるか。」

伊織は何事もなかったかのように本のページをめくり、美しい発音のドイツ語で物語を語り始める。耳元で囁かれる伊織の言葉はいつものからかうような毒のあるそれではなく、穏やかな湖の様な暖かで落ち着いた静かな響きで零の耳に届く。文字だけを追っていた時はあんなにも苦痛だった物語が不思議と心に届いた。

物語は年若い男女の恋の物語。燃えるような想いを秘めた男性が主人公で、手の届かない高貴な少女に恋をする。会ったたびに囁かれる愛の言葉に少しずつ惹かれていく少女の心。そして、二人の間に立ちはだかる身分の壁。

「Ich liebe dich sehr.（貴方を心から愛している。）」

物語の言葉だ、と分かっているても耳元で伊織に囁かれるとイヤでも心臓が跳ねる。この心臓のドキドキが伊織に伝わってしまうのではないかと思うと気が気ではなく、零は微かに身動きをした。

「・・・どうした？」

伊織は本に指を挟んで閉じ、背後から零に回した手にぎゅっと力を入れる。

「えっ？！な、なんでもないよっ、っ・・・続けてっ！ちょ、ちよっとっ！」

「疲れたから、ちょっと休憩。」

伊織の言葉に時計を見ると、始めてからすでに二時間近くが経過していた。すっかり物語の世界に引き込まれていた零はハツとする。

「ご、ごめん、気付かなくて。私飲み物買ってくるからっ！」

伊織に抱きしめられている事にも、思ったよりも時間が過ぎていた事にも慌てた零は伊織の手を解いて立ち上がるうとするが、伊織の腕に拘束されて立ち上がれずに戸惑う。

「休憩だ、つつてんだろ。」

伊織は零を抱く腕に力を込めて零の耳元に頬を寄せる。

・・・ちょ、ちょ、ちょ、ちょっ・・・！何か、これって、すつごく、恋人同士みたいでっ！

冷静そうに見える伊織の体温がフツと高くなる。零は自分の耳に聞こえるほどに高鳴る鼓動が背中越しに伊織に伝わる事を怖れ、放しで、と自分を抱く伊織の腕を掴む。

「イヤだね。」

頬と頬が微かに触れる距離。ドキドキが加速しすぎて何も考えられなくなる。

「Ich liebe dich herzlich。」

「・・・そっ、そんなのズルイよっ！」

「ん？ずるくて結構だね。俺は零を俺のものにするためなら何でもするぜ？」

「はっ、放してっばー！」

「イヤだ。」

意識するほどに、半そでのシャツから伸びる伊織の腕の引き締まった筋肉や、線が細く見える割にがっちりした胸板が間近に感じられて零はカツと身体が火照るのを感じる。今では伊織の香り、とさえ思える柑橘系の香るさわやかなムスクの香りに包まれているとそれだけでどうしようもなく鼓動が乱れた。

「零、好きだ。どうして俺じゃダメなんだ？」

耳元で囁かれる伊織の声。顔が見えないだけにその哀しげな響きが零の心に刺さる。ダメ、な理由などない。

「だ・ダメとか、そう言うんじゃなくって・・・」

「ダメじゃないなら俺にしとけよ、」

「だ・だからっ！そんな、急に・・・」

「急じゃねーだろ、俺はいつも言ってる。」

「・・・」

「・・・そうだけど、そうだけど！伊織君の好きは、本気かどうか、分からないんだもん・・・」

そう思った零は、少なからずハツとする。本気かどうか分からなくて、不安だから・・・？

「零、お前、こういうのは嫌か？」

「え・・・？」

「俺は好きなヤツとはいっても一緒にいたいと思う。いつも側にいて触れていたいと思う。大切な人が苦しんだり辛い目に合わないように、一番近くで守りたいと思う。でも、零が嫌なら仕方ない・・・」ぎゅっと抱きしめる腕に力がこもり、耳元で紡がれる切ない声に零の心が悲鳴を上げる。

「いつ、嫌じゃないよ。私だって、好きな人には側にいてほしい・・・」

「・・・言っただけ、合意の上だからな？もう文句言わせないぜ？」

「え？！えっ??」

伊織はニヤニヤ笑いながら零の首筋に鼻をすり寄せて、真っ赤になつて慌てる零を見ておかしそうに笑う。

「だから、お前は可愛いって言っただけ。」

ほら、本の続き、はじめるぞ、と伊織は楽しげに本を広げ、流暢なドイツ語で物語を紡ぎ続けた。

053：夏休みの課題・3（後書き）

こんな風に、読んでもらうたら（＊、q、＊）やばい。
気絶する自信がある。えへへ（、、＊）（
次回は零×健です

054：夏休みの課題・4（前書き）

ご無沙汰してしまいました

冬なのに夏の話題ですみません（^^ゞ

今回は健君メイン・・・かな？それでもないか・・・。

054：夏休みの課題・4

伊織とのドイツ語レッスンは、精神衛生上の問題を除けば零にとつてこれ以上ない成果をもたらし、あんなに苦手だと思っていたドイツ語がすんなりと入ってくるようになった。零としては不本意ながらも伊織の協力のおかげでドイツ語の課題を早々に終わらせる事が出来、機会があったら何かお礼をしようと心の中で思う。残るは数学だけ、なのだがその数学が厄介で、零は連日頭を悩ませていた。

「零ちゃん、」

控えめにドアをノックして、かおるが顔を覗かせる。

「・・・どう？進んでる？」

「・・・まあ、ね・・・。」

解ける問題から進めて、ようやく半分ほど終わらせた。夏休みももう中盤。急がないと全て終わらせる事はかなり困難だ。

「僕、これから父の呼び出しで出けなくちゃいけなくなつて・・・零ちゃんに何かあったらつて思うと心配なんだけど、出来るだけ早く帰ってくるからね。」

「・・・な、何か、かおる君つて保護者目線だよね・・・？お兄ちゃんがいたらこんな感じかも・・・。」

零は大丈夫だよ、と笑顔を返しながら思う。いつもいつも、自分の事を気にかけてくれる優しいお兄ちゃん。一人っ子の零にとってはその存在は憧れるべき対象であり、そんな風に接してくれているかおるの存在に心癒されている事は確かだ。

「何かあったら、いつでも電話してくれていいからね、」

かおるはそう言っていていつものようににっこりと微笑むと、行きます、と出かけていった。

「・・・私もお出かけしたいな・・・。」

寮にいる限り、特別出かけなくても生活は出来る。出来てしまうだけに、課題が終わるまで、と部屋に引きこもった生活がもう半月も

続いている。

・・・そういえば、伊織君はもう課題終わったって言ってたし、かおる君と久遠君はもともとほとんど課題出てないんだよね・・・。
泣きそうになってるのは健と自分だけ、と言う事実には少しへこみ、溜息をついて改めて数学の課題に向き合う。

「もー！わっかんないよー！」

すでに分かる問題は全て解いてしまっており、難解な問題ばかりが残っている。時間を置けば閃くかと、改めて問題を見てもやはり分からない。零はお気に入りのクマのぬいぐるみを抱きしめてソファにゴロン、と寝転ぶ。物理が得意で数学が苦手な意味が分からない、と竹川に言われたけれど、苦手なものは苦手なんだよ、と心の中で思う。

・・・こうなったらお昼寝してやる！

どうせ考えても分からないなら一日くらい休憩したってバチは当たらないはずだ、と零は勝手に決め込んでソファのクッションに身を沈めた。寮の空調は快適で、半そでのポロシャツにラフなカーゴのハーフパンツでごろごろしていても熱くも寒くもない。連日深夜近くまで伊織がドイツ語の課題に付き合ってくれていたこともあり、寝ようと決めた零の意識はすぐに眠りに引き込まれた。

どれだけ必死に頑張っても絶対に夏休みの間に終われない課題も3年連続ともなると慣れてくる。出来る限りの努力はするものの、どの教科の手を抜くかについても、健はすでに心得ている。

「零ちゃん、数学頑張ってるかな。」

難解な古典の文章を読んで頭を混乱させた健はふと思う。自分だけ英語の課題を手伝ってもらっておいて、自分は何も手伝っていない。ちよつと自分の課題にも飽きてきたし、口実を作って零の部屋へ行くこうと思えば、軽い足取りで零の部屋へ向かう。女の子の部屋に

入る、という以上の緊張に囚われながらドアをノックしようとした健は、ドアが完全に閉まっていなことに気付く。

・・・先客？

いつも誰か男子が部屋に入るときは扉を閉めないという暗黙のルールが敷かれている。そつとドアを押して中を覗くと、ソファアの上に寝転んでいる零が見えた。

・・・寝て、る？

ソファアの上でクマのぬいぐるみを抱えて、眠っているように見える零。柔らかそうな髪が少し頬にかかり、目を放すと次の瞬間には消えてしまいそうな儚さをまとう。健は一瞬ためらった後、音を立てないようにそつと零の部屋に入り、眠っている零の側に近づいた。センターテーブルの上にはやりかけの問題集。途中までやりかけて投げ出している問題を見て小さく笑う。その問題はかなりひねくれた問題で、零は素直だから途中で混乱したのだろうと思うとほほえましかった。

「・・・・・・・・」

そつとソファアの側に跪く。すやすやと穏やかな寝息を立てる零は精巧に出来た人形のように思わず見惚れた。色白で陶器の様にも見える肌に長い睫毛が影を落としている。ほんのりと桜貝色をした唇は少し肉厚でもつと近づいて触れたいと思ってしまう。いつもかおるや伊織がそうしているように頬を寄せて抱きしめたいと願う自分と、いつだったか伊織が言っていた、首筋に噛み付きたい、と言う言葉の意味が今なら分かる気がする。

あまりにも無防備な美しい人形。華奢な身体は簡単に攫ってしまえそう、眠っている零に口付けて抱きしめたいと言う欲望と抑えようとする理性の狭間で葛藤する。

「・・・・・・・・零ちゃん、」

囁くように、呼びかけてみる。目を覚ましそうにない零をしばらく見つめ、健はそつと顔を近づける。

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・？」

健の唇が零の唇に近づいた時、零はふと、何かの気配に気付いて目を覚まし、まだ完全に覚醒していない意識の中、間近に健の顔を見つけた零は思わず大声を上げた。

「あ、ご、ご、ごめん、お、起こすつもりなかったんだけど、って言うか、俺、その、あのっ……」

「……た、健君っ?!」

「あつ、あのっ、ご、ごめんっ」

不意に目を覚ました零に驚いた健は飛び上がる勢いで零から離れる。

「……どうしたっ?!……おい、健!お前何しやがった、」

「えっ?!俺?な、何もしてないって!本当だって!」

零の声に隣の部屋の駿が開いたままのドアから飛び込んできて鋭く健を睨む。たいてい無表情で不機嫌そうな顔をしている駿だがいつも冷静なその瞳に怒りの色が閃く。

「ならどうしてそんなに慌てる必要があるんだ?」

怒鳴っているわけでもないのに、冷静な怒りがこんなにも怖いものかと、ソファァーから起き上がった零は思う。

「え、いやっ、だ、だって、その……」

「どうせ、数学の課題の手伝いを口実に部屋に来たらソファァーで間抜けに寝てたから手を出そうとでもしてたんだろう、」

「そっ、そんなことしてねえよっ!」

「ならどうして佐倉が悲鳴を上げるんだ?」

「えっ?!そ、それは……」

「……いつも思うけど、久遠君って、すごい観察力……」

まだ目が覚めたばかりで少しぼんやりしたまま零は思う。

「……おい、お前がボーっとしてるからこういう事になるんだ!お前自分の置かれている立場が分かってるのか?!」

「えっ?!わ、私っ?!」

突然駿の怒りの矛先を向けられて零は戸惑う。少しお昼寝してただけなのに、と思うが怖くてとても言い出せない。

「……零ちゃんが悪くねーよ!零ちゃんにまで怒ることねーだろ

！」

「諸悪の根源は黙ってる。」

健を黙らせて零を睨んだ駿は明らかに怒りを含んだ口調で続ける。

「お前が自分で自分の身を守れないせいで、こっちはいい迷惑なんだよ。いい加減に自分が常に狙われてるって事くらい自覚しろ！」

・・・ねっ、狙われてるって、そんな・・・

駿の言葉に零は戸惑う。

「かおるや伊織がいつも側にいるから誰も手出ししないだけで、お前が一人でいれば間違いなく手を出すヤツが出てくる。それなのにいつもフラフラ構内を一人で歩き回ったりしてどういつつもりなんだ！」

・・・図書館に行ったりすることを言われてるの・・・？

駿の怒りのベクトルが零に向けられ、零は駿に鋭く睨まれて言葉に詰まる。

「・・・はい、そこまで。駿、そんなに怒っちゃ零ちゃんがかわいそうだよ。それに零ちゃんが悪いんじゃないで、零ちゃんに手を出すヤツが悪いんでしょ？」

「・・・かおる君！」

ただいま、零ちゃん、と優しく微笑むかおるの顔を見るとホッとする。迷子になって一人ぼっちで淋しい思いをしていた子供が迎えに来てくれた親を見て安心する気持ちに少し似ている、と零は思う。

「・・・チツ、お前がもつとちゃんと見張らないからこういうことになるんだ！」

駿はそう言って零の部屋を後にし、隣の自室へ戻っていく。半ば呆然とその背中を見送った零にゆっくりと歩み寄ったかおるは零の隣に座ってそつと肩を抱く。

「・・・どうして駿があんなに怒ってたの？・・・まあ大体察しはつくけど・・・」

かおるは部屋の中を見回してそう言つと、チラリと健を見る。

「健？後で僕の部屋へ来ること。いいね？」

054：夏休みの課題・4（後書き）

ふー。

守りたい。守られてい願望が強すぎるわりに・・誰も守ってくれない悲しい現実。

私的にはリアルお兄様が欲しい今日この頃です

055：夏休みの課題・5（前書き）

またまた間を開けてしまいました・・。
今回は駿君メインです！。

いいよね、イケメンよりどりみどり。
逆ハ―最高。

055：夏休みの課題・5

数学の課題に煮詰まった零は休憩にと深夜に食堂に下り、偶然居合わせた駿と思いがけず立ち話をする事になった。もともと背の低い零と背の高い駿が並ぶとかなりの身長差で、顔を見ようと思うと首が痛い、と零は内心思う。

「お前この夏、どこにも出かけてないのか？」

「・・・だって、課題終わらないし・・・」

「・・・そ、そんな呆れた顔しなくったって・・・」

「人間の集中力の限界は90分なんだそうだ。数学ばかりやってるから余計分からなくなるんじゃないのか、」

バカにされる事を覚悟していた零だったが、駿は意外にも少し微笑む。

「たまには気晴らしも必要だろ。明日俺買い出しに行くけどお前も行くか？」

「えっ?! いいの?!」

思いがけない駿の提案に一瞬でテンションの上がった零に駿は少し苦笑した。分かりやすいヤツだ、とわかってはいるものの、これだけはつきりと喜びの表情をされると誘った方が照れる。

「じゃあ明日な。昼過ぎに出る。たまには早く寝ろよ。お前夜な夜なつるさいんだよ。」

「え、うるさい? 音楽の音とか、聞こえてた? ご、ごめんなさい・・・」

「違う、音楽じゃなくてお前が。時々、あーとかもーとか騒いでるだろ?」

「・・・そ、そういうば・・・煮詰まり過ぎるとたまに声だすかも・・・」

「ご・・・ごめん・・・」

「・・・まあ無駄に騒いでるわけじゃないからな。今日は早く寝ろ

よ。じゃあ明日。」

《じゃあ明日。》

軽く手を上げて食堂を出て行った駿の背中を見送って零は思わず胸を押さえる。今までほとんどともに会話をした事のない駿と出かける事になった。お隣の部屋で、クラスも同じなのに、もしかすると一番何も知らない人。少し怖くて、でも困った時に黙って助けてくれる優しい人。二人きりになる事を最も想像できない人だけれど、零は不意に修学旅行の肝試しで抱きしめられた事を思い出す。

あの時は真っ暗な闇が怖くて何も考えられなかったけれど、大きくて暖かな手の温もりに、とても安心したことを思い出す。

・・・明日、楽しみだな。

零は心の中で呟いて、自分の部屋へ戻っていった。

夏休みの課題に煮詰まっていた零を連れ出した駿は思いがけず二人きりになれる機会が訪れた事に少し感謝しながら、強い日差しに目を細める。真夏の太陽は容赦なく降り注ぎ半そでのシャツから出た肌を焼く。

「あー、これ可愛い!」

少し前から雑貨屋の中をあちこち歩き回って、使い道の分からない小物を見ては可愛い可愛いと楽しげに声を上げる零を見ていると思わずこちらまで微笑んでしまう。

「ねえ、これカーテンレールに飾ったら絶対綺麗だよね!」

「・・・え?あ、ああ。」

大きなクリスタルのような、キラキラと輝くオブジェ。ただ吊り下げておくだけの、《何の役にも立たないモノ》に見えるが零にとつては違うのだろうと思う。何度か零の部屋に入ったことがあるが、棚の上や出窓のスペース、ドレッサーの前などに使い道の分からない

いものたちがたくさん並べられている。

駿の適当な相槌にも零はそうだよね！と目を輝かせている。

「・・・それって、飾り？」

「え？そくだよ。こういうのがあると、テンション上がるよね！」

100%の笑顔で返されると、思わず言葉に詰まる。天真爛漫、と言うのが正しいのか、天使の様な、と表現するのが正しいのか、と心の中で思う。

「これ、買ってくるね！ちょっと待ってて。」

カウンターへ歩いていく零の後姿を見守りながら、駿は少し苦笑する。ほんの少し前、正確には昨日の夜まで、いつも少しおびえた目で見るだけで近づいてくる事のなかった零が今日は良くなついた子犬の様に笑顔を振りまいて側にいる。

思えば、零を近づけないようにあえて壁を作っているのは自分なのに、本当はずっとこうやって側にいたかったんだと気付く。決して頼りないわけではない。頭も良く、自立心もある彼女だがなぜか目が放せなくて、なぜか守ってやりたくなる不思議な子。

そんな事を考えながら、駿は精算を済ませて自分の方へ小走りに戻ってくる零に微笑みかけた。

「ねえ、久遠君って甘いもの好き？」

街を並んで歩きながら零が問いかける。ふと見ると、おしゃれなカフェ。

「いや・・・あまり。少し休憩するか？ずっと歩いてるしな。」

駿はそう言つて、零の返事を待たずにカフェの中に入る。少し慌てたように後についてくる零の気配を感じながら、駿は少し苦笑する。きつと甘いものが好きではない、と言ったから気にしているに違いない。

席に案内されてテーブルの上のメニュー表を見る。センスのいい綺麗なケーキの写真がたくさん載っている。有名なパティシエの店と言う事もあり、店の中は女性客が多く混雑している。

「あつ、あのつ、」

案内された席に座ると、零は困ったような顔で駿を見る。

「何？」

次に零が言いそうな言葉は察しがついていたが、あえて尋ねてみる。あまりにも解りやす過ぎて、そんな零が可愛くて思わず笑みがこぼれる。

「あの、甘いもの、好きじゃないんだよね？」

ほらやっぱり、と駿は内心想う。さっき甘いものはあまり好きじゃない、と言った事を気にしているに違いない。

「佐倉は好きなんだろ？お前だけ食べればいい。俺はコーヒーが飲めたらそれでいい。かなり歩いたし、俺もちょうど休憩したかったんだ。」

駿の言葉に零がホッと安心したような笑顔になる。そんなに気を使わなくても、もっと思ってた事を言えばいいのに、と思う。これだけ可愛い子のわがままなら、大抵の男は皆喜んで聞くだろうと思いいながら近づいてきた店員にオーダーを通す。

「あ、あのね！今日はありがとう。ずっと課題ばかりだったから、すっごく楽しいの。」

テーブル越しに、少しはにかんだような零の笑顔。いつも横顔を見ていることが多いせいか、ひどく新鮮に見えて、思わず目を逸らす。いつもはストレートの髪をゆるく巻いて、ラフにまとめただけの髪、服装は涼しげなライムグリーンのチュニックに白のミニスカート。いつもと違う印象を受けるのは何故だろう。

「あ・・ご、ごめんね？久遠君の用事、まだ全然だよな？今日の買出しって、何を買に行くの？」

零の問いかけに駿はハツとする。零を誘う口実にとつさに買出し、と言ったものの、別に買いたいものがあつたわけではない。

「あ・・いや・・」

どう誤魔化そうか、と思ったちようどその時、オーダーしていたケーキと飲み物が運ばれて来る。

「わあ、おいしそう！ねえ見て！これ可愛い！」

零のオーダーしたカプチーノには泡で子猫の絵が描かれている。

「バリスタからの贈り物です。」

店員の言葉に零がカウンターの奥に目をやると、優雅にウインクする外国人バリスタの姿。深めの金髪に濃い緑色の瞳。零が嬉しそうに笑って小さく手を降ると、バリスタは満面の笑顔で投げキスをする。

「可愛いと何かと得するもんだな。」

「え？」

「周り見てみるよ。お前だけ、特別みたいだけど？」

駿の言葉に零が隣の席に運ばれてきたカプチーノに目をやると、そこには至って普通のカプチーノが置かれている。驚いた零がもう一度カウンターの奥に目をやると、外国人バリスタは嬉しそうな笑顔で零に手を振った。

「・・・何でだろうね？」

零の言葉に駿は思わず脱力する。これだけ周囲を惑わしておいて本当に自覚がないんだろうか？と時折不思議になる程この可愛いお嬢さんは何事においても鈍い。

「佐倉が可愛いから、あのバリスタが一目惚れでもしたんだろ。気を引くためのパフォーマンスってやつさ。」

「えっ？」

驚いて目を丸くする零を見て、駿は苦笑する。自分は基本的に洞察力には長けている方だと思うが、零の自分に対する自信の無さは驚くほどだ。

「お前、本当に鈍いよな？普通気付くだろ？」

「だ、だってそんなの急に言われたって・・・」

「一目惚れってのは急にするもんじゃないのか？」

「そ・・・そうだけど・・・」

少し困ったような表情で、零は呟き、いただきます、と手を合わせ て見た目にも美しいケーキをほおばる。おいしい、と笑顔になる様

子は見ているだけでひきこまれる。華の様な笑顔、というのはこういう笑顔の事を言うのだろうと思う。

「そんなにうまいのか？」

「うん！甘すぎないし、すっごくおいしいよ。・・・食べてみる？」

零は嬉しそうに笑いながら面白い、フオークでケーキを切り取って駿に差し出した。

「おっ、俺はいらなからっ！」

いつも冷静な駿が慌てるのを、零は不思議そうに見つめ、甘いもの嫌いなんだったね、と謝った。

「・・・お前さあ、」

幸せそうにケーキを食べる零に、駿は苦笑交じりに声をかける。

「鈍いと言つか、天然と言つか、本当、面白いヤツ。」

「えっ？！天然じゃないよ！私なんか変な事した？」

「いや・・・別に。ただ、もう少し、考えてから行動した方がいいと思うだけだ。」

駿の言葉に零は少し首をかしげ、ハツとなって微かに頬を染める。

「お前が考えてる事は見てるだけでわかるから見てて飽きないな。もういい、言っても無駄だって事が良く分かった。」

声を立てて面白そうに笑う駿に、零は一瞬見とれる。

・・・久遠君の笑顔、素敵なんだ。

「俺はお前の、そう言うところ、好きだぜ。」

おかしそうに笑いながらそう言った駿の言葉に、零の心がドキン、と音をたてた。

055：夏休みの課題・5（後書き）

今回はラブラブと言うよりは、ちょっとドキドキ感って言うか。そう言う感じにしてみました。

けど、私としてはあまあまが欲しいので、また壊れたようにうろたふ全開頑張りまーす！

056：ホラー映画・1（前書き）

夏と言えばホラー！

と言うことでホラー映画です。

ちなみに私は人生で一度もホラー映画を見たことのない人です。

056：ホラー映画・1

課題ばかりでは身体によくないから、みんなでホラー映画を見よう、と健が言い出し、何故か皆が零の部屋に集まっていた。

「だって零ちゃん、他の部屋だったら絶対来ないだろ？」

そう言いながら健はホラー映画といえばコレ、と呪いのビデオで話題になったDVDを手に行っている。

「・・・私、帰る！！」

「帰るって、どこへ帰るつもりなんだ？」

「・・・ものすごい素で突っ込まないで・・・」

真顔で突っ込みを入れてきた駿に零は軽く悲しくなる。

「大丈夫だって！よく見たら面白いぜ？俺ホラー映画かなり好きなんだけど、」

「健君と一緒にしないですよ！面白いわけないでしょ！」

「怒った顔もかわいいねえ。怖けりや抱きしめてやるから心配すんなって。」

「・・・別に、そんなことして欲しくないッ！」

「・・・まあまあ、零ちゃん、大丈夫だよ？一人じゃないんだし・・・。人生で一度くらいは見てもいいんじゃない？」

「かおる君までそんな事言うんだ？・・・ひどい・・・」

泣きそうな顔の零にかおるはふとここまでして見る必要があるのかと思う。

「・・・ホラー映画なんて、確かに悪趣味だけだね、

内心想いながらも、かおるは間違いなく怯えるであろう零を慰める事を思うとそれもまたいいかなと思ってしまっている自分に気付く。

「ほら、いつまでもウダウダ言っでないで！始めるぞ！」

かくして、零の部屋でのホラー映画上映会が始まった・・・。

「そんな怖いなら、見なきゃいいだろ、

直視できず、かといって目をそらすこともできず、ただただ固まっている零に、隣に座っている駿の呆れた声がかかる。

「だ。だって、声だけ聞いてたら余計怖いし・・・」

「それに、そんな離れたところにいるから余計怖いんだろ、もったこっち来いよ、

不意に、手をひっぱられてバランスを崩した零は駿の方に倒れこむ。「ごっ、ごめん、

零が慌てて離れようとする、駿はそれが当然かの腕の中に零を抱きとめてこれなら怖くないだろ、と視線はテレビに向けたまま淡々と告げる。

直ぐ近くを感じる駿の体温に零は頭の中が真っ白になり、何も言えないままフリーズする。

「駿、隣に座ってるからって、どさくさにまぎれて零ちゃんを抱きしめるのはやめてもらいたいんだけど、」

「だ、そうだけどうする？」

かおるの言葉に駿は零の顔を覗き込む。

「あ、え、あつ、私っ大丈夫ッ！」

不意に近づいた顔にパニックになって零は慌てて駿から離れる。そんな零の様子を見て駿は大げさに呆れた顔をし、改めて視線を画面に戻した。

結局、2時間半の映画を見終えた私は完全に、怯えていた。作り物とわかっていても、もしかすると実際に遭遇するかもしれないと思ってしまう。

「じゃあ明日ねー」とさわやかに解散した皆を恨みたい気分さえなりながら、部屋に取り残されて一人所在無く佇む。鏡や窓やテレビの画面に何か映るのではないかと思うと気が気ではなく、何かで

気を紛らわそうと部屋の中をうろつろしている、不意に、小さく扉をノックする音が響いて思わず悲鳴を上げた。

「俺だ。悲鳴上げることないだろう、

ドア越しに呆れた声。駿だ。

「ごっ、ごめんっ」

零は慌ててドアを開ける。

「入っていいか、

遠慮がちに言う駿を招き入れ、零は改めてごめん、と謝った。

「どうせさっきの映画が怖くてビクビクしていたんだろう、

バカにしたような声。そう、その通りです、と頷く。

「怖くて眠れなくて震えてるんだろうと思って、様子を見に来たんだ、

少し照れたように、視線を外して告げる駿。いつもの淡々とした口調ではなく優しさを含んだ口調に、さっき腕の中に抱きとめられた事を思い出し、零は頬が赤くなるのを止められなかった。

「さっさと寝ろよ。見ててやるから、

「そ、そんなこと言われたって・・・

「寝ないなら何か話すか、

駿はそういい、ドレッサーのスツールに腰を下ろす。零はベッドサイドに座り、何を話そうかと考える程に頭の中が混乱した。

「お前さ、

駿は改めて切り出す。

「こんだけ男に囲まれてて誰かに告られたりしてないのか？

「えっ？

「みんな影ではコソコソお前のこと気にしているって言うんだぜ。

「えっ、そっそうなの？

零は少し慌てる。

「まあ・・・直球のかおるや伊織は例外だけだな。」

そっいつて駿は苦笑するように小さく笑う。

「よく・・・わかんない・・・かも。かおる君とか伊織君はいつもいろいろ言ってくれるけど・・・その他のみんなからは何も言われたことないよ?」

「そうか。でも、大切に思われていることは確かだ。俺もお前といると楽しい。」

「え・・・」

「女といて楽しいと思ったのは初めてだ。」

「フワリ、と微笑む。その整いすぎた微笑に零はめまいすら覚える。」

「いつも笑わない駿の笑顔から目がそらせない。」

「お前は、誰かいないのか?」

「えっ私ツ?!」

突然の質問に声が裏返る。あたふたと否定しようとすればするほど、肯定しているようなものだ、と自分で思う。きっと顔も真っ赤だ。

「俺が協力してやるよ、」

協力、と言う駿の言葉に零の心が少しざわめく。こんな風に駿と話すのは初めてで、どう話していいのかわからない。

「なんだよ、急に黙ったりして。もしかして、もうすでに振られたとか、そう言うことか?」

呆れた声に反論しようと顔を上げ、予想外に優しく微笑む瞳にぶつかって言葉を失う。

「相変わらず変なヤツだな、お前。・・・けど、お前を振るバカなヤツがいるなんて意外だな。」

駿の柔らかな声、初めて聞いた、とぼんやりとそんな事を考える。

「ま、何か辛いことあったら言えよ。少しでも頼ってくれたら嬉しいから、」

いつもの無表情とは違う、優しい微笑みに零の鼓動が暴れ出した。

056：ホラー映画・1（後書き）

ポイント付けてくださった方、お気に入り登録して下さいる方、
本当にスパーテンションあがります

感想をくれたりしたらさらにテンションあがります！

ダメ出しもぜひお願いします。

推しのヒトがいればリクエストくだされば、サブストーリーの方で
書いていたりしますので

あ、ちよつと時間もあれば腐系もリクエストお受けしますww

057：ホラー映画・2

時計は夜中の2時を過ぎており、駿が部屋を出て行って一人部屋に残った零は再びホラー映画を観た事を激しく後悔しながらクマのぬいぐるみを抱きしめる。

・・・と、とりあえず、シャワー浴びなきゃ・・・。

零は窓ガラスや鏡、TVの画面に怯えつつもシャワールームで大急ぎでシャワーを浴びる。シャワーを浴びている途中も不意に背中から肩を叩かれるのではないかと思うと気が気ではなく、急いで髪を洗うとバスタオルを頭から被ってバスローブを羽織って部屋に戻る。

・・・怖くないもん。あれは、作り物！

ドレッサーの前に座って、自分に言い聞かせる。それでも鏡越しに、背後に何か映ったらしようと思うと今日は眠れそうにもない。くまのぬいぐるみを膝の上のせてドライヤーで髪を乾かし始めると、周囲の音が聞こえなくなる分、少しだけ落ち着ける。

・・・何で世の中にホラー映画なんかあるんだろう・・・？意味わかんないしっ。

その瞬間に恐ろしいシーンを思い出して思わず後ろを振り向いてしまふ。

・・・やっぱ、怖いかも・・・。

恐怖を紛らわせるために、音楽をかける。大好きなアーティストの最新アルバムはラブソングが中心で聞いていると共感できる部分が多く、切なくなったり幸せになったりできる。

パジャマに着替え、クマのぬいぐるみを抱きしめてソファアに座ってみる。窓の外で吹く風の音にさえビクビクしてしまう自分が情けない、と思っていると、不意にドアが開き、零は小さく悲鳴を上げた。

「入るぞ・・・おい、悲鳴上げることないだろう。」

「いつ、伊織クンツ！」

「お前の事だから、どうせ怖くて眠れずにいるだろうと思って様子を見に来てやったんだ。ありがたく思え、」

「・・・な、なんかデジャヴ・・・」

「いつもなら反論もしたいところだが、今は少なからずホッとしている自分がいる。」

「・・・お前って本当にわかりやすいヤツだな？ほら、眠るまでいてやるからさっさと寝ろよ、」

「・・・みんな、同じ事、言うんだ・・・。」

駿が言うのと伊織が言うのとで印象が全然違うのはどうしてなんだろう、と零は内心思う。

「なら、添い寝してやろうか？」

「だっ、大丈夫っ！一人で平気だから！」

「そう？そうは見えないけど？そんなクマ抱きしめてないで俺を抱きしめてくれよ。」

「えっ？！あ、こ、これは、その・・・」

「・・・しまった、抱きしめたままだった・・・。」

何となく、一番見られなくなかった人に見られてしまったような気がして、零は少し動揺し、慌ててぬいぐるみをソファアの上におろす。

「強がり言っていないで、頼りたいときは頼ればいいんだよ、まったく。」

普段は隙だらけのクセにこんなときばかりガードして、いいながら伊織は零の隣に並んで腰をおろし、零の肩を抱き寄せる。

「・・・お前さあ、もうアイツのことが好きってわけじゃないんだろ？」

「え・・・？」

いつもとは違う伊織の声のトーンに零は戸惑う。

「想っても想っても、振り向いてくれないヤツより、お前の事を想ってるヤツの側にいたほうが、幸せだと思わないか？」

「そ・・・そんな・・・」

「俺はお前の事だけを見てるよ。お前の事だけを想ってる。お前が何を見て何を感じているのか、何をしたいのか、いつも、見てる。」
まっすぐに目を見ながら紡がれる言葉に、零は心の奥が締め付けられるような苦しさを覚える。熱い炎のような伊織の想いが伊織の瞳から伝わるようでめまいがするほどに苦しくなる。

「好きだ。」

いつもの自信に溢れた伊織とは違う、不安や哀しさや切なさの入り混じった瞳。そのまま伊織に抱きしめられた零は身動きも出来ずに伊織の腕の中で目を閉じる。

伊織の腕の中で狂おしいほどに暴れる伊織の鼓動を感じた零はそれが自分の鼓動なのかどうかさえも判断できずに俯く。

「俺は絶対に、お前を不安にさせたりしない。だから、俺の側にいてくれないか、」

「・・・伊織君・・・」

「・・・どうして、こんなに苦しいんだろう？どうしてこんなに心が痛いのか？私、どうしていいのか、わかんないよ・・・」

かおるに言われた言葉が心の中に甦る。『絶対に辛い思いや寂しい思いはさせないって約束するよ。』

「・・・どうして、かおる君も伊織君も・・・」

「俺ではアイツの代わりはできないか？」

「代わり、って・・・」

「私・・・そんな風に想ってもらえるような子じゃないのに・・・」
口にすると、急に悲しくなって思わず泣きそうになる。今このタイミングで泣き出したら間違いないく伊織を困らせる、そう思った零は泣き出さないように必死に心を静める。

「お前がどんな風に想っていいようがそんなことは関係ない。俺がお前を好きなんだ。」

「・・・心が痛いよ、伊織君・・・」

「・・・そんな顔すんなよ。」

「俺はお前を泣かせたい訳じゃない。お前の側でお前を守りたいだけだ。」

伊織の胸の中は温かくて、さっきまで怯えていた自分が嘘の様に感じる。伊織の言葉の一つ一つが零の心を揺さぶり、心の芯が熱くなった。

057：ホラー映画・2（後書き）

もう・・・（＊、q、＊）

願望そのままですみません。

書きながらにやにやしているからいつまでたっても稚拙な文章・・・。

でもまだまだ続けます。

みんなが卒業するまで、ぜひお付き合いくださいませ。

ポイント付けて下さって、本当にありがとうございます

058：ホラー映画・3（前書き）

ホラー映画パートのラストになります。
更新に一月も間があいてしまいました・・・。
今回は私的に糖度低めです。

「零ちゃん、まだ起きてる？」

伊織が部屋を出て行ってもまだドキドキのおさまらない心を抱えていた零はかなり控えめにドアをノックする音に顔を上げる。とつさに時計の針を見るとちょうど3時を指している。どうやらありがたい事に今日は明るくなるまで眠らずにいられそうだ、と零は思う。

「起きてるよ？」

返事をして、ドアを開けると、きまり悪そうに俯いた健が立っていた。きつと健も怖がっている自分の事を心配して来てくれたんだろうと思うと心が温かくなる。

・・・それにしても、見てるみたいに入れ替わりで来るから不思議・・・。

「あ・・・あのさっ」

健はいつになく元氣のないトーンで切りだす。

「あの・・・俺さ、その・・・ごめん！俺、前に零ちゃんの事守るって言ったのに零ちゃんが嫌がる事しちまったなって・・・。あんなに怖がると思わなかったんだ・・・。」

いつも元氣な健がしゅんとしているとこっちまで調子狂う、と思いつながら零は少し笑う。

「大丈夫だよ？すごく怖かったけど・・・みんなも心配して来てくれたし、もう平気！」

「・・・みんな？そっか。そりゃ、そうだな。・・・あ、あのさ、ホントにごめん！俺、零ちゃんに嫌われたら・・・って思ったら怖くなってさ・・・。俺！零ちゃんがいてくれないと困るんだ・・・その、なんていうか・・・。」

「健君？私、どこにも行ったりしないよ？健君の事嫌いになつたりしないし……。もう大丈夫だから、心配しないで？」

言いながら、零は自分の事を本当に心配してくれる人がいてくれる事が嬉しくて心の奥が熱くなる。自分で思っているよりもずっと、みんな自分の事を心配してくれているのかもしれない、とそう思うと苦しほどの幸せが心の奥に広がる。

「零ちゃん！俺っ！」

「キャッ！」

突然強く肩を掴まれた零がよろめき、健は慌てて零を抱きしめて体を支える。

「あ、ご、ごめんっ！あのっ……。俺っ！」

健が何か言おうと口を開きかけた時、静かに向いの部屋のドアが開いてかおるが顔を出す。

「健、零ちゃんが嫌がる事をして謝りに来たのは立派だけど、筒抜けに聞こえちゃってるからそれ以上言うのはやめた方がいいと思うよ？」

少しあきれたような、怒っているような、あまり抑揚のない口調。かおるらしいといえばかおるらしく、らしくないと言えばらしくない。

「それに、」

かおるは自分の部屋を出て、零と健の方へ近づく。

「怯える姫君を守るのは僕の仕事だから、健は自分の部屋に帰ろうか？」

静かで穏やかなかおるの口調。それなのに従ってしまう不思議な力を秘めた声に健は何か言いたそうにしながらもごめんね、ともう一度零に謝ってその場を離れる。

「さあ、いい子が寝る時間はとくに過ぎちゃってるけど、」

かおるはいつものようににっこり笑って零に近づくと、そのままフワリと抱き上げる。

「ちょ！ちょ、ちょっ！！」

・・・い、いきなりお姫様抱っことかつ！

「零ちゃん、暴れると危ないって、いつも言ってるでしょ？」

・・・そういう問題じゃなくってっ！お姫様抱っこが異常事態なんですって！！

零ちゃんいい匂い、と髪に顔を近づけられて零はさらにパニックになる。

かおるはそんな零にはおかまいなしに零を抱き上げたまま部屋を横切り、途中ソファアーの上で寝転んでいたクマのぬいぐるみを拾い上げるとそのままロフトの上に零とクマをおろす。

「姫君はそろそろ寝ないとね？一人じゃ眠れないって言うならいつでも僕の部屋へおいで？伊織と違って僕は紳士だからね。」

ただ、とかおるは少し考えるような表情を浮かべた後いつものようににっこりとほほ笑む。

「寝ばけておはようのキスくらいはするかもしれないけどね。」

じゃあ、お休み僕の可愛い零ちゃん、とかおるはすっと顔を近づけて零の額に口付ける。

「明日の朝、お迎えにあがります、僕の姫君。」

優雅に一礼して部屋を出て言ったかおるの後ろ姿を、零は茫然と見送った。

058：ホラー映画・3（後書き）

相変わらず報われないお方がお一人・・・。
なんとなくそうなってしまうっているって言うか。
おでこチュウ萌えますよね・・・。
って私だけか・・・スミマセン。

059：花火へ（前書き）

次こそは！

059：花火へ

ホラー映画騒動以来、零はなんとなく皆との接触を避け部屋にすることが多くなっていた。

もちろん、課題を終わらせるため、と言う口実もあり不自然さはない、と自分では思っている。

思い出すと、心が痛い。

皆の優しさと、もしかしたら本当かもしれない『好き』と言う想いがじわじわと零の心の奥に広がる。

・・・私が好きになってももらえるなんて、ありえない。

そう、思う。

だけど、ウソであんな事が、言えるんだろうか？冗談であんな事を？

・・・私、どうしたいんだろう・・・。

頭の奥が痛くなるような数学の課題を眺めながらぼんやりと思う。誰かを好きになって、誰か一人のそばにいたいと思う瞬間がくるんだろうか、と漠然と思う。

皆という事が楽しくて、皆の事が好き、だと思う。だけどそれは、友達としての『好き』でしかない。

「零ちゃん、いる？」

そのとき、コンコン、とドアをノックする音がして、健の声が響く。「いるよ？」

こたえると、そつとドアが開いて健が顔を覗かせる。

「どう？課題、進んでる？」

「・・・全然ダメ」

「俺、手伝うからさ！だから、あの・・・」

「?どうしたの?

珍しく口ごもる健に零は少し驚く。

「あのさ、今日の夜、花火見に行かないか?」

「えっ!花火あるんだ!」

「うん、くらっち浴衣あるって言うしさ、浴衣着て、見に行こうぜ!」

「浴衣かあ!いいね!楽しそう。」

花火なんて、いつ以来だろう、と思う。浴衣を着るもの久しぶりで露天の並ぶ様子を思い浮かべるとわくわくした。

「うん、行く!」

じゃあ、5時に玄関集合な、と健が部屋を出て行くと、例は久しぶりに心が晴れる気がした。

悩んでも答えが出ないのなら、悩む必要などない。今は目の前の、できる事を精一杯やるだけだ。

約束の時間が近くなり、零は寮母の部屋で浴衣を着付けてもらっていた。

想像していたのと少し違う、濃い紫色の下地に蝶が舞う大人っぽいデザインで、自分には似合わないのではないかと不安になる。

「零ちゃんかわいいから何でも似合うわね、」と満面の笑みの寮母さんだったが、零は鏡の中の自分が恥かしくてうつむく。

「ほら、髪もアップにして・・・メイクもしなきゃダメよ?」

「はあい・・・」

綺麗に結んでもらった帯が少し嬉しい。寮母さんが貸してくれたかんざしで髪をアップにして、少し逆毛を立ててふんわりと散らす。メイクはあまり気が進まなかったが、寮母さんに言われるまま、アイラインを引いて、マスカラをつける。

「下駄はあるし、ポーチはあるし・・・」

寮母さんは嬉々として準備をしながらメイクをしている零を見て微笑む。こんなに可愛いのに、どうして自信をもたないのか、いつも不思議で仕方がない。

「はい、これで完璧。いつてらっしゃい！」

ポーチを渡された零は、部屋の時計を見て驚く。5時、と約束していたのに、5時を少し回っている。

「大変！行ってきます！きゃあっ！ごめんっ！」

急いで寮母さんの部屋を出たところで健に激突する。

「おっと……零ちゃん、大丈夫？！……ってちょ、零ちゃん可愛すぎる……」

「わ、私は大丈夫……ごめんね！」

顔を上げて笑うと、ふっと健が目をそらせる。

「……健君？」

「あ、いや、その……あんまり可愛いから、その……なんかさ……」

直視できない、と照れたように笑った後、行こうか、いつもの調子で笑う。

「か、可愛いとかっ！そんなのないもん！……似合わないでしょ？こんな大人っぽい……」

なれない下駄では歩きにくく、どうしても少し遅れてしまう。

「……似合ってるよ。すごく可愛い。……あ、零ちゃんごめん、俺、歩くの早かった？」

顔が赤くなっているのを悟られずに済むと思うと、健は心の中で日焼けしていてよかった、と思う。

「ホントに……？よかった！似合ってないって言われると思ってたんだ！」

嬉しそうに笑う零の笑顔に健の心の奥がざわめく。自分に向けられる感情が、トモダチ以上でない事を、健は知っている。

かおるや伊織のように好きだと言えば零はどう思うのだろう、と思うと苦しくなる。どうせ叶わない想いなら、ずっとこのまま、友達

のままの方がいいと思う自分もいる。

「めちやくちや似合ってるぜ？零ちゃんもつと自信持てよ！こんなかわいいのにさ。」

健は零に歩調を合わせてゆつくりと歩きながら、伊織の様に零の肩を抱けたらどんなにいいだろうと思う。

「健君はいつもかっこいいよね！さわやかスポーツマン！」

「零ちゃんにそういわれると何か照れるな。」

普段から女子にかっこいいといわれる事には慣れていたが、零にそう言われるとなぜか気恥ずかしくなる自分がいる。

年に一度の花火、と言う事もあり、人出は多い。露天もたくさん並んでいて、別に欲しい物があるわけでもないのに心が躍った。

「あそこからだ、座って見れるから、あそこ行こう。」

健が指差した先は高台の公園。みな露天のある場所に集まっっていて遠目に人は少ないように見える。

「石段、危ないから気をつけて、」

そう言っただけは照れくさそうに手を差し伸べる。

「あ・・ありがとう！」

零はかおるのそれとは違う、健の優しい気遣いが嬉しくて、少しドキドキしながら健の手に掴まった。

059：花火へ（後書き）

ポイント付けてくださった方
お気に入り登録していただいている方
ありがとうございます！
これからも頑張ります！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6142n/>

いつも君がいた

2011年6月23日18時14分発行